

k y u s h u

i n s t i t u t e o f

t e c h n o l o g y

平成18年度

# 現状と課題

九州工業大学工学部自己点検・評価報告書

九州工業大学工学部・工学研究科部局評価委員会

# 目 次

1	はじめに	1
2	工学部・工学研究科の教育	
2.1	2006年度卒業生アンケート(工学部)	2
2.2	2006年度修了生アンケート(工学研究科)	40
2.3	2006年度実施 企業アンケート(2004年3月以前卒業生)	74
2.4	2006年度実施 企業アンケート(2004年3月以前修了生)	84
2.5	2006年度実施 卒業生アンケート(2004年3月以前卒業生)	94
2.6	2006年度実施 修了生アンケート(2004年3月以前修了生)	104
3	工学部・工学研究科の管理運営	
3.1	工学部・工学研究科の組織図	112
3.2	各種委員会活動の点検・評価	114
3.2.1	工学部・工学研究科人事構想委員会	114
3.2.2	工学部・工学研究科部局評価委員会	115
3.2.3	工学部教務委員会	116
3.2.4	工学部学生委員会	118
3.2.5	工学部入学試験委員会	120
3.2.6	工学部・工学研究科教育方法等開発委員会	121
3.2.7	工学部・工学研究科安全環境委員会	123
3.2.8	工学部・工学研究科情報化推進委員会	124
3.2.9	工学部・工学研究科広報委員会	127
3.2.10	工学部学生募集活動委員会	128
3.2.11	工学部予算委員会	130
3.2.12	工学部図書委員会	130
3.2.13	大学院工学研究科学務委員会	131
3.2.14	大学院工学研究科入学試験委員会	133
3.2.15	DNA実験安全管理委員会	134
3.3	教員組織	135
3.3.1	教員の配置	135
3.4	事務組織	138
4	工学部の財政	

4 . 1	工学部の運営費交付金配分状況	139
4 . 2	科学研究費補助金の採択状況	141
4 . 3	外部資金導入状況	142
4 . 3 . 1	寄附金	142
4 . 3 . 2	民間等との共同研究	142
4 . 3 . 3	受託研究	143
4 . 3 . 4	寄附講座	143
4 . 3 . 5	寄附金の利息	143
5	工学部と社会とのつながり	
5 . 1	工学部の地域貢献活動	144
5 . 1 . 1	大学公開	144
5 . 1 . 2	公開講座等	144
5 . 1 . 3	リカレント教育への協力	145
5 . 1 . 4	出前講座	145
5 . 1 . 5	情報公開	147
5 . 2	学生の国際交流	148
5 . 2 . 1	外国人留学生（国籍別・課程別・費用別）在籍状況一覧表	148
5 . 2 . 2	外国人留学生（学科別・専攻別）在学状況一覧	149
5 . 2 . 3	学生の海外派遣	150
6	おわりに	151

（平成19年度工学部・工学研究科部局評価委員会委員名）

## 1. はじめに

平成19年度版「工学部自己点検・報告書・現状と課題」を発刊するはこびとなりました。今年度も、これまでと同様に、18年度に実施された卒業生・修了生アンケート、企業アンケート、ならびに各種委員会の活動、等について記載されています。

平成16年度に実施された国立大学の法人化後、中期計画・中期目標の年度計画に基づいて教育・研究活動が進められていますが、工学部部局評価委員会では卒業生・修了生、そして企業へのアンケート調査を行い、その結果を各種委員会にフィードバックさせることを主たる役割として来ました。平成20年度には、国立大学法人としての5年間の評価が行われますが、アンケート結果は教育目標の達成度を測る指標として活用できるものと期待しています。

本冊子は6章から構成されています。第2章「工学部・工学研究科の教育」では、2007年3月に実施した卒業生・修了生アンケート、2007年4月～7月の間に実施した企業アンケート、そして企業アンケートと同時に実施した2004年3月以前の卒業生・修了生へのアンケート結果について記載しています。これらのアンケートの結果は過去4回のアンケートデータを含めて5年分のデータとして比較していますが、2004年3月以前の卒業生・修了生アンケートは2006年が最初の実施でしたので、2年分のデータとして記載しています。企業アンケートに関しては、“全体としての傾向”として企業側から見た本学の卒業生、修了生の評価を簡潔にまとめております。また、卒業・修了後3年を経過した本学同窓生を対象にしたアンケートは、十分ではないかもしれませんが、法人評価の観点からも有用なものです。第3章は「工学部・工学研究科の管理運営」で2006年度の工学部組織および各種委員会の活動等について記載されています。第4章は「工学部の財政」で外部資金の獲得状況、民間との共同研究等について記載されています。第5章は「工学部と社会のつながり」で公開講座、出前講義等について記載されています。第6章は「おわりに」では編集作業にあたった部局評価委員のコメントが記載されています。

なお、今回より、電子化したCD版としての発行形態を再考し、より広範に、また利便性良く閲覧できるよう、工学部のホームページに掲載することに致しました。これにより、学内外に九州工業大学工学部・工学研究科の内容を公表し、社会に開かれた大学としての役目を達成したいと考えております。

最後に、平成19年度の「工学部自己点検・評価報告書・現状と課題」をまとめるにあたりご協力頂きました教育職員各位、および事務職員の皆さまに心から感謝致します。

平成20年1月吉日

鶴田隆治（工学部・工学研究科部局評価委員会委員長）

## 2 工学部・工学研究科の教育

### 2.1 2006年度卒業生アンケート（工学部）

アンケート実施年月日 平成19年3月5日

アンケート回収率

学年	配付枚数	回収枚数（回答率）
4年生（卒業予定者）	585枚	347枚（59.3%）

[1]所属する学科・コース名を書いて下さい。

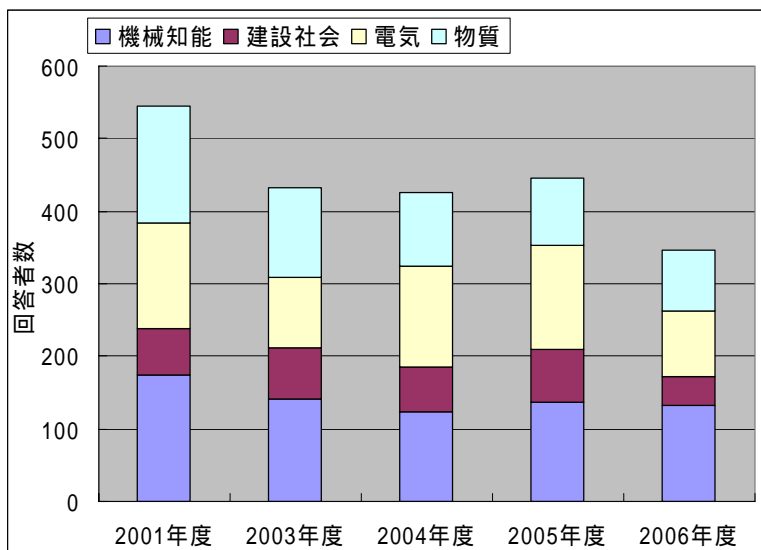
機械知能工学科（133名）

建設社会工学科（39名）

電気工学科（91名）

物質工学科（84名）

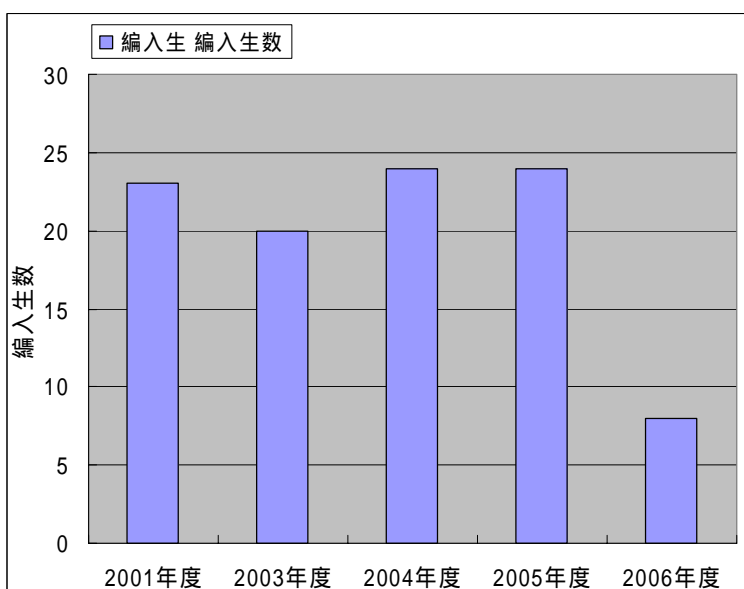
回答者数が昨年の445名から大きく減少して347名となり、回答率が60%を下回ってしまった。特に建設社会と電気工学科の減少が目立つが、その理由を調べて改善し、2001年度の水準に戻す努力が必要である。



[1-1]3年次編入の人は[ ]に○を入れて下さい。

[8名]

3年次編入生の回答数は、ここ数年大きな変化はなかったが、今回は大きく低下している。特別な理由があると思われるので、早急に調べて対処する必要がある。

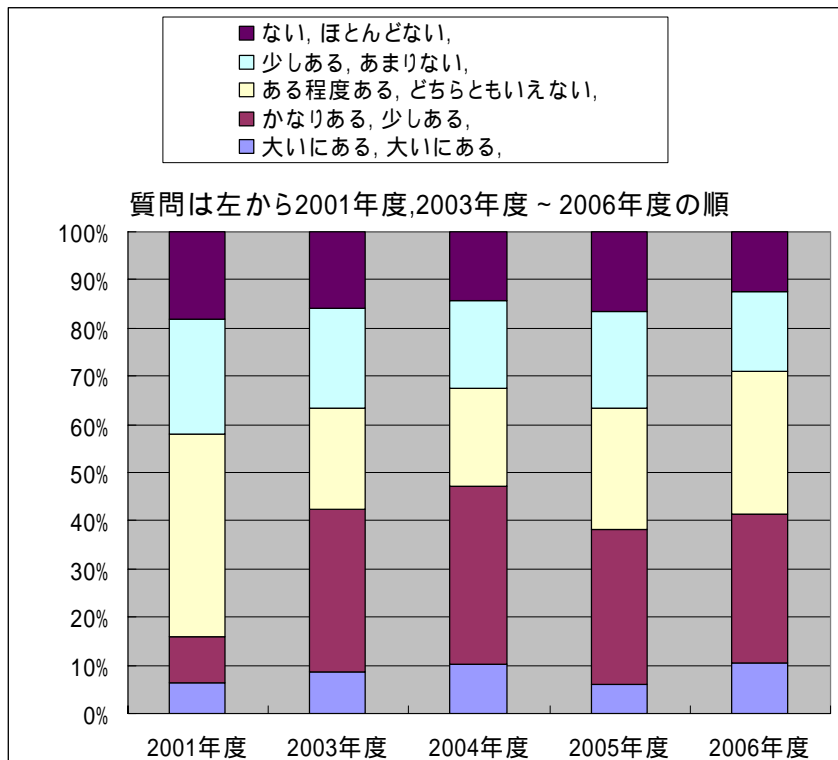


[2]大学教育があなたの成長（自己形成）に及ぼした効果についてお尋ねします。

[2-1]人間科学科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

（法学，経済学，社会学，哲学，倫理学，歴史学，語学，保健体育学，文学，教育学等）

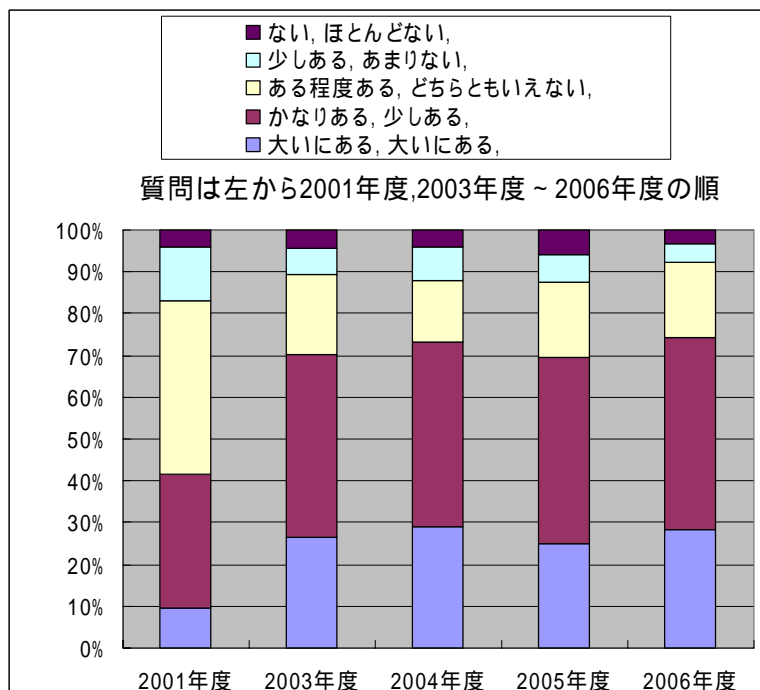
効果があると回答した割合が増加し，2004年度までにみられていた教育の改善傾向が再び現れている．人間科学科目の教育改善が順調に進んでいると判断できる。



[2-2]工学基礎科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

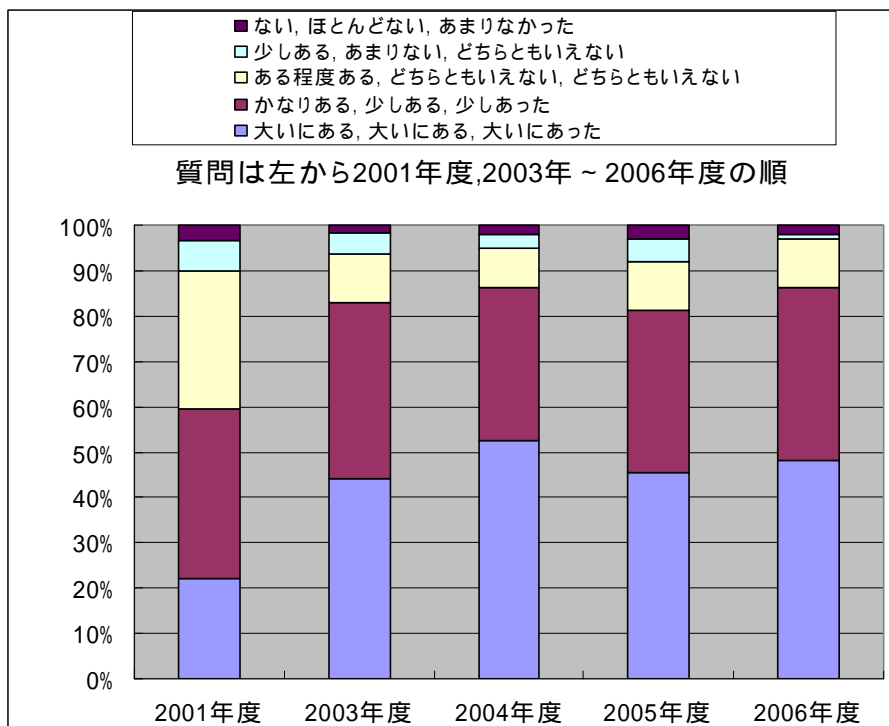
(数学，物理学，化学，情報関連基礎科目)

効果が「あまりなかった」，「ほとんどなかった」と回答した割合が減少しており，「大いにある」と「少しある」を含めた評価が70%を超えている。工業基礎科目においても教育改善が順調に進んでいると判断できる。



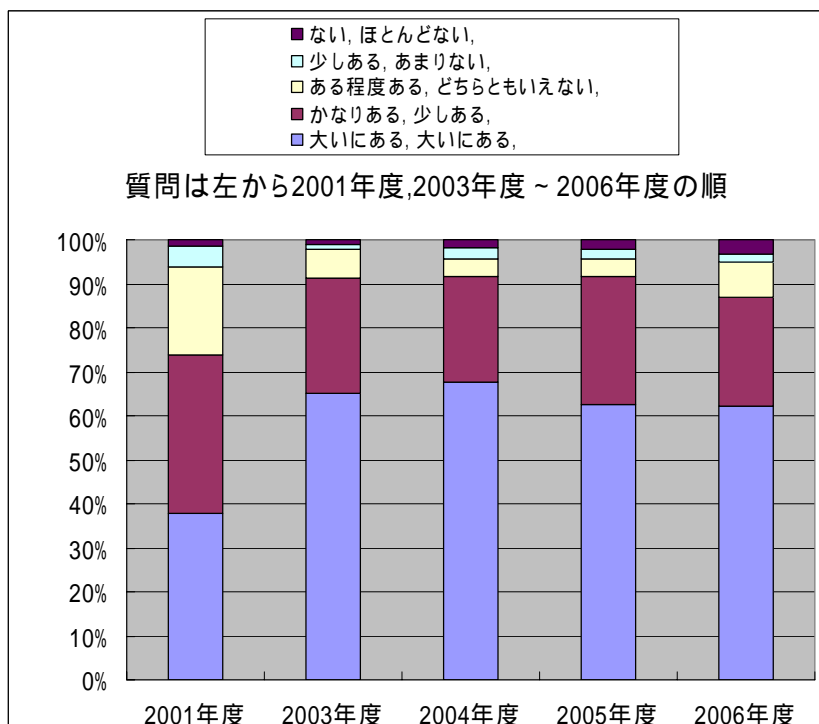
[2-3]工学専門科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

「あまりない」「ほとんどない」という否定的な回答がかなり減少している。また、「大いにある」と「少しある」を加えると85%を超えており、教育に対する工学専門科目の達成度は満足できるものであると判断できる。



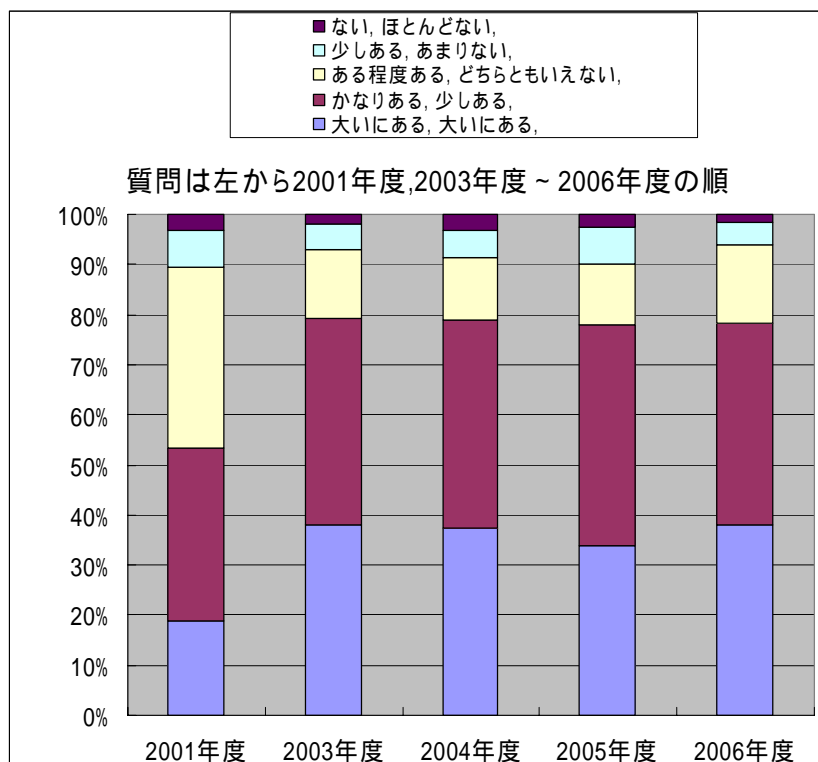
[2-4]卒業研究はあなたの自己形成に効果がありましたか。

「大いにある」は2005年度とほぼ同じであるが、「どちらともいえない」が増加し、その分「少しある」が減少している。卒業研究が自己形成に効果があると回答した卒業生の割合が90%を下回ったものの、教育に対する卒業研究の達成度は十分に満足できるものであると判断できる。



[2-5]実験・実習・演習・製図はあなたの自己形成に効果がありましたか。

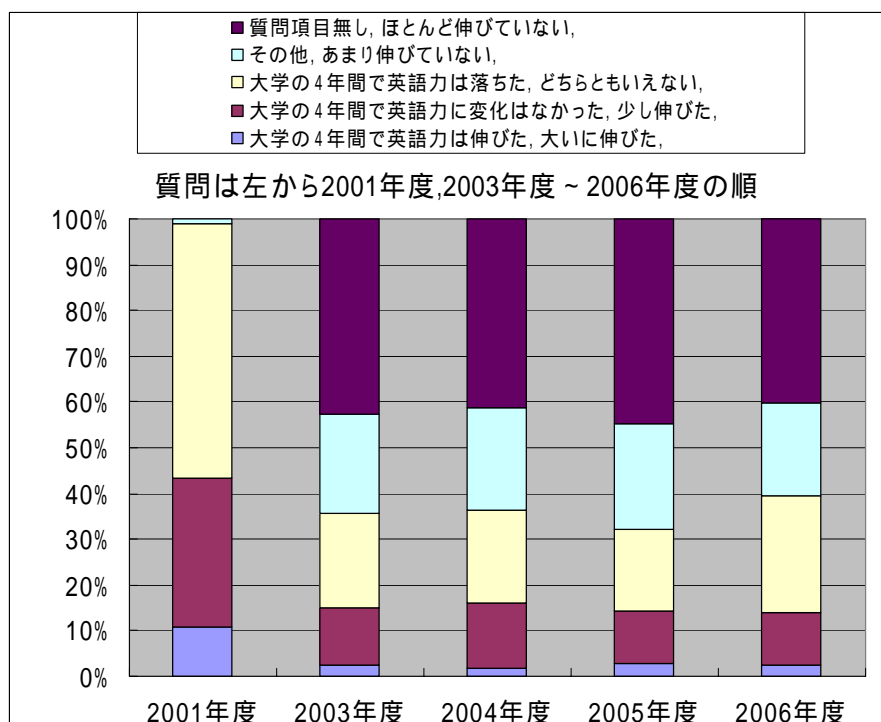
これまでと同様、「大いにある」と「かなりある」とをあわせ、80%程度の学生が効果があったと答えており、実験・実習・演習・製図の教育効果はかなり高いと考えられる。



[3]英語力についてお尋ねします。

[3-1]大学の4年間であなたの英語力は伸びましたか。

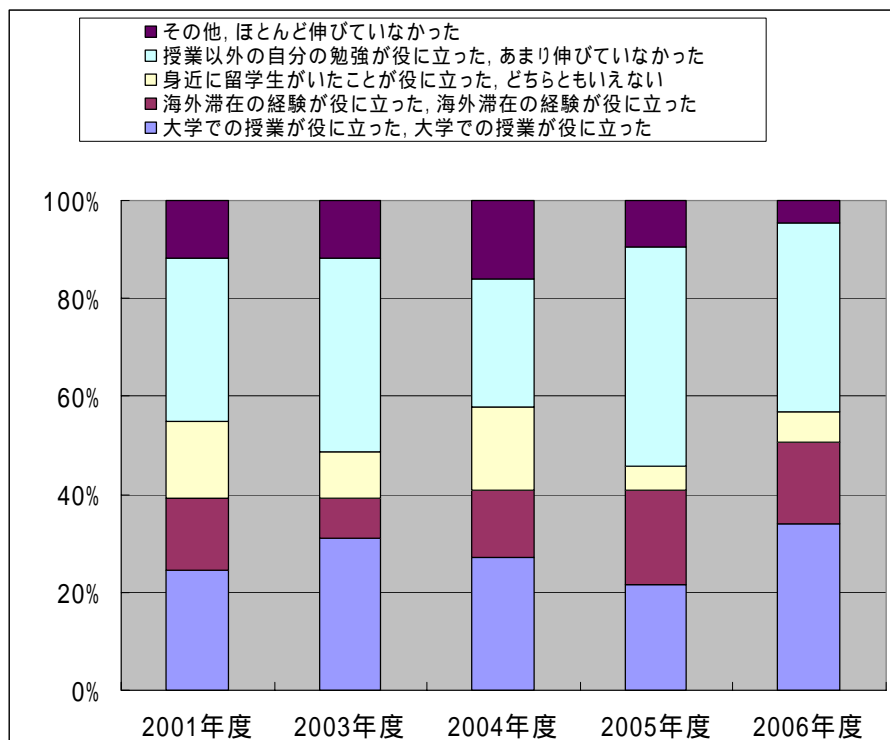
2003年度からの4年間、およそ4割の卒業生が「ほとんど伸びていない」と回答しており、全体の傾向も変わっていないため、改善がなされていないと判断される。





[3-2][3-1]でA（大いに伸びた）またはB（少し伸びた）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

2006年度は大学の授業に対する評価が増加している。ここ数年みられた「海外滞在の経験」が役に立ったと回答している学生の増加傾向は止まっており，学生支援等の制度面において，新たな取り組みが必要になってきたのではないかとと思われる。



E（その他）[具体的に： ]

- ・ 3年次以降授業がほとんどなかったから。
- ・ 大学院入試の為，TOEICの勉強をしたので。
- ・ 英語にふれる機会が少ない。
- ・ あまり英語を勉強することがなかった。
- ・ 研究室での論文で
- ・ 研究室での英語文献

大学院入試やTOEIC受験，そして卒業研究で英語に触れる機会があることが英語力を高めることの原因として上がっているが，逆に通常の授業が少ないため，全体としての英語力の向上に成果が現れていないと思われる。

[3-3][3-1]でD（あまり伸びていない）またはE（ほとんど伸びていない）と答えた方：その理由は何ですか。

昨年と同じく，「1年次にしか必修科目としての英語科目が無い」や「1，2年の授業以外に触れる機会がない」といった意見が多く，カリキュラムに工夫が必要と思われる。

- ・ 続けなければ忘れてしまう。
- ・ 1年のときしか勉強しなかったから。

- ・ 英語を使用する機会が少なすぎたため。
- ・ 継続することができなかつたから。
- ・ 学んでいたのが1年生のときだけだったため。
- ・ 勉強する機会がなかった。
- ・ 1, 2年生のときでほぼ授業が終わってしまい, 3, 4年生のときにほとんど勉強していないから。
- ・ 英語を使う機会が無い。
- ・ 授業を受けるのみで自分自身では特に勉強しなかつたため。
- ・ 英語に対する大学, 又本学生全体の意識が低いこと。自分自身のあまえ。
- ・ 1年生のときにしか英語をしていないから。
- ・ 英語の授業が少なく, 自己学習もしなかつたため。
- ・ 英語に触れる機会がほとんどなかつたため。
- ・ 1年時に授業が多く, その後授業が少ないため。
- ・ 専門の勉強が優先になった。
- ・ 3年以降勉強していない。
- ・ 勉強してないから。
- ・ 授業が選択のため, 受けなかつた。
- ・ 1年次のみだから。
- ・ 授業がすくない。
- ・ 1年だけしか英語の講義が行れないため。
- ・ 勉強をあまりしてないから。
- ・ 英語を作っていないから。
- ・ 勉強不足, 授業が中学レベル
- ・ 1年次しか英語をやっていないから。
- ・ 1年のときに少しただけで後はほとんどしないから。
- ・ 自分の意識と英会話に日常性を感じなかつたため。
- ・ 英語の講義を受けていないから。
- ・ 分からなかつた。
- ・ 使う機会が少なく, 高校よりレベルが低かつた。むしろ, 落ちている。
- ・ 英語の勉強をすることがあまりない。
- ・ 英語を使う機会が少なかつたから。
- ・ 勉強していない, 授業がない。
- ・ ほとんどの資料は日本語である。
- ・ 2, 3年次にほぼ英語の勉強をしていなかった為。
- ・ 高校よりも英語をつかわなくなつたため。
- ・ 教育時間短か過ぎ。
- ・ 中, 高校でやったことの繰り返しのよう思えた。
- ・ 英語の授業が少ない。
- ・ 英語を使う必要性がない。
- ・ 勉強しなかつた。
- ・ 授業内容
- ・ 1年だけが必修だった為, その後自分で勉強しなかつたから。
- ・ 1年の頃は機会があつたが学年が上がるにつれて必要性を感じなくなつたため。
- ・ 使用する機会がないから。
- ・ 継続的に学習していない
- ・ 文法などが全然で会話もなななで単位が出てたので...
- ・ 英語にふれる絶対数が減つたため。
- ・ 授業数が少ないから。
- ・ 勉強をあまり行っていないから。
- ・ 時間が足りない。
- ・ 英語力をつける環境が整っていないから。
- ・ 英語系科目が少ないことと, その質の低さ, 及び自己学習の少なさ
- ・ 高校内容よりLevelが下がっている。

- ・ 接することがない。
- ・ 英語の必修授業が一年で終わってしまうため。
- ・ 英語の講義が少なかった。
- ・ 自分から勉強しようとしなかった。
- ・ 英語に触れる機会がほとんどなかった。
- ・ 週に一度しか授業がないため。
- ・ 高校の頃と比べ、英語に触れる機会が減ったから。
- ・ 英語があまり好きではないため。
- ・ むしろ英語力は落ちたと思う。(工学専門英語を除く)
- ・ 自主的に勉強していないため。
- ・ 編入であるために大学で英語の授業を受講しなかったから。
- ・ 授業が中学レベル
- ・ 使う機会がない。
- ・ 1年までしかなかったから。
- ・ 1年生のときしか英語に触れていなかったの、高校生の頃より単語力等、英語関連の力が落ちたと感じます。
- ・ それがわかればもっと伸びたはずだ。
- ・ 英語の必修の授業は、高校生レベルだったから。
- ・ 勉強していないから。
- ・ 勉強してないから。
- ・ 授業での英語が無くなった、2年以降はほとんど、英語にふれなかったから。
- ・ 英語を使う機会が少なかったため。
- ・ 勉強しなかったから。
- ・ 勉強しないから。
- ・ 日常的には学習しなかったから。
- ・ 英語の学習を怠っていた。
- ・ 大学に入って英語を使う機会が減ったから。
- ・ 授業数が少ない。
- ・ 英語にふれる機会が少なかった。
- ・ あまり勉強してないから。
- ・ 勉強しなかったから。
- ・ 大学1年次にしか英語の授業を受けなかったから。
- ・ 英語を勉強する環境になかったことと、自分が勉強しなかった為。
- ・ 2年次以降英語に触れあう機会がなかったから。
- ・ 英語の授業が少ないから。
- ・ 1年次しか勉強していないので、それ以降、英語から離れれば英語力は落ちる。
- ・ 勉強不足。
- ・ TOEICの点数
- ・ 英語は勉強しないと退化することがわかった。
- ・ わからなかった。
- ・ 単位の取得に重きをおいていたため、英語力を伸ばそうという意志がなかった。
- ・ 英語は短期間では学習できない。
- ・ 勉強した時は伸びるが、勉強してない期間があると結局元の学力に戻るから。
- ・ 勉強しなかった。
- ・ 興味ある分野に出会えた。
- ・ 授業外の時間に自主的な勉強をしなかったため。
- ・ 英語に関わっていない。
- ・ 2年生で終わるから。
- ・ 1年生でしか習らわないから。
- ・ 英語の授業が少なかった。
- ・ 関心が持てなかったから。
- ・ 講義以外で自主的にあまり勉強しなかったから。
- ・ 勉強する機会がなかったから。

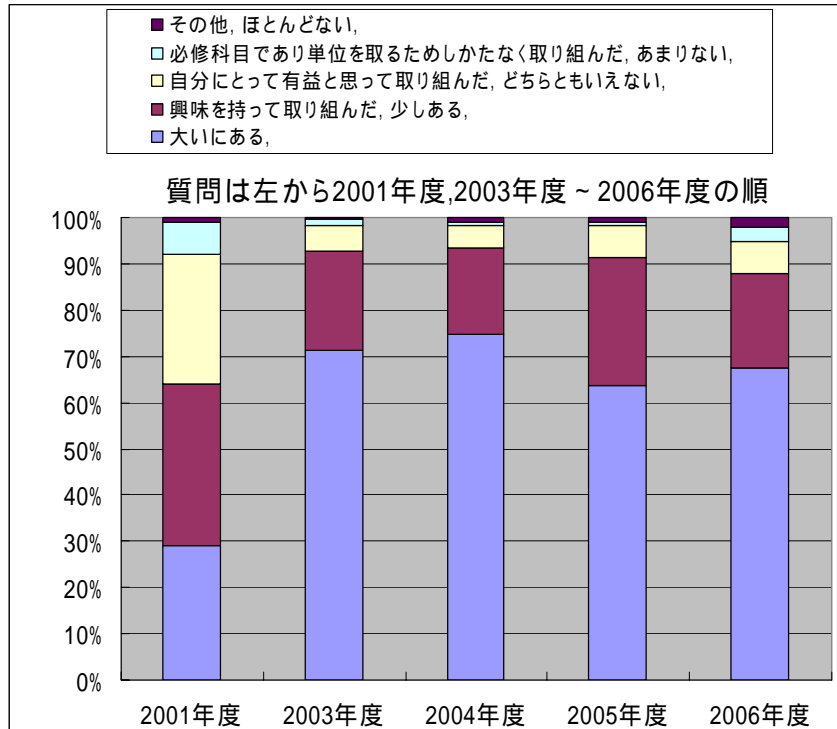
- ・ 1年時のみ
- ・ 大学では学問についてしか学ばなかったため。
- ・ レベルが低すぎて、逆に下がったから。
- ・ 英語の長文にはふれても、文法にふれる機会が少ない。宿題やレポートもない。時間が足りない。
- ・ 2年次以降英語を履修しなかった為。
- ・ 3～4年次にまったくやらなかった。
- ・ 3年時から英語の授業もとらずに、そのままほったらかしにしていた。
- ・ 学年があがるにつれて英語にふれなくなったから。
- ・ 3年次から英語の授業がなかったから。
- ・ やっていない。
- ・ 勉強を全くしていないから。
- ・ なし。
- ・ 特に興味がなく、勉強する気がおきない。
- ・ あまり記憶に残っていないので。
- ・ 勉強をしなかったから。
- ・ 勉強していないから。
- ・ 英語に対する勉強する意欲が全く沸かなかった。
- ・ 1年でしか英語の授業を受けていないため。
- ・ 特にためになる授業がなかったから。
- ・ 自分があまり勉強していなかった。
- ・ 使わないから忘れる。
- ・ 勉強不足。
- ・ 英語にふれる機会が少なかった。
- ・ 英語を使う機会がない。
- ・ 3年・4年ではほとんど英語を使っていないので英語力は落ちてきている気がする。
- ・ 興味なかったから。
- ・ 授業をいかせず、さぼってしまったからだと思います。
- ・ 勉強不足
- ・ 英語に関する機会が少なかった。(自分の努力が足りなかった)
- ・ 高校生の時よりも力が落ちたから。
- ・ 必修しか受けてないから。
- ・ 意欲を持って学習できるような機会がない。
- ・ 何もしてほしかったため。
- ・ 英語の授業のレベルが低かった。
- ・ 2年次以降で英語を学習する機会があまりなかったから。
- ・ 苦手意識を払拭できなかったため。
- ・ 自主的に勉強しなかったから。
- ・ 実用性に欠ける。
- ・ 講義以外で英語に接する機会がなかった。
- ・ 授業内容が中学レベルであり、それを一年しか学ばないから。
- ・ ドイツ語などの勉強をしたから、英語だけのが良いと思う。
- ・ 英語は、1年時の授業以来全んど触れていないため。
- ・ 3, 4年で英語を取らなかった。
- ・ 英語にふれる機会が少なかったため。
- ・ 自分で英語を勉強しようとしなかったから。
- ・ 特に主だった勉強をしていないから。
- ・ 大学1年の時は授業があり、伸びたと思うがその後は授業もなく、自身でも何もしなかったため、伸びなかった。
- ・ 授業の単位を取るためだけだった。
- ・ 英語の講義をとらなかった。
- ・ 英語にふれる機会が、なかったため。

- ・ 英語に接する機会が少なかったから。
- ・ 英語の時間数が少ないため。
- ・ 英語の勉強を4年間まったくしていない。授業でしか、英語には、触れなかった。
- ・ 大学で英語に触れない時間が多かったため。
- ・ 大学時代に努力を怠った。
- ・ 英語に関わっている期間にバラつきがあった。
- ・ 英語の勉強する時間がすくなかった。特に3年時。
- ・ 英語に触れる機会がなかった。
- ・ 授業時間が少ない。
- ・ 英語に触れる機会が少なかった。
- ・ 3・4年の英語の授業がほとんどなかったため、忘れていった。
- ・ ほとんど英語に触れる機会がなかった。
- ・ 2年次以降に英語の科目が選択以外なかったから。
- ・ 1, 2年生のときしか授業をとっていない。
- ・ 授業が充実していない。
- ・ 英語に接する機会が極端に減った。
- ・ 結果が全てです。
- ・ 内容の薄い英語の授業じゃ英語力なんてつきません。
- ・ ほとんど英語にふれなかったから。
- ・ 英語を学ぶ機会なし。
- ・ 英語の必要性がまだ自分の中で確立していないため自分自身の意識が低いから。
- ・ 元来英語は苦手だから。
- ・ 英語の講義が少なすぎるため。
- ・ 実際に英語が身につかなかったから。
- ・ 工業系の大学だから仕方ない。
- ・ 英語を1年のときにしか勉強しなかったため。
- ・ 英語科目は数が複数あるのに内容がバラバラだから。
- ・ 勉強する機会がなかったから。
- ・ 日常で英語を使う機会がない。
- ・ 上級英語の授業をとらなかった。TOEICを受けていない。
- ・ あまり英語にふれなかった。(高校生の時より学習時間が減った)
- ・ 授業が全く面白みがなく、つまらないものだった。
- ・ 学年があがるにつれて英語の講義が少ないこと。
- ・ 自分で英語の勉強をしていなかった。
- ・ 授業内容は高校以下のレベルの英語の授業だと思う。
- ・ 講義が終わってから英語にほとんど触れなかったため。
- ・ 英語の学習量が足りなかったため。
- ・ TOEICに照準を合わせてほしかった。英語の講義が低レベルすぎる。
- ・ 高校のときのほうが勉強していた。
- ・ 3年以降に英語の講義がほとんどない。
- ・ よくわからなかった。
- ・ 英語に触れる機会が少ない。4年時に必要になる英語の力は1～3年までの授業に関係ない。

#### [4]卒業研究についてお尋ねします。

##### [4-1]卒業研究の意義はあると思いますか。

2006年度は、「大いにある」がやや増加したが、「少しある」が減少したため、両者の合計は90%を少し下回っている。しかしながら、依然高い割合で学生は卒業研究に大きな意義を感じており、これまでと同様、卒業研究は教育の達成に有効であると判断される。

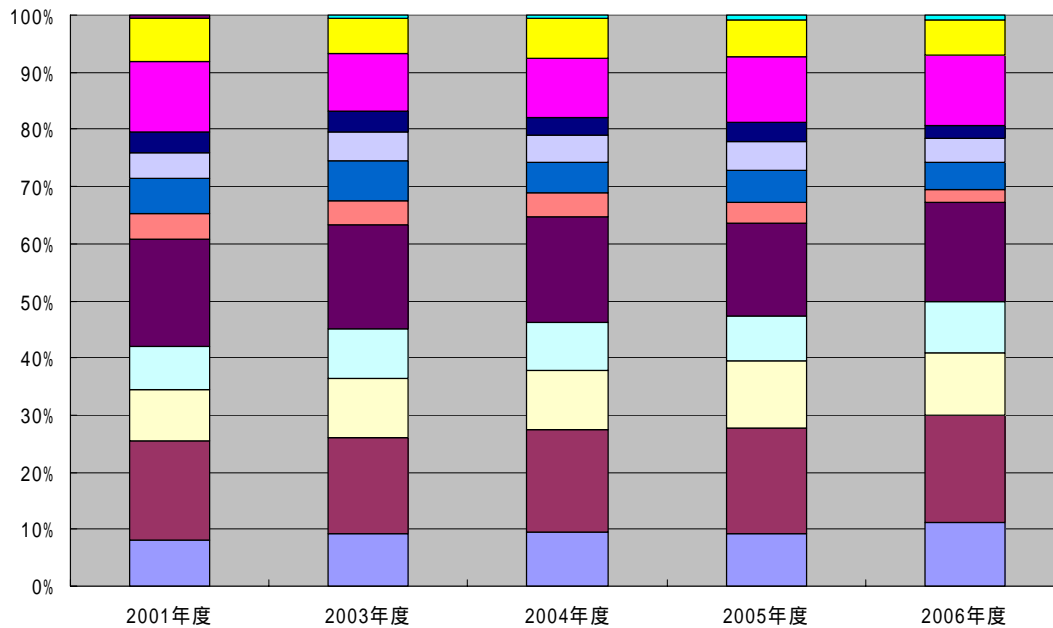


[4-2][4-1]でA（大いにある）またはB（少しある）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

(1)講義では学べなかった知識,スキルを学ぶことができた,(2)発表の仕方を学んだ,(3)研究がどのようなものかわかった,を理由に挙げる学生が多く,卒業研究活動の意義に対する理解はここ数年変化していない。

- その他,
- 意義がなかった, その他,
- 問題を探求する方法について勉強できた, 問題を探求する方法について勉強できた,
- 研究がどのようなものかわかった, 研究がどのようなものかわかった,
- 優れた研究に関わることができた, 優れた研究に関わることができた,
- 些細なことでもこれまでにない発見や創造の楽しさを実感した, 些細なことでもこれまでにない発見や創造の楽しさを実感した,
- 自分で新しいものを作り出すおもしろさを経験した, 自分で新しいものを作り出すおもしろさを経験した,
- グループ活動の勉強になった, グループ活動の勉強になった,
- 発表の仕方を学んだ, 発表の仕方を学んだ,
- 文献の読み方, 集め方を学んだ, 文献の読み方, 集め方を学んだ,
- 自主的に研究を進めるやり方が身に付いた, 自主的に研究を進めるやり方が身に付いた,
- 講義では学べなかった知識, スキルを学ぶことができた, 講義では学べなかった知識, スキルを学ぶことができた,
- 問題解決の方法論を勉強できた, 問題解決の方法論を勉強できた,

質問は左から2001年度,2003年度～2006年度の順



L (その他)[具体的に :

]

- ・ 人間関係
- ・ 「学ぶ」という行為の意義を知る良いきっかけとなった。
- ・ 資料の作り方がわかった。
- ・ 研究を進めていく中で, 考え方, 自主性を学べた。
- ・ 会社にいるであろう, 文章を書くことの練習となった。
- ・ 自分のやっている研究に対する理解が深まった。
- ・ 技術が身についた。
- ・ 本当の意味の勉強ができた。
- ・ 大学生活4年間うち, 一番充実しているといえたのが4年生の一年間であった。大学入学時から研究したかった。
- ・ 研究は思っていたより複雑であることがわかった。

[4-3][4-1]で卒業研究の意義がD(あまりない)またはE(ほとんどない)と答えた方: その理由は何ですか。

ごく少数意見となるが, 卒業研究の楽しさよりも苦しさのみが残ってしまったと思われる意見があった。

A [具体的に： ]

- ・ 理由もない。
- ・ 特になし。
- ・ 評価方法があいまいなため。
- ・ 興味がない。
- ・ 社会に出て役に立つとはあまり思えないから。
- ・ 卒論は自分から自由と健康を奪ったから。
- ・ 大変なだけで，社会に出ても必要としない。
- ・ たかだか1年間で4年間の集大成とはいえない。研究内容によって，仕事量が違う。
- ・ 忙しすぎる。
- ・ 院に進学する学生はいずれ重複する内容をするようになるので何も分からない段階で形づくって卒業研究をするよりかは卒業試験または研究レポートの提出をする方が意味があると思う。
- ・ 精神的に苦しく眠れずノイローゼ気味になった。
- ・ 人間関係を学べた。
- ・ そう思うから。
- ・ 自由な時間がほとんどもない。研究時間が長いことや，休み期間が短い。
- ・ 理系なので卒業研究とはいっても人の研究でしかない。他人にテーマきめられて手足のように実験するだけではない。
- ・ 研究室によって卒論へのとりくみが大きく異なるため。
- ・ 自分の希望する職種と同じ研究を行っている研究室に配属されなかったから。
- ・ ほとんどが何も考えずに同じ作業をくりかえしているだけだから，自分で勉強した方がいい。

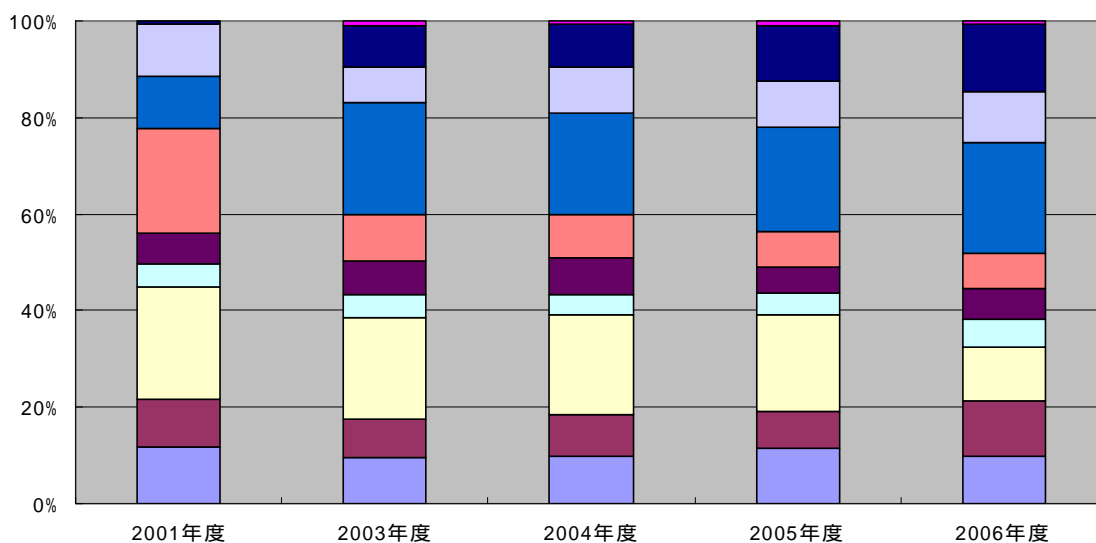
[5] 大学生生活を振り返って，どのようなことがよかったですか。（複数回答可）

これまでと同様，「将来の自分の進路を見出したこと」，「友達ができたこと」，「自由であったこと」などが多く回答されている。詳細を見ると，「知識・視野が広がり人間的に成長したこと」は減少し，「将来のために必要な能力を身につけたこと」の回答が増えている。



- 質問無し, その他,
- その他, 時間が十分あり, 自由であったこと,
- 時間が十分あり自由であったこと, 部やサークルの活動に打ち込めたこと,
- 部やサークルの活動に打ち込めたこと, 友達ができたこと,
- 友達が出来たこと, よい先生にめぐり会ったこと,
- 卒業研究が出来たこと, 卒業研究ができたこと,
- 自分の好きな勉強が出来たこと, 自分の好きな勉強ができたこと,
- 知識, 視野が広がり人間的に成長したこと, 知識, 視野が広がり人間的に成長したこと,
- 将来仕事をする上で必要な能力を身につけたこと, 将来仕事をする上で必要な能力を身につけたこと,
- 将来の自分の進路を見出したこと, 将来の自分の進路を見出したこと,

質問は左から2001年度,2003年度～2006年度の順



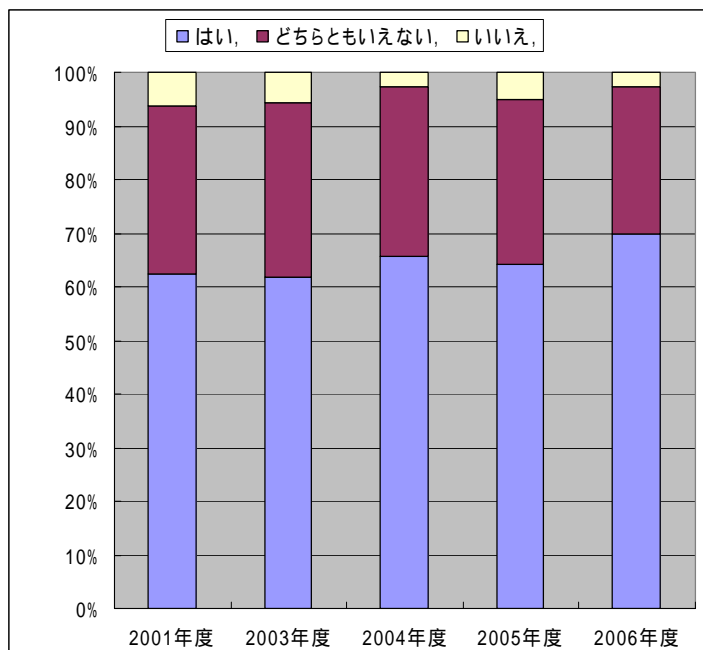
J (その他) [具体的に: ]

- ・ 同じ考えを持つ仲間めぐりあえたこと。
- ・ 一人暮らしができた。
- ・ 生涯, 勉強しないといけないことがわかった。
- ・ 部活に入ったことでOB, 先輩方からいろんなことを学べた。大学での友達ともいろいろ話し, 楽しい大学生活をおくれたこと。
- ・ 特になし。

[6]入学した学科についてお尋ねします。

[6-1]現在の学科に入学してよかったと思いますか。

2001年度～2006年度の傾向を見ると、「はい」が60%超で推移しており、「どちらとも言えない」が33%から減少している。「いいえ」の割合も6%程度から減少傾向にある。全体としては学生の満足度は増加の傾向にある。



[6-2][6-1]でC(いいえ)と答えた方：その理由は何ですか。

質問の意味にかかわらず感想を書いているが、「いいえ」と回答した回答者の理由としては、「志望学科の内容が自分に合っていないとか、おもしろくない」と回答した卒業生が比較的多かった。

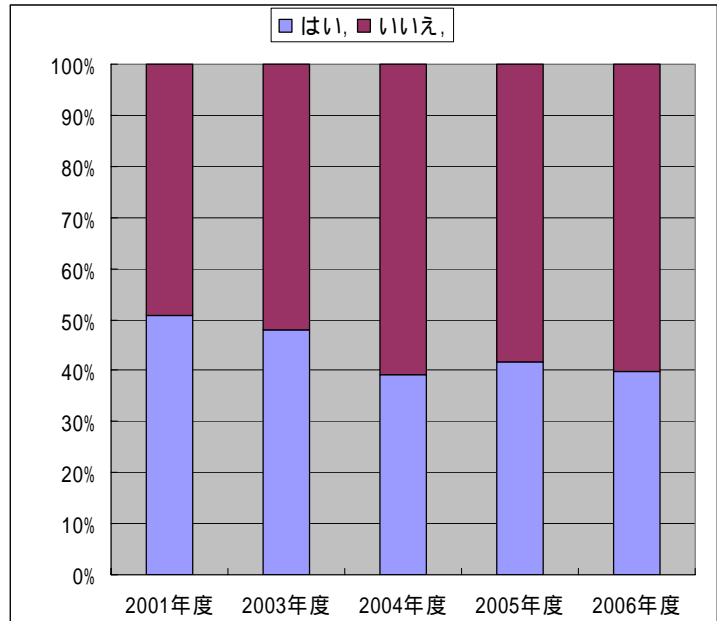
A [具体的に： ]

- ・ 工学があまり向いていない。
- ・ なし。
- ・ おもしろい
- ・ おもしろくないことに加え、その業界が先細り
- ・ 自分に合ってなかった。
- ・ 土木は将来不安である。
- ・ あまり興味がない。
- ・ 講義などの選択肢が少ない。
- ・ あまり自分のために役立ってないと思ったから。

[7]入学時の目標の達成についてお尋ねします。

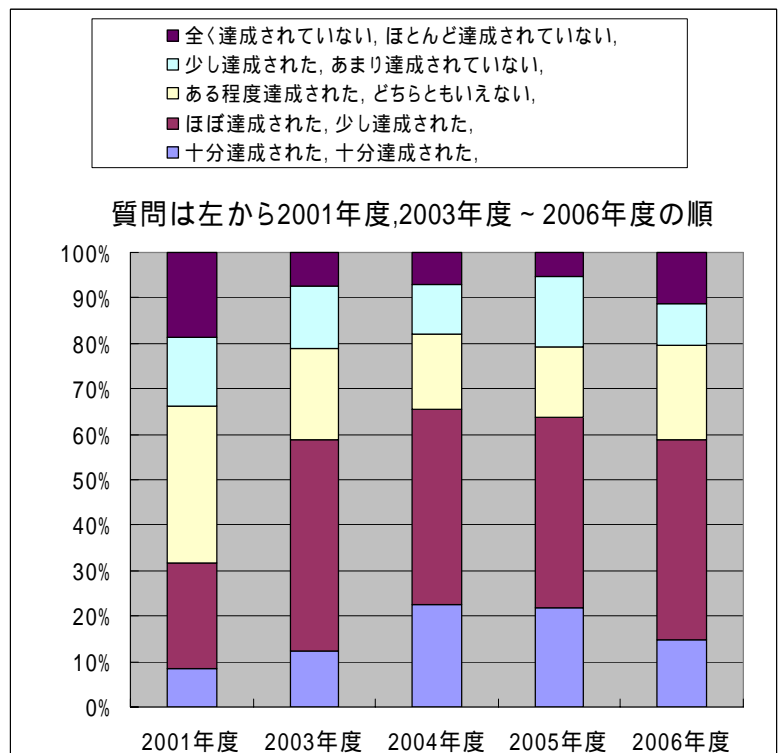
[7-1]あなたは入学の時に大学で達成したい目標がありましたか。

2011年度から2016年度までをみると、「はい」が50%から40%程度にまで減少しており、目標をもたずに入学する学生が増えている。



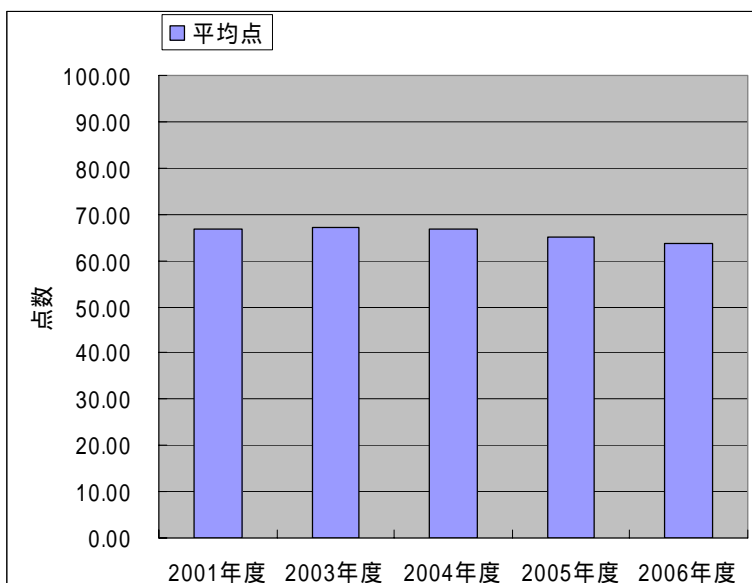
[7-2][7-1]でA（はい）と答えた方、それは現在どの程度達成されていますか。

「十分達成された」が、2011年度から2015年度にかけて増えてきていたが、2016年度には若干減少している。今後の動向に注意が必要であるが、全体的には、目標を持って入学した学生に対する改善効果が現れている。ただし、[7-1]で示したとおり、「はい」と答えた学生数が減っていることを認識しておく必要がある。



[8]在学中の学生生活の満足度に対して100点満点で点を付けるとすれば何点と思いますか。

2011年度から2016年度にかけて満足度が若干減少傾向にあり、今後の動向に注意が必要である。

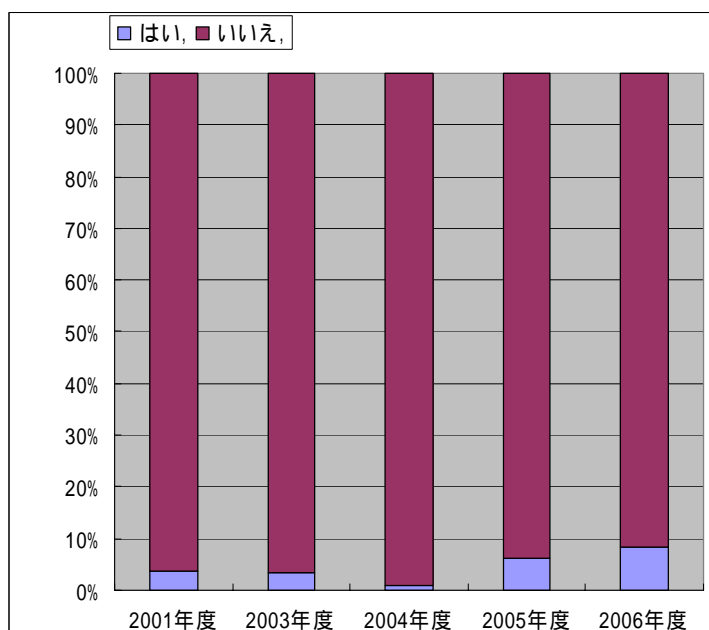


[9] 卒業により取得予定の資格についてお答え下さい。

(本学の教育目標に適合しない資格(自動車免許等)は除外します。)

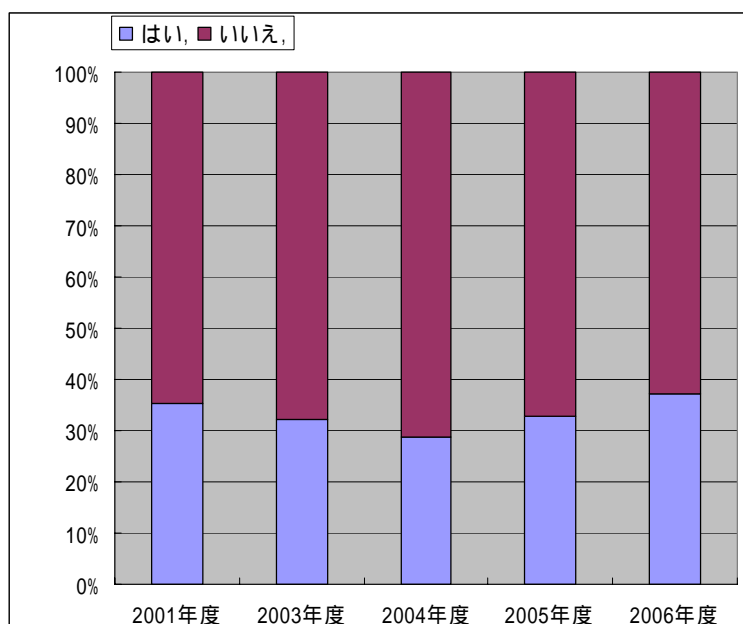
[9-1] あなたは教員免許取得を目標としていましたか。

工学部で「教員免許取得を目標とした」学生が若干現れてきた。



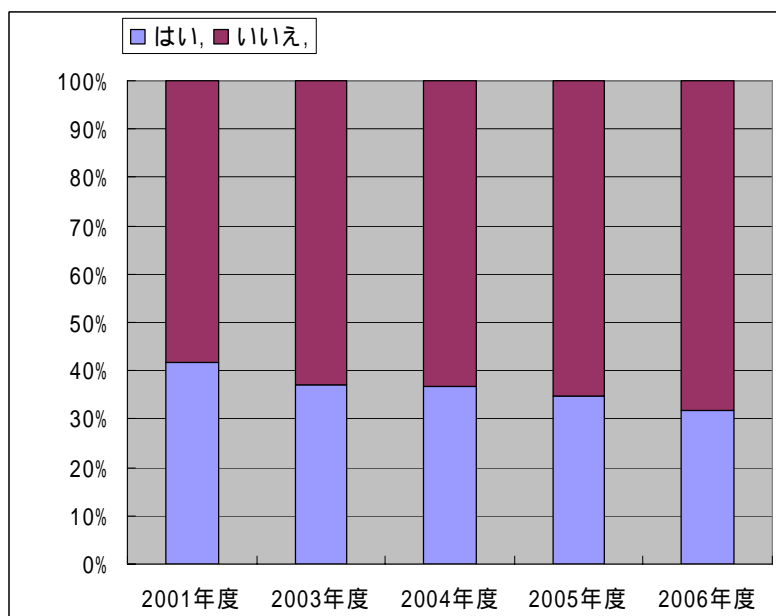
[9-2] 教員免許(数学)が可能でしたら、あなたは取得を希望しましたか。

卒業後教員免許を取得予定の卒業生は減少傾向にあったが、資格の必要性を感じている卒業生が増加し始めていると考えられる。



[9-3]あなたは卒業後資格（教員免許を除く）を取得する予定ですか。

卒業後資格取得予定の卒業生が減少している。



[9-4][9-3]でA（はい）と答えた方：どのような資格を取得する予定ですか。

卒業生は種々の資格を取得予定である。

A [具体的に： ]

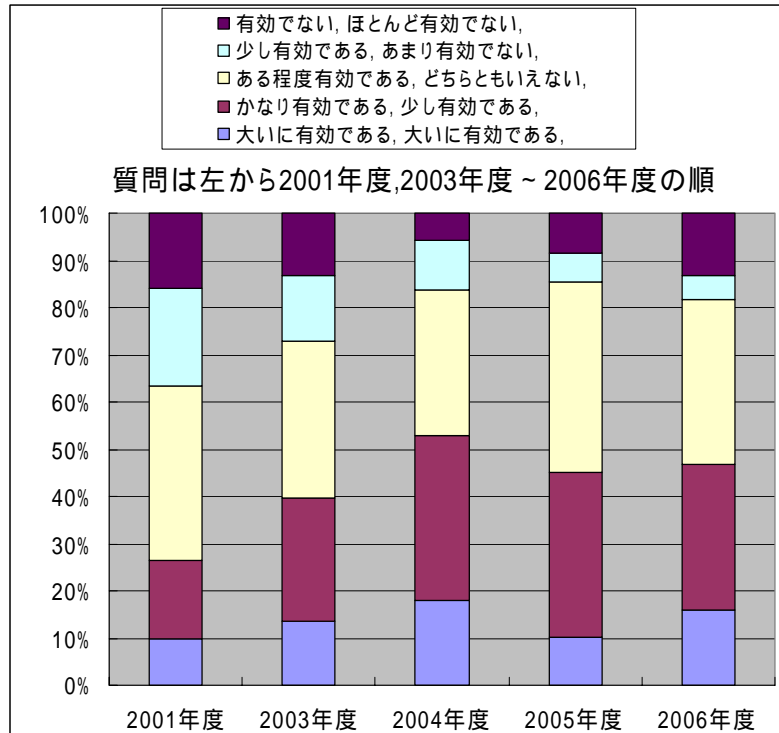
- ・ TOEIC
- ・ 考えていない。
- ・ どんな資格があるか分かりません。
- ・ 考えてない
- ・ カラーコーディネーター
- ・ 中小企業経営診断士，弁護士，行政書士。
- ・ 色々と。

- ・ 仕事に必要なもの。
- ・ いろいろ
- ・ C A D , ワード・エクセル , シスアド
- ・ ボイラタービン主任技術者
- ・ わかりません。
- ・ 具体的には決めていない
- ・ 電気工事士 , 危険物とりあつかい
- ・ 語学系 , 情報系
- ・ 情報関係
- ・ 技術系の資格を広く。
- ・ T O E I C T O F L E
- ・ 技術的な資格
- ・ 危険物
- ・ 基本情報処理技術者
- ・ 技術系の資格
- ・ 情報処理に関するもの。
- ・ 技術士
- ・ 技術士 , 建築士等
- ・ 1 級土木施工管理技士
- ・ 専門の資格
- ・ 一級建築士
- ・ 土木施工管理技士
- ・ 技術士
- ・ 技術士 , 施工管理技士 , 建築士など
- ・ 技術士
- ・ 技術士補
- ・ 技術士
- ・ 技術士補
- ・ 情報系
- ・ 技術士補 , 技術士など
- ・ 技術士 , 施工管理技士
- ・ 技術士とか
- ・ 一級施工管理技士 , コンクリート技士
- ・ 技術士
- ・ 建設系全般
- ・ 技術士
- ・ 技術士
- ・ 宅建 ,
- ・ 環境計量士
- ・ 技術士など
- ・ 情報処理試験
- ・ 情報系 , 英語関連
- ・ 電験 3 種
- ・ 技術士 , I E L T S
- ・ 電気主任技術者 , エネルギー管理士
- ・ T O E I C , 電験 種 , 情報処理
- ・ 電験 , 危険物取扱主任技術者
- ・ 電気関係の資格
- ・ 電気主任技術者
- ・ 電検
- ・ 電験
- ・ 電験 3 種
- ・ 電検 3 種

- ・ 電気主任技術者
- ・ 電検
- ・ 電検
- ・ 基本情報技術者試験
- ・ 第1種陸上無線技士
- ・ TOEIC
- ・ 技術士
- ・ 簿記
- ・ 電気主任技術者
- ・ 初級シスアド・電検
- ・ 第1級陸上無線技士
- ・ 第1種陸上無線技士
- ・ 基本情報処理
- ・ 会社での就業に役立つ資格
- ・ 電気通信主任技術者
- ・ 日商簿記3級
- ・ TOEIC
- ・ 情報系
- ・ 情報処理技術者試験
- ・ 基本情報その他
- ・ 情報処理技術者
- ・ 基本情報処理技術者試験
- ・ 危険物取扱等
- ・ TOEIC, 危険物取扱など
- ・ 中小企業診断士
- ・ 危険物取扱いとか
- ・ 仕事についてから必要とされる資格
- ・ X線操作技士
- ・ 弁理士資格
- ・ 危険物取扱
- ・ 初級シスアド
- ・ 環境関係, パソコン関係
- ・ 就職に必要かつ, 今後のためのものを。
- ・ 電験
- ・ 気象予報士の資格
- ・ 他学部を受検
- ・ 工学系のもの。会社で必要なため。

[9-5][9-3]でA(はい)と答えた方:大学の授業は資格取得に有効ですか。

2001年度~2006年度の傾向を見ると、「大いに有効」及び「少し有効」であると回答した卒業生が、30%弱から過半数程度まで増加しており、大学の授業は資格取得に有効と評価している卒業生が増えている。



[9-6][9-5]でD（あまり有効でない）またはE（ほとんど有効でない）と答えた方：その理由は何ですか。

資格取得に直接関連する内容が無いとの回答が見受けられる。以下に卒業生の回答を示す。

A[具体的に： ]

- ・ 参考にはなる程度で十分とは言えない。
- ・ ちがう方向だから。
- ・ 分野が違うから。
- ・ レポートの提出が未だに手書き。勉強にはなったが、PCのスキルにつながらない。
- ・ 経験的に...
- ・ 分野が違うから。
- ・ 繋がりが無い。
- ・ 授業の内容が現実的でない。
- ・ 自分で参考書等で勉強した方が効率的
- ・ 分野がちがうから。
- ・ 資格取得に沿った授業ではないから。
- ・ 取れる資格があまりないため。
- ・ あまり範囲を網羅しているといえない。
- ・ 特に試験に直接関わる授業や講習会がなかったの。
- ・ 関係性がないから。
- ・ 授業がないため。
- ・ 授業は資格とは関係ない内容ばかり。
- ・ 自分に教員免許取得の意志がないから。
- ・ 専門がちがう。
- ・ つながりが分からない。
- ・ 正直使って使えない。
- ・ 専門分野以外の資格取得には有効でない。
- ・ 直接材料に関わる資格がほとんど無いから。

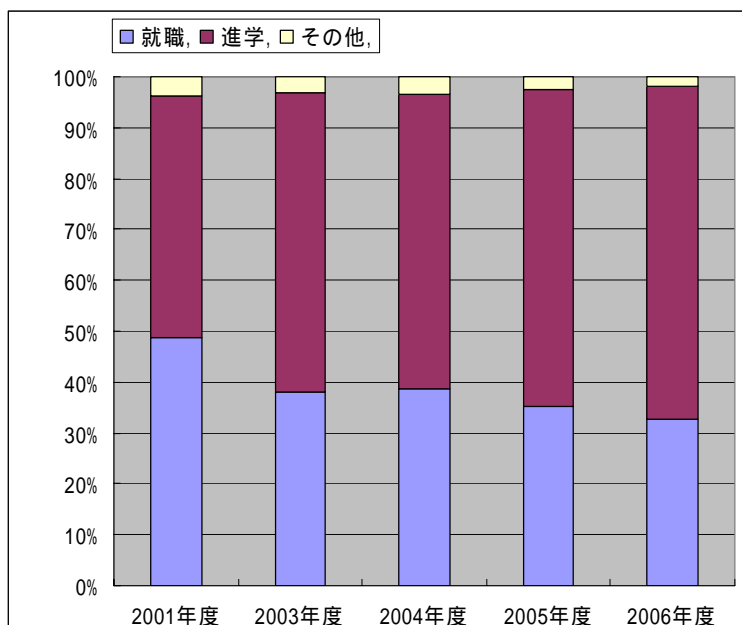


- ・ 学科が違う。
- ・ 自分の希望する資格にほとんど大学の授業は関係ない。

[10]卒業後の進路についてお尋ねします。

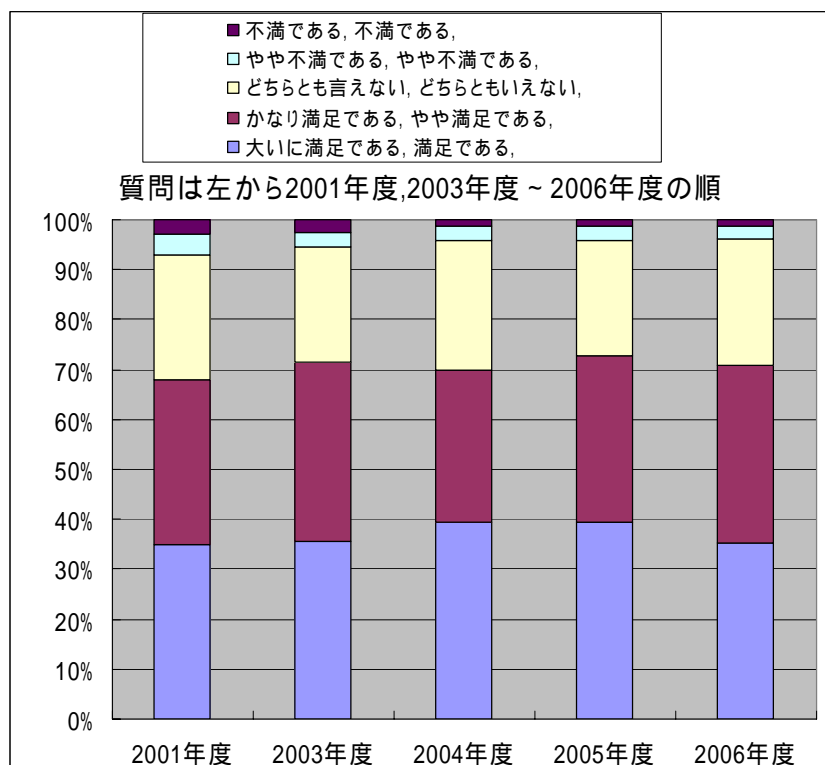
[10-1]あなたは卒業後就職しますか，進学しますか。

進学する卒業生が2003年度に6割弱であり，2004年度もほぼ同じであるが，2005年度と2006年度は6割強となり，学部生の進学率は増加していると言える。



[10-2]あなたは卒業後の進路に満足していますか。

2001年度から2006年度の傾向を見る。「不満であるとやや不満である」が7%から4%と若干減少しており，「かなり満足である」と「大いに満足である」が増加傾向にある。「大いに満足である」は2001年度から2005年度にかけては35%から40%と増加していたが，2006年度には減少している。今後の動向に注意は必要であるが，全体的には改善の傾向にある。



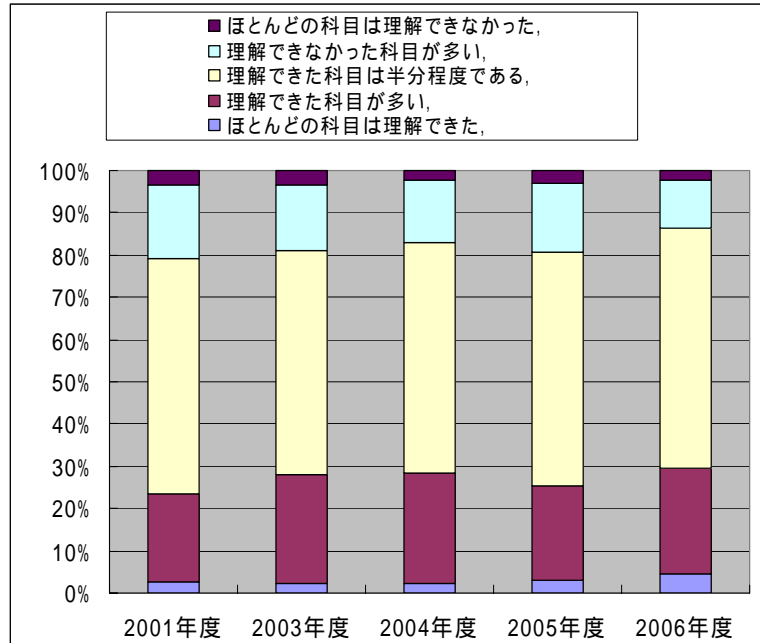
[10-3][10-2]でD（やや不満である）またはE（不満である）と答えた方：その理由は何ですか。

将来の不安,卒業後の進路を安易に決めたことへの後悔をあげた卒業生が比較的多かった。

- ・ やっていけるかどうか。
- ・ 何も決められなかったから。
- ・ 進路選択をする際にその時しのごいで大学院にってしまったこと。
- ・ もっといい仕事先をのぞんだから。
- ・ 就職先の決定が安易すぎた。
- ・ 上へ
- ・ 就職したかったから。
- ・ 進路が今だに決まっていないから。
- ・ 自分自身の思ったものになれなかった。（就職できなかった）
- ・ まよっているから。
- ・ 自分の実力がともなわないのに院試に合格してしまった。
- ・ 将来が不安です。就職など

[11]これまでに受講した科目の理解度はどの程度ですか。

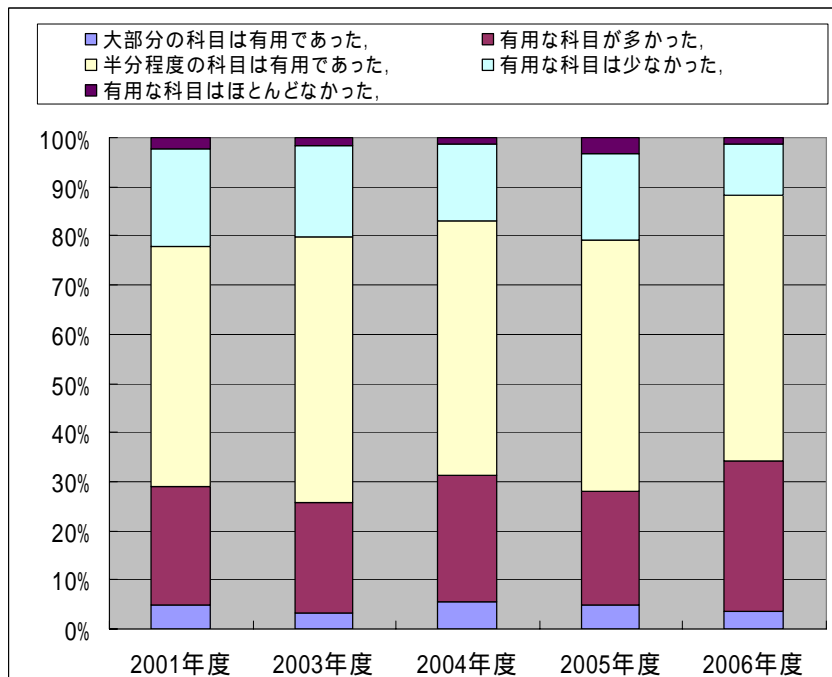
2001年度から2006年度の傾向を見る。「ほとんどの科目は理解できなかった」と「理解できなかった科目が多い」の割合が21%から減少し,特に,2006年度には13%に減少している。更に,「理解できた科目が多い」と「ほとんどの科目は理解できた」の割合も24%から増加し,全体的には改善の傾向にある。



[12]履修価値のあった科目の割合についてお尋ねします。

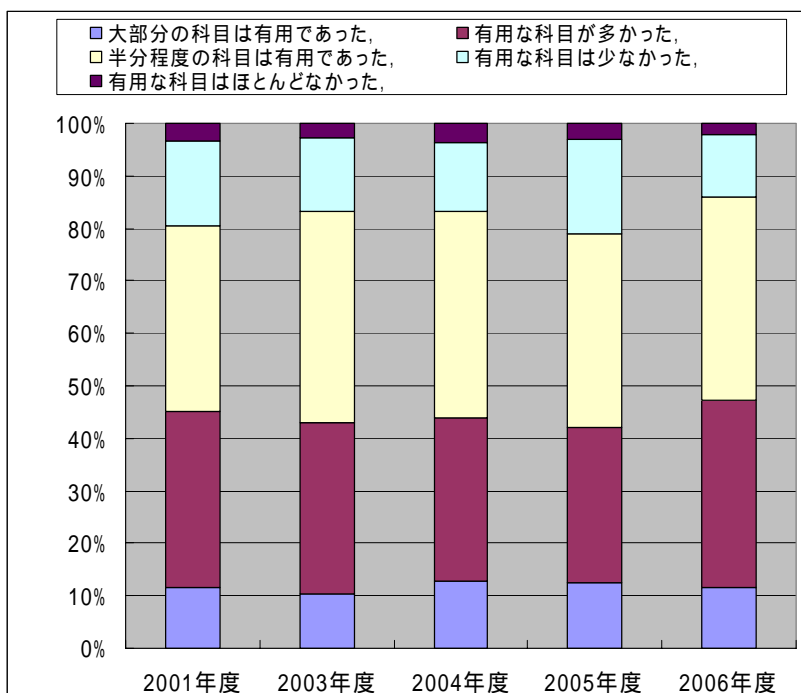
[12-1]受講した講義科目（演習科目を含む）の中で、自分自身の成長のために有用であり、履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

2001年度から2006年度の傾向を見る。「有用な科目はほとんどなかった」と「有用な科目は少なかった」の割合が22%から若干減少していたが、特に、2006年度には12%に減少している。更に、「有用な科目が多かった」と「大部分の科目は有用であった」の割合も29%から増加し、全体的には改善の傾向にある。



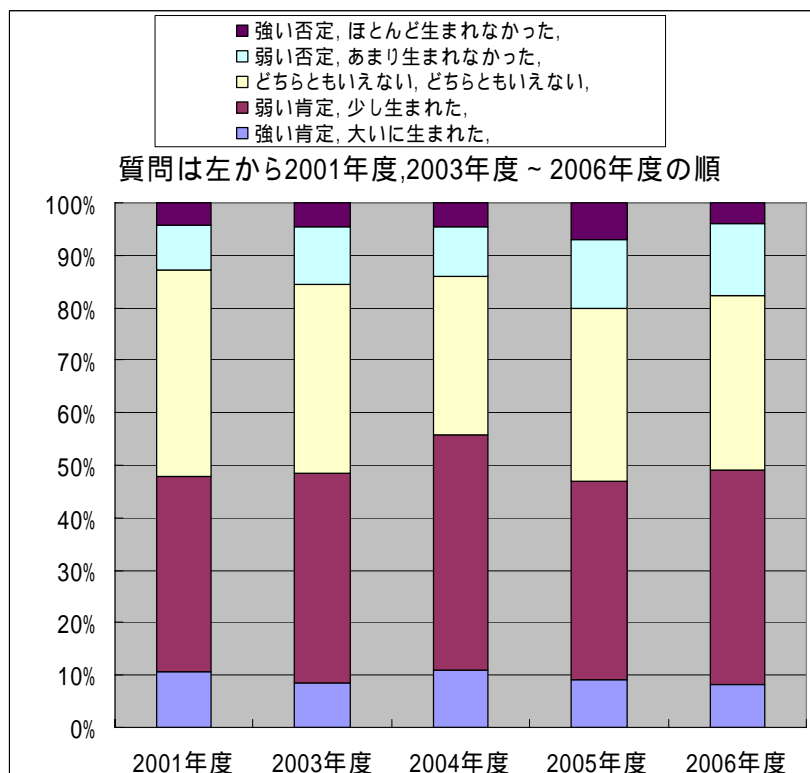
[12-2]受講した実験・実習科目の中で、自分自身の成長のために有用であり、履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

2001年度から2006年度の傾向を見る。「有用な科目はほとんどなかった」と「有用な科目は少なかった」の割合は20%からほとんど変化はなかったが、2006年度には、14%に減少している。なお、「有用な科目が多かった」と「大部分の科目は有用であった」の割合は45%からあまり変化は無かった。



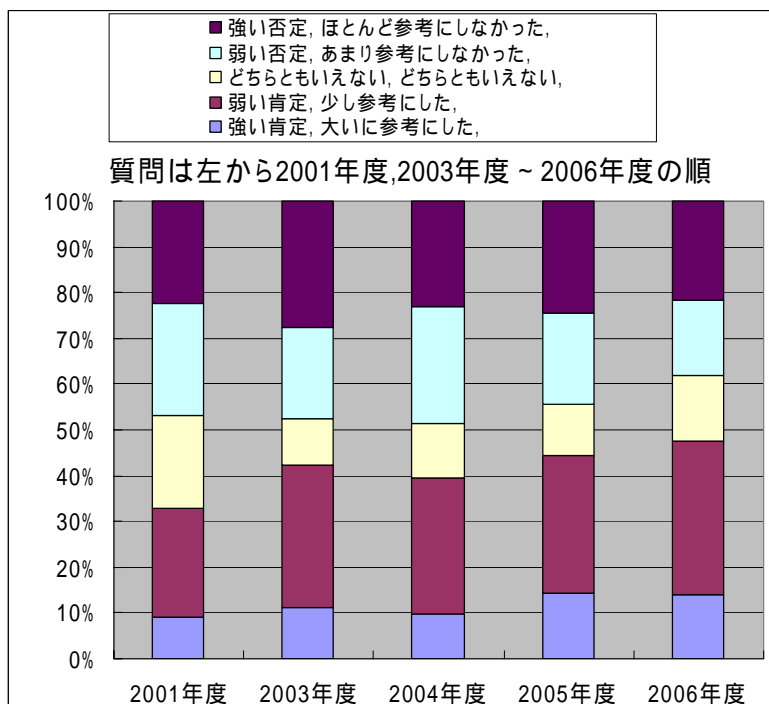
[13]大学における教育により、将来への自信や意欲が生まれましたか。

2001年度から2006年度の傾向を見る。否定の割合は13%から20%程度に増加し、肯定の割合は48%から増加していたが、49%に戻っており、今後の動向を観察する必要がある。



[14] 講義科目を選択する際に、シラバスを参考にしましたか。

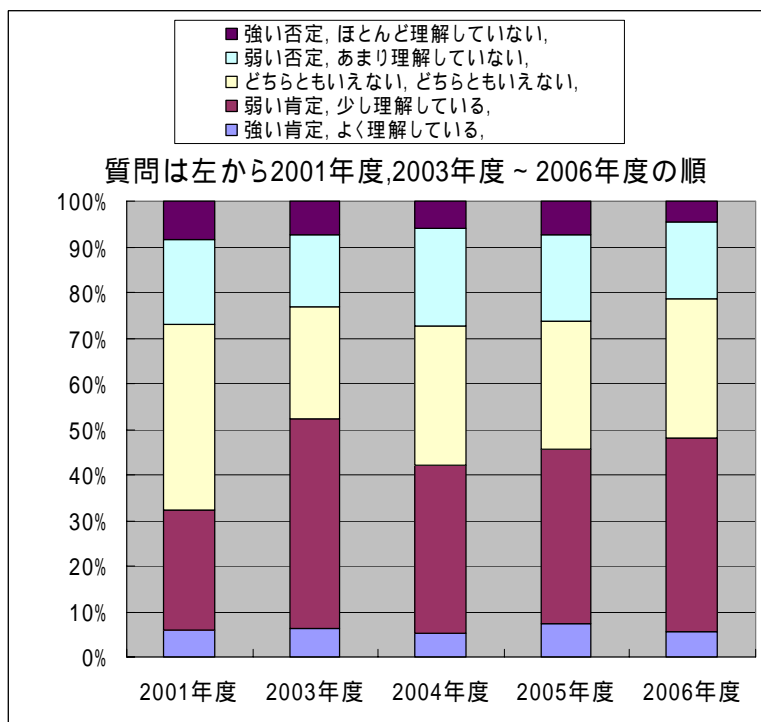
2001年度から2006年度の傾向を見る。否定の割合が47%から39%と減少し、肯定の割合が33%から47%へと増加しており、改善傾向にある。



[15] カリキュラムについてお尋ねします。

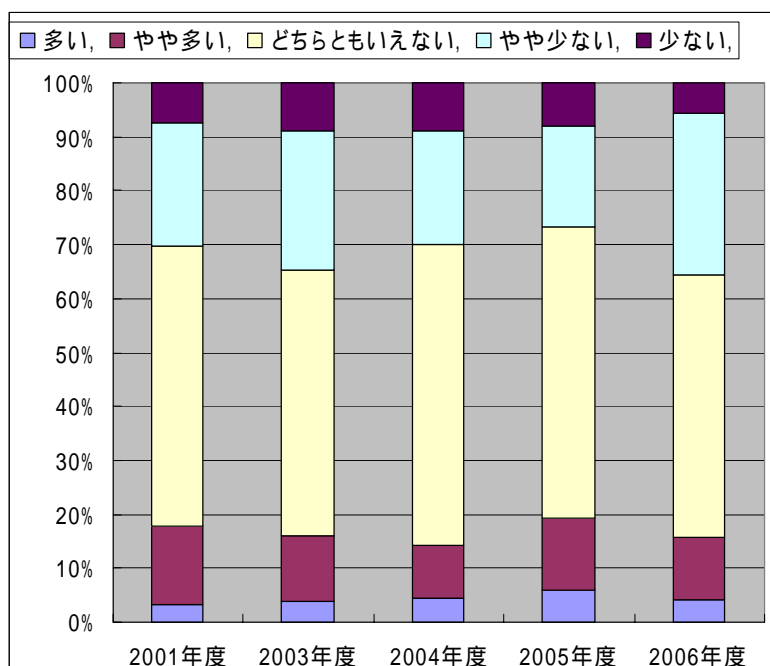
[15-1] カリキュラムの中で、科目間のつながりを理解していますか。

2001年度から2006年度の傾向を見る。否定的な回答が27%から22%と減少し、肯定的な回答が32%から48%と増加傾向にある。



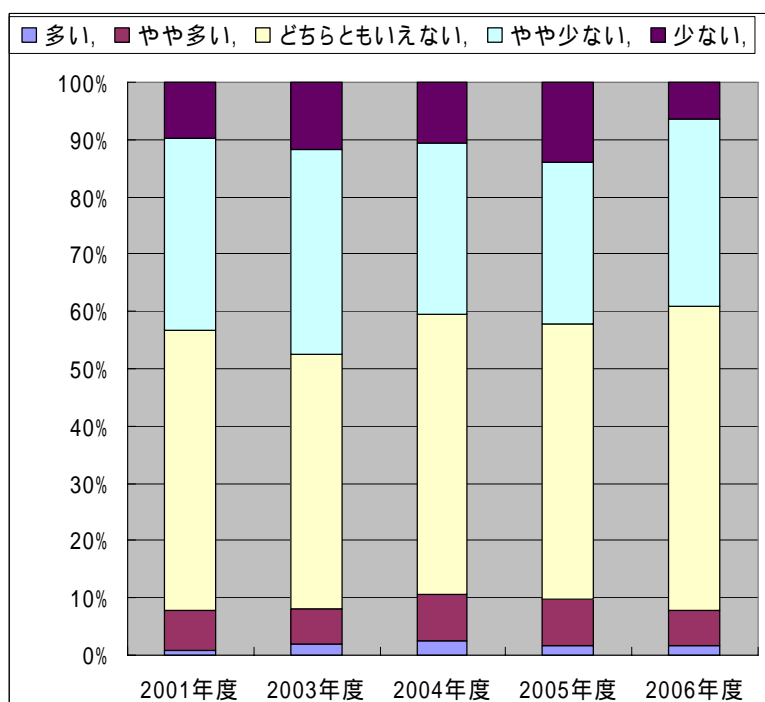
[15-2]カリキュラムの中で、実験・実習科目の比重は多いと感じますか、少ないと感じますか。

2001年度から2006年度の傾向を見る。「少ない」と「やや少ない」は30%程度、「やや多い」と「多い」も20%弱であり、その割合にあまり変化はない。



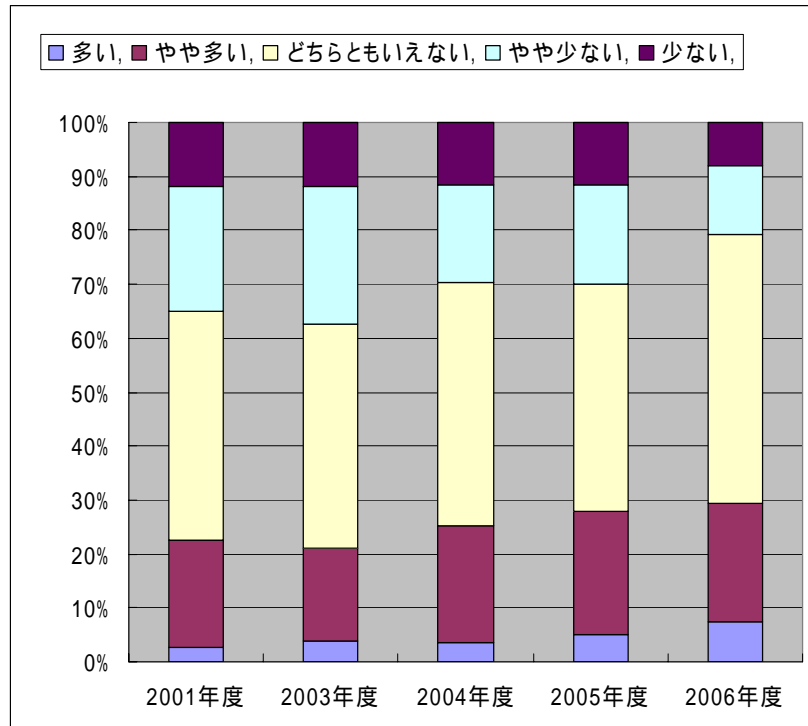
[15-3]カリキュラムの中で、演習時間の比重は多いと感じますか、少ないと感じますか。

2001年度から2006年度の傾向を見る。「少ない」と「やや少ない」は40%強程度であり、「やや多い」と「多い」は10%程度であり、その割合にあまり変化はない。



[16]受講した科目全般について、教育への熱意があった担当教員の割合はどの程度ですか。

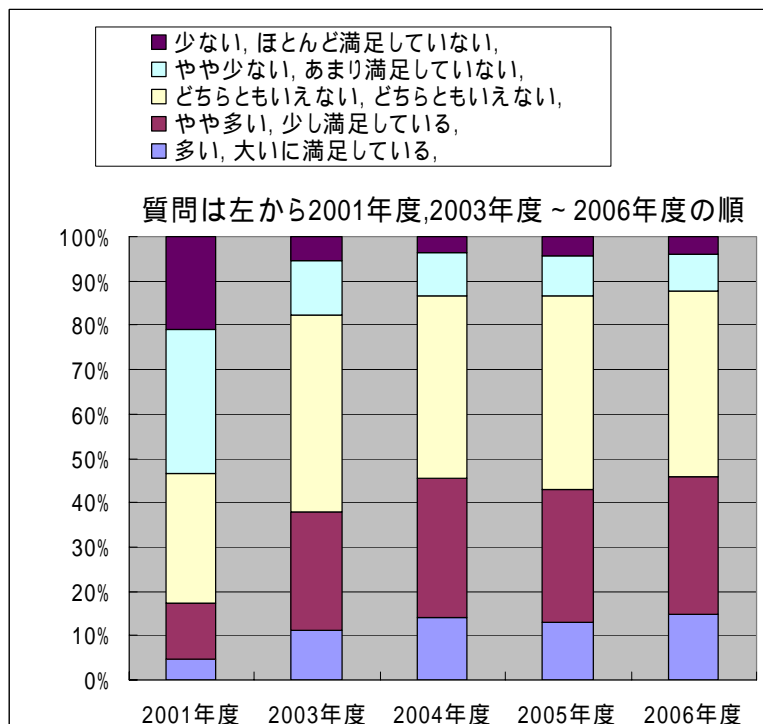
2001年度から2006年度の傾向を見る。「多い」と「やや多い」が22%から29%に増加し、「やや少ない」と「少ない」が38%から21%に減少しており、教育の熱意に対する評価が上昇しているようである。



[17]成績評価についてお尋ねします。

[17-1]成績評価（秀、優・良・可・不合格・未履修）に満足していますか。

2003年度から2006年度の傾向を見る。2003年と2006年に限って言えば、「大いに満足」と「少し満足」は38%から46%と増加し、「あまり満足していない」と「ほとんど満足していない」は18%から12%に減少しており、満足度について改善されつつある。



[17-2][17-1]でD（あまり満足していない）またはE（ほとんど満足していない）と答えた方：その理由は何ですか。

種々の意見が回答されたが、大きく分類すると、成績についての不満足度が強いことの理由として、一方で「自分の努力の不足や結果が伴わない勉強」をあげるものと、「成績評価の手続きの公正さについての疑念」をあげる者がいた。

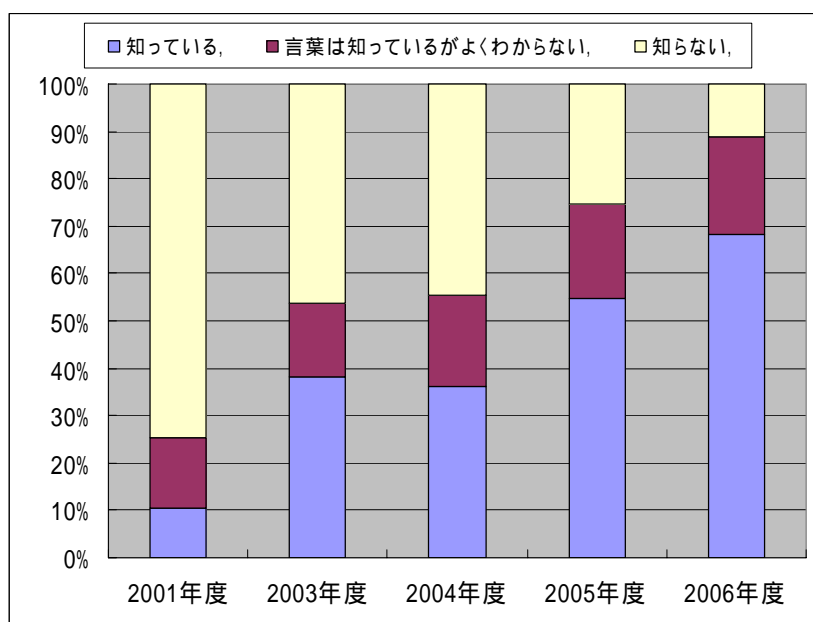
- ・ 自分が悪い。怠けた。
- ・ 自分自身の勉強不足に対する後悔。
- ・ レポートや出席の成績へのえいきょう。
- ・ 秀が少ない。
- ・ 勉強をしてもテストのみでの評価だと良い評価が得られないことがある。
- ・ ギリギリ合格が多かった。
- ・ もっといい成績がえられると思った。
- ・ 良や可が多い。
- ・ 評価が低かった。
- ・ 努力が足りず、よい成績を残せなかった。
- ・ 可が多いので。
- ・ 自分の能力に対して。
- ・ 評価がよくない。
- ・ 10段階評価を希望
- ・ 勉強をもっとすればよかった。
- ・ もうちょっと頑張れたと考えられる。
- ・ 採点ミスなどが多い、採点基準がいいかげん
- ・ 不合格・未履修があったから。
- ・ 未履修ばかりだから。
- ・ 試験成績の順位づけ半年に1度くらいはしてほしい
- ・ 毎年同じ問題を出すのはやめてほしい。荷物は外に出して、不正なしで、試験してほしい。
- ・ 教授によってテストのむずかしさがちがうから。
- ・ わるい。
- ・ 秀は別に無くてもいいのでは。
- ・ 秀が少なかったから。
- ・ 評価が辛すぎる。
- ・ 先生によって評価にばらつきがありすぎる。
- ・ 勉強不足
- ・ 勉強しなくて、成績が非常に悪かったため。
- ・ 成績が悪かった。
- ・ 納得のいかない減点等があったり不透明な成績のつけ方をされたり受講した人の成績が全員同じだったり（70良）（´；´；`）したから。
- ・ よい成績が取れなかったため。
- ・ 秀，優が少なかった。
- ・ 秀があまりないから。
- ・ 先生によって評価の厳しさが大いに違う。
- ・ 可が多かったから。
- ・ 優が少なかったから。

[18] オフィスアワー（質問・相談時間）についてお尋ねします。

[18-1] オフィスアワーという制度を知っていますか。

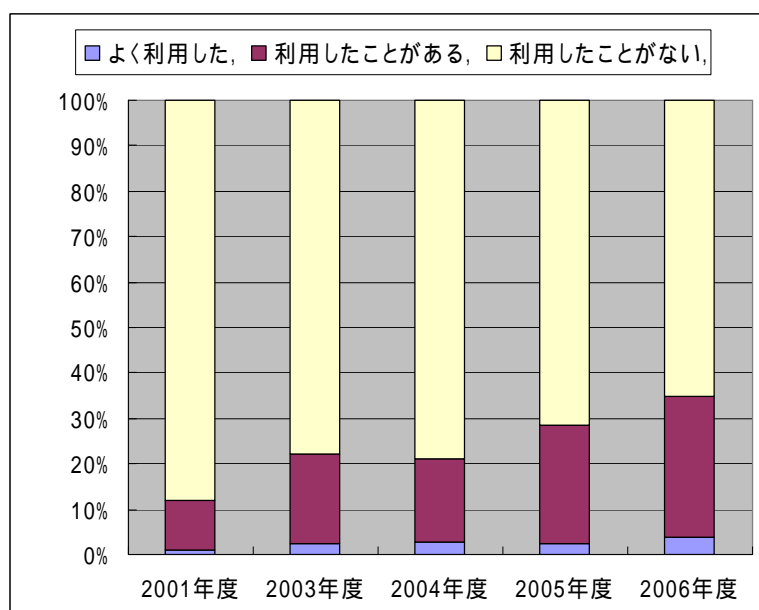
2003年度から2006年度の傾向を見る。2003年度から2005年度にかけて「知っている」は38%から68%に増加し、「知らない」は46%から11%に減少しており、かなり改善されてきている。





[18-2] オフィスアワーを利用して、教員に質問した経験がありますか。

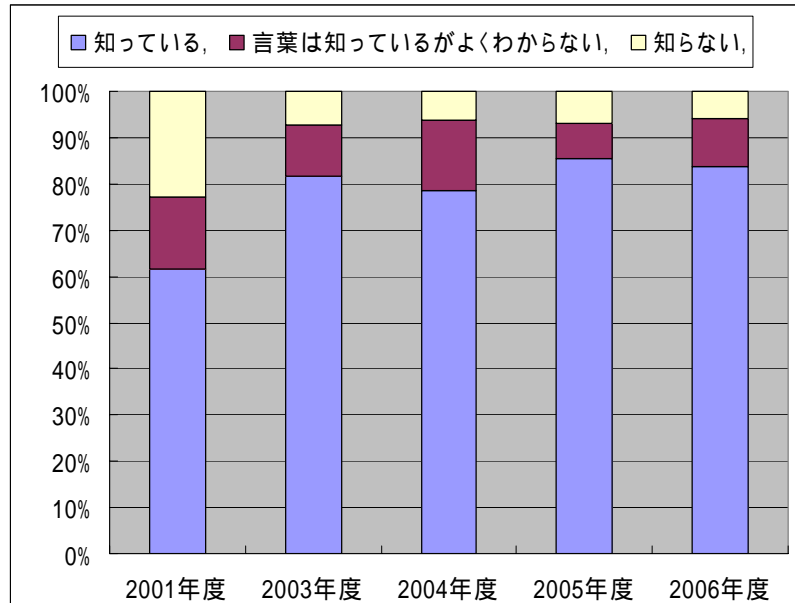
2003年度から2006年度の傾向を見る。「よく利用した」者と「利用したことがある」者は、22%から35%に着実に増加している。



[19] ティーチングアシスタント (TA) についてお尋ねします。

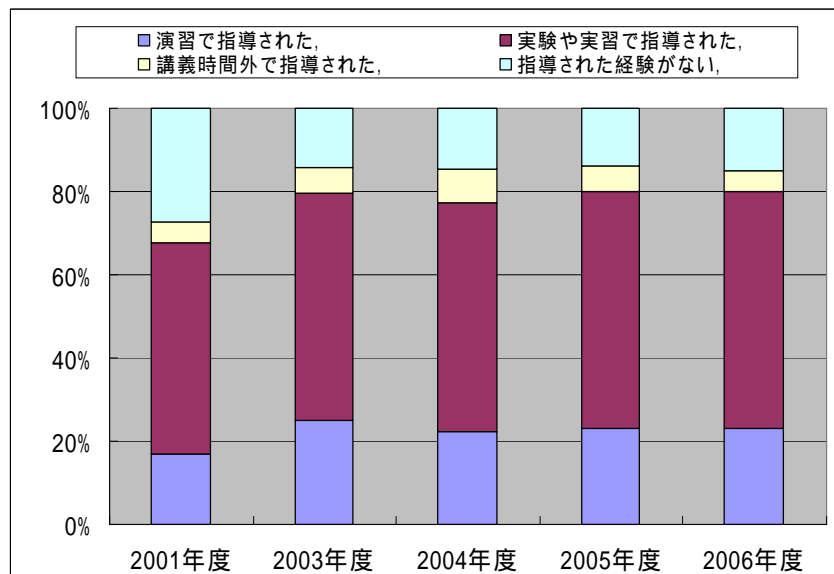
[19-1] ティーチングアシスタント (TA) という制度を知っていますか。

TA制度を知っている者の割合は2005年から2006年にかけては変化しておらず、8割以上の者が知っている。制度が定着しつつあると判断できる。



[19-2]ティーチングアシスタント（TA）に指導してもらった経験がありますか。（複数回答可）

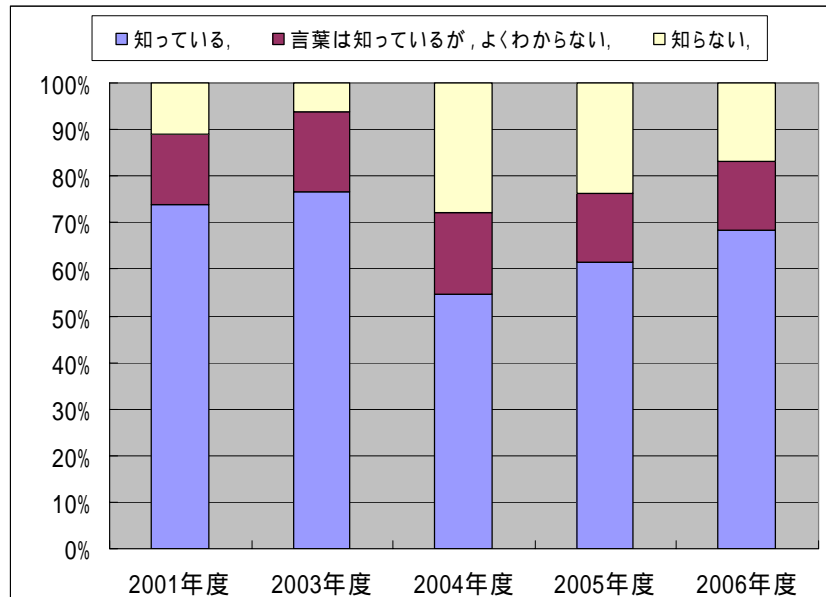
2006年度は前年度と大きな変化は見られないが、ほぼ85%が「演習」「実験・実習」「講義時間外」のいずれかの指導を受けた経験があり、制度が定着しつつあることが認められる。



[20]指導教員制度についてお尋ねします。

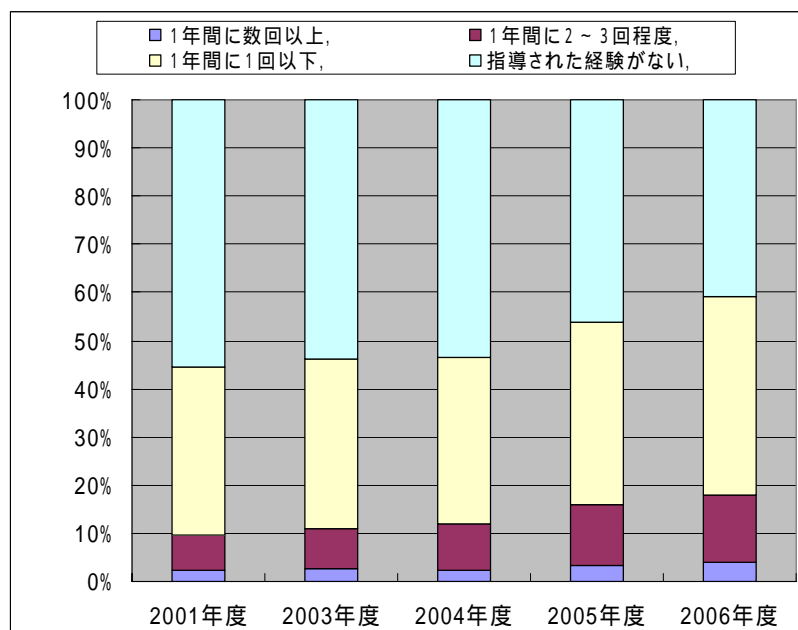
[20-1]指導教員制度を知っていますか。

指導教員制度については、2005年から2006年にかけて改善傾向が認められるものの、「知らない」または「わからない」割合がまだ3割以上も存在することは、制度の周知方法も含めて改善すべき事項である。



[20-2] 1年生から3年生の間に、指導教員から指導やガイダンスを受けた経験がありますか。( 受けた経験のある方は、1年間の平均的な回数を答えて下さい。)

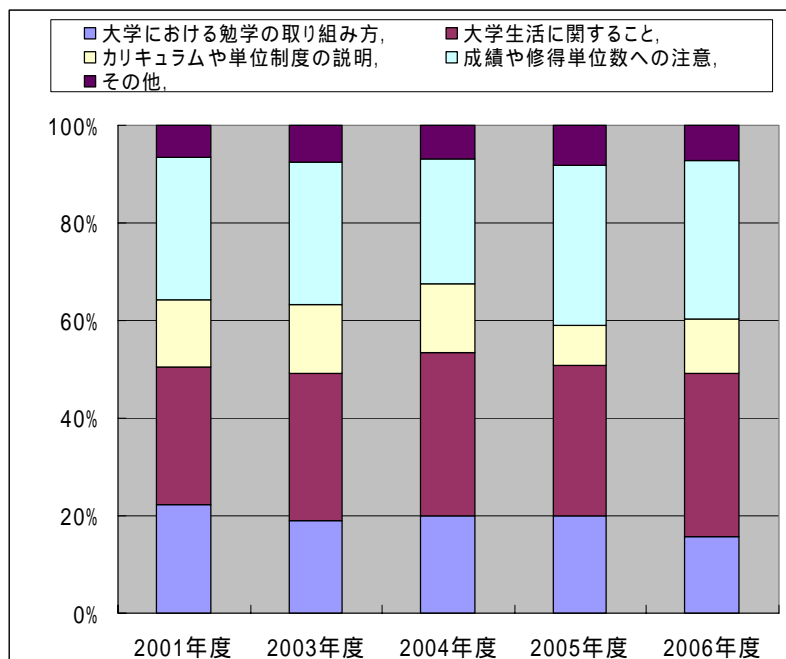
指導された経験が無い割合は着実な減少傾向が認められるが、まだ4割以上もある点は、今後の検討課題である。指導教育のあり方の啓蒙活動を活発にするなど指導方法の改善を含めて教員活動取り組みに改善が望まれる。



[20-3][20-2]でA (1年間に数回以上)、B (1年間に2～3回程度)、C (1年間に1回以下)のいずれかを答えた方：1年生から3年生の間に、指導教員から指導を受けた内容を答えて下さい。

(複数回答可)

複数回答であり、勉学の取り組み、生活全般、カリキュラム、単位、成績のいずれも話題になっており、経年変化もほとんどない。



E (その他)[具体的に:

]

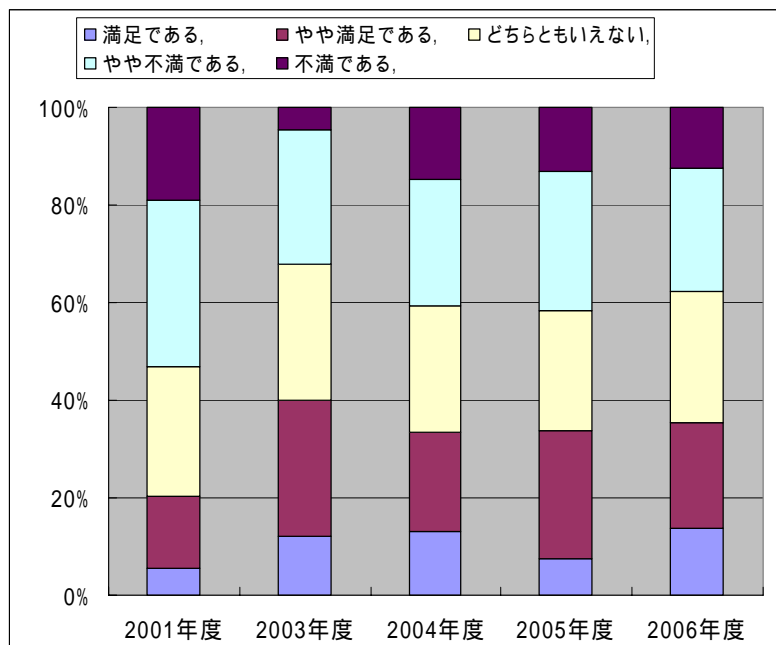
就職や研究室配属，進学など将来についての相談が実施されている点は指導教員制度の趣旨に合致している。しかし，教員と学生の対話の機会をどのように確保すべきであるのか，カウンセリングの在り方に工夫すべき課題が認められる。進路や勉学について気軽に相談できるようなカウンセリング制度の在り方について，改善が必要である。

- ・ 大学院に進学することの有用性
- ・ 進路
- ・ 就職関連
- ・ 合宿で少し話したのみ。「いつでも相談に乗ります。」と。
- ・ 学科旅行のみ。
- ・ 留年した時の過ごし方。
- ・ 就職とか。
- ・ 卒業後の進路について。
- ・ 休学について。
- ・ 将来について（就職・進学）
- ・ 研究室早期配属。
- ・ 進学か就職かに関する話し合い。
- ・ 就職指導
- ・ 留学について。
- ・ あまり覚えていません。指導教員と話をしたという印象しかありません。
- ・ 研究室の種類と何をやっているのか。
- ・ 修得単位のしるされた用紙をもらった。
- ・ 1年生の時に，呼ばれて話しをした。
- ・ 覚えがない。

[21]施設や設備等についてお尋ねします。

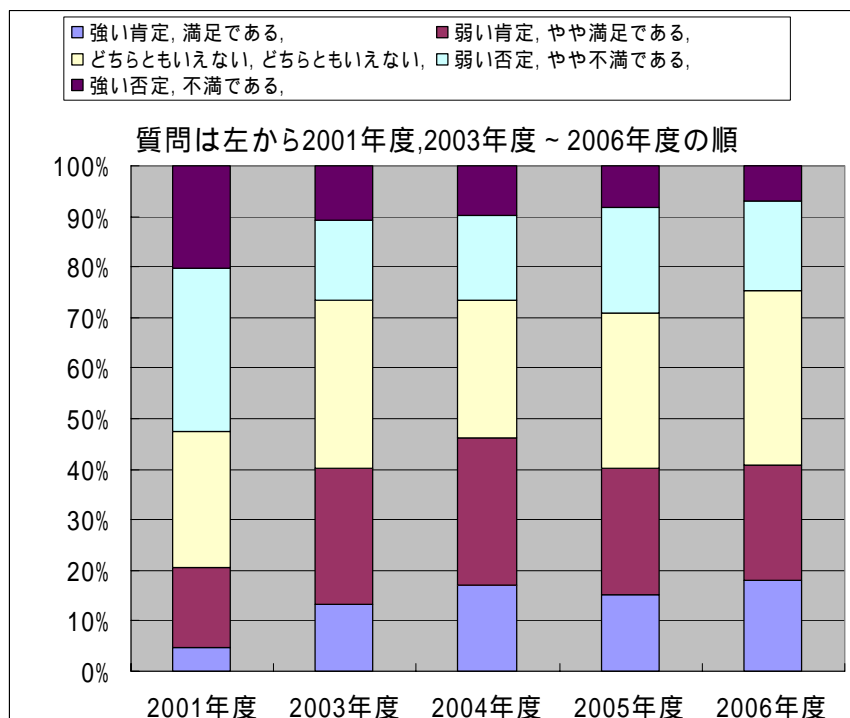
[21-1]教室の広さ，席数，明るさ等について，満足していますか。

不満足とする意見が4割弱あることは真剣に受け止めるべきである。今後の改善への継続的取り組みが必要である。

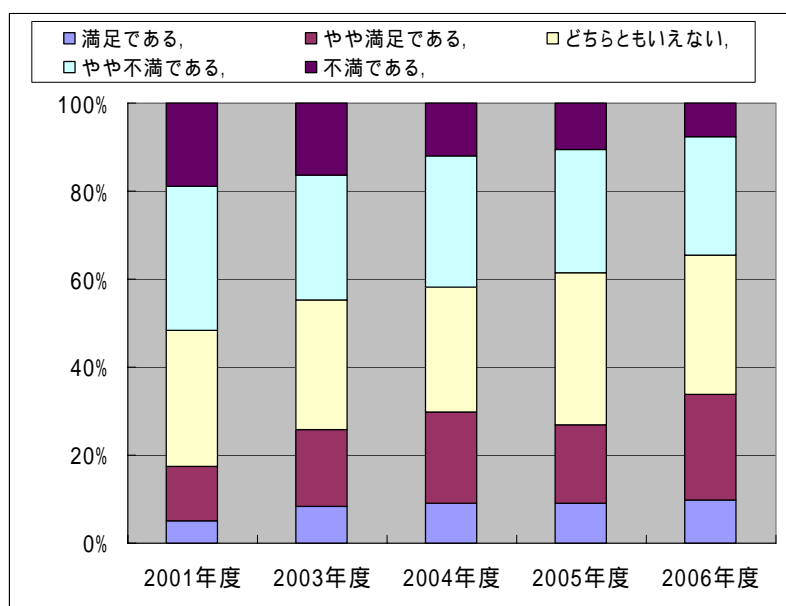


[21-2]必要な設備（マイク，OHP，プロジェクタ等）に満足していますか。

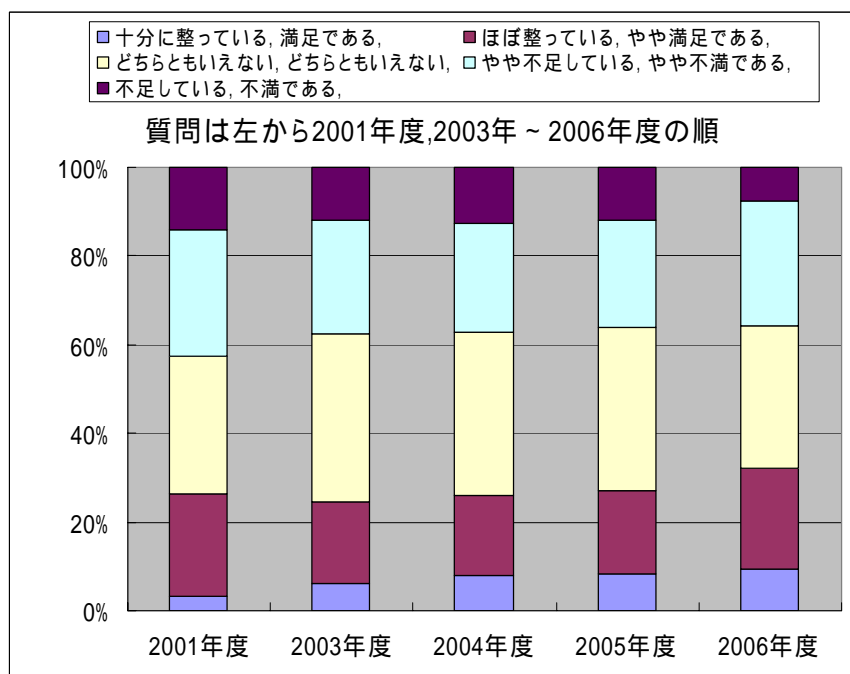
肯定的な意見がこの5年間で改善される傾向が認められるが，否定的意見がまだ3割弱もある。今後の継続的取り組み改善が必要である。



[21-3] 1年生から3年生の間に利用した実験室・実習室の広さ，明るさ等について，満足していますか。  
 若干の改善傾向がみられるが否定的評価がまだ4割弱もあり，低い評価が定着していると判断できる。  
 継続的な対策，取り組みが必要である。



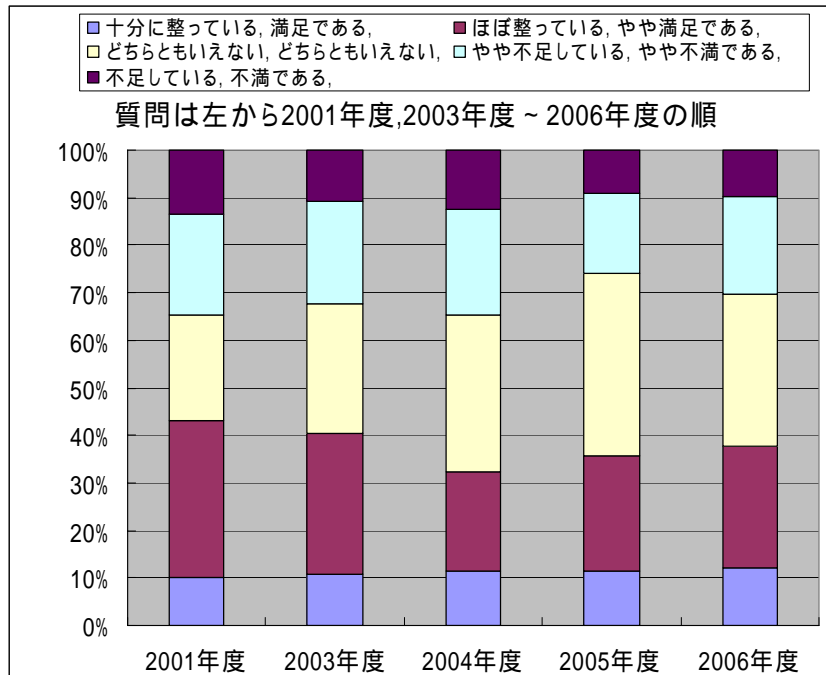
[21-4] 1年生から3年生の間に利用した実験・実習に必要な設備・装置について，満足していますか。  
 満足度については否定的評価が4割程度もあることが問題であり，今後の改善に向けたいっそうの努力が必要である。



[22] 情報機器についてお尋ねします。

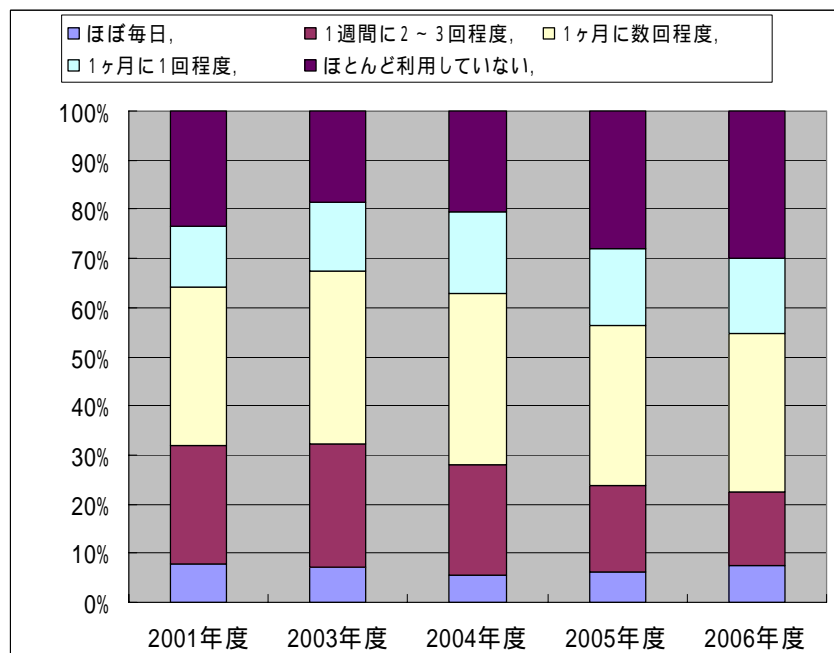
[22-1] 情報機器（コンピュータ端末等）の整備状況について満足していますか。

不満足とする意見が3割あり，今後の継続した改善に向けたいっそうの取り組みが必要である。



[22-2] 1年生から3年生の間に、講義以外でネットワークや情報サービス(ソフトウェア,教材を含む)を、どの程度利用しましたか。

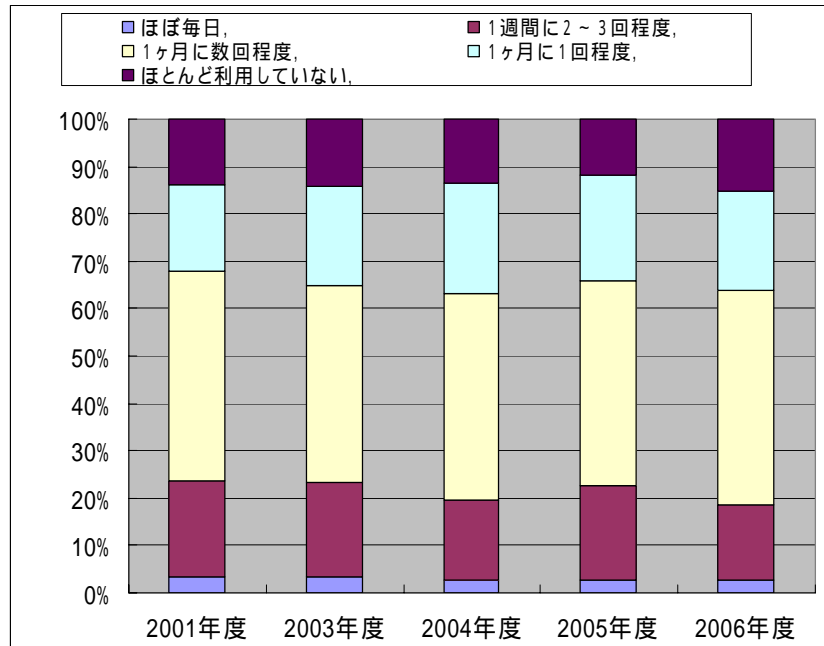
利用頻度はこの3年間で明瞭な減少傾向が認められる。原因を調査し、対応策を検討する必要がある。



[23]図書館についてお尋ねします。

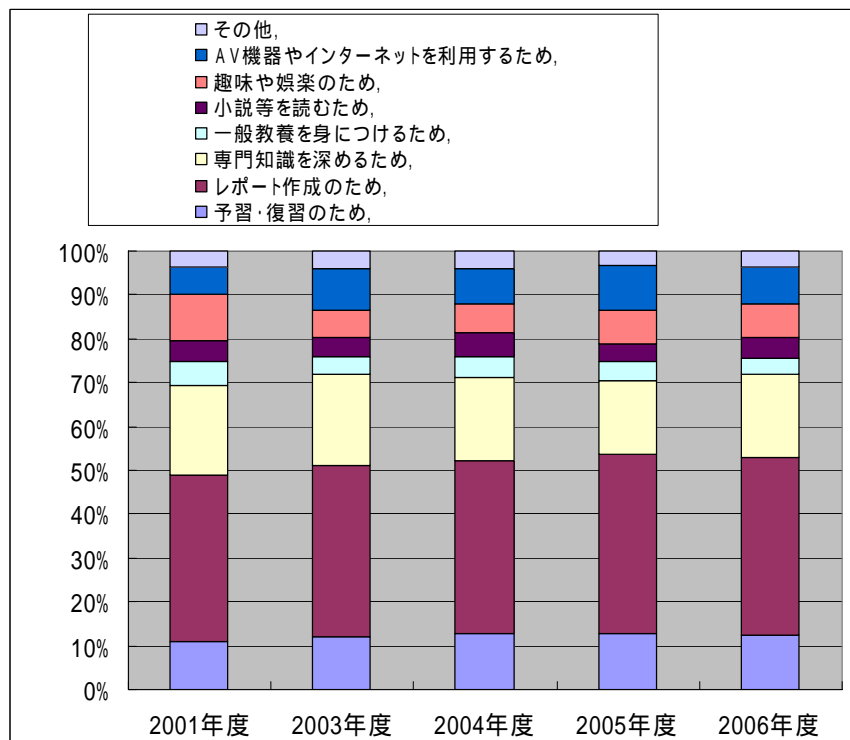
[23-1]図書館を利用している頻度はどの程度ですか。

利用頻度はこの3年間大きな変化は認められない。



[23-2] 図書館を利用する主な理由を答えて下さい。(複数回答可)

全体として図書館利用の理由にはこの3年間で大きな変化は見られない。



H (その他) [具体的に :

]

図書館の利用形態については大きな変化は無い。

- ・ 試験勉強
- ・ 試験勉強
- ・ 論文さがし

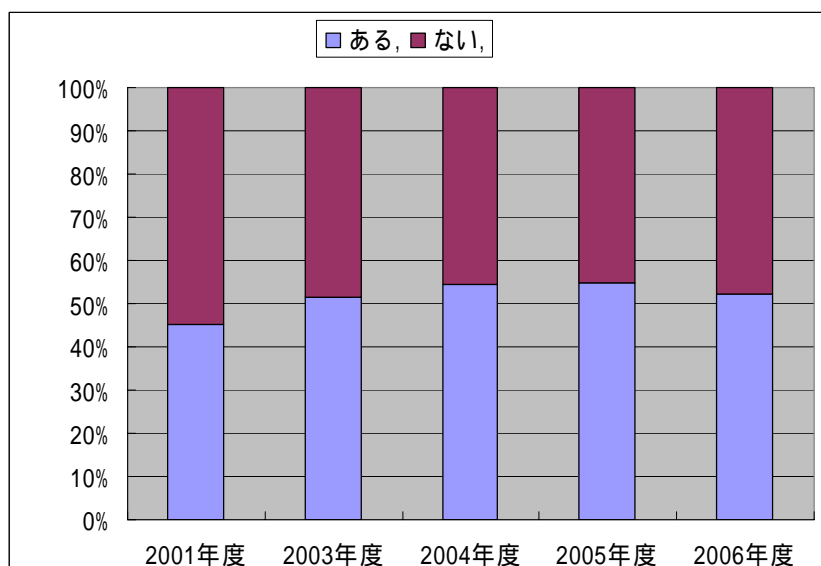


- ・ 時間があいたとき
- ・ 研究・論文に関する資料
- ・ 新聞を読みに利用
- ・ テスト前の勉強のため。
- ・ テスト勉強
- ・ テスト対策
- ・ 試験勉強
- ・ 新聞を読みにいく。
- ・ 試験勉強
- ・ 自主勉強のため。(授業以外のとか)
- ・ 試験勉強
- ・ 試験勉強
- ・ 講義間の時間潰しのため。
- ・ テスト勉強
- ・ 新聞を見るため。
- ・ 新聞のチェック
- ・ テスト勉強
- ・ 試験勉強のため。
- ・ 試験勉強のとき。
- ・ 文献
- ・ 英語文献を探す。
- ・ テスト勉強

[24]工場見学やインターンシップ(工場実習)についてお尋ねします。

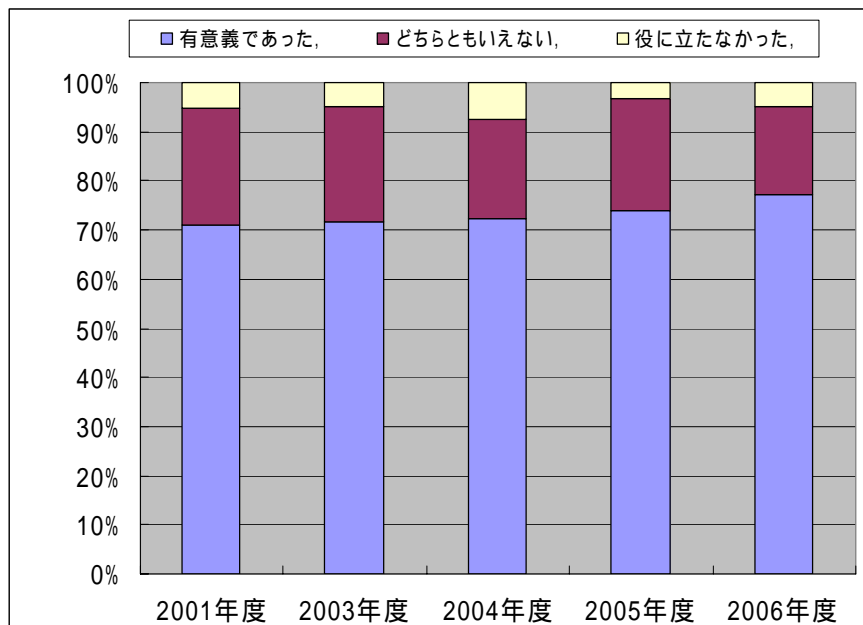
[24-1]工場見学やインターンシップに参加した経験がありますか。

この3年間で工場見学とインターンシップの経験者割合には大きな変化はない。しかし、約半数の卒業生は経験しておらず改善へ向けた更なる努力が必要である。



[24-2][24-1]でA(ある)と答えた方。工場見学やインターンシップに参加した経験が、自分自身の成長のために有意義であり、履修した価値がありましたか。

工場見学、インターンシップの受講者の肯定的評価がこの3年間で若干の改善傾向が認められる。70%強の卒業生が有意義と考えている。



## 2.2 2006年度修了生アンケート（工学研究科）

アンケート実施年月日 平成19年3月5日

アンケート回収率

課程	配付枚数	回収枚数（回答率）
博士前期課程	328枚	203枚（61.9%）
博士後期課程	16枚	4枚（25.0%）

以下の設問の中で、“博士後期課程の方のみ”の有効回答枚数は、3枚である。

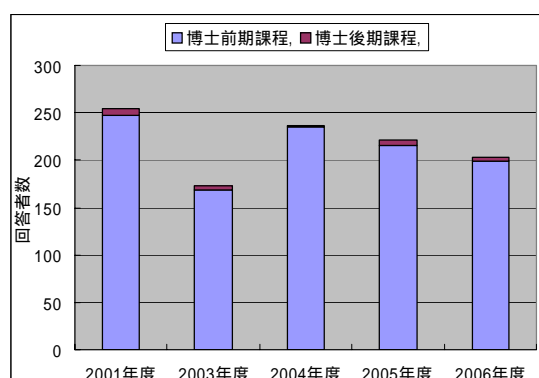
[1]あなたの課程,専攻についてお答え下さい。

[1-1]あなたが修了される課程は何ですか。

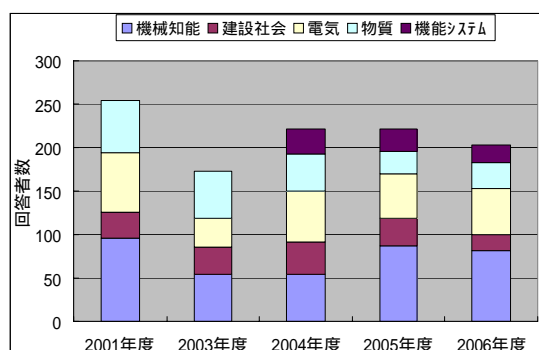
昨年度に比べ,全体で回答者は,博士前期課程で12名,回答率が11%減少し,博士後期課程で2名の減少,回答率が大幅に60%から25%に減少した。専攻別では,電気工学専攻と物質工学専攻の回答者が増加したが,他の専攻は,減少した。

A（博士前期課程）199名

B（博士後期課程）4名



[1-1] あなたが修了される課程は何ですか



[1-2]あなたが修了される専攻は何ですか。

機械知能工学：82名

建設社会工学：18名

電気工学：53名

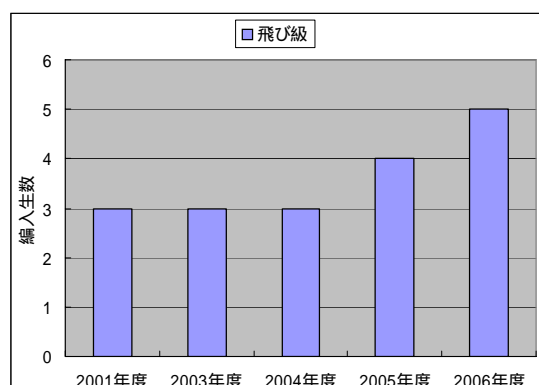
物質工学：30名

機能システム創成工学：20名

[1-2] あなたが修了される専攻（分野）は何ですか。

[1-3]飛び級入学の方は [ ] に を入れてください。

飛び級の入学者の数は5名で2000年度から1名増加している。

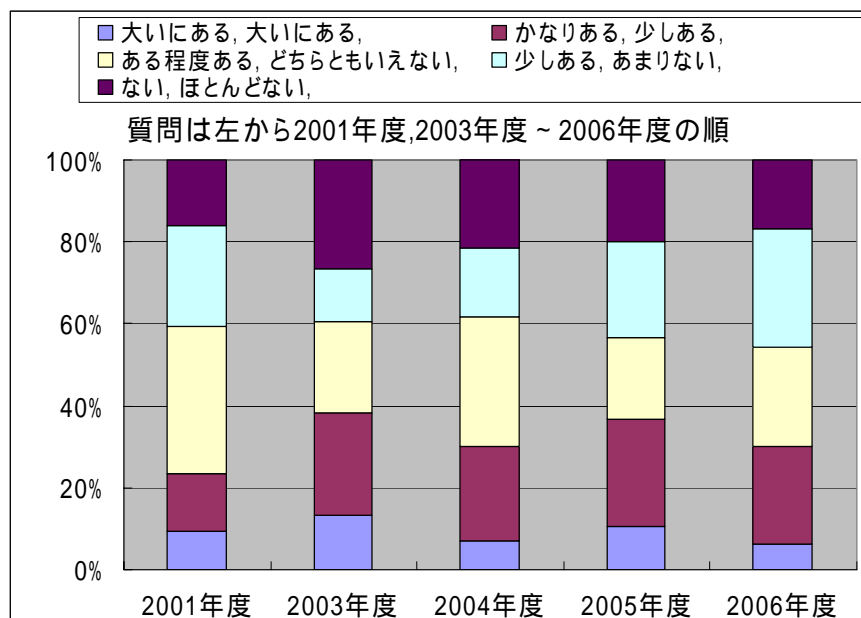


[1-3] 飛び級入学の方

[2]工学研究科における大学院教育があなたの成長（自己形成）に及ぼした効果についてお尋ねします。

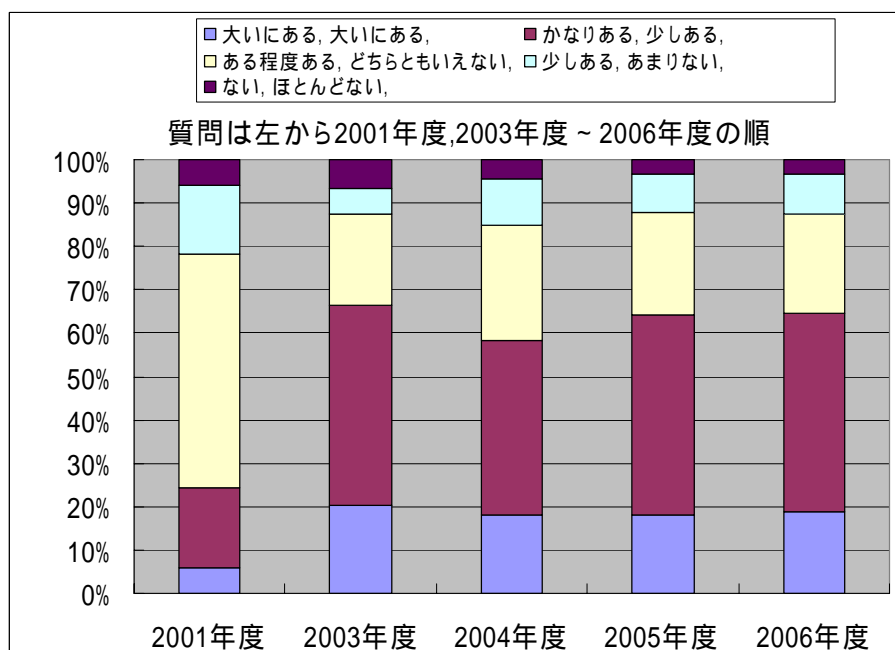
[2-1]外国語科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。（受講生のみ）

外国語科目の自己形成効果については、「ある程度ある」以上が減少傾向にあり、6割以下の水準にあることは低い水準であると判断すべきであり、改善に向けた努力が必要である。



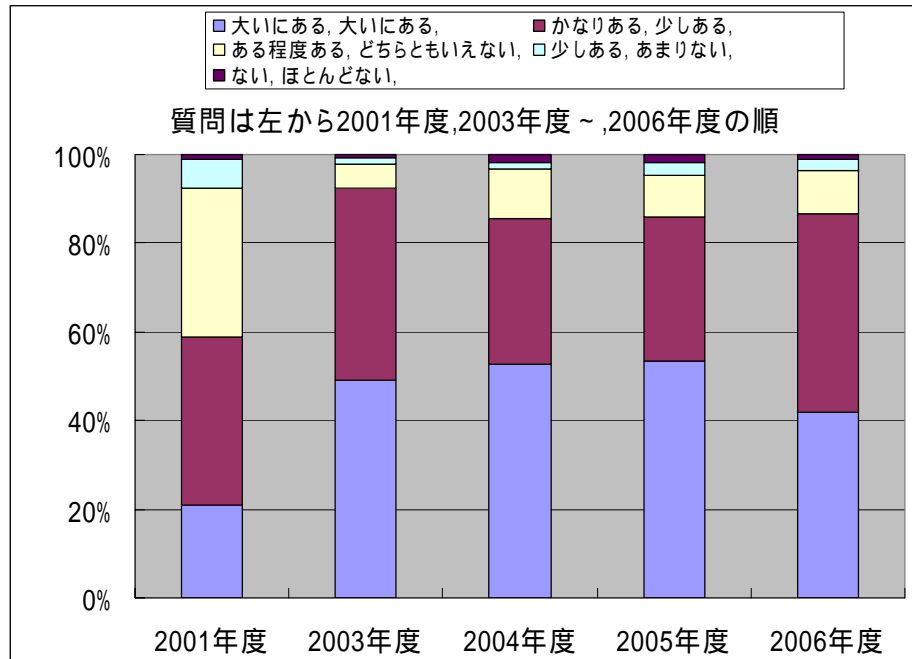
[2-2]共通科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

共通科目の教育効果については、「かなりある」以上が6割以上の水準にあり、一定の効果を果たしていると思われる。しかし、13%程度の修了生は教育効果に対して肯定的な回答をしておらず、さらに改善に向けた努力が必要である。



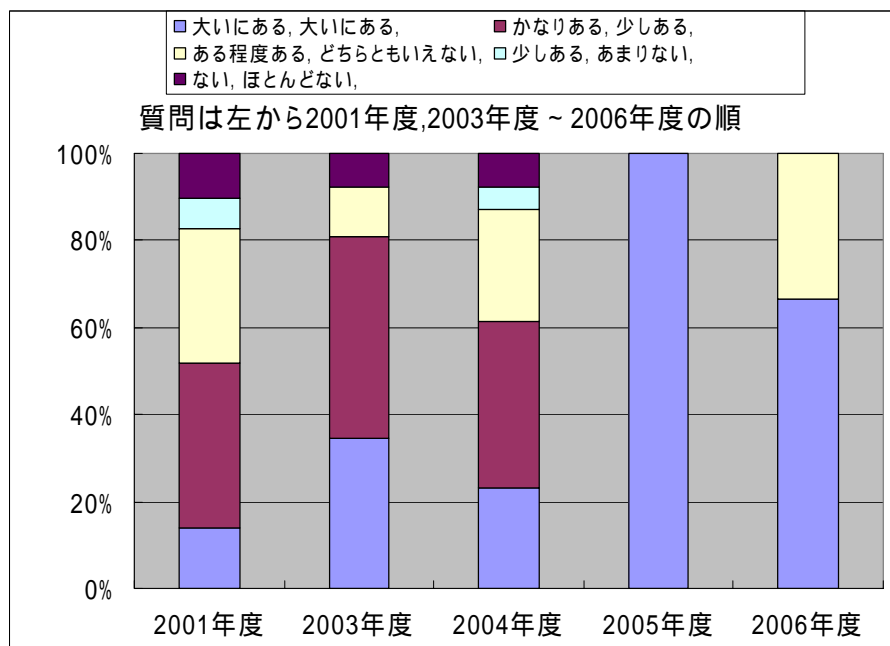
[2-3] 専門科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

専門科目の自己形成効果については、「大いにある」と「かなりある」の合計は変化が見られない。



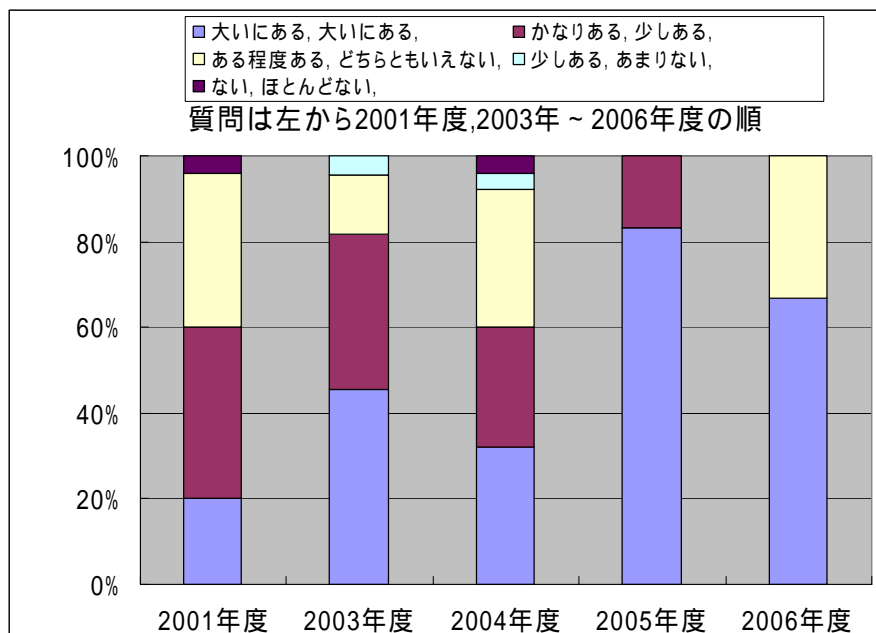
[2-4] 学外研修・特別演習はあなたの自己形成に効果がありましたか。(博士後期課程の方のみ)

博士後期課程の回答者が4名と少ないので統計データとしての有効性には慎重を要するが、博士後期課程の学生の回答は「おおいにある」であり、2006年度修了生はこれらの科目の効果进行评估していると判断できる。



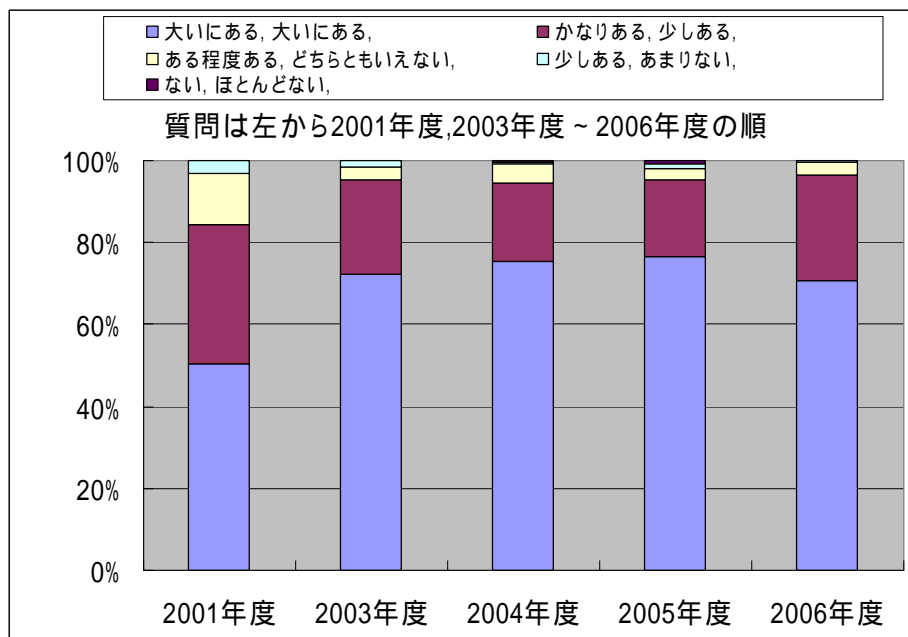
[2-5]プロジェクト研究はあなたの自己形成に効果がありましたか。(博士後期課程の方のみ)

博士後期課程の回答者が4名と少ないので統計データとしての有効性には慎重を要するが、博士後期課程の学生の回答は「おおいにある」,「ある程度ある」であり,2006年度修了生はこれらの科目の効果を評価していると判断できる。



[2-6]学位(修士・博士)論文のための取り組みはあなたの自己形成に効果がありましたか。

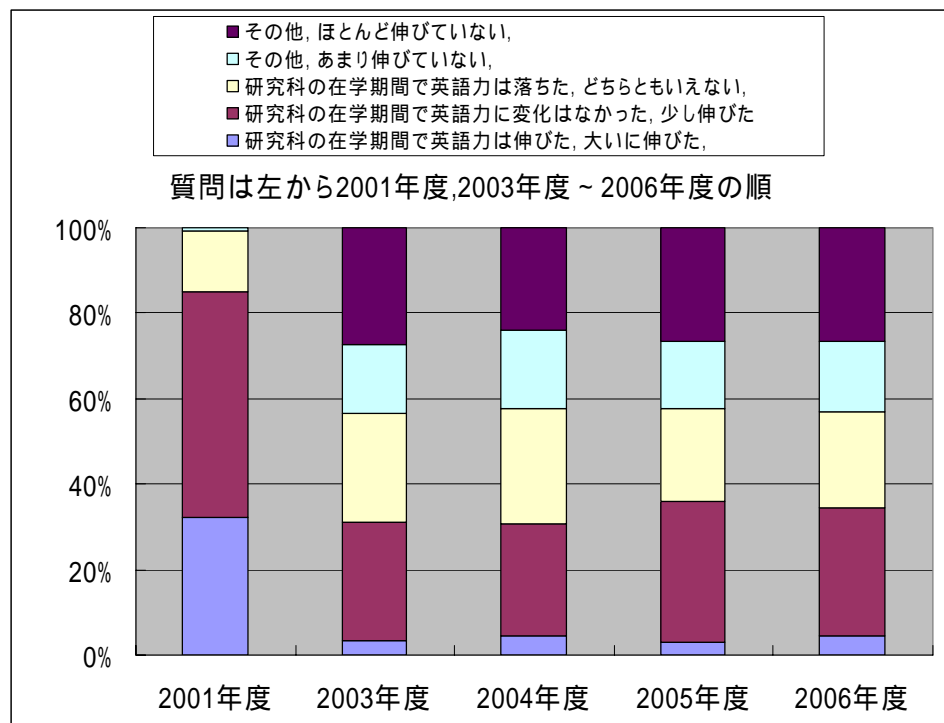
学位(修士・博士)論文取り組みの自己形成効果については,「大いにある」と「かなりある」の合計が9割以上の水準を保持しており,一定の教育効果が肯定的に受け止められていると判断できる。



[3]英語力についてお尋ねします。

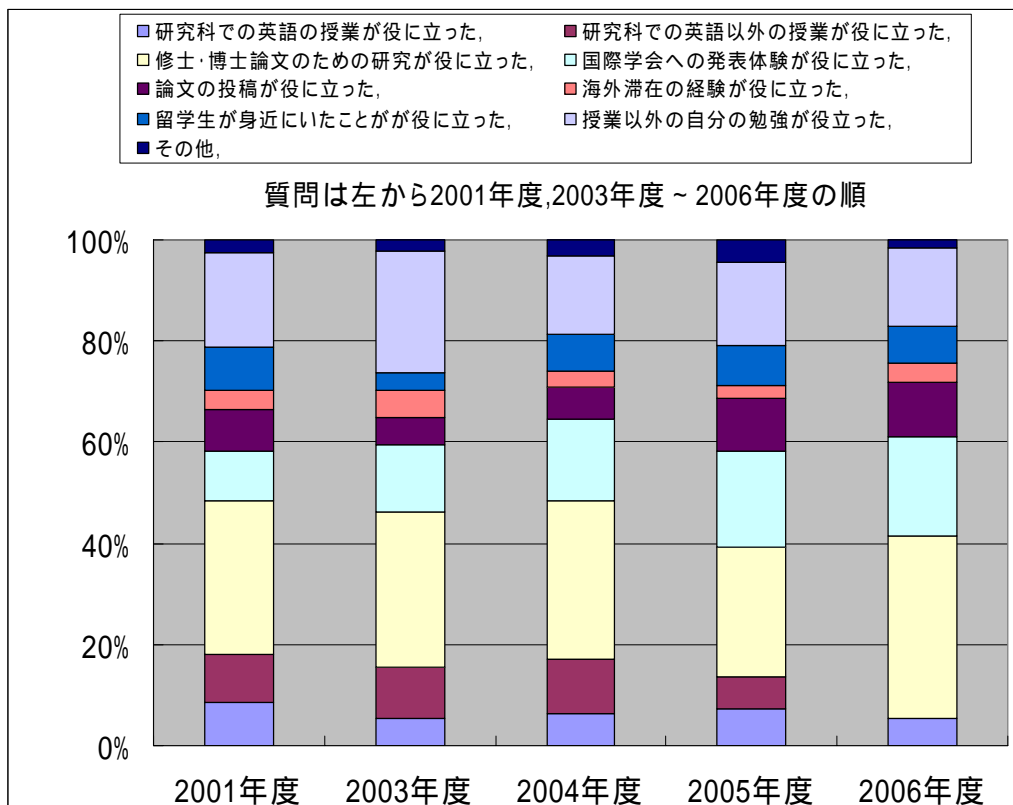
[3-1]研究科の在学期間であなたの英語力は伸びましたか。

大学院の英語教育については、全般的に否定的評価が認められる。英語力が「ほとんど伸びていない」とする者と「あまり伸びていない」とする者の合計が4割以上を占めていることは、教育方法に改善すべき課題があると判断すべきであり、今後の重点課題として対策に取り組む必要がある。



[3-2][3-1]でA（おおいに伸びた）またはB（少し伸びた）と回答された方：その理由は何ですか。（複数回答可）

「修士・博士論文のための研究」以外では、「国際学会への発表」「論文投稿」「留学生との交流」などが英語力の向上に役立ったと回答する者の割合がかなりの割合であり、国際的交流活動への参加が英語力向上に一定の効果を持つことが統計データに現れているものと判断できる。



I (その他)[具体的に

]

- ・ 英語論文の翻訳
- ・ 英会話に通学した。

[3-3][3-1]でD (あまり伸びていない) またはE (ほとんど伸びていない)と答えた方：その理由は何ですか。

「英語の論文を読む程度」という回答に表れているように英語に接する機会が少ないことと、英語学習に対する意識と努力の不足を自分自身で感じている。何れにしても「英語力」を必要とする機会増大の方策が望まれる。

- ・ 英語に興味湧かなかった。面白さを感じない。
- ・ 英語に触れる機会が少なかったため。
- ・ 勉強不足
- ・ 勉強不足
- ・ 勉強不足
- ・ 英語を使う機会があまりなかった。
- ・ 英語力というのは文献を読むことができることを指しているのではないと思うから。
- ・ 勉強しなかったか。
- ・ 英語に接する機会をさけたため。
- ・ 勉強する時間がとれなかった。
- ・ 英語は日々の積み重ねなので、学会発表(国際)や英語論文を読むほどでは伸びない。
- ・ 何もしていないから。
- ・ ほとんど英語をつかってなかったから。



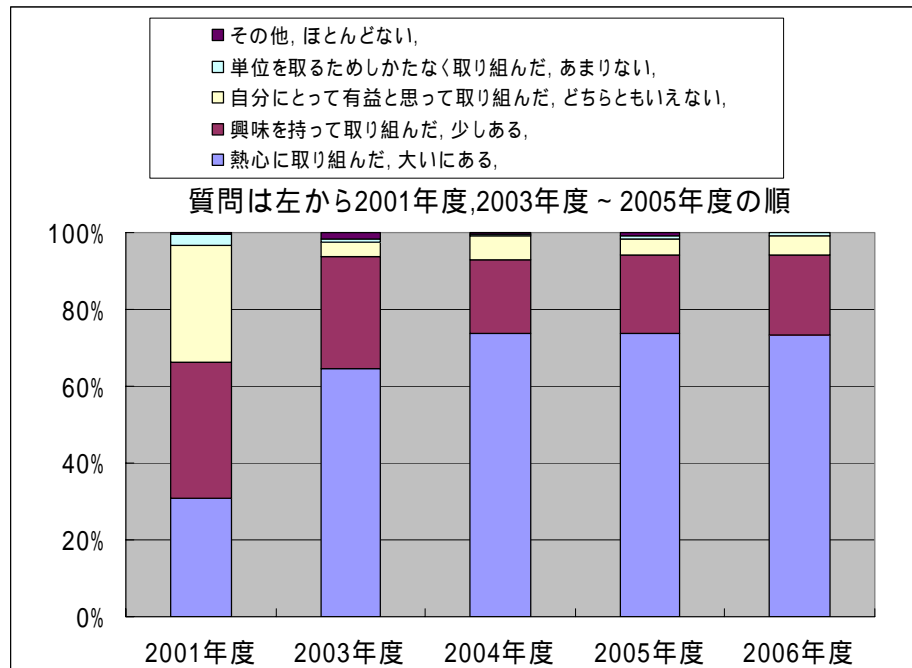
- ・ 研究の特性状，英語に触れる機会がほぼなかった。
- ・ 使用する機会がなかった。
- ・ 英語にふれなかったから。
- ・ ほんやくソフトを使用するため。
- ・ 努力してない。
- ・ 英語に接する時間の減少
- ・ 語学の勉強を怠ったから。
- ・ 英語を使う機会が極端に少ない。
- ・ 講義でとらなかったため，英語論文程度でしかふれていない。
- ・ 日常的に使わないとどうしても忘れてしまう。
- ・ 英語にふれる機会が少ない。
- ・ 英語を話す機会が少ない。
- ・ 英語を使う機会が少なかったから。
- ・ 全くやっていないから。
- ・ 英語を使う機会がなかったから。
- ・ 使用する機会がなかった，他の分野に興味があった。
- ・ 実際に英語を使う機会が少なかったため。
- ・ 英語の勉強をしてないから。
- ・ 英語を用いる機会があまりなかったため。
- ・ たまに英語論文に接する程度であったから。
- ・ 使う機会がない。
- ・ 英語にあまり触れなかったため。
- ・ 英語を使用する機会がない。
- ・ 語学の勉強をしていないから。
- ・ 語学の勉強をしていない。
- ・ 英語を使う機会がほとんどなかった。
- ・ 使う機会があまりなかった。
- ・ 努力していないため。
- ・ やっていないから。
- ・ 英語をほとんど使わなかった。
- ・ 気持ち，意識的に積極的に取り組もうとはしてなかったため。
- ・ 英語を使うことがなかった。
- ・ 英語に接する機会が少なかったから。
- ・ 勉強を怠ったから。
- ・ TOEICで得点をとるための勉強のみしかしなかったから。
- ・ あまり英語力が伸びるような勉強をしなかったから。
- ・ 英語を使うチャンスがなかった。
- ・ 使う機会がなかったため。
- ・ 使っていないから。
- ・ 勉強していないから。
- ・ 嫌いなものは伸びない。
- ・ 勉強しなかったから。
- ・ 英語に接する時間はあまりなかった。
- ・ 勉強時間の不足
- ・ 英語を使う機会が少なかった。
- ・ 勉強していないため。
- ・ 読むばかりで会話しなかった。
- ・ 英語の勉強をとくにしていないから。
- ・ 自分のやる気の不十分さ。
- ・ 学習を怠ったため。
- ・ 英語を使う機会がない。
- ・ 特に勉強する機会が無い。
- ・ 英語力を測るような機会がなかったため。

- ・ 実際に国際学会に参加してみて、自分の英語力の無さを痛感したから。
- ・ 勉強不足
- ・ 英語に接する機会が少なかった。
- ・ 自分の能力の問題。
- ・ 授業のコマが少ない。
- ・ 勉強する時間が少なかった。
- ・ あまり使う機会がなかったから。
- ・ 活用の場が非常に少ないから。

[4]学位（修士・博士）論文のための取組みについてお尋ねします。

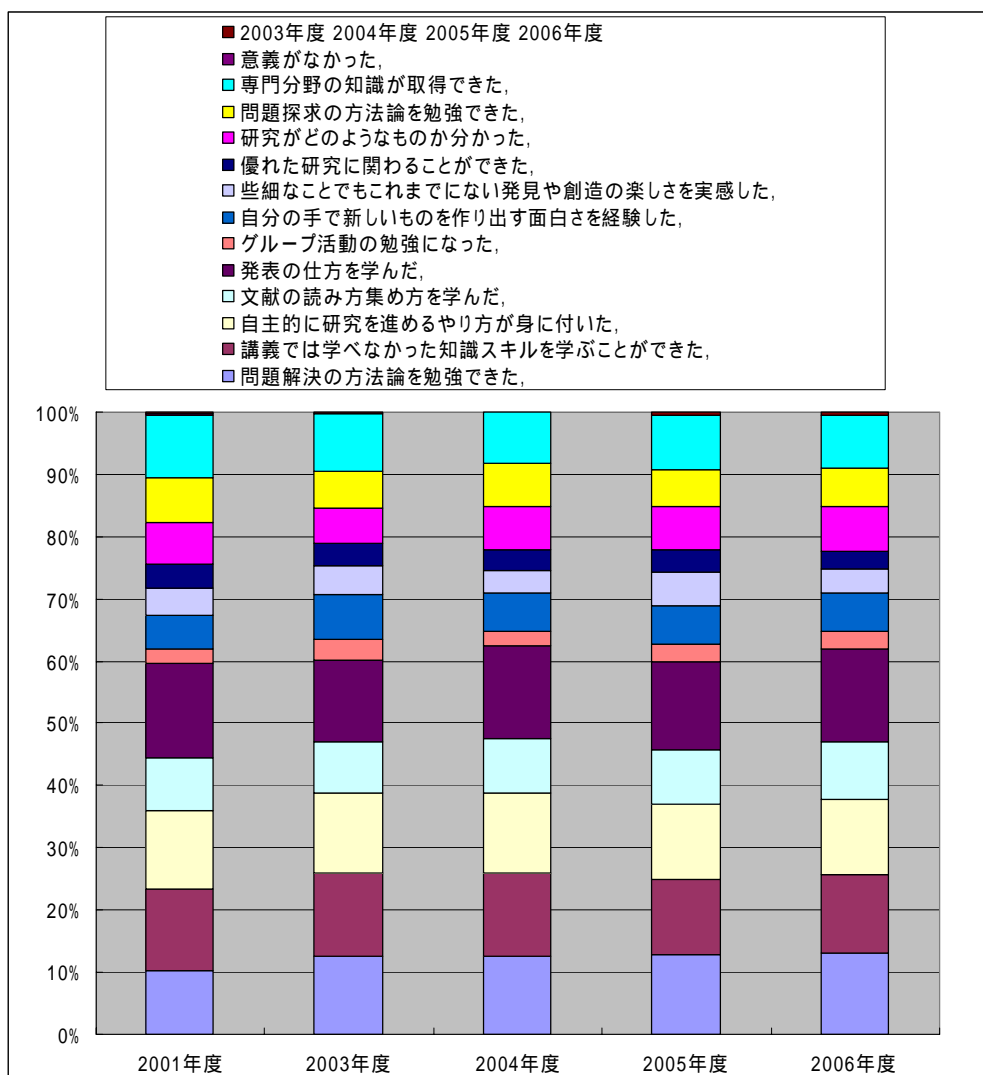
[4-1]学位論文の意義はありますか。

昨年度と変わっておらず、学位論文のための取組は大学院教育において重要と判断される。



[4-2][4-1]でA（大いにある）またはB（少しある）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

昨年度と変わっておらず、課題解決の方法論、講義では学べない知識・スキルの取得、文献の読み方・集め方、発表の仕方が上位を占めており傾向は変化していない。



N (その他) [ 具体的に : ]

- ・ 教授（年上の方）との接し方を学んだ。
- ・ 基本ソフトを使いこなすことができるようになったから。
- ・ 使えない人間は無視するにかぎるということがわかった。
- ・ 上司との付き合い方がわかった。

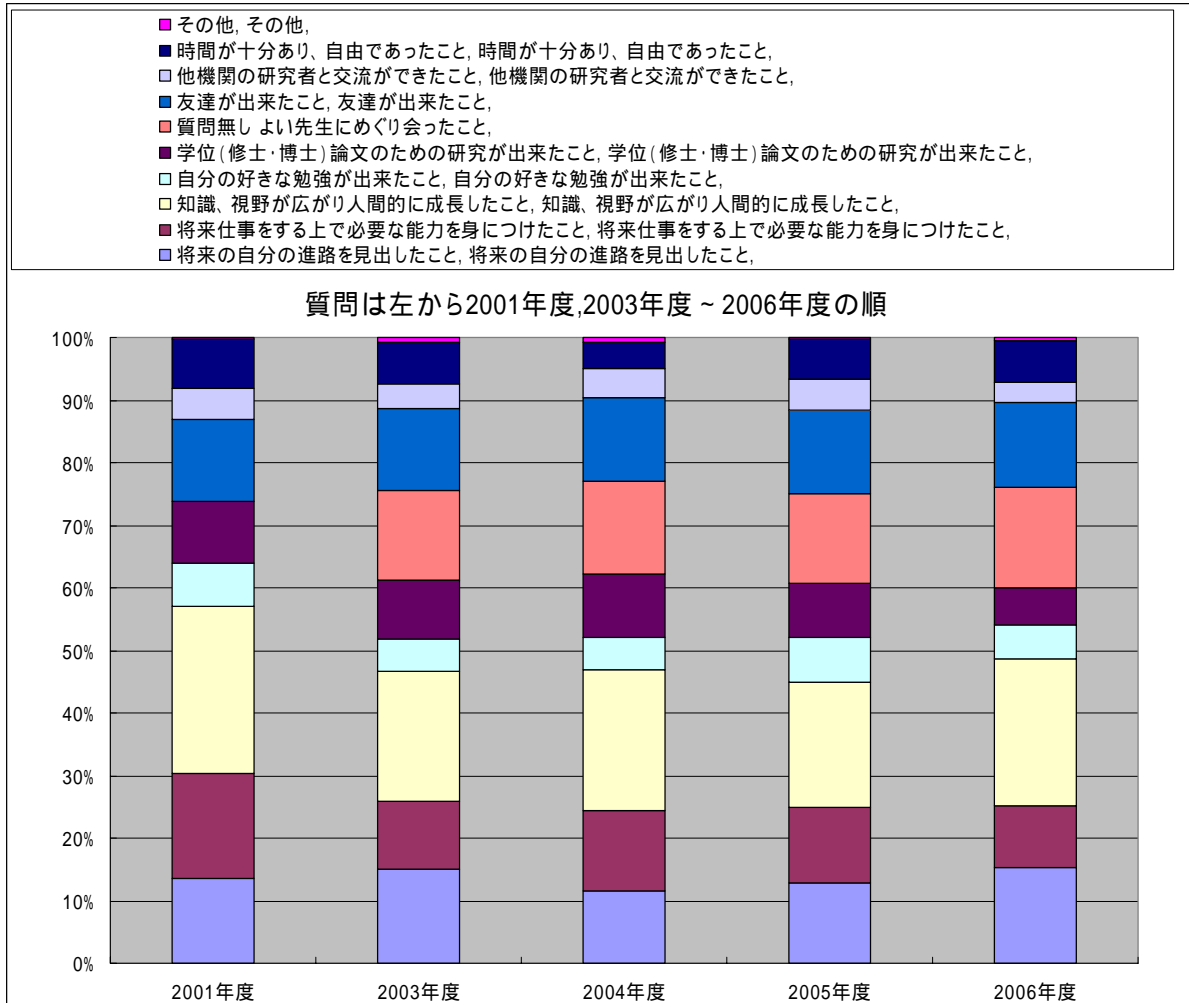
[4-3][4-1]でD（あまりない）またはE（ほとんどない）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

以下の回答があった。学生の意識と客観的な評価が必ずしも一致するとは限らない。

- ・ 2年間きちんと研究に取り組んで、一応の結果を残しても正当な評価を受けることはできないから。

[5] 研究科生活を振り返って、どのようなことが良かったと思いますか。（複数回答可）

昨年度と違い「将来の自分の進路を見いだした」と「知識・視野が広がり人間的に成長した」が増えており、積極的・意欲的な取り組みの成果が見える。



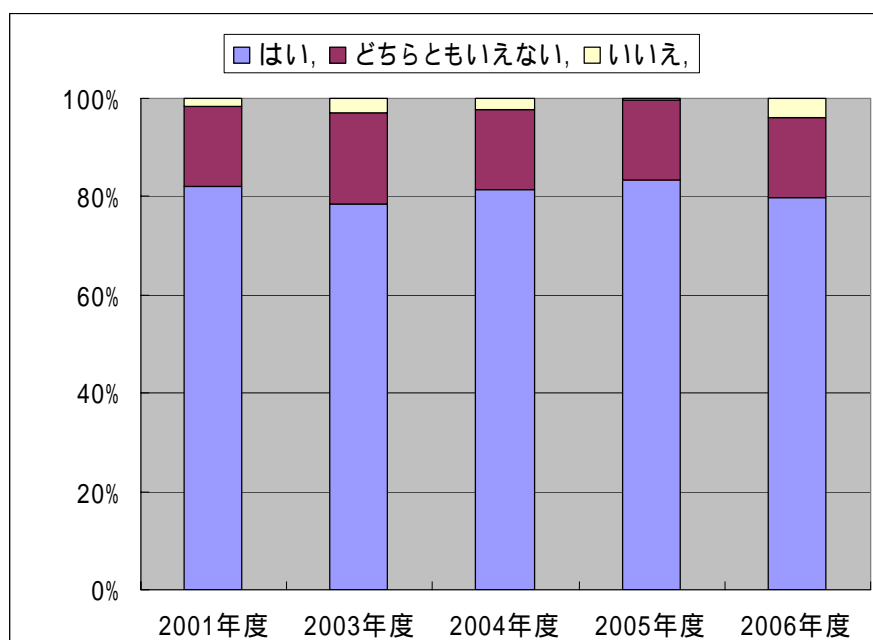
J (その他) [ 具体的に： ]

- ・ 先輩として後輩の研究指導をしたこと。
- ・ ない。

[6] 入学した専攻についてお尋ねします。

[6-1] 現在の専攻に入学してよかったと思いますか。

再び「いいえ」が復活している。学生本人は希望せずに大学院に進学する場合もあるように読みとれる。今後の推移を慎重に見守る必要がある。



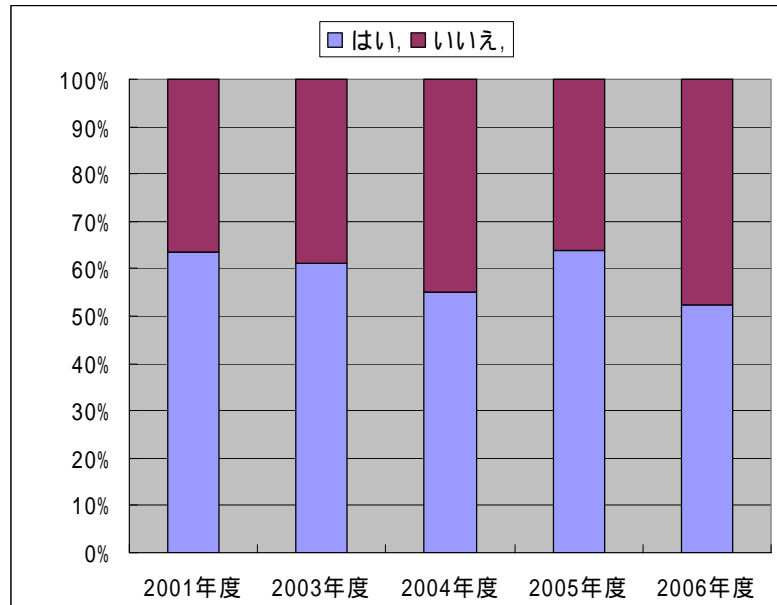
[6-2][6-1]でC (いいえ) と答えた方：その理由は何ですか。

- ・ 自分の進路と全く関係がなかったから。
- ・ 自分の興味が違うところにあるから。
- ・ 将来の夢とあまり関係ないから。
- ・ 建設業の先行が不安だから。
- ・ 別にやりたいところに入学してないから。
- ・ 勉強できる環境ではなかった。
- ・ レポートが多い！！

[7]進学時の目標についてお尋ねします。

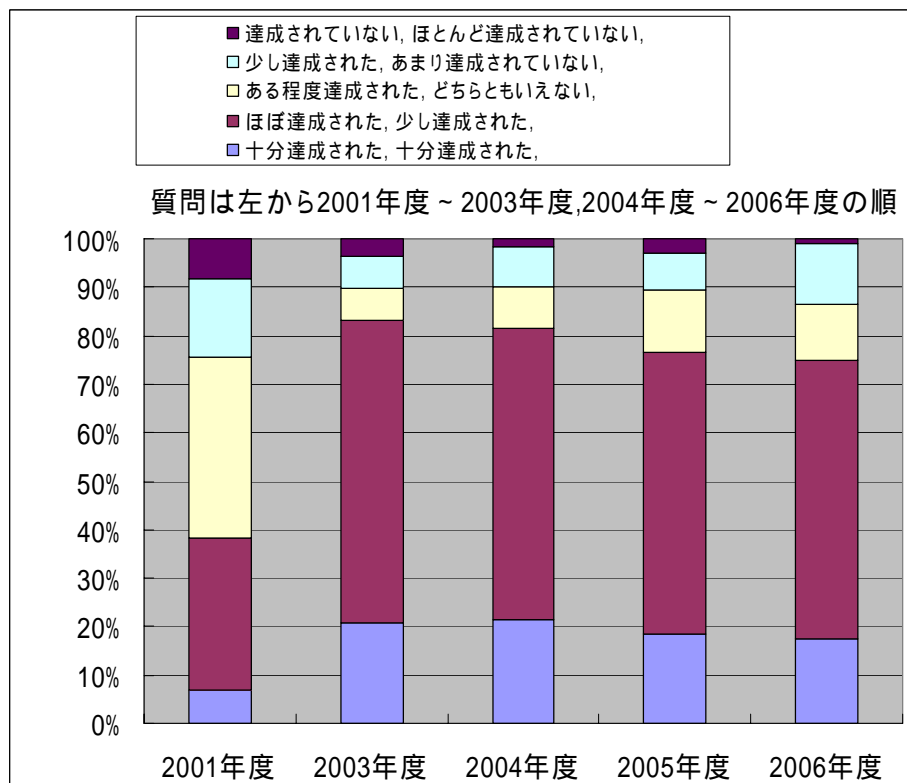
[7-1]あなたは進学の際に研究科で達成したい目標がありましたか。

目標を持って進学した学生の割合は50%近くまで減少し、半数近くは目標も無しに進学した。今後の推移を慎重に見守る必要がある。



[7-2][7-1]でA(はい)と回答した方：現在どの程度達成されていますか。

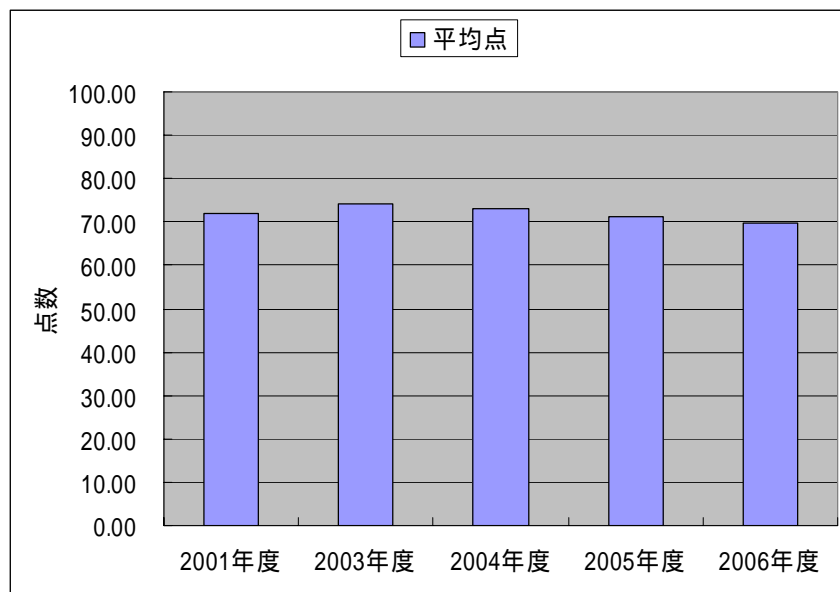
「十分達成された」と「ほぼ達成された」の達成感を有している修了生は変化していないが、「少し達成された」とする修了生が増えた。十分な達成感を感じている修了生の割合も20%以下であり、対策を講じる必要がある。



[8]研究科在学中の学生生活の満足度に対して100点満点で点を付けるとすれば何点と思いますか。

ほとんど変化はないと考えられるが、達成感を有している修了生の漸減傾向と同調しているよ

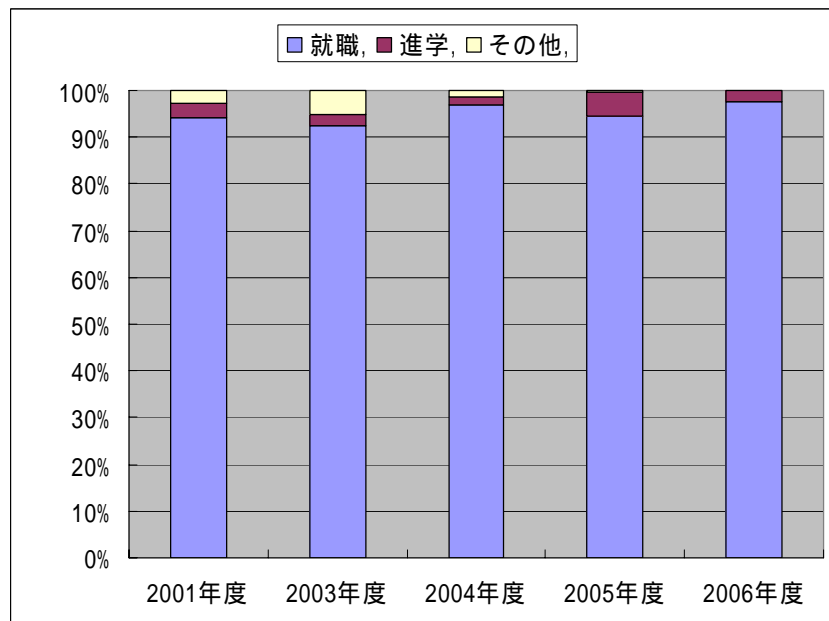
うに見える。向上に向けた努力が必要であろう。



[9]修了後の進路についてお尋ねします。

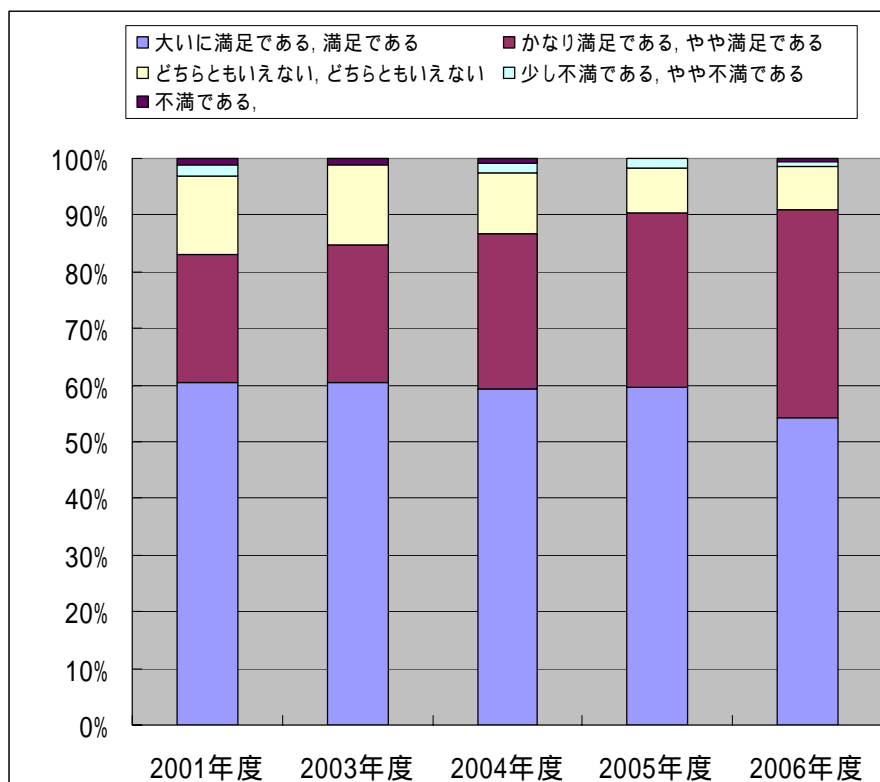
[9-1]あなたは修了後就職しますか、進学しますか。

就職する学生が95%以上、残りの数%が進学している。



[9-2]あなたは修了後の進路に満足していますか。

修了後の進路に満足感を抱いているものの割合は昨年度とほぼ変わっていない。



[9-3][9-2]でD（やや不満である）またはE（不満である）と答えた方：その理由は何ですか。

一部解釈不能な理由もあるが、不満足感のほとんどは希望がかなえられなかったことに起因する。

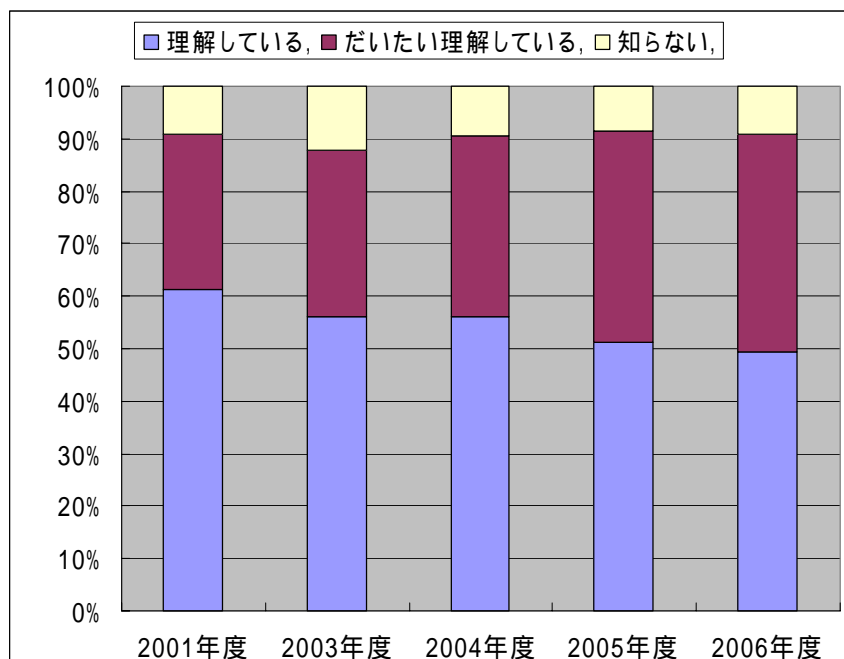
- ・ 満足はしているが、自由で就職活動を制限されたことに大いに不満あり。
- ・ もう少し...ちがうところがよかった。
- ・ 就職先の勤務地に不満があります。

[10]研究活動についてお尋ねします。

[10-1]進学時の研究室の配属決定方法を理解していますか。

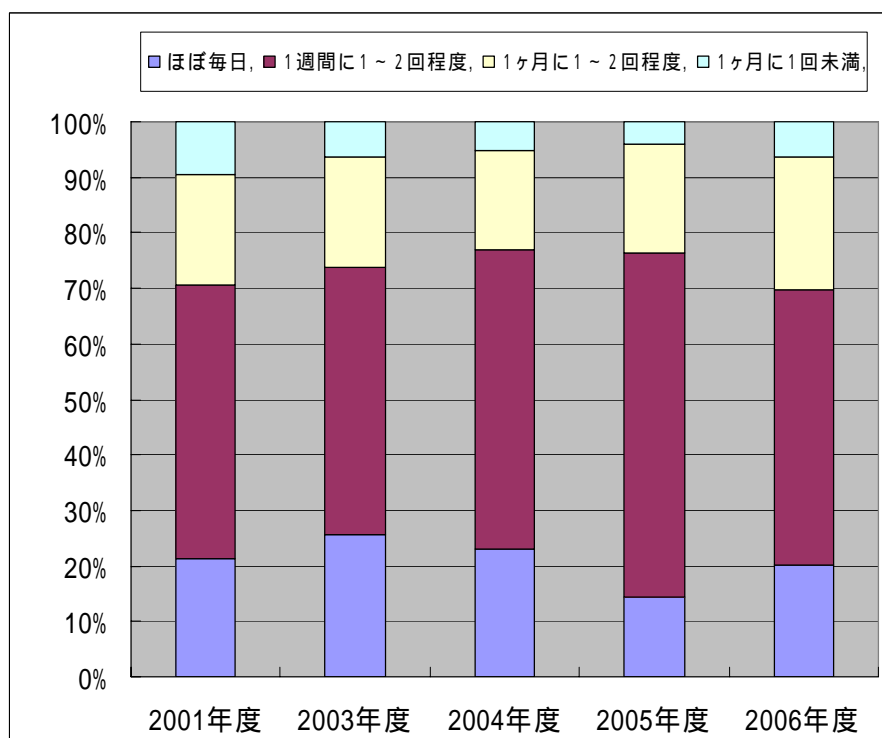
昨年度と同様に、研究室の配属決定方法を知らない学生は10%程度である。





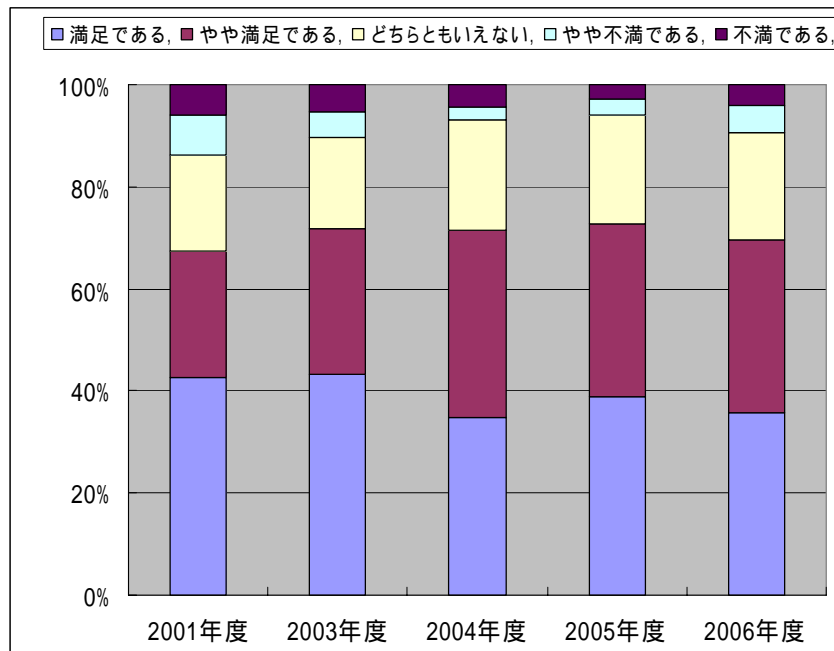
### [10-2] 研究指導はどの程度の頻度で受けましたか。

昨年度から反転し、ほぼ毎日研究指導を受けた学生が増加する傾向にあるが、一ヶ月に1回未満と回答した学生も増える傾向にある。教員が学生の研究指導にもっと多くの時間を割けるような対策を講じる必要がある。



### [10-3] あなたの研究に対する指導方法について、どのように思っていますか。

不満とやや不満と回答した割合は増加して10%近くになっており、修了生への研究指導方法改善の努力・工夫を続ける必要がある。



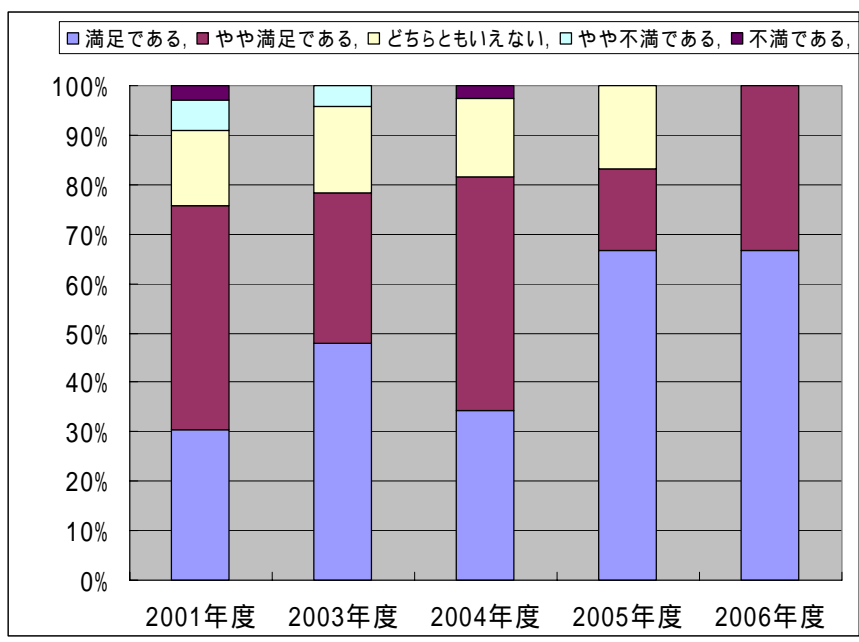
[10-4][10-3]でD（やや不満である）またはE（不満）と答えた方：その理由は何ですか。

一部解釈不能な理由もあるが、特に指導時間が少なかった場合に不満を感じている様子が伺える。教員が学生の研究指導にもっと多くの時間を割けるような対策を至急に講じる必要がある。

- ・ 内容が自分にとって理解できなかった。
- ・ あまり協力的でない。
- ・ 研究に関するミーティングをもっと積極的に行うべきである。
- ・ もう少し一緒に考えてほしい。
- ・ 先生とのコンタクトがほとんどないから。
- ・ 言えない。
- ・ 放置されすぎです。（涙）
- ・ 新規装置の操作方法以外教えてもらったおぼえがない。話を聞いても毎回違うことを言い出すのでよくわからん。
- ・ 先生があまり詳しくない。具体的指示がない。
- ・ 先生が多忙で指導機会が少ない。
- ・ 学生間で研究の引き継ぎがうまくいっていないのに、日常の教官の指導がほとんどなかった。
- ・ 仕事がいそがしいと言われ、実験の相談等を行えなかった。
- ・ 指し示し導くような指導ではなかったから。
- ・ 特に先生から研究を進展させる助言は無かった。
- ・ ここでは書ききれません。

[10-5]あなたの研究に対する指導体制（指導教官グループ）について、どのように思っていますか。（博士後期課程の方のみ）

博士後期課程の有効回答は3枚であるが、全て肯定的な回答が得られている。



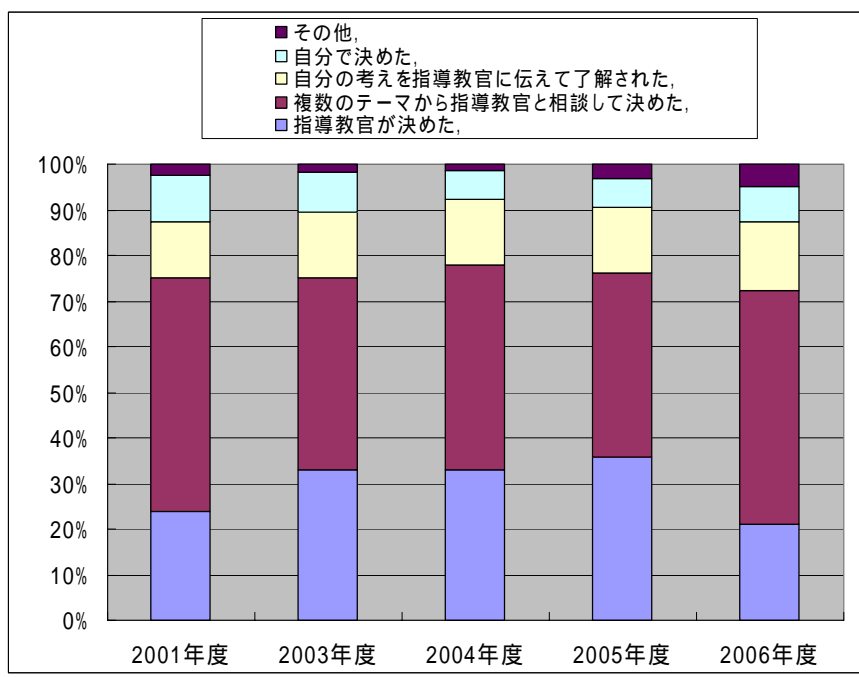
[10-6][10-5]でD（やや不満）またはE（不満）と答えた方：その理由は何ですか。

学生が十分な達成感を抱いて課程を修了できるようにするため、博士後期課程学生一人当たりの研究費の十分な手当の努力が必要である。

- ・ 装置が故障した際の研究費がない。

[10-7]研究テーマはどのように決定されましたか。

ここ数年間で指導教官がリーダーシップを取って研究テーマを決めた比率が下がり、学生が自分で決めた割合が増えている。

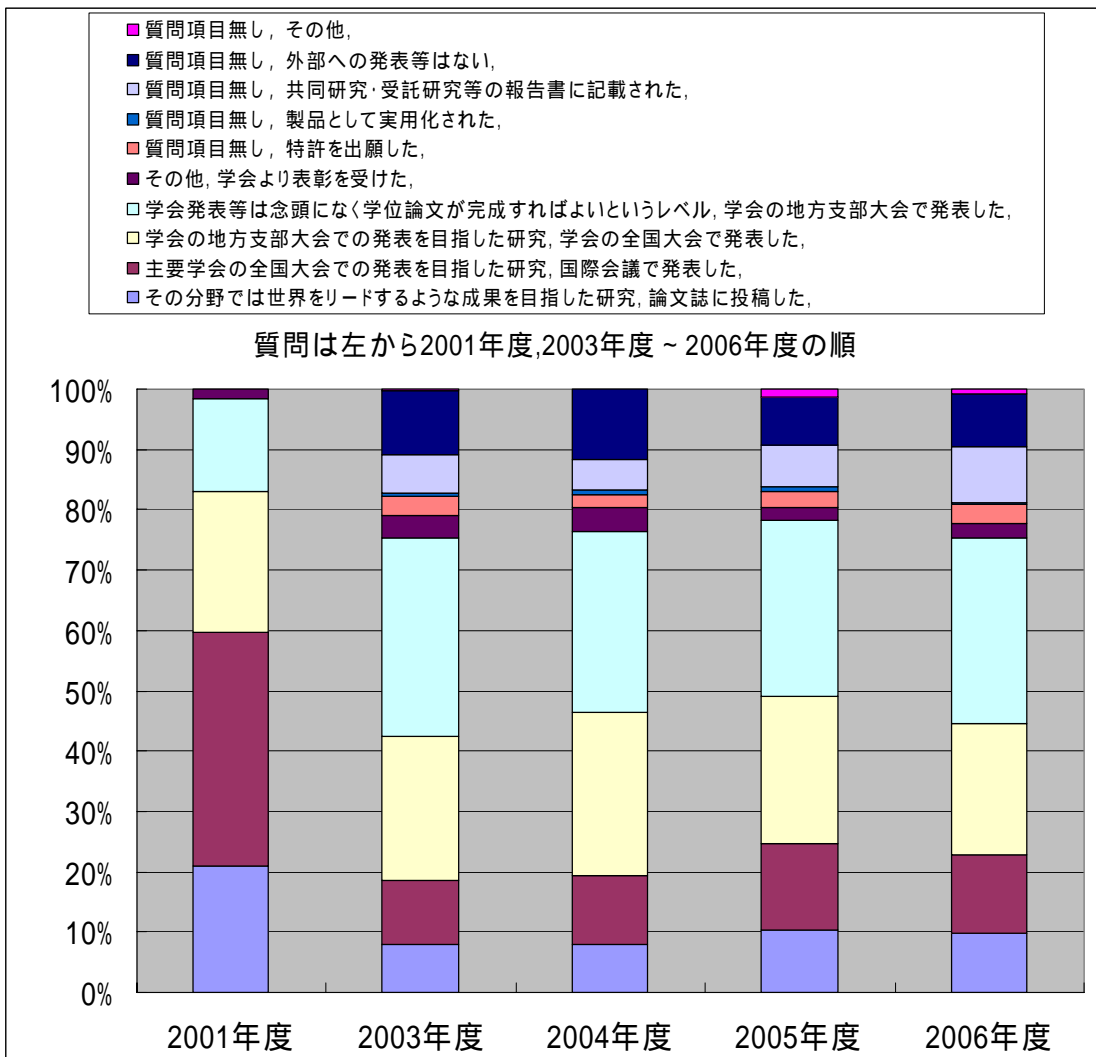


E (その他) [具体的に： ]

- ・ ジャンケンポン
- ・ くじ引き
- ・ 同じチームの人が決めた。
- ・ 指導教員との対談の中から興味のある研究テーマを見つける事ができた。
- ・ いつのまにか。
- ・ 複数あるテーマの中から選んだ。
- ・ 研究テーマありきで研究室に入った。
- ・ このテーマがやりたいと伝えても，納得されない。
- ・ 学部時代のテーマをそのまま引き継いだ。
- ・ 複数のテーマから学生同士で相談して決めた。

[10-8]あなたが在学中に研究したテーマの成果は下記のうちどれに該当しますか。(複数回答可)

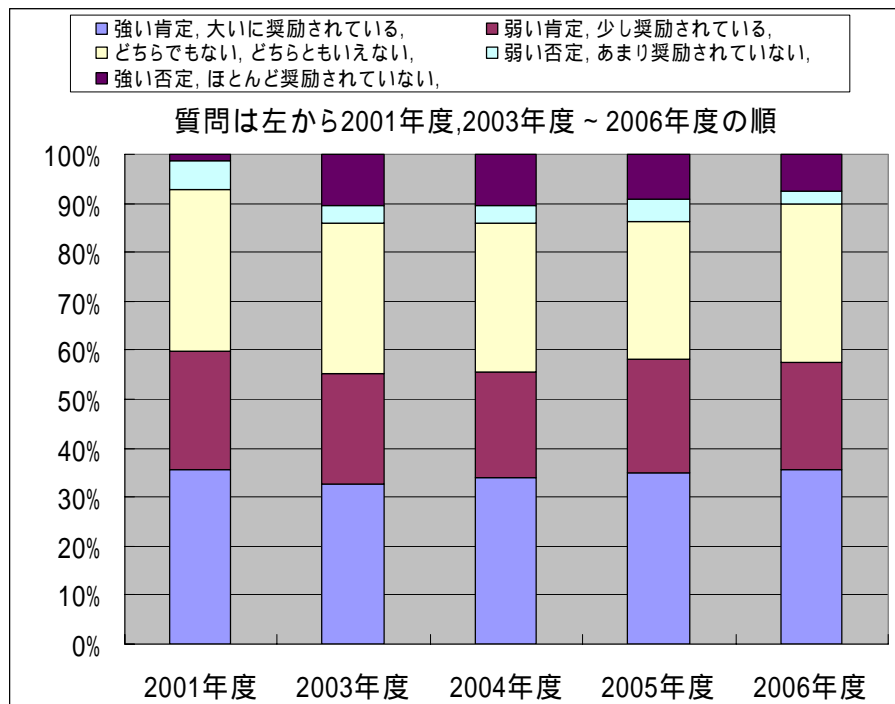
昨年に比べ、学会の全国大会発表よりグレードの高い成果が減ったことは非常に気がかりである。今後慎重に推移を見守る必要がある。



J (その他) [具体的に： ]

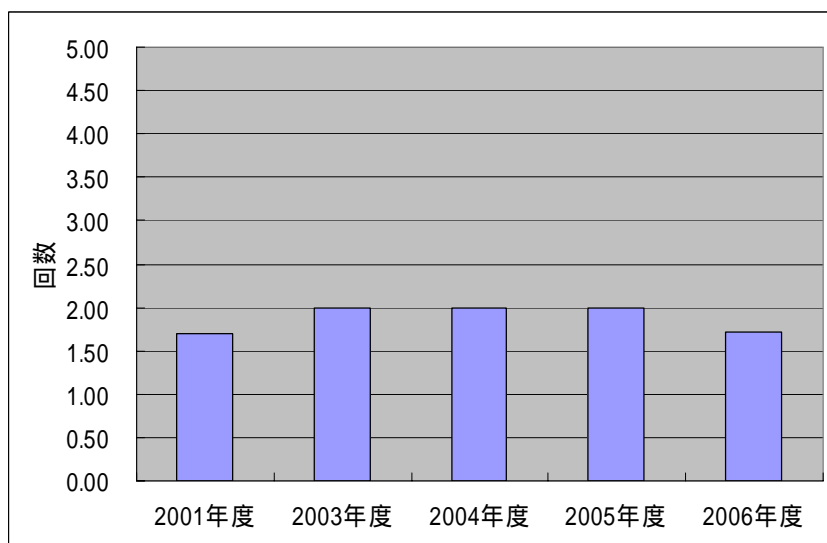
- ・ 技術雑誌に寄稿
- ・ 研究会で発表を行った。
- ・ 2 回程ポスター

[10-9]学外での研究活動（学会発表や他機関での研究活動等）を奨励されていましたが、2003 年度以降は多かれ少なかれ推奨されていると感じている学生の割合が増加している。



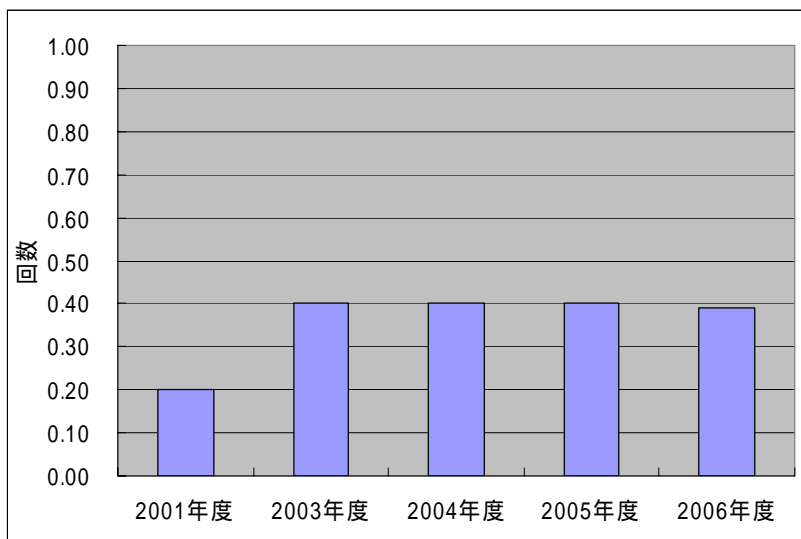
[10-10]あなたは在学中に国内学会（大会等）で何回発表しましたか。

修了生の発表回数は2回未満となっている。



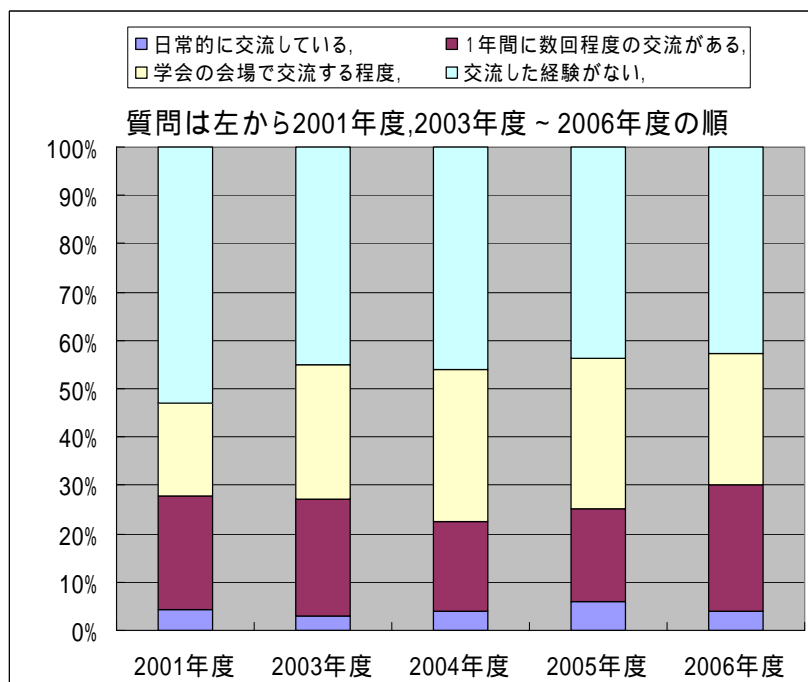
[10-11]あなたは在学中に国際会議で何回発表しましたか。

修了生の発表回数は2003年度以降0.4回となっている。



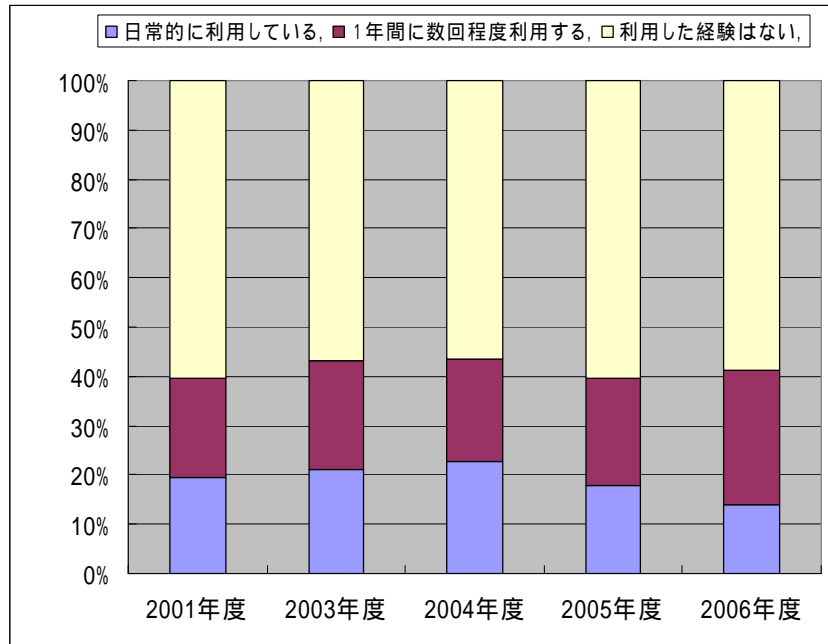
[10-12]学外の研究者（国内および国外）と研究交流した経験がありますか。

交流経験のない修了生の割合は漸減している。



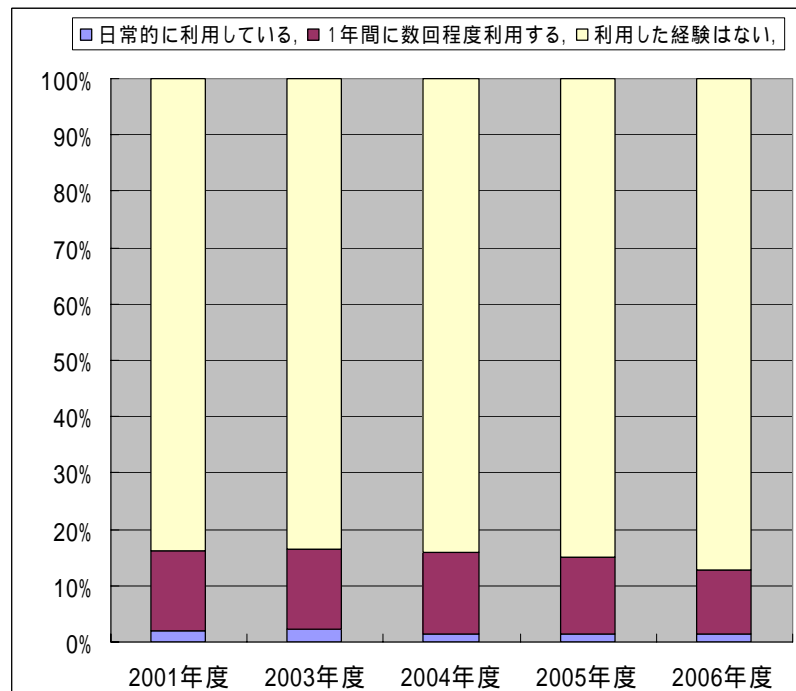
[10-13]学内の共同利用施設（情報科学センター，機器分析センター等）を研究のために利用した経験がありますか。

経験者の割合はここ数年そう大きく変化していない。



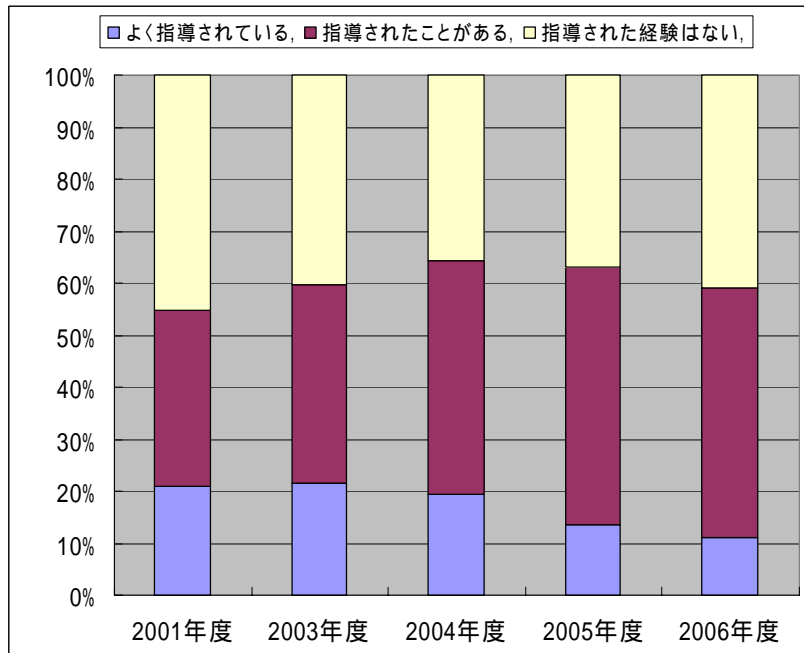
[10-14]学外の共同利用施設等を研究のために利用した経験がありますか。

経験者の割合は漸減する傾向にある。



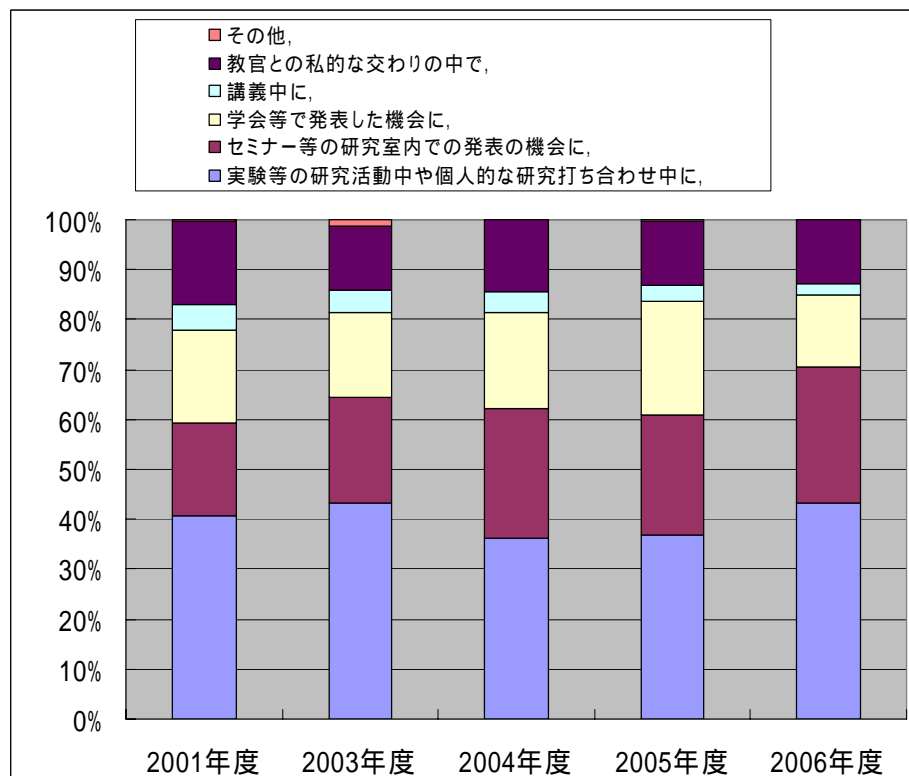
[10-15]学位論文の研究を通して、研究遂行に対して競争意欲が向上するような指導を受けたことがありますか。

指導されたことがある修了生も、よく指導されている修了生も漸減する傾向にある。指導を受けたことがない修了生が40%に達した。指導の改善が必要である。



[10-16][10-15]でA（よく指導されている）またはB（指導されたことがある）と答えた方：それはどのような機会に指導されましたか。（複数回答可）

教員との個人的な研究打ち合わせやセミナー、学会発表等で指導を受けている学生の割合は70%に達した。



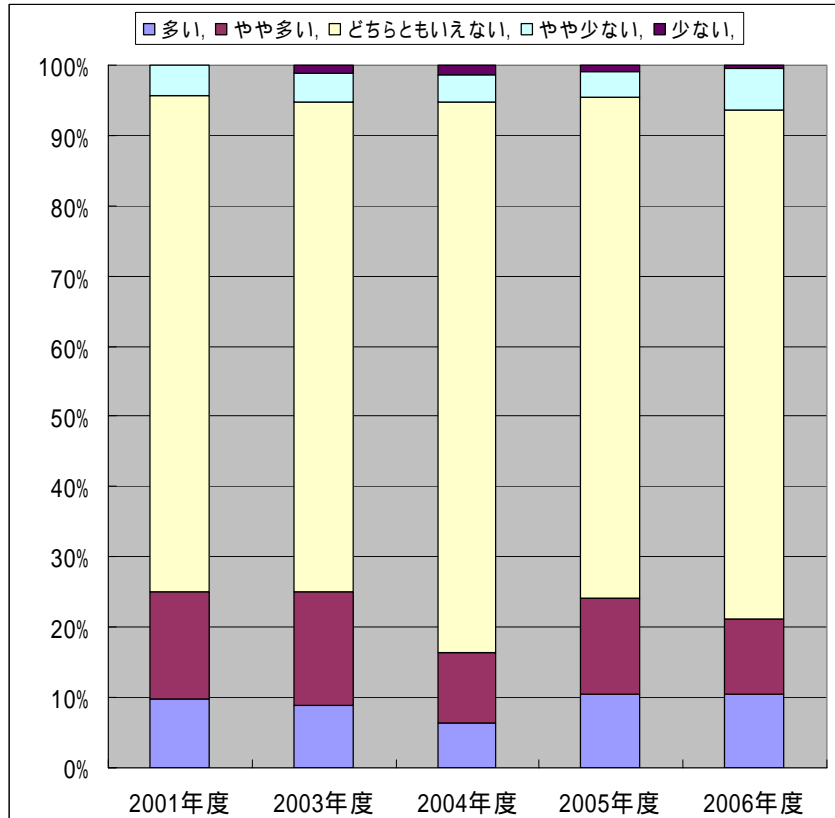
F（その他） [具体的に： ]  
（回答者なし）



[11]工学研究科における講義・演習等についてお尋ねします。

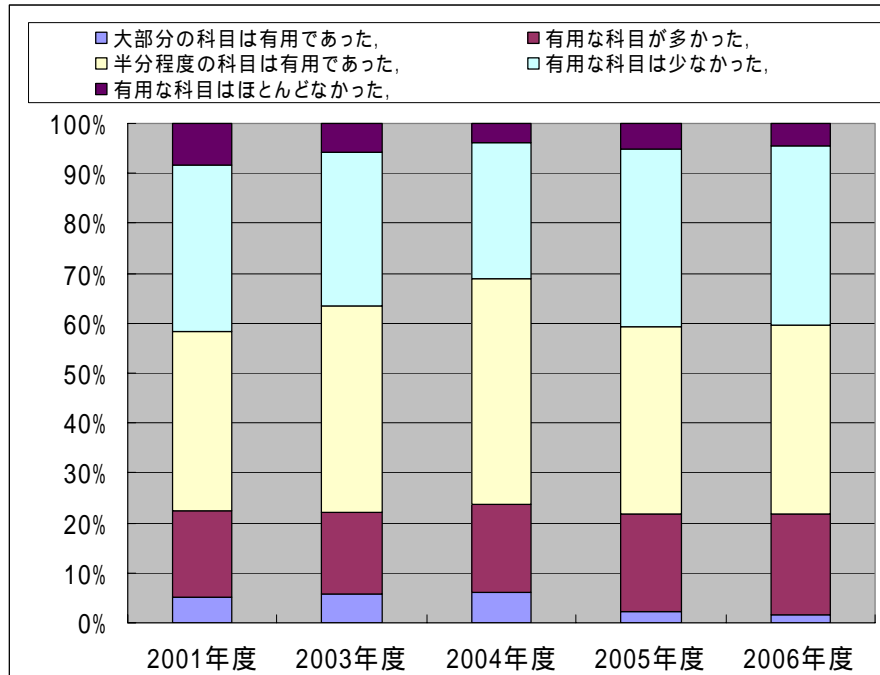
[11-1]工学研究科における講義・演習等の必要要件単位数は多いでしょうか、少ないでしょうか。

「やや多い、多い」と回答した修了生が25%より16%に減少してまた24%まで増加し、2006年度は21%まで減少しているが、講義・演習等を好まない傾向になっている。講義・演習等の内容を改善する必要がある。



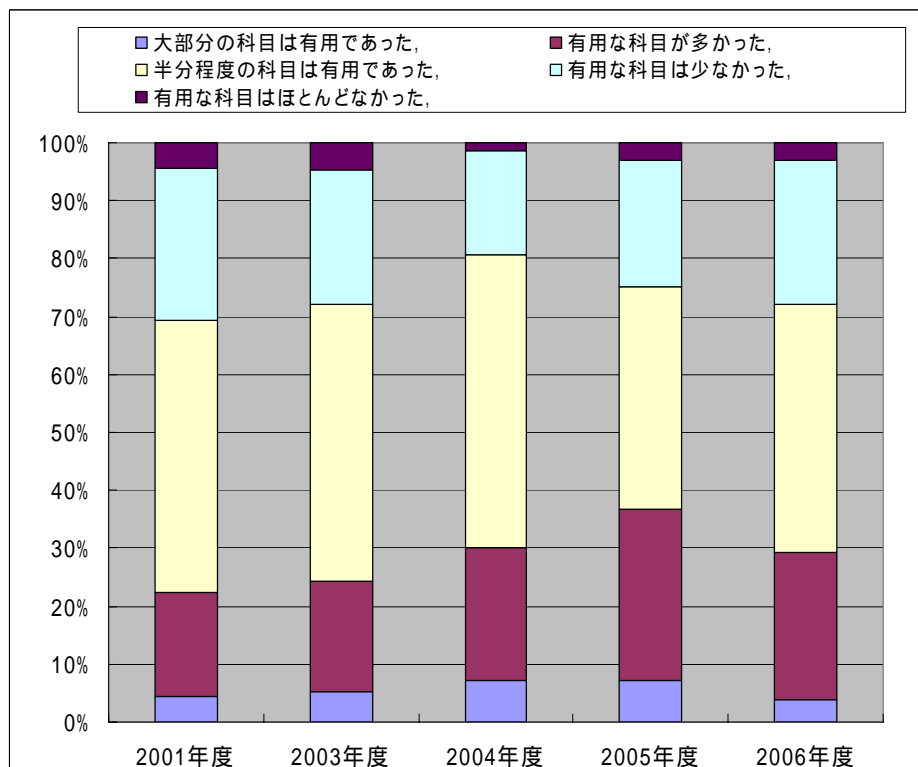
[11-2]工学研究科で受講した講義科目（演習科目を含む）の中で、自分自身の研究に役立った科目の割合はどの程度ですか。

「半分以上の科目は有用であった」と回答した修了生が68%まで増加傾向にあったのが2005、2006年度はほぼ60%に減少している。有用な科目が増加するように、さらなる講義（演習）内容の改善が必要である。



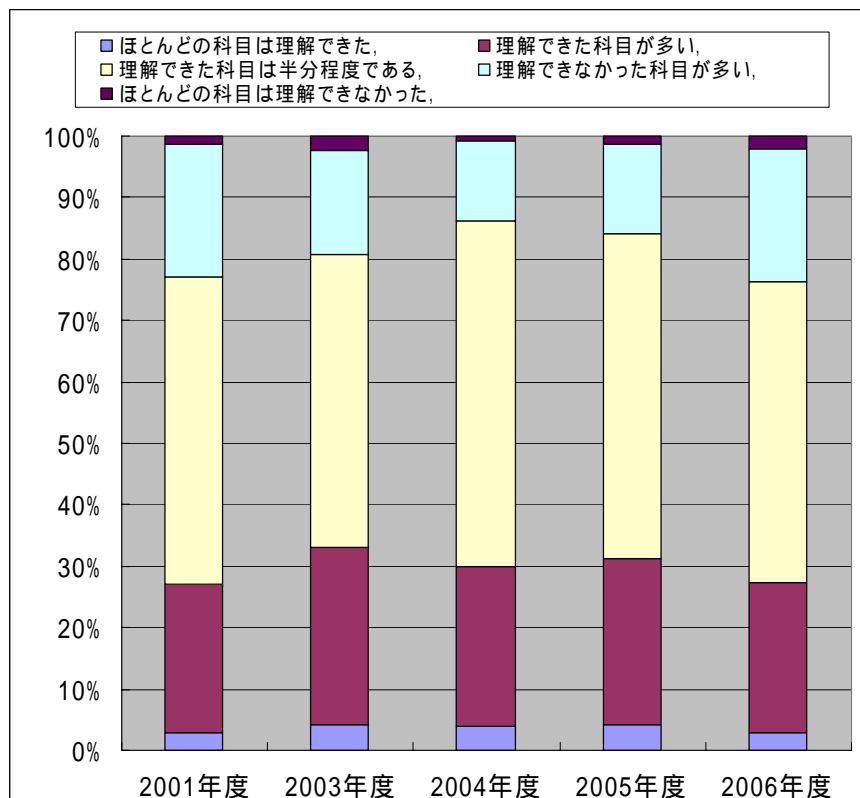
[11-3]工学研究科で受講した講義科目（演習科目を含む）の中で、自分自身の成長のために有用であり、履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

「大部分の科目は有用であった,有用な科目が多かった」は37%まで増加傾向にあったのが2006年度は29%に減少している。また、「半分以上の科目は有用であった」と回答した修了生が81%まで増加傾向にあったのが2006年度は72%に減少しており、講義（演習）の内容の改善が必要である。



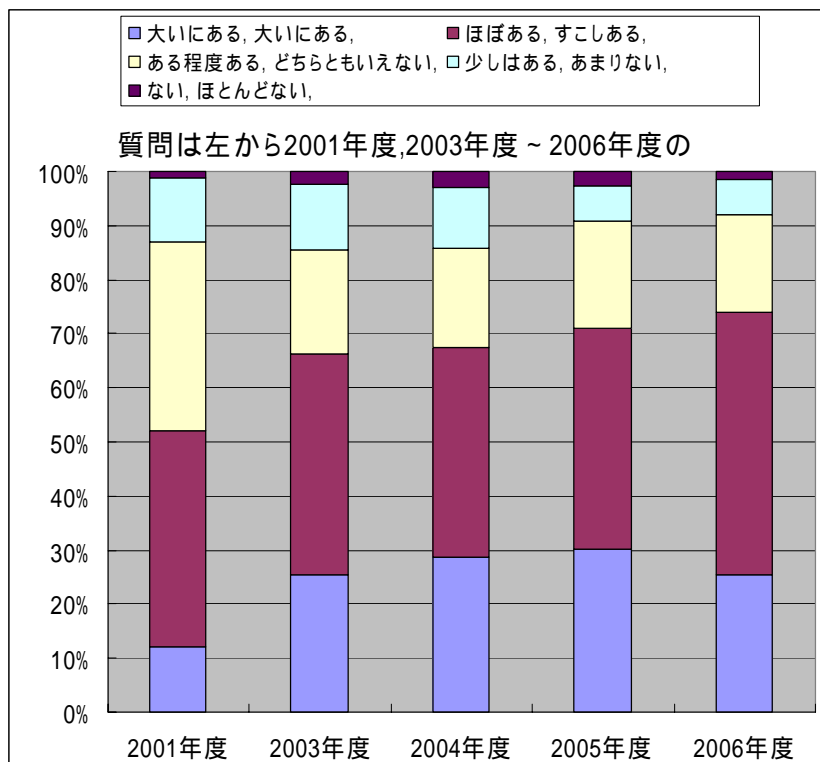
[11-4]工学研究科で受講した講義科目の理解度はどの程度ですか。

「理解できた科目が半分以上」の修了生の割合が86%まで増加傾向にあったのが、2006年度は76%に減少、また「理解できなかった科目が多い」の割合も増加しているので講義内容や教授方法の改善が必要である。



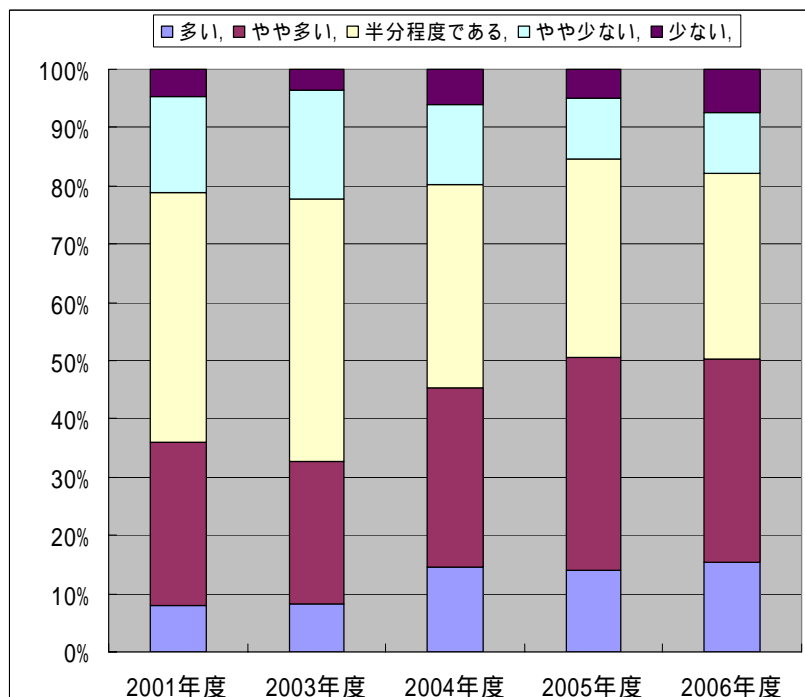
[11-5]学部で履修した科目と研究科で履修した科目の間に、つながりがあったと思いますか。

「学部で履修した科目との関連がある」と回答した修了生の割合が52%から順次74%まで増加しており、学部で履修した科目との関連性は向上している。



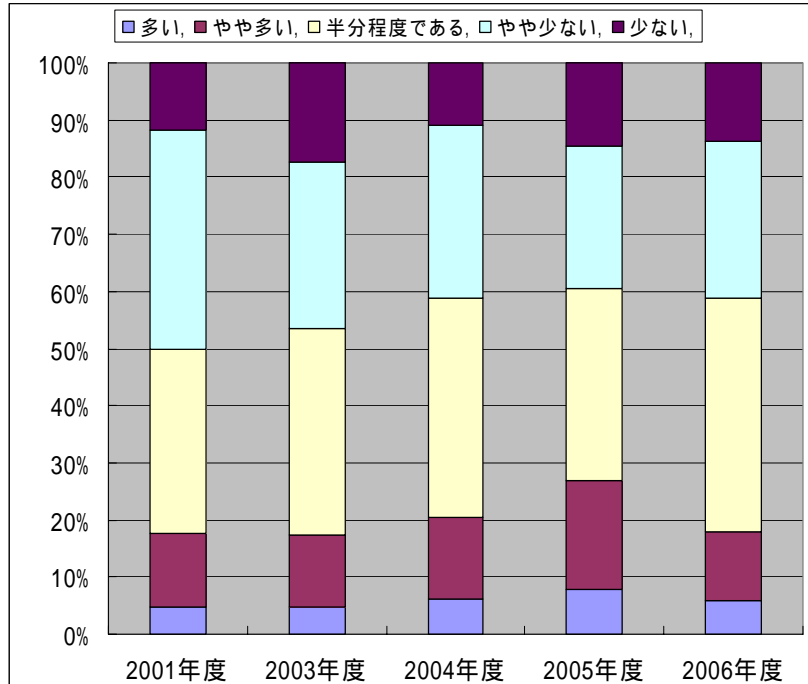
[11-6]工学研究科で履修した科目全般について、教育への熱意があった担当教官の割合はどの程度ですか。

「半分以上の教員に熱意があった」と回答した修了生の割合は、79%から85%まで増加していたが2006年度は減少している。更に熱意のある教員の割合を増加させる必要がある。



[11-7]工学研究科で履修した科目で、就職後、仕事をする上で役に立つと思う科目はどれくらいありましたか。

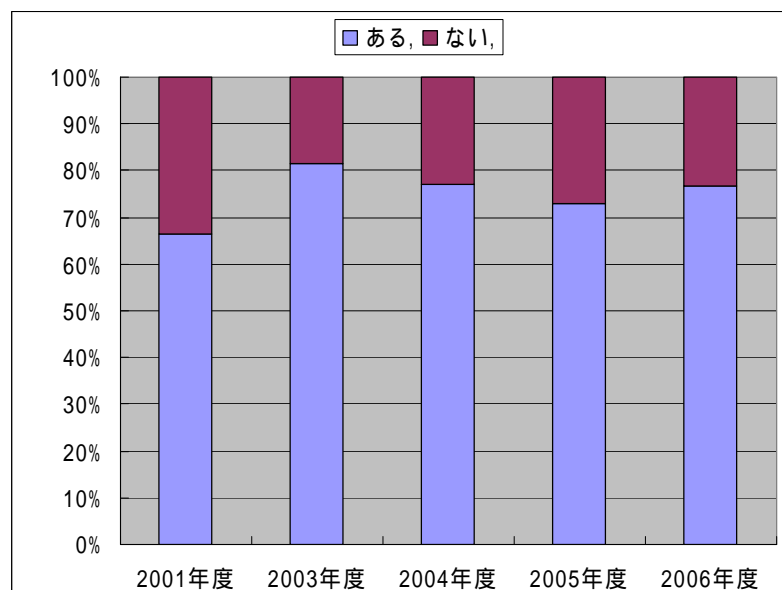
「半分以上の科目は仕事に役に立つ」と回答した修了生は、50%から60%程度まで増加しており、教育効果は改善されていると思われる。しかし、41%は役に立っていないと思っているので、改善の必要があると考えられる。



[2] T A , R A 等の制度についてお尋ねします。

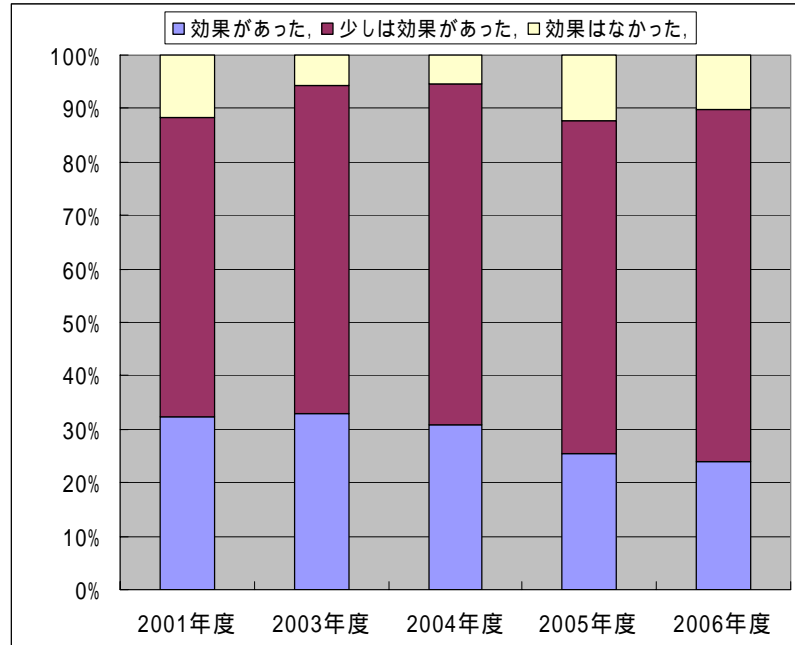
[12-1] T A を担当したことがありますか。

T A 経験者は2003年度の81%をピークに減少傾向にあったのが2006年度77%に増加している。更に制度の定着が進むよう努力する必要がある。



[12-2][12-1]でAと答えた方：TA活動を通して、学部学生に対して教育的効果があったと思いますか。

「効果があった」と回答する者は30%前後、「少しは効果があった」とする回答は60%前後で、二つの回答を併せると90%前後が自分のTAが教育に貢献していると自己評価している。



[12-3][12-2]でC (効果はなかった) と答えた方：その理由は何ですか。

「効果がなかった」と評価している回答者は6%から12%の間を前後しているが、この回答者群の具体的な回答は次の通りである。それらの厳しい自己評価はTAの現実を伝えており、TA制度の改善すべき点を示している。

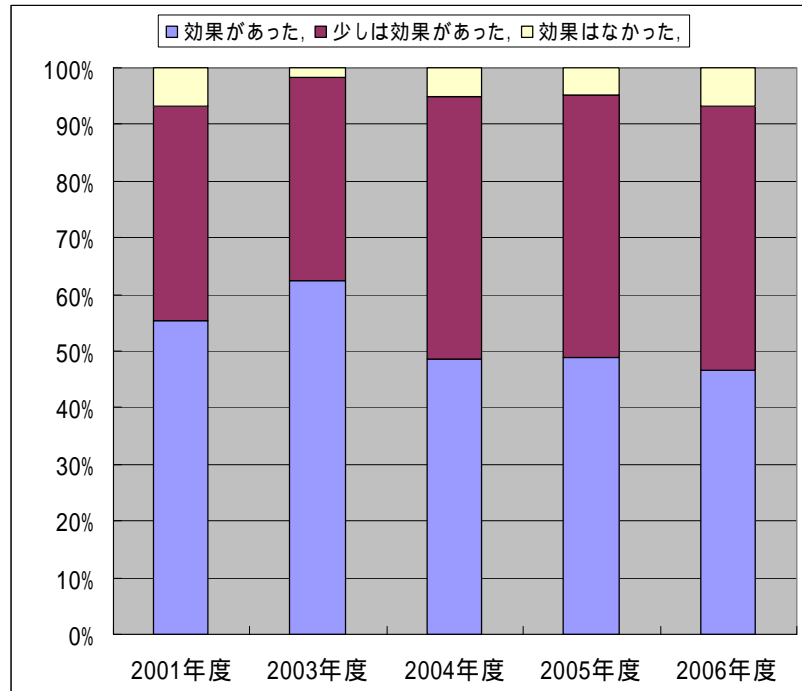
A [具体的に：

]

- ・ 役に立てなかった。
- ・ 実際に質問をうけるなどなかった。
- ・ 特に学部学生とのふれあいがなかったから。
- ・ 効果がある(わかる)ような事がなかったこと。
- ・ 学部生の受動的な態度
- ・ 自分が何かを教えたわけではないので。
- ・ 学部生のやる気がなかったように感じたから。
- ・ 一つのテーマに対する時間があまりにも短い。特に、電気電子工房が。少なくとも半年は必要。
- ・ 学部学生のやる気は個人の問題でやる気がない学生は何もしない。
- ・ 質問されない。
- ・ 自分にやる気がないから。
- ・ 期間が短かったから。

[12-4][12-1]でA (ある) と答えた方：TA活動は、自分自身にとって教育的効果があったと思いますか。

90%以上が、教育効果があったと答えており、TA活動が充分機能していると思われる。



[12-5][12-4]でC（効果はなかった）と答えた方：その理由は何ですか。

TA活動は自分自身にとって教育的効果がなかったと回答する者は6%程度で、量的には少ないが、下記のようなその理由は、TAの改善すべき点を示している。

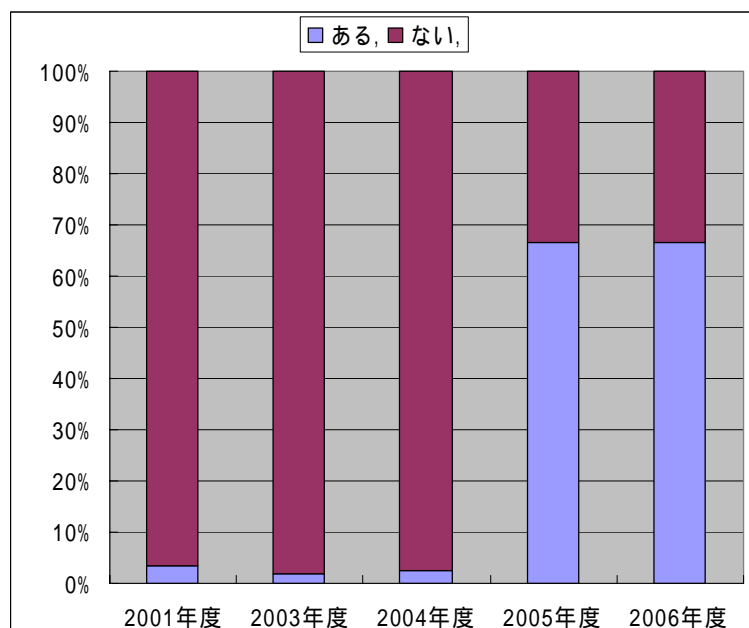
A [具体的に：

]

- ・ 実際に質問をうけるなどなかった。
- ・ 特に教育することがなかったから。
- ・ 関わりがあまりなかった。
- ・ 知っている事だったから。
- ・ 自発性に欠けるものだったため。
- ・ 補佐だけなので時間がもったいない。
- ・ 雑用的な仕事だった為。
- ・ 自分にやる気がないから。

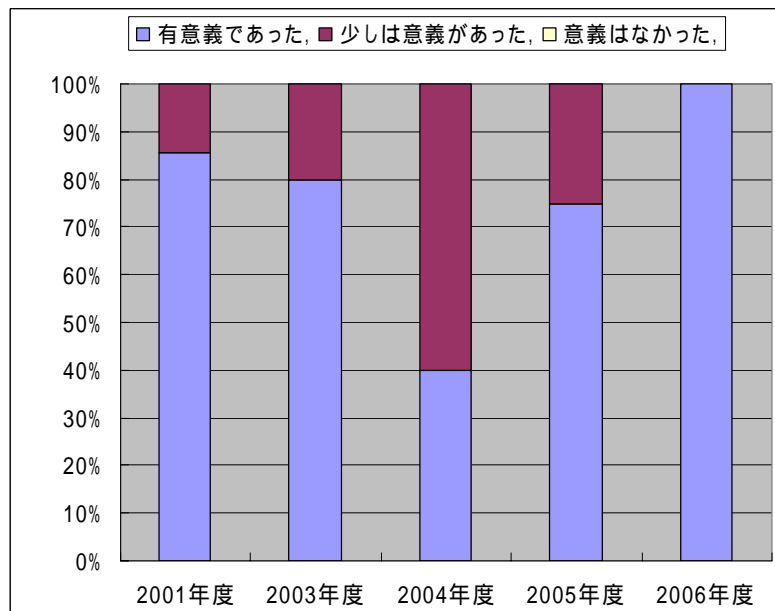
[12-6] R Aを担当したことがありますか。（博士後期課程の修了生のみ）

2005年度はR Aを経験した博士後期課程の学生が大幅に増加し、その傾向は2006年度にもみられる。



[12-7][12-6]でA（ある）と答えた方。RA活動は、自分自身にとって意義があったと思いますか。

2005年度はRA活動の体験者全員がRAを肯定的に考えており、75%の学生はRAに「意義があった」と評価している。今年度は100%の博士後期課程学生が「意義があった」と評価している。



[12-8][12-7]でC（意義はなかった）と答えた方：その理由は何ですか。（博士後期課程の修了生）

前項[12-7]で「意義はなかった」と回答した者がゼロであり、この項の回答はない。

A [具体的に： ]

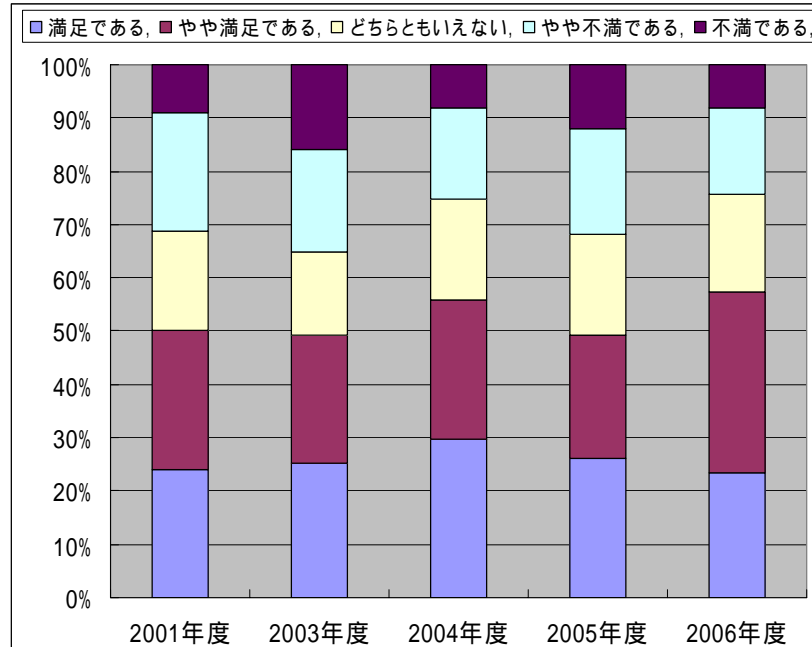
・回答者なし。



[13]施設・設備等についてお尋ねします。

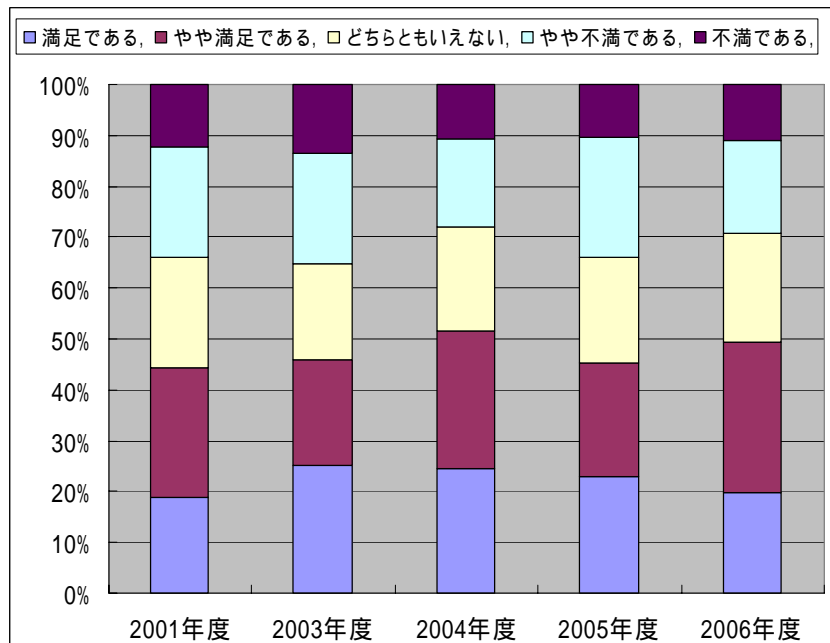
[13-1]研究に使った実験室・実習室のスペースや環境等について満足していますか。

「満足」と解答した学生は50%前後であったのが2006年度は58%に増加しているが、更に増加するよう検討する必要がある。



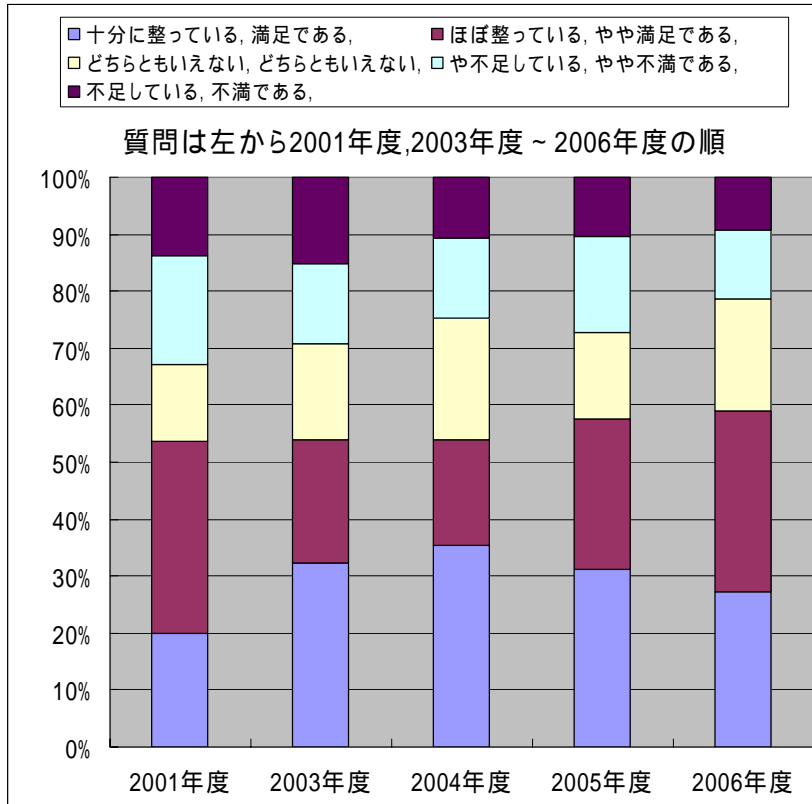
[13-2]研究に必要な設備・装置について満足していますか。

設備に関しても「満足」と回答した学生の割合は50%前後であり、更に増加するよう検討する必要がある。



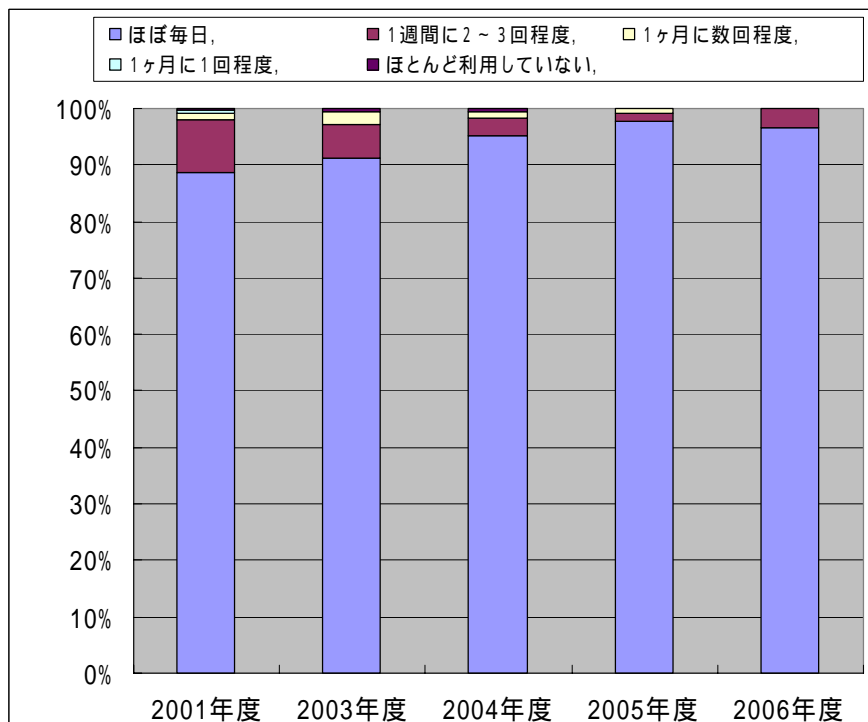
[13-3]研究に必要な情報機器（コンピュータ端末等を含む）の整備状況について満足していますか。

「満足、やや満足」と回答した学生の割合は60%近くまで着実に増加している。



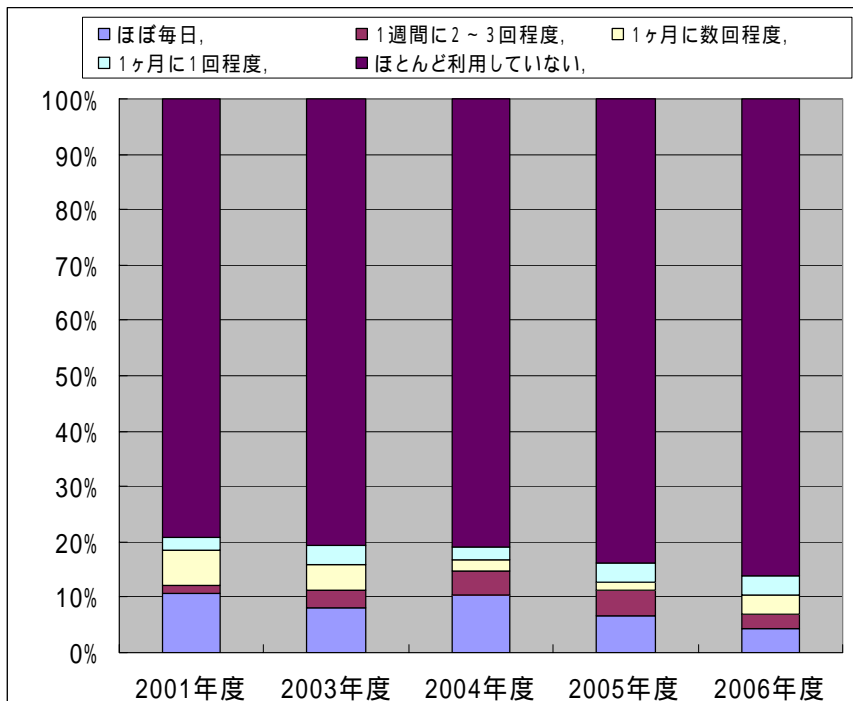
[13-4]インターネットをどの程度利用していますか。

インターネットを毎日利用する学生の割合はコンスタントに増加し 97%に達している。1 週間に2～3 回以上必ずインターネットを利用している学生は 100%である。



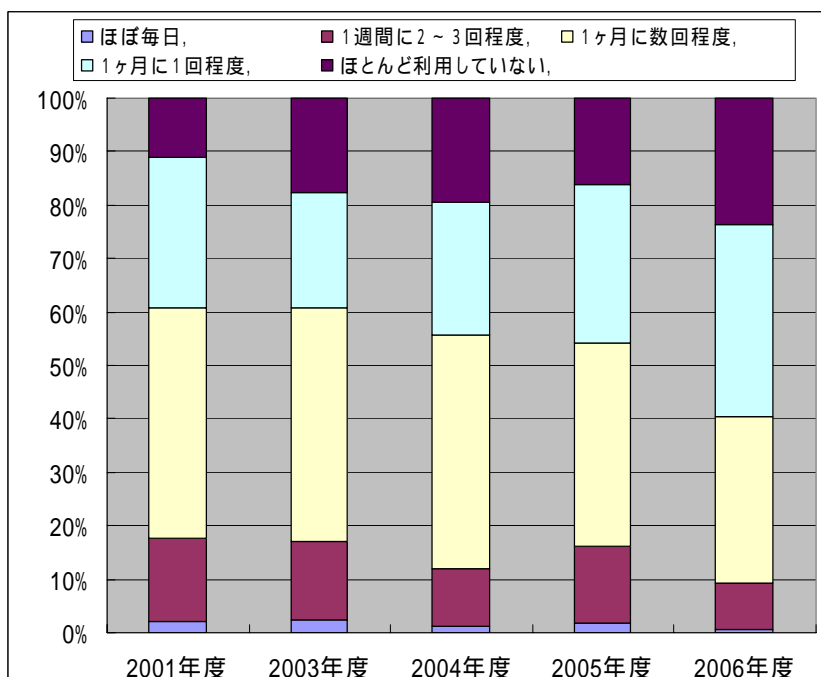
[13-5]情報科学センターが提供しているサービスをどの程度利用していますか。(インターネットや電子メールを除く。)

約 80%以上の学生が情報科学センターのサービスを利用していない。これは増加傾向にあり2006年度は 86%に達している。



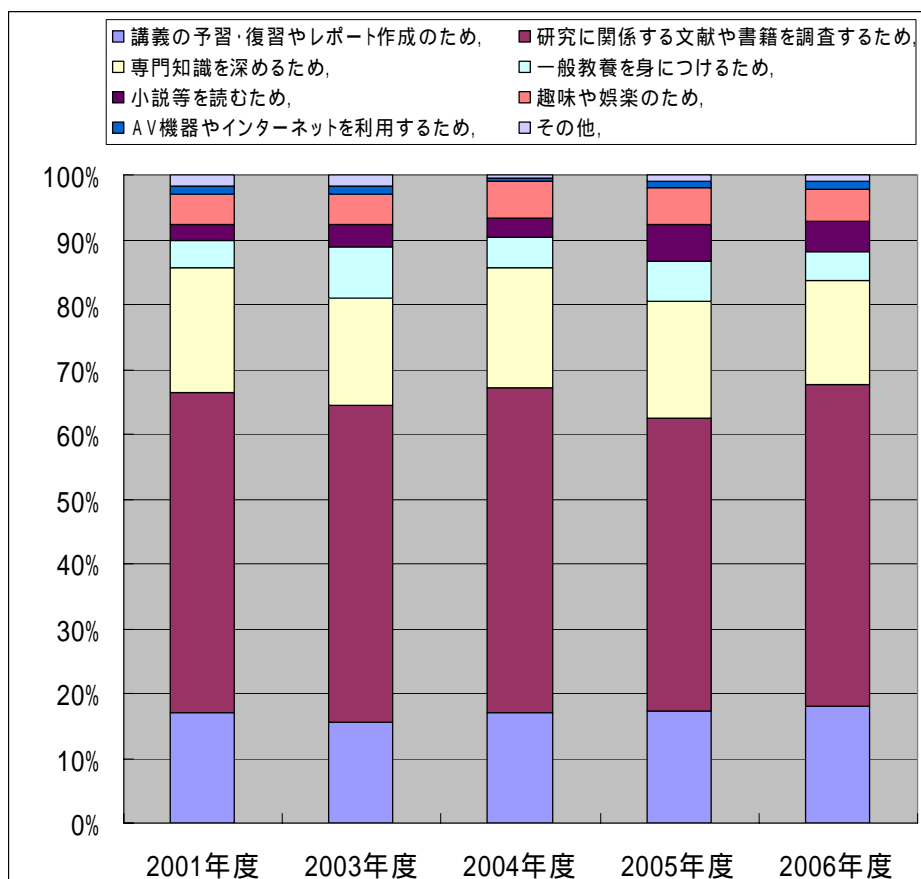
[13-6]図書館を利用している頻度はどの程度ですか。

1週間に2~3回程度まで日常的に利用している学生の割合は61%からほぼ40%に減少している。また、ほとんど利用しない学生の割合も 11%から 23%まで増加している。



[13-7]図書館を利用する主な理由をお答えください。(複数回答可)

学生が講義，研究，専門知識および一般教養に関して図書館を利用している割合はそれぞれ18%，50%，20%，6%程度で合計は90%程度である。この傾向は2001年度から変化していない。



H (その他) [具体的に： ]

- ・ 新聞を読むため。
- ・ 新聞
- ・ コピー機の利用。
- ・ 新聞

## 2.3 2006年度実施 企業アンケート (2004年3月以前卒業生)

2006年度は、昨年度までに実施したアンケート結果に基づき、その後の卒業生のレベル変化や卒業生に対する企業の要求レベルを継続して調査することを目的として実施した。

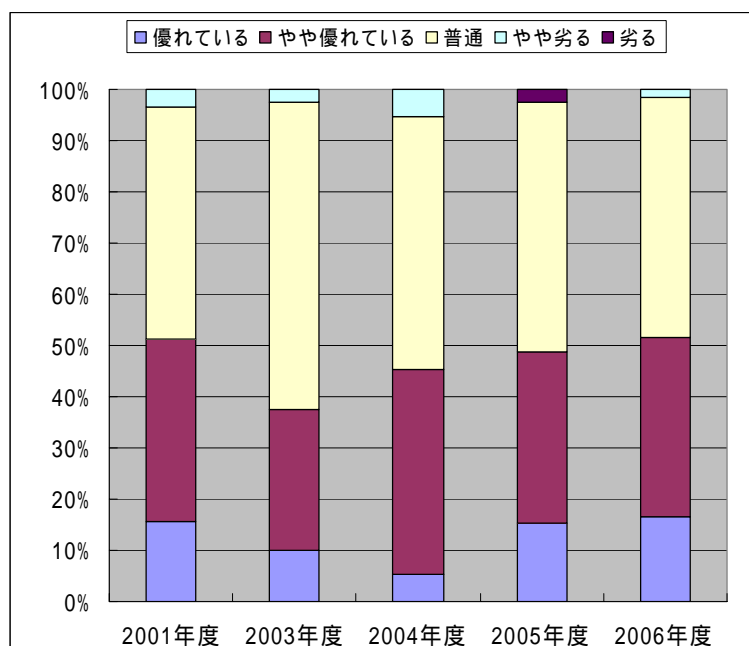
アンケートは、2004年3月期の卒業生のうち企業へ就職した者のリストに基づき、工学部総務係より郵送を行った。しかし、アンケート用紙配布企業は、224社でこれは昨年度の配布企業121社を上回った。回答のあった企業は、64社で回答率は28.6%であり、2005年度の33.1%より減少した。今回のアンケート実施方法としては問題ないと思えるが、よりアンケートの実施時期は早めて、人事担当者へ直接渡す枚数を増やし、回答率を上げる必要があると考えられる。

以下、各質問について、アンケート結果を述べる。

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

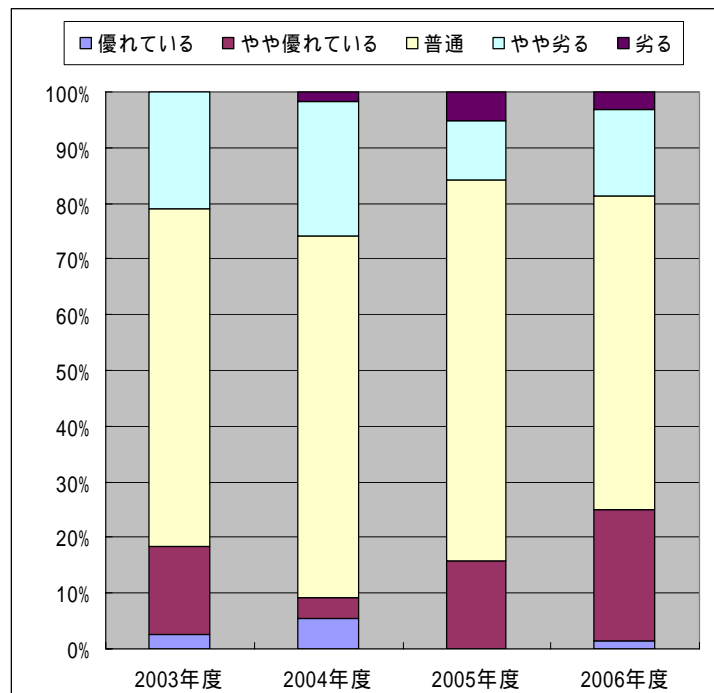
### (1) 卒業生が受けた教養(人文・社会等の一般教養)教育のレベル

一般教養については、「優れている,やや優れている」が2003年度には38%に減少しているが、以後増加を続け2006年度には51%に達している。順調に改善が進んでおり、今後の経過に注目したい。



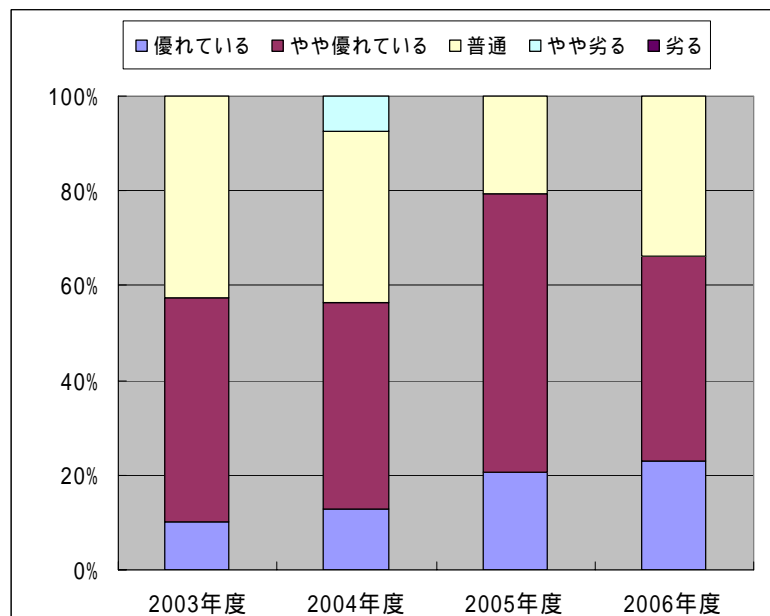
### (2) 卒業生が受けた語学(特に英語)教育のレベル

2004年度は、企業の74%は普通以上であると回答している。これは2005年度には84%に上昇しており他大学に比べてそれ程劣るレベルではないと判断できる。2006年度は81%に減少しているが、この比率を更に増やす努力が必要である。



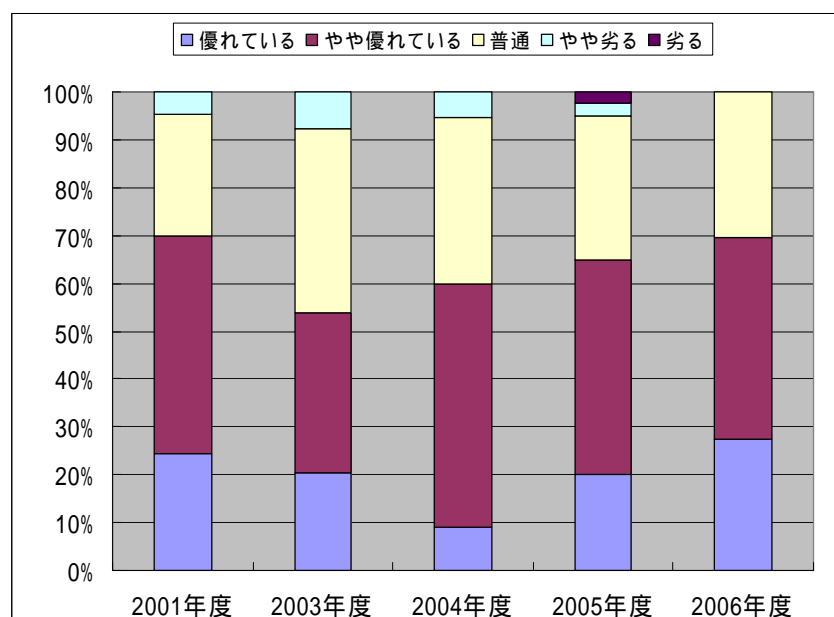
### （３）卒業生が受けた理数系（数学・物理・化学）教育のレベル

全企業が普通以上と回答しているが、「優れている」、「やや優れている」と回答した企業が2005年度は80%近くであったのが2006年度は68%まで減少している。今後この比率を更に上げる努力が必要である。



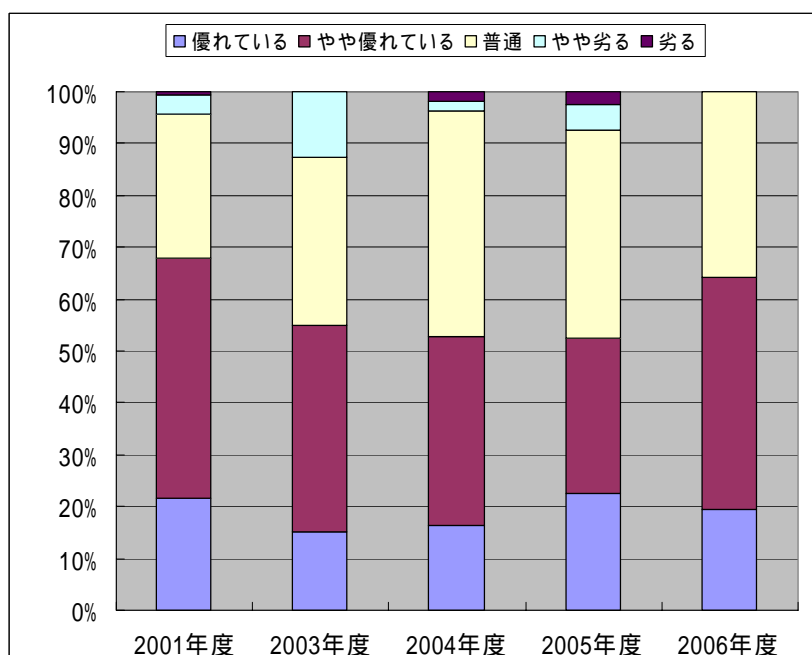
### （４）卒業生が受けた専門教育のレベル

卒業生の専門教育レベルについては、「優れている、やや優れている」が2003年度は54%に減少しているが、その後増加を続け2006年度には70%に達している。今後の経過に注目したい。



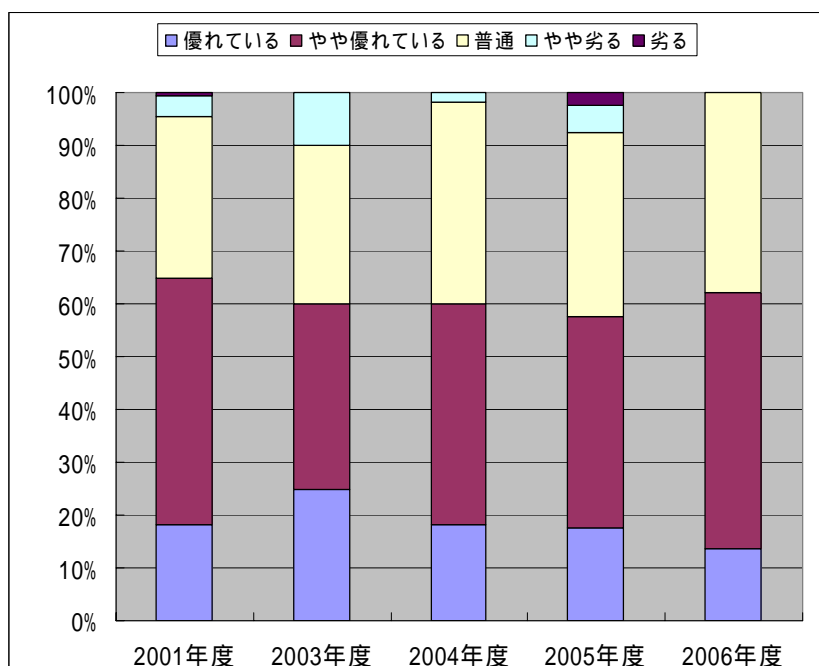
### (5) 卒業生が受けた課題探求能力教育のレベル

卒業生の課題探求能力レベルについては、「優れている，やや優れている」が2001年度の68%から2004年度の52%まで年々減少しているが，2006年度は65%に増加している。



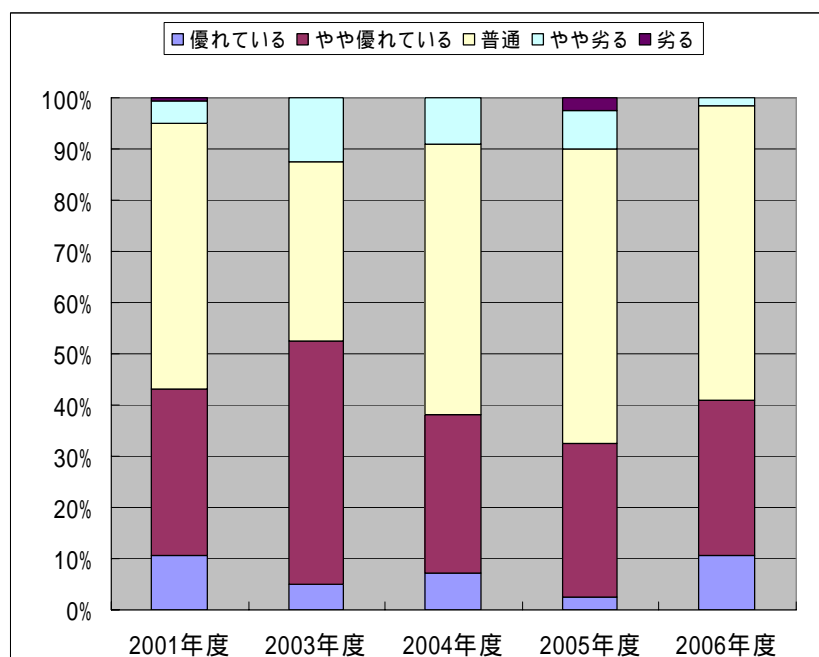
### (6) 卒業生が受けた課題解決能力教育のレベル

卒業生の課題解決能力については、「優れている，やや優れている」は2001年度の65%からやや低下したものの2006年度は62%まで上昇しているが，卒業生の課題解決能力レベルが低下傾向にある可能性もあり，注意して経過を観察する必要がある。



### (7) 卒業生が受けた独創性教育のレベル

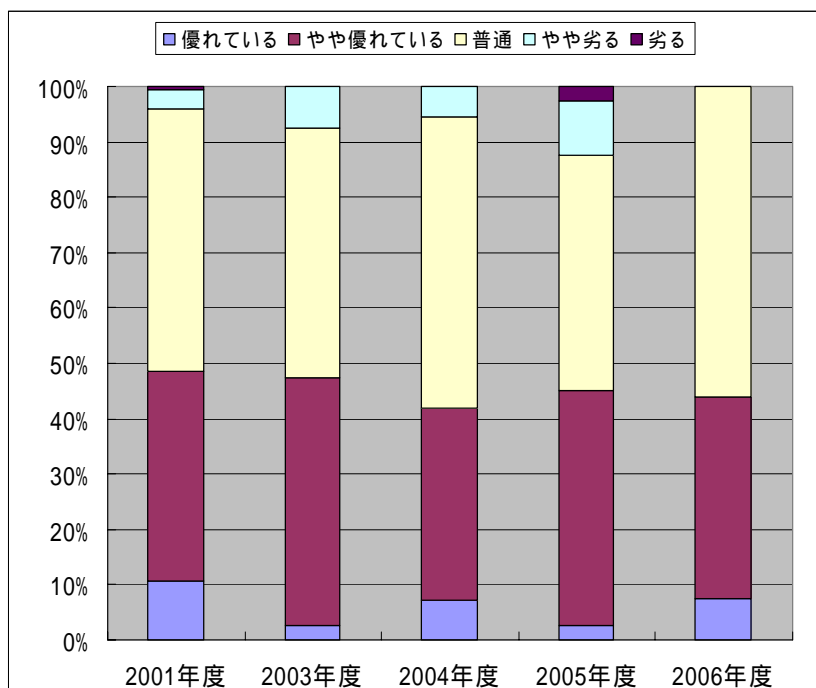
卒業生の独創性については「優れている，やや優れている」が2003年度の52%から年々減少しているが、2006年度には41%に増加している。更に評価を向上させる努力が必要である。



### (8) 卒業生が受けた構想力教育のレベル

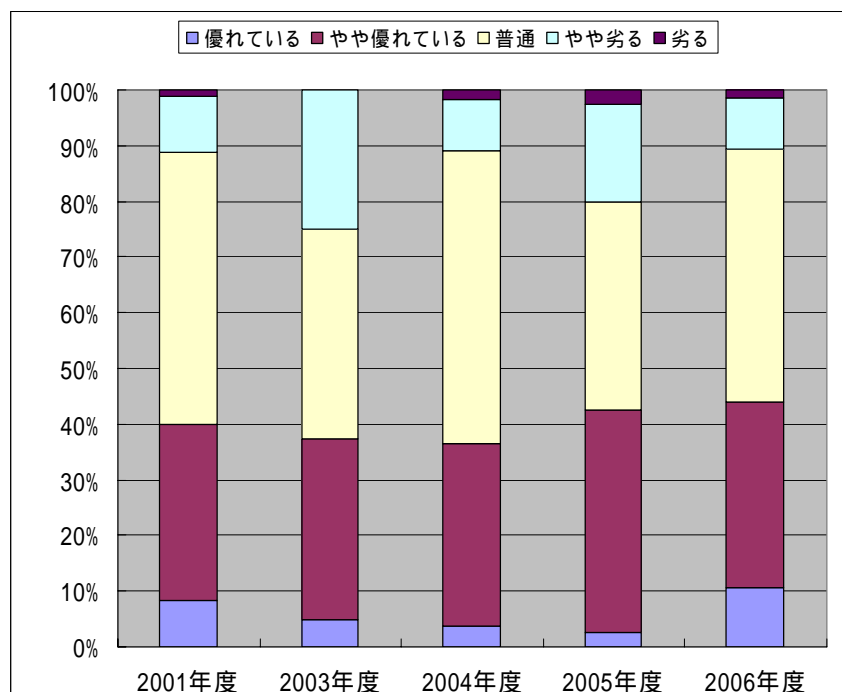
卒業生の構想力については、「優れている，やや優れている」が2001年度の48%から減少傾向にあったのが、2005～2006年度は45%と上昇気味である。注意して経過を観察する必要がある。





### (9) 卒業生が受けた表現力教育のレベル

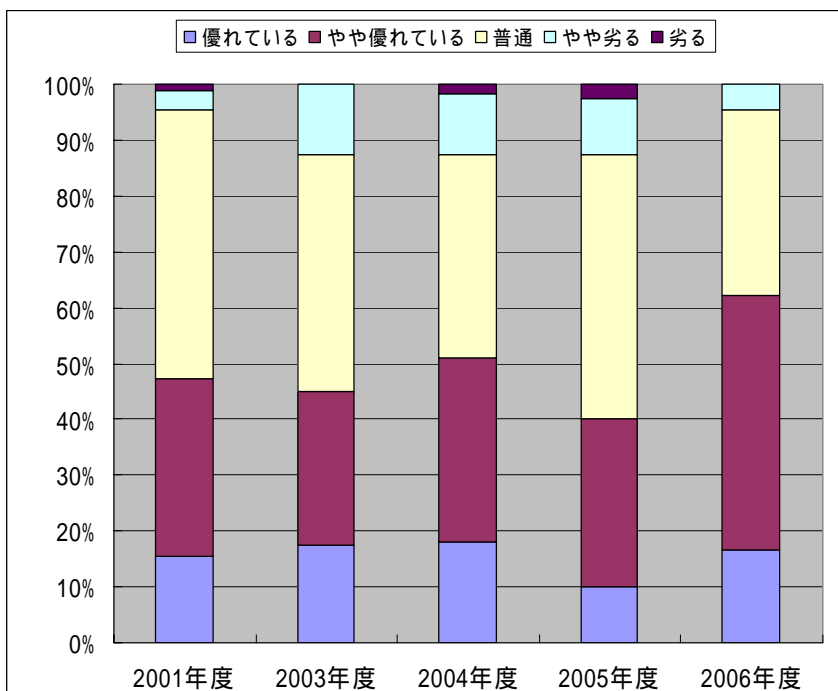
2005年度に「普通」以上の評価が2004年度に比較し9%程低下したが、2006年度には再び2004年度と同じ値に戻り、「やや優れている」の評価の比率も上昇傾向にある。今後も注意して推移を観察する必要がある。



### (10) 卒業生が受けたコミュニケーション能力教育のレベル

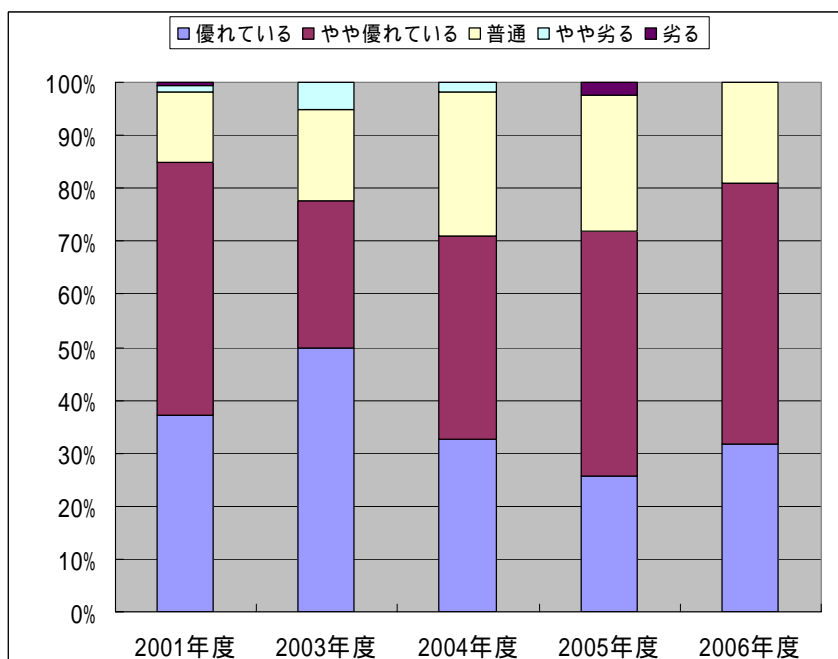
コミュニケーション能力に関しては「普通」以上の評価(約85%)にここ3年ほとんど変化が見られなかったが、2006年度は95%に上昇し、「劣る」の評価はなくなった。改善の傾向が見られ

る。



### (11) 卒業生が受けた仕事に取り組む熱意に対する教育のレベル

「普通」以上の評価が100%であり、「やや優れている」以上の評価が80%に達した。全体として評価は高い。



2. 貴社・貴機関が九州工業大学 工学部 卒業生に望む事項（卒業生の資質等）がございましたらご記入ください。

指摘が多様である。全体的に「真面目」で「熱意」があり「専門性」も持ち合わせているとの評価が多いが、一方で「表現力」、「コミュニケーション能力」の育成への期待が高い。

- ・ 中村君の様な、高い教養と熱意を持った人材を今後とも、御紹介を是非、お願い致します。
- ・ 協調性、バイタリティ、チャレンジ精神のある人材となるよう、勉学以外にも打ちこめるものを持っていただきたい。
- ・ 新たな業務領域にチャレンジする意欲。課題を設定する能力。
- ・ 今までと同様、大きな視点から仕事を推進していく力を持っていて欲しいです。
- ・ 特にありません。
- ・ 特に有りません。
- ・ コミュニケーション能力 対話能力や交渉能力に加え、分からない事を聞く、聞くことを恐れないこと。
- ・ 特にありません。
- ・ 今後とも、熱意を持って積極的に業務に取り組める人材を望みます。
- ・ 基本的なことは十分に身に付けているので、基礎的なことを大切に専門教育に取り組んでほしい。
- ・ グローバル化の中、語学修得は必須であります。技術系の学生の方の中には、語学にアレルギーをお持ちの方が散見されます。積極的に修得いただくよう希望します。
- ・ 特にありません。
- ・ 自分の意見をはっきり人前で主張できるよう。ディベート教育も必要と思われる。
- ・ 教養、専門知識の差はどの大学出身者でも大きな差はありません。課題、問題に立ち向う意欲、ねばりが大切であり、その結果をどう表現するか、どう相手に伝えるかが社会で大きな差となってきます。広い意味で「話せる技術者」（理解し吸収し伝える）を目指してほしい。
- ・ 常に改善意欲、向上心を持つように心掛けていただきたい。
- ・ 若年層社員の退職者が近年多くなって来ています。社会環境の変化はありますが、工学部に入社した意義を教育して欲しいと実感します。
- ・ 特になし
- ・ ソフトウェア開発の基礎知識をある程度学生の間にも有してほしい。（基本情報技術者試験に合格する等）。システム開発とは何か、システムエンジニアとは何か本業界に関する情報がある程度自分で調べた上でこの業界に興味を持っていただける方
- ・ 特にありません。多少の個人差はありますが、資質は充分と考えております。
- ・ 資質とは生まれ持ったものもあると思いますが、環境、つまり校風や恩師からの影響も大きいと思います。貴校は他校より先生方と学生の結びつきが強いと感じています。（OB訪問の受入姿勢を見て）今後も、この校風を大切にして頂きたいと思います。
- ・ 特になし
- ・ 特になし
- ・ 九工大卒の方が不足しているという訳ではありませんが、何事にも元気に取り組む姿勢が大切であると思います。特に、近年の卒業生は静かな方が多いと感じます。
- ・ 貴校だけではなく工学系の卒業生はコミュニケーション能力が弱いのでその分野への注力もお願いします。
- ・ コミュニケーションに関する能力開発する教育をお願いします。
- ・ 理工系の学生における一般的な傾向（課題）として、コミュニケーション能力の低調さがうかがえる。特に、相手の意図や目的に思いを及ぼし、その上で判断するという視点に欠けるため、形式的な2Wayになっている。逆に、こうした能力を持ち、あるいは発現できれば、実社会やビジネスにおいての優位性は大きなものとなると思う。
- ・ 仕事に対する姿勢が前向きで協調性のある人材を希望します。
- ・ 前向きな姿勢、問題意識
- ・ 海外へ出向く機会が増えています。是否に語学力の強化を。少なくとも英語会話力の強化を。社内、対外的にも、成果を表現し、相手にうまく伝えるKHが必要。工大生は若干、表現力が劣る様に思います。専門以外（経済、歴史など）も社会では必要となります。学生時代に読書も必要か。

- ・ 専門分野等に関しては、十分な知識を有しています。その他として、組織の中で力を発揮し成果を上げていく為には、コミュニケーション能力、協調性、リーダーシップ等が大切です。このような点についても教育の中に盛り込んで頂ければと考えます。
- ・ 語学力（英語）の向上。他校出身者に比較して表現力が劣るように感じる。
- ・ 語学力の向上（英語）。表現力の向上（プレゼン資料作成能力等）
- ・ 自ら提案し、新しいことにチャレンジするタイプの人材が不足しています。こうしたタイプの学生を是非お願い致します。
- ・ 入社してから学ぶ機会のあまりない理論的な部分を在学中にしっかり習得して欲しい。
- ・ ねばり強さ、探究心、対人能力
- ・ ひとつの事にこだわりを持って打ち込む事が出来る。学生時代に色々な経験を積む事。
- ・ 明るい存在感の持てる資質を備えた性格に育てあげて下さい。
- ・ 全体的には優れているが数学・物理の基礎を十分理解して欲しい。
- ・ コミュニケーション能力 さらに向上すれば良いと思われれます。

### 3. 九州工業大学 工学部の教育に対して、ご意見・ご要望（企業が必要とする人材の専門分野、専門知識等）がございましたらご記入ください。

要望・意見は多岐に亘る。キーワードにすると、「語学力」、「情報基礎」、「IT」、「専門性」、「ソフトウェア」、「要素技術」、「表現力」等が挙げられる。

- ・ 就職内定後に3～4ヶ月程度体験入社をさせて載きたい。入社後のモチベーション向上と不安の排除を行ない働きやすい環境作りを行ないたい。
- ・ 貴学卒業生は、明確な目的意識と高い意欲を持っており、能力が極めて高く、非常に熱心で真面目な印象を受けます。当社にとって、かけがえのない人材となることと料料します。
- ・ 企業研究に直結する教育を企業と一緒に研究すれば良いのでは。
- ・ システム工学：個々の要素から全体を構築する。メカトロニクス。
- ・ 特に貴大学ということではありませんが、ハードウェア系の職種を希望する学生さんが減っている様に思われます。教育内容への配慮をいただくと有難く思います。
- ・ 特にありません。
- ・ 電気工事に関する、専門知識。
- ・ 特に有りません。
- ・ 特にありません。
- ・ 半導体パッケージの組立てに関する基礎知識を、習得して頂きたいと思えます。
- ・ 当社は半導体、システムLSIの設計、開発を担当する会社なので、半導体全般に関する、基礎知識の付与に力を入れていただきたい。また、アナログ技術者の育成は、今後の課題であり、大学での取り組みに期待したい。
- ・ 語学修得と考えます。（英語、中国語）
- ・ 特にありません。
- ・ 英会話（初級程度）は、理系でも必要なもので、大学教育で勉強させてほしい。
- ・ 一番大きな差があるのは「語学力」です。あるレベルまでの英語は期待します。
- ・ 語学力（英語・中国語など）が身に付くよう、基礎的な部分について、お願いいたします。専門知識については、問題ないと思えます。
- ・ 土木の場合現場教育にて多くの事を経験していきますが入社即戦力とは考えていませんが、測量とパソコンは学生時代に身に付けて欲しいと思えます。
- ・ 大学で学んだ知識の応用が出きない。独創性のある企画・開発力を期待する。
- ・ 計装制御（PID制御等）に関する基礎知識、電気回路（ラダー等）のプログラム経験
- ・ 特にありません。
- ・ 実践的プログラミング 他大学ではここまで教育している場合もある。
- ・ 特になし。
- ・ 御校の卒業生は当社でも幅広く活躍しています。今後とも工学部での学習をより深く学び、実社会で役立ててもらいたいと思えます。
- ・ コンピュータ（近代のパソコンについて）の作り・動作の基礎教育を実施して欲しい。

- ・ 職業観がしっかりしており、仕事に取り組む姿勢も、能力的なバランスも良く、お手本となる素晴らしい人材です。企業としては、大衆や個人に対しての伝える力となる、プレゼン力、表現力が加わればベストです。
- ・ C言語及びハードウェア記述言語の能力アップ
- ・ 昨今、私立大学の理工系で見られる“公的資格取得”への取り組みは、学生の知識・スキルの体系付けられた拡大手段として評価できる。ただし、資格取得が絶対的な目的と化すことや、あるいは就職活動を有利に運ぶための手段に堕すことは、必ず避けるべきだと思う。
- ・ 電気の基礎知識は勿論のことですが、現在あらゆる設備で使用されているコンバータ・インバータ及びフィールドネットワーク等の知識の習得が必要だと思います。
- ・ 特にありません。
- ・ 工大生はまじめ過ぎる。もっと社交性があればと思います。理数系の力が劣えている様にも思います。2項も含めて、教育現場の中で御検討いただき、人材育成強化を期待したい。
- ・ 当社は主に肥料、飼料の製造・販売を事業としています。同分野への教育の充実もお願いできればと考えます。
- ・ 貴校のカリキュラムで十分と思います。
- ・ 独創性ある自己の意見や意識を明確に表現できる人材を求めています。
- ・ 特にありません。システム開発言語教育など必要ですが、大学の学問とは異なりますので、これは社内教育いたします。

#### 4．全体としての傾向

2005年度以降他の項目に比較して相対的に低かった語学の評価が向上したため、全評価項目において、平均点以上と見なされる「普通」以上の評価が80%を越えた。語学以外の10項目は95%を超え、なかでも、理数系、専門、課題探究能力、課題解決能力、構想力、熱意のレベルの6項目は100%であり、企業の卒業生に対する評価は高いと判断される。

「やや優れている」以上の評価に着目すると、すべての項目についての評価に上昇傾向がみられる。一方で、5%以下ではあるが「劣る」の評価が「語学」と「表現力」に対して示された。

全般において卒業生は企業から高い評価を得ていると判断される。しかし、一方では、語学と表現力に「劣る」の評価があり、課題が残されている。

用語の説明

○ 課題探求能力

ひとつの課題を深く追求する能力。上司の期待が1であれば1.5倍,2倍等の結果を出す。ただし,結果を出す時間については考慮しない。

○ 課題解決能力

ひとつの課題に対し,現在所有する情報・知識を用いて,与えられた期限内に結果を出す能力。

○ 独創性

既存の概念にとらわれず新しいアイデアを創出する能力。

○ 構想力

既存の技術・装置を組み合わせる新しいシステムを構成する能力や,先を見る能力。

○ 表現力

資料作成能力やプレゼンテーション能力。

○ コミュニケーション能力

交渉能力や対話能力。

## 2.4 2006年度実施 企業アンケート (2004年3月以前修了生)

2006年度は、2001年度、2003年度、2004年度および2005年度に実施したアンケート結果に基づき、その後の修了生のレベル変化や修了生に対する企業の要求レベルを調査することを目的として実施した。調査は企業の大学院教育に対する評価の経年変化を調べるため、2004年度のアンケート項目に添って行った。

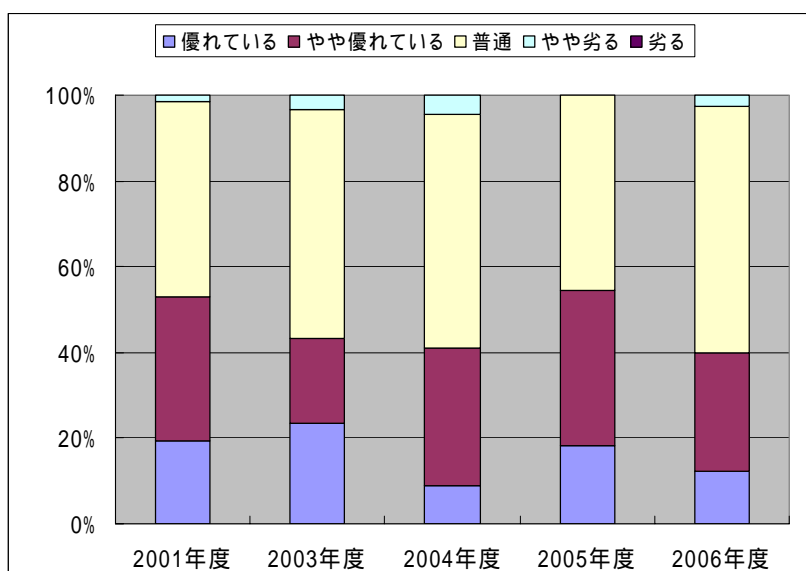
アンケートは、2004年3月期の修了生のうち企業へ就職した者のリストに基づき、工学部総務係より郵送を行った。しかし、アンケート用紙配布企業は、212社でこれは2004年度の配布企業107社を大幅に上回った。回答のあった企業は40社で回答率は18.9%であり、2005年度の30.8%より僅かに減少した。今回のアンケート実施方法としては、問題ないと思えるが、よりアンケートの実施時期を早めて、回答率を上げる必要があると考えられる。

以下、各質問について、アンケート結果を述べる。

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

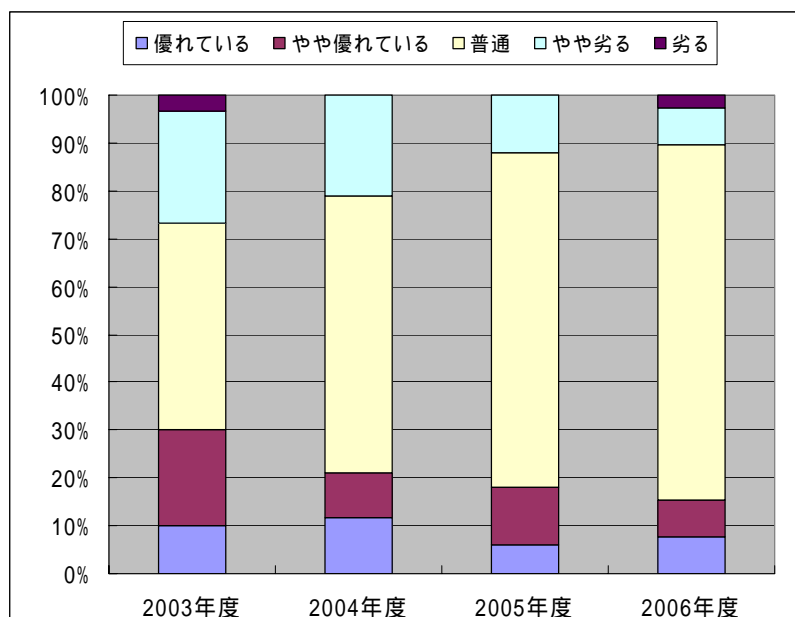
### (1) 修了生が受けた教養(人文・社会等の一般教養)教育のレベル

「普通」以上の回答が100%に近いが、「やや劣る」の回答が数%あった。また、2001年度から続いていた「やや優れている」「優れている」の回答の低下傾向が2005年度に改善され、両者の和は52%に増加していたが、今回は40%に低下した。全体として企業側の評価はこのレベルに定着しているとみられる。



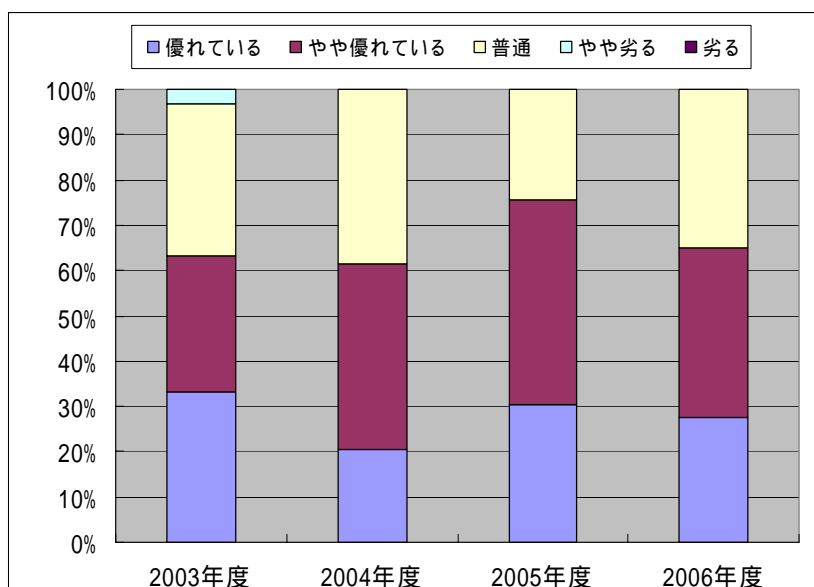
### (2) 修了生が受けた語学(特に英語)教育のレベル

「普通」以上の回答が90%に増加し、「やや劣る」の回答が減少した。企業側の評価に改善が見られる点では評価される。しかし、「やや優れている」以上の回答には年々低下の傾向がみられ、今年度の回答率は約15%に低下している。この数値は教養教育、理数系等の他の学力に比較して極端に低く、根本的な対策が必要であると考えられる。



### (3) 修了生が受けた理数系(数学・物理・化学)教育のレベル

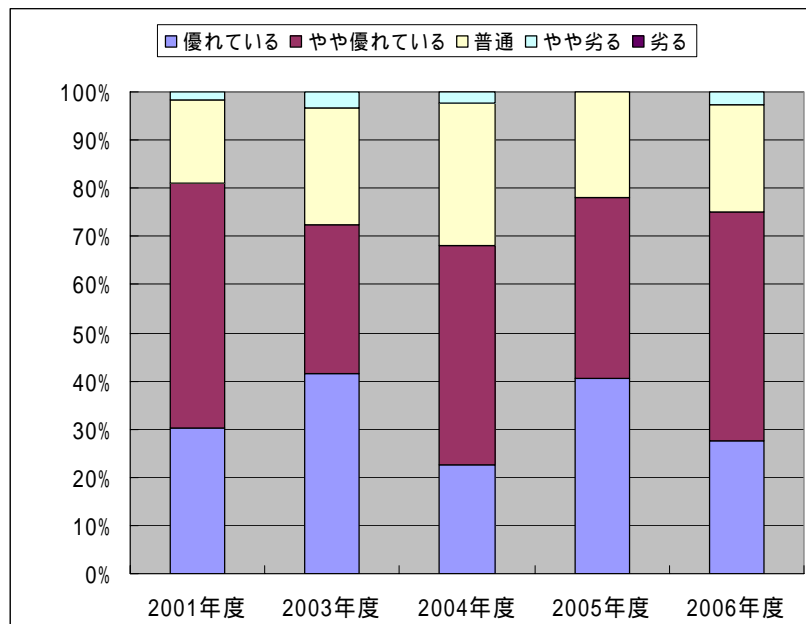
「普通」以上の回答が100%に達する。また、昨年度に比べて、「やや優れている」「優れている」の回答は低下し、その和は65%であるが、一昨年以前と同じレベルである。企業側の評価は概ね高いと判断される。



### (4) 修了生が受けた専門教育のレベル

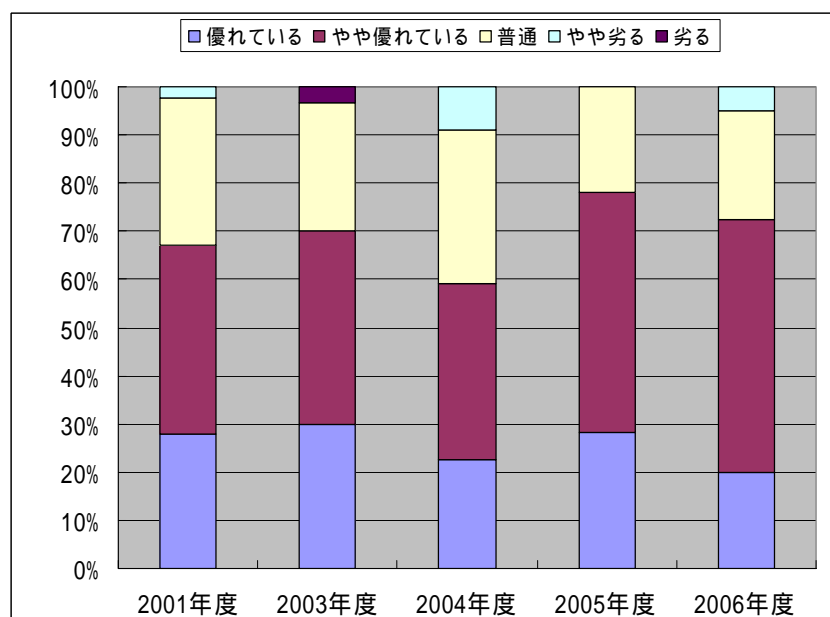
「普通」以上の回答が100%に近いが、「やや劣る」が数%あった。年々続いていた「やや優れている」以上の回答の低下傾向は、昨年は78%に増加していたが、今年度は75%と若干低下した。「優れている」の回答は30%に低下したが、企業側の評価は高いと判断される。





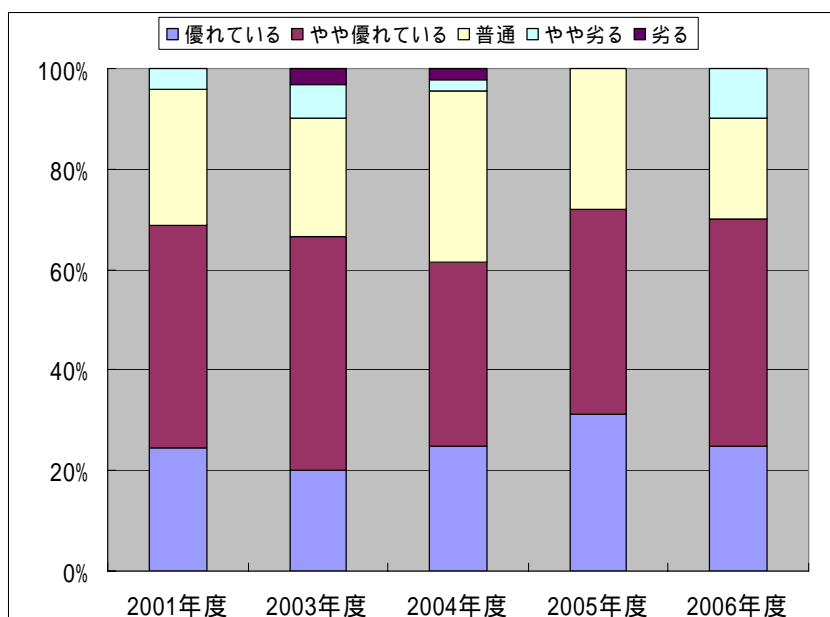
### (5) 修了生が受けた課題探求能力教育のレベル

「普通」以上の回答が95%に達する。昨年度は「やや劣る」「劣る」の回答は無く、「やや優れている」以上の回答も78%に増加したが、今年度はやや低下し72%であった。企業側の評価は高いと判断される。



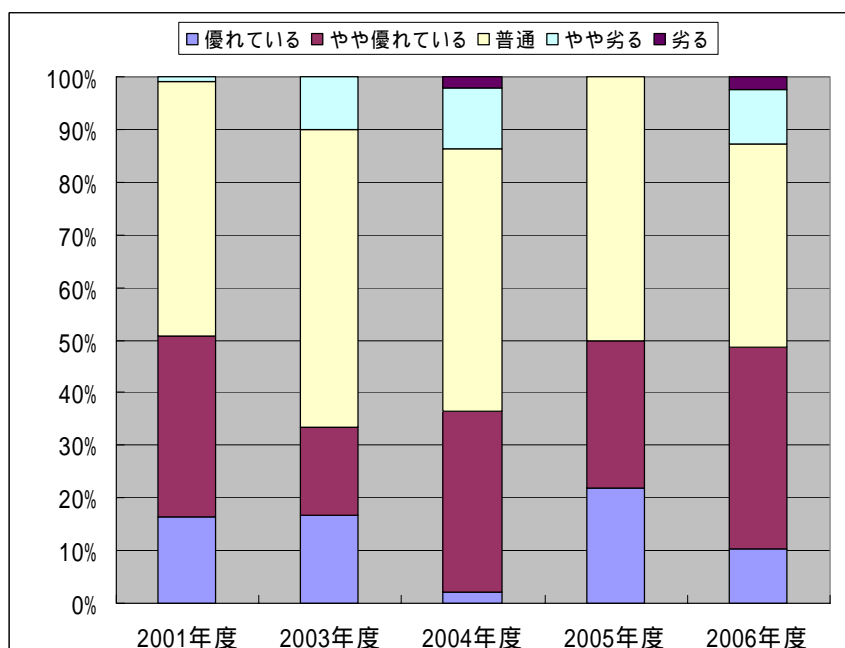
### (6) 修了生が受けた課題解決能力教育のレベル

昨年は2001年度から連続して見られた「やや劣る」「劣る」の回答がゼロになり、「普通」以上の回答が100%に達していたが、今年度は「普通」以上の回答は90%に低下した。しかし、「やや優れている」以上の回答は昨年とほぼ同じであり、企業側の評価は高い。



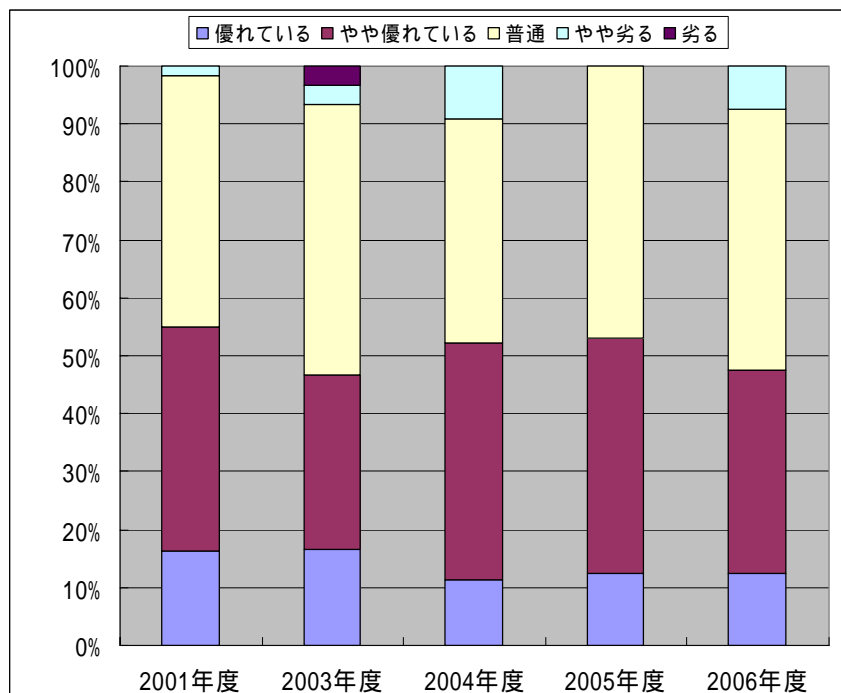
### (7) 修了生が受けた独創性教育のレベル

年々増加の傾向にあり、昨年度は「普通」以上の回答が100%になったが、今年度は再び「やや劣る」、「劣る」が一昨年とほぼ同じレベルに増えた。また、「やや優れている」以上の回答が50%を下回っており、高くない。今後は「やや優れている」「優れている」の回答率を増やすための努力が必要である。



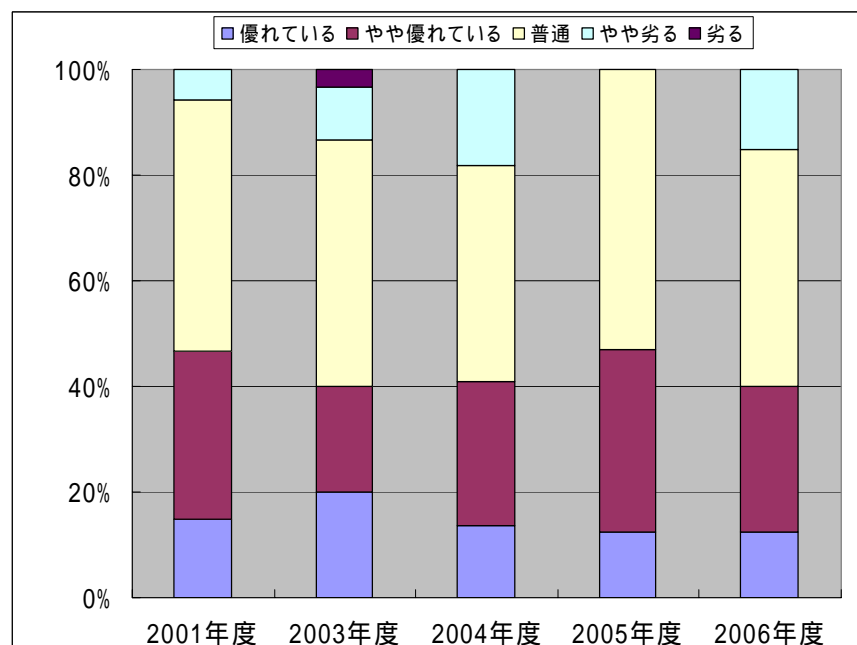
### (8) 修了生が受けた構想力教育のレベル

2005年度は「やや劣る」以下の回答はゼロで、「普通」以上の回答が100%であったが、今年度は「やや劣る」、「劣る」の回答が8%あった。今後は50%を下回っている「やや優れている」「優れている」の回答率を増やすための工夫が必要である。



### (9) 修了生が受けた表現力教育のレベル

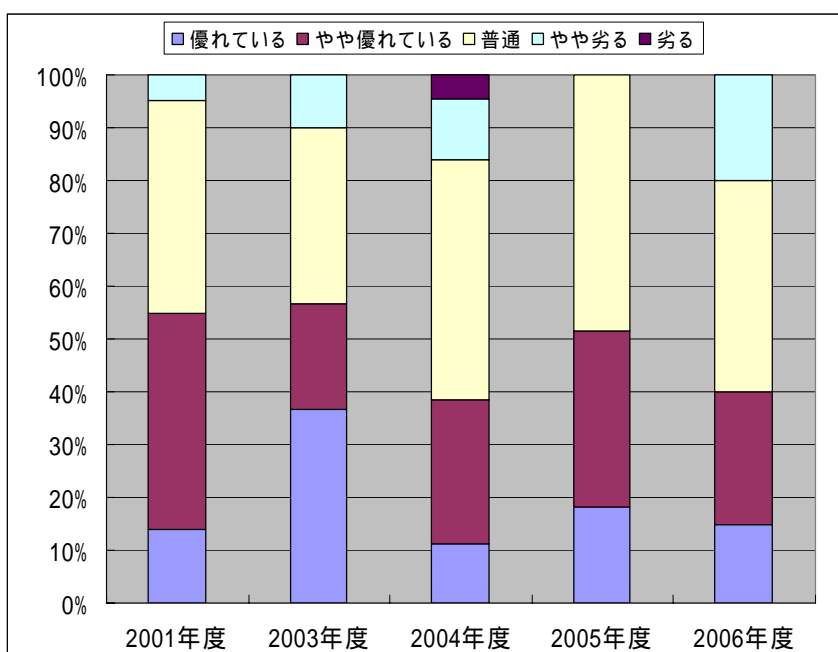
これまで表現力は本学の修了生の苦手な項目の一つと指摘されており、「やや劣る」「劣る」の回答が年々増加し、2004年度は20%弱もの回答率であった。2005年度は一挙にこれがゼロとなり、「普通」以上の回答で100%となった。しかし、今年度は再び一昨年と同じレベルに低下した。「やや優れている」以上の回答率も40%と低く、今後はこれをあげるための努力が必要である。



### (10) 修了生が受けたコミュニケーション能力教育のレベル

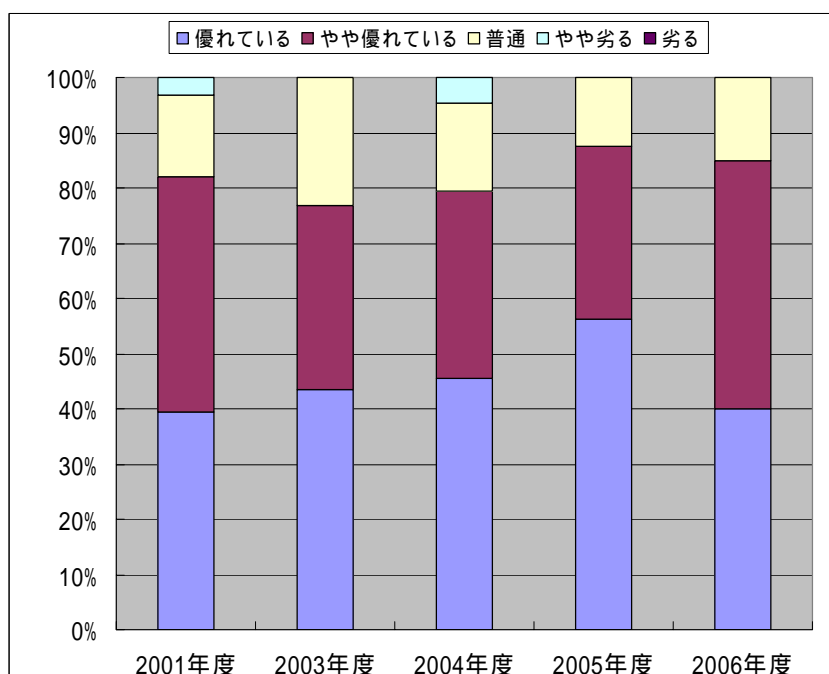
年々増えていた「やや劣る」「劣る」の回答(2004年度で16%)が、2005年度はゼロとなり、「普通」以上の回答が100%となったが、今年度は「やや劣る」が20%に増加した。コミュニ

ケーション能力は本学修了生の苦手な項目と指摘されているが、今後は余り高くない「やや優れている」「優れている」の回答（40%程度）を増やす工夫が必要である。



#### (11) 修了生が受けた仕事に取り組む熱意に対する教育のレベル

2005年度と同様に、2004年度に見られた5%の「やや劣る」の回答はなく、「普通」以上の回答が100%となった。「やや優れている」「優れている」の回答も85%もあり、本学の修了生は企業から非常に高い評価を受けている。



2. 貴社・貴機関が、九州工業大学 大学院工学研究科 修了生に望む事項（修了生の資質等）がございましたらご記入ください。

キーワードとして列挙する。「語学力」、「積極性」、「社会常識」、「コミュニケーション」、「意欲」、

「想像力」、「構想力」、「発表力」等。

- ・ 論理的思考能力の高い人材を望みます。特に技術者の場合は必要とされる能力でありま  
すし、課題解決能力や表現力のベースとなる能力と考えます。
- ・ 段どり力や品質管理・問題解決能力を望みます。
- ・ エンジニアとしてのプライドを身につけたい方。又、九州を問わず、全国でも就職可能  
な方に、受験して頂きたいです。
- ・ 修士論文テーマについては、自信を持ってプレゼンできるように、研究に没頭して欲し  
い。修士でも応用力と表現力が学士と同等の場合が多く感じます。工大生は、後輩に対  
するリーダーシップは維持されていると思います。
- ・ 広範な知識と高度な専門性を合わせ持ち、自から情報を集収し、課題を見出し、解決を  
図ることができる人材を育成することが望ましいと思います。
- ・ 特定の修了生ではなく、修了生全般に望む事項として記します。1．専門知識...弊社で  
は、有機合成化学は必須です。それなりの(相当の)専門知識が欲しいものです。2．  
一般教養...恥ずかしくない程度の国語力、数学力があれば問題ありません。国語力は報  
告書作成時の表現力にも繋がりますし、重要な要素ではあります。3．英語力...英会話  
ができるに越したことはないのですが、頻度的には非常に少ないので、寧ろ学術文献の  
読解力(英文和訳力)が大切と考えます。4．その他...専門知識等の学力もさることな  
がら、報告会や報告書作成に於けるプレゼンテーション能力も必要です。これは本人の  
センスや慣れに因る処が大きいのかも知れません。
- ・ 院生に望む事は、問題解決の道筋を自分で切り開いて行ける能力に、より優れている事  
と考えています。特に科学的分析、意志決定が行なえる様に充分訓練され習得されてい  
る事を望みます。
- ・ 自分の意見を言う力、何故だと聞く、問題解決の代替案を考える力がもっとあると、物  
事が早く解決すると思います。一つの事に集中して行う力は、大変素晴らしいです。
- ・ 特になし。
- ・ 九州出身(生まれ、教育両方の意味で)の方は、弊社ではグローバルに活躍されてお  
ります。特に海外経験比率が高い。
- ・ 自ら考え、自ら行動する姿勢。物事を前向きに考える姿勢(例:できない理由ではなく、  
どうやったらできるかを考える)。論理的に物事を考える力。既成概念にとらわれない  
新しい発想。
- ・ 誠実で粘り強いタイプの学生が貴大学のOBには多く見られますが、若干おとなしい方  
が多いような感じを受けます。
- ・ 面接を通じて感じるのが、自分をアピールする能力、相手に理解してもらおうというサ  
ービス精神が低いように思いました。又、世の中の様々なことに広く視野を持てるよう  
取り組んで頂きたいと感じています。
- ・ 夢や目的意識(目標)を持ち、その実現に向けてひたむきに取り組む姿勢が何よりも大  
切であると考えます。業務上のみならず、社会人として最も重要であると考えています。
- ・ 高い専門性に加え、高いコミュニケーション能力。
- ・ 特にありません。
- ・ 修了生に対する要望は特にない。課題解決の力は付与されているものと感じる。但し、  
学部時代で取得すべき基礎力が近年落ちているのではないかという不安は感じている。  
(他大学に対しても同様ではあります)
- ・ 九州工大に限らず、一般的な事ですが、自己をアピールする力やプレゼンを行なうこと  
ができる力を身に付けて欲しい。
- ・ 自ら問題を解決しようという意欲も能力も持っていると思うが、もっと、人を巻きこむ、  
人の力を借りる、という訓練が不足しているのではないかと思う。
- ・ 自分で課題を発掘し、主体的に周りを巻き込んで行動出来る資質。
- ・ 持っている知識を応用させて他でも活用する力。コミュニケーション能力。
- ・ 課題解決にあたる際の多彩なアプローチを試みる意欲。
- ・ 何事に於いても真面目に熱心に取り組む姿勢が見られます。前向きなチャレンジ精神。  
海外生産にとまなう、語学力。

### 3.九州工業大学 大学院工学研究科の教育に対して、ご意見・ご要望(企業が必要とする人材の

専門分野，専門知識等)がございましたらご記入下さい。

キーワードとして列挙する。「コミュニケーション能力」,「IT」,「語学力」,「専門知識」,「課題解決能力」等。

- ・ 特にありません。
- ・ 設計・製造・試験の進め方や手法。実習等による経験があるとよいと思う。
- ・ 機械・電気電子・情報学科の学生を要望しています。工学系の知識及び、語学に力を入られている貴学の学生様に引き続き、採用できることを期待しています。
- ・ 大学院としての専門に希望はありません。学士課程での工学基礎(材力,など)を応用してみることで、ハードウェアとソフトウェアに乖離のないバランス感覚を持たせるよう意識いただければと存じます。
- ・ 船舶工学。
- ・ 九工大生に限らない一般事項ですが、情報系の技術者とは言え、メーカーでの職掌としては、電気や機械等のハードウェア系にまで踏み込む必要があります。バーチャルな世界に閉じこもらず、モノに触れること、動かすことに興味、関心を持てるよう、ご指導頂ければと思います。
- ・ 弊社は有機合成化学を主とする業種です。従い、この専門知識は最低限必須です。しかも貴大学院工学研究科修了生の場合、弊社での配属は研究開発部門となります(大抵の場合)ので、不可欠です。更にはプロセス化学関連の業務(技術開発)に携わる事も多いので、有機合成化学の知識に加えて、化学工学にも明るい修了生(又は卒業生)をご紹介頂けると幸いです。
- ・ 工学基礎(機械,潤滑,振動,強度,制御電気)は何においても重要で確実に身に付けている事が、先ず必要です。その上で各々の専門分野となりますが、近年必要とされるのは、シミュレーション計算,プロセス制御あるいは材料(高温,高压材料等)が当社では多くなっています。
- ・ 船舶関連の知識についてもふれる機会等を作っていただければ幸いです。
- ・ 英語のレベルアップは継続的に力を入れて頂きたい。コミュニケーション能力も申し分ないですが、こちらでも継続的に力を入れて頂きたい。
- ・ 学生の中に、しっかりと基礎学力をつけておいて頂きたいと考えております。
- ・ 先端学問のみでなく、企業に入社して、即戦力となるような学問・コミュニケーション能力を持ち合わせていらっしゃる学生様が多く、非常に高く評価させていただいております。
- ・ 専門性に関しては、皆さんそれぞれが探求心をもって取り組んでいらっしゃるよう感じます。
- ・ 業務上必要とする知識については、入社後の教育・業務を通しての習得に負うところが大きく、必ずしも在学中の能力のみでは判断していません。
- ・ 特にありません。
- ・ 当社からの印象は「実学の府」です。リコーグループは環境対応に軸を置く物創りを大きなテーマに据えており、メーカーである以上、環境負荷の少ない製品/サービスの提供に努力します。各専攻分野で関連技術の発掘、推進に研究・教育の両面で取り組んでいただきたいと望みます。
- ・ 特になし
- ・ 1, 英語力の強化。2, 自分の専門分野(勉強していること)が全体とどうつながっているのか、どういう位置づけで、どのような価値があるのか、初めに体系的に理解させることが必要ではないでしょうか。
- ・ 自分のやっている研究の意義をきちんと理解し、情熱と夢を持って研究に取り組む人材。
- ・ 知的財産に関する教育の機会を持って頂きたい。
- ・ 半導体の生産技術(ASISY, 評価)をリード出来る知識, 人材

#### 4. 全体としての傾向

企業側から見た修了生の評価を卒業生の評価と比較すると、卒業生評価では2005年度までは、全般において「優れている」の回答が増え、一方でこれに比例するように「劣る」の回答も増加していたため、卒業生の間では学力と能力に格差が生じ始めているのではないかと考えられて

いた。他方、修了生の評価では、2005年度に「優れている」の回答が増加し、これに反比例するように「劣る」の回答が大幅に減少して、2004年度に10項目あった「やや劣る」の評価が、語学の項目のみになったが、2006年度は2004年度以前と同様の傾向を示し、2005年度の高評価はやや特異であったと考えられる。しかし、理数系、専門、課題探究能力、課題解決能力、熱意の教育レベルでは「やや優れている」「優れている」の評価が70%（但し理数系は65%）を越えており、企業の修了生に対する評価は全般に高い。今後は「やや優れている」以上の評価が50%を切っている語学(15%)、教養、表現力、コミュニケーション(いずれも40%)の強化が課題であろう。

用語の説明

○ 課題探求能力

ひとつの課題を深く追求する能力。上司の期待が1であれば1.5倍,2倍等の結果を出す。ただし,結果を出す時間については考慮しない。

○ 課題解決能力

ひとつの課題に対し,現在所有する情報・知識を用いて,与えられた期限内に結果を出す能力。

○ 独創性

既存の概念にとらわれず新しいアイデアを創出する能力。

○ 構想力

既存の技術・装置を組み合わせる新しいシステムを構成する能力や,先を見る能力。

○ 表現力

資料作成能力やプレゼンテーション能力。

○ コミュニケーション能力

交渉能力や対話能力。



## 2.5 2006年度実施 卒業生アンケート (2004年3月以前卒業生)

中期目標・中期計画に基づいて、2005年度から卒業後3年が経過した企業へ就職した卒業生へのアンケートを実施した。

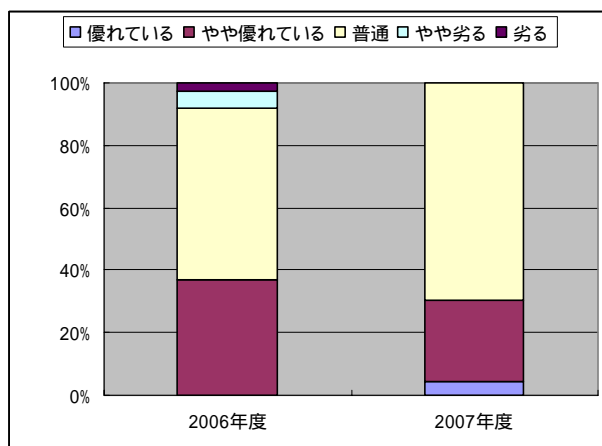
アンケートは、2004年3月期の卒業生のうち企業へ就職した者のリストに基づき、工学部総務係より郵送を行った。しかし、アンケート用紙を配布した企業に就職した卒業生は、230名(224社)で、回答のあった卒業生は46名であり、回答率は20.0%であった。今回のアンケート実施方法としては、問題ないと思えるが、よりアンケートの実施時期は早めて、人事担当者へ直接渡す枚数を増やす等、回答率を上げる必要があると考えられる。

以下、各質問について、アンケート結果を述べる。

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

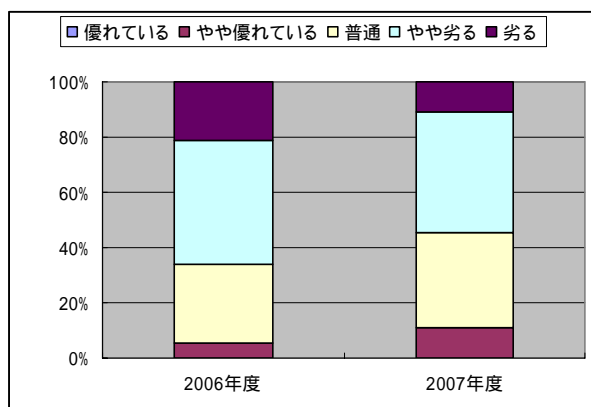
### (1) あなたが受けた教養教育のレベル

「普通」以上の評価が100%であり、教養教育レベルは肯定的評価を受けていると判断される。但し、「やや優れている」以上の評価の比率が低下していることについては課題として受け止める必要がある。



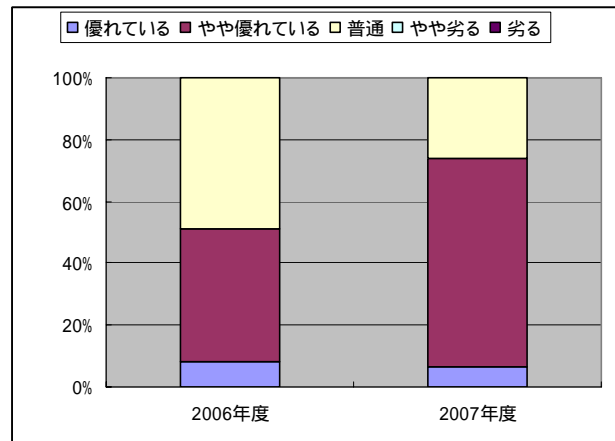
### (2) あなたが受けた語学(とくに英語)教育のレベル

「普通」以上の評価は45%で、「劣る」「やや劣る」の評価が55%であり、2005年度よりは改善されているが、依然、語学教育は卒業生から大きな批判を受けていると判断される。早急な対策が必要であろう。



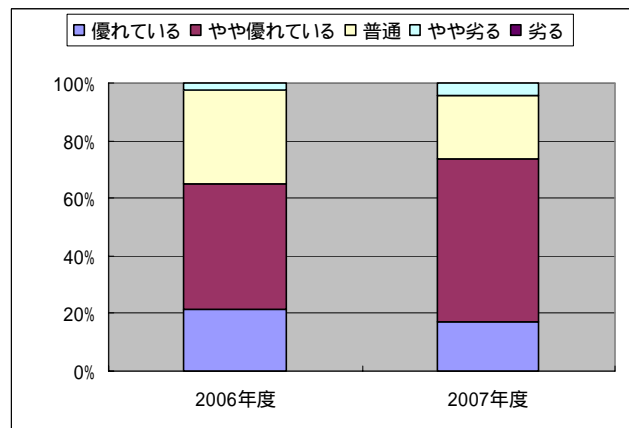
### (3) あなたが受けた理数系教育のレベル

70%強の卒業生が「優れている」「やや優れている」の評価を与えている。「普通」以上の評価は100%に達する。卒業生は理数教育システムに問題を感じていない。今後は1桁台にとどまっている「優れている」の評価を向上させるための工夫が課題であろう。



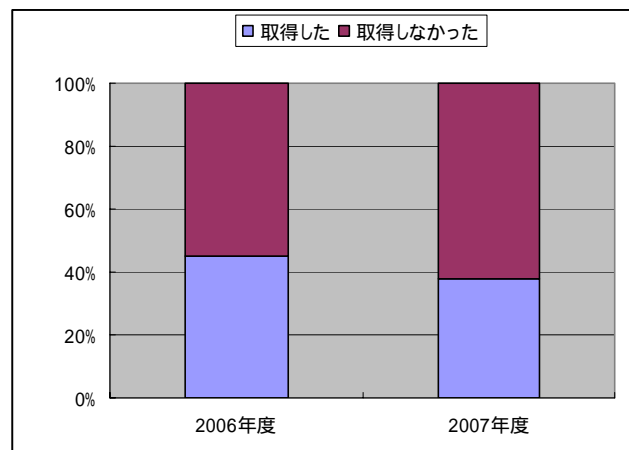
#### (4) あなたが受けた専門教育のレベル

「優れている」で17%、「やや優れている」以上で72%、「普通」以上で95%の評価を得ている。非常に高い評価が得られていると判断されるが、一方で数%の「やや劣る」の評価がなされている。課題として受け止める必要がある。



#### (5) あなたは入社後資格を取得しましたか？

40%弱の卒業生が入社後資格を取得しており、資格に関する意識は高いと判断されるが、2005年度に比べると低下している。



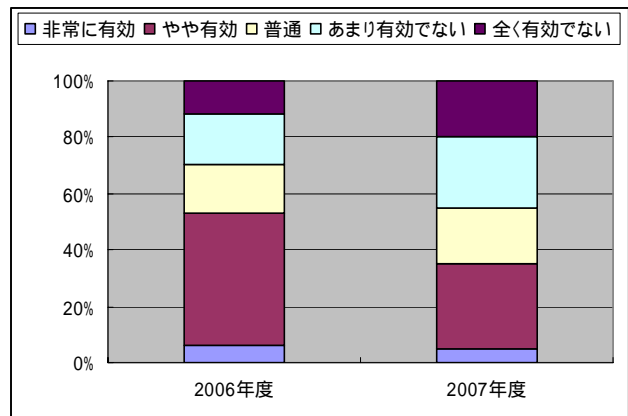
#### (5) 入社後取得した資格は具体的に。

- ・ダイカスト技能2級，フォークリフト，玉掛け，クレーン（5t未満），FANUCロボット資格，Kawasakiロボット資格
- ・基本情報処理技術者
- ・情報処理技術者試験
- ・公害防止管理者水質第一種

- ・二級土木施工管理技士
- ・ソフトウェア開発技術者試験
- ・溶射管理士，防錆管理士（めっき）
- ・甲種火薬類取扱保安責任者
- ・クレーン
- ・初級システムアドミニストレーター，簿記3級，ビジネス実務法務3級，. c o m M a s t e r
- ・溶接管理技術者1級，危険物取扱い乙 4
- ・第3種冷凍機械責任者免状，ビジネス検定2級
- ・危険物取扱者乙種4類。
- ・危険物乙4種，第二種衛生管理者
- ・測量士補，技術士補
- ・知財検定2級
- ・情報処理技術者

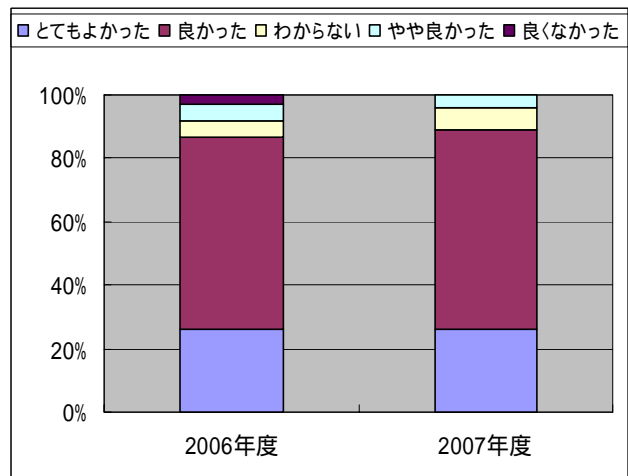
（6）資格を取得した方にお尋ねします。本学の教育は資格取得に有効でしたか？

「普通」以上の評価が50%を下回り，「あまり効果がない」，「全く効果がない」が30%から45%に増加しており，卒業生が本学の教育が資格取得に有効であったと必ずしも評価していない。有効でなかったとの評価に関しては資格の種類（例えばフォークリフト等）と大学教育のマッチングの問題等も関連しているものと考えられる。



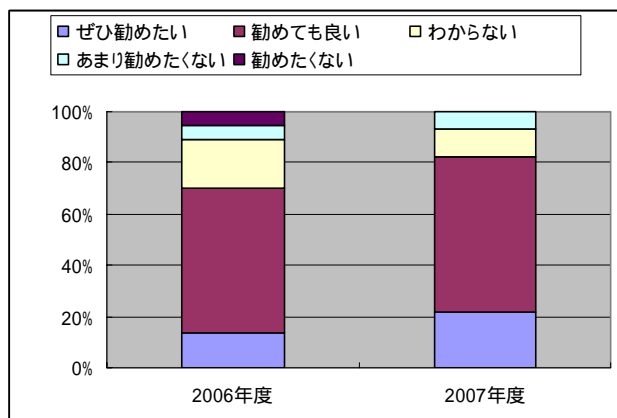
（7）あなたは，九州工業大学工学部を卒業してよかったと思いますか？

「とても良かった」「良かった」の評価が90%に達する。ほとんどの卒業生が今の仕事を続けていく上で，本学で受けた教育の成果を肯定的に考えている。



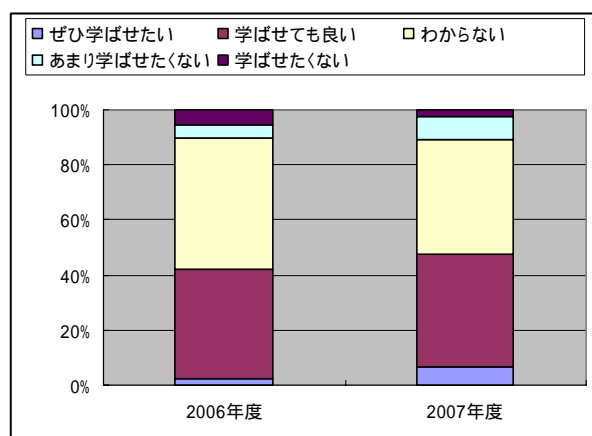
( 8 ) あなたは、九州工業大学工学部を魅力ある学部として後輩に勧めたいと思いますか？

「ぜひ勧めたい」、「勧めても良い」の割合が71%から82%に増加、また「勧めたくない」の割合が5%から0%に減少し、就職者は九州工業大学工学部を魅力ある学部として後輩に勧めたいと思う傾向が上昇している。



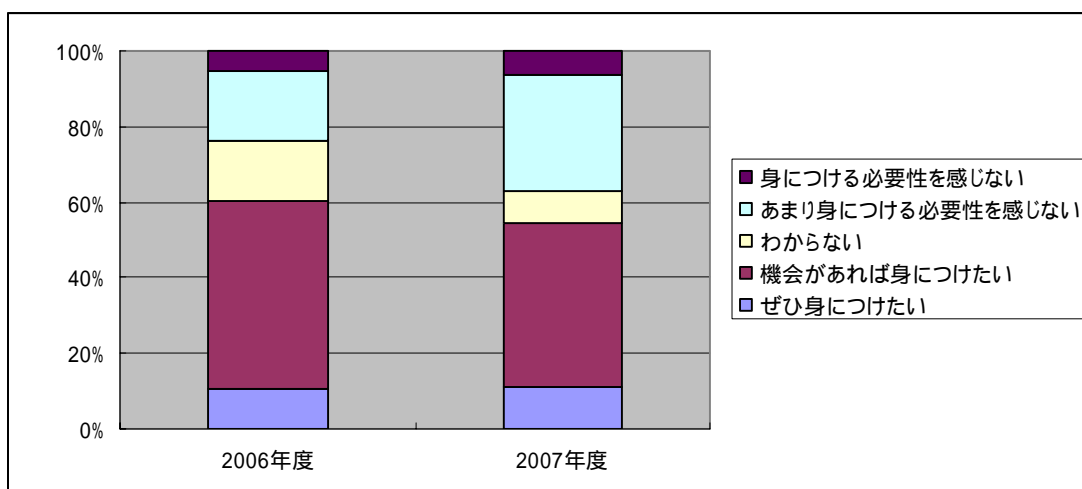
( 9 ) あなたは、将来、子供ができれば、九州工業大学に学ばせたいと思いますか？

「ぜひ学ばせたい」、「学ばせても良い」の割合は42%から48%に増加しているが、九州工業大学工学部を後輩に勧めたいと思っている82%と比べてかなり低い。これは、子供に対してより慎重になる結果と思われる。「学ばせたくない」、「あまり学ばせたくない」、「わからない」の割合は、52%に減少しているが、高い。より魅力ある大学にする努力が必要である。



( 10 ) あなたは、更に高度な学力(修士, 博士)を身につけたいと思いますか？

更に高度な学力を「ぜひ身につけたい」、「機会があれば身につけたい」の割合が61%から54%に減少、また「あまり身につける必要性を感じない」、「身につける必要性を感じない」の割合も23%から38%に増加している。その要因が何であるか分析の必要がある。



2. あなたが九州工業大学 工学部 に在学して良かった点がありましたらご記入下さい。

九州工業大学で学んだことが十分職場で役立っている。カリキュラムや研究環境の満足度は高く、研究指導では学術面の指導のみならず有意義な人的交流も特筆されている。就職者が工学部に在学して良かったと述べている事柄は今後も継続していく必要がある。

- ・ 物質工学以外のことも色々学べた点です。在学中は、学内の廃液処理施設（環境科学センター？）でアルバイトをさせて頂き、特に柿本助教授に良くご指導してもらいました。これにより、環境や化学の知識も深めることが出来ました。
- ・ 現在勤めている会社で九工大OBが多く、若い方～年配の方まで繋がりがある。在学中に学んだ知識が今でもよく使う機会がある。
- ・ 多くの分野に関する知識を学ぶことができる。
- ・ 専門的な知識については、会社に入ってからすぐに使えるものが、いくつかあった。
- ・ 礼儀が身についた。
- ・ 他の大学に比べ、どの程度高いレベルの教育を受けさせて頂いたのかは比較のしようがないが、就職先における業務の中で、学んだことが非常に役立っていると思う。また、入学前後共に、留年率が高いという話がつきまತ್ತったが、それは、その場しのぎの薄っぺらな知識では履修できるものではなく、卒業後もしっかり頭に残っている知識であり、非常に助っている。
- ・ 教員の知識レベルが高く、特に専門分野の講義については、とても興味深いものでした。現在の仕事に直接結びつく事は少ないですが、考え方などは活かす事ができています。
- ・ 専門教育のレベルが高く、理解に苦しむ事が多々あったが、熱心に教えて下さる教授が多かった事。一般の企業と共同で研究を行えた事。
- ・ 学力のみならず、目上・同僚との接し方は特に好感を持たれるようです。九州工業大学卒業生というだけで、礼儀をわきまえているという感じを持たれていると思われれます。同期入社との比較を行っても、自分にはそういった事を学んできたという意識をもてます。
- ・ 共同研究というかたちで、アメリカで約5ヶ月間研究を行う機会があったこと。
- ・ 工学部で学んだ基礎的な知識は、今現在でも通じる所があり支えになっています。
- ・ 大学4年に入ってから一年間が研究に集中できる時間があり、充実していたのが良かったです。
- ・ 自由な時間が多くて、自己啓発を自発的に行える時間が多かったこと。多くの友人を持つことができたこと。一生を通して行える生きがいを見つけたこと。
- ・ 他大学、他学部の事はわかりませんが、大規模な装置を使用しての実験は良かったです。体験する事が何よりもわかりやすいと思うので、後輩達に多くの体験をさせてあげて下さい。
- ・ 友達だけでなく、気の合う教授に出会えたことです。
- ・ 留年率が高い。（誰でも進級できない）
- ・ 様々な専門的な知識を学ぶ事ができたので良かった。
- ・ 現在の仕事が大学で勉強したことによって理解しやすく、受け入れやすかった点

- ・ 国立だったので、学費の心配をそれほどしないで、勉強や部活に専念できたこと。4年生の時に、研究していた内容を学会に出て発表するという機会を与えてもらい、めったにない経験をさせてもらえたこと。
- ・ 会社に先輩がいること。
- ・ 専門的な技術や、工学の基礎を身に付けるには、良い環境だと言える。民間企業との協同研究等、実用的なものとして学べる事は、社会人になってから自信につながると思う。
- ・ 好きだった分野を学ぶことができた。
- ・ 専門分野だけでなく、自分で選択すれば広範囲に渡って物事を学ぶことが出来た。充分とはいえなかったが、パソコンを自由に使える環境にあり、講義以外でも知識を身につけることが出来た。
- ・ サークル活動で楽しく生活できたこと。
- ・ 4年生からの研究室での研究において、共同研究者や、教授の方と共に考え、学んだ点。
- ・ 優秀で丁寧にご指導頂いた先生方に恵まれたことを、九工大に行って良かったと思います。
- ・ 金属工学について幅広く学べた事。(物質材料卒)。また研究室で、1つの事を、深く探究出来た事。
- ・ 研究施設が充実している。
- ・ 専門的な知識を学ぶことができた。
- ・ 図書館の資料の充実
- ・ 学生生活は充実したものでありました。また、専門分野で学んだことは今でも生かされていると思います。
- ・ 3年生から4年生になるときに行われた、各社への工場見学は、現在の会社を就職先として選ぶ際に、非常に参考になりました。
- ・ 自分と価値観や、教養レベルの近い人間に出会えたことです。今、大学時代の専門とはかけ離れた環境にいるので強くそう思います。
- ・ 専門教育は、しっかりと身についたのでその点が良かった。

### 3. あなたが九州工業大学 工学部 に在学して不満を感じた点、こう改善すべきだと感じた(例えばこういった技術(科目)を教えてほしかった)点がありましたらご記入ください。

会社の業務遂行に対する卒業生の高い向上心と現実の充実感・手応えの多様性を反映した結果となっている。学部の教育・訓練の目的や課程と日常の会社業務遂行に必要とされる能力や資格の差異については本人の意識も截然としていないため、アンケートには「不満」として表れてしまったように見受けられる。英語教育、実験・実習、プレゼンテーション、経営学など実践的科目のより一層の充実が求められている。インターン制度は既に開始されているが、就職セミナーや卒業生を招いての講演会などをさらに充実していく必要がある。

- ・ 金属材料でも鉄以外の物についてもう少し学びたかった。
- ・ 英語(工業英語)。実験 充実していたが、もっと増やしてほしい。
- ・ 色々な科目を学ぶことができるが、それぞれの科目の関連性についても教える授業にした

方が更に理解が深まると思う。

- ・ インターンシップだけでなく、仕事についてもっと近い関点からの講義があればよいと感じます。
- ・ 基本的な機械工学を学べればよかった。（別の学部でしたが...）
- ・ 選択科目の中で、就職後になって、学んでおけばよかったと思うものがあった。履修登録の際、選択の参考となるように、ラフで構わないので、各種業界と結びつきが分るようなちょっとしたコメントが欲しかった。
- ・ 語学についてはもう少し力を入れてはどうかと思います。特に英語については、一般英語はもちろん技術英語等専門的な内容も学ぶことができればと思います。
- ・ ネイティブスピーカーによる外国語授業の増加。専門用語は業種により様々であるため、大学で教えられるものに限界があると思われませんが、会話、およびメール等コミュニケーションでの英語力は必要であると感じます。
- ・ 共同研究は正式な留学ではなかったが、学校からの金銭的なバックアップが欲しかった。また、その間に休学ができなかったこと。TOEIC, TOEFLに向けた実用的な上級英語を学べる科目があればよかった。
- ・ 英語をもう少し強化すべきだと思います。
- ・ 工作機械を増やし実際に加工が体感できる環境が欲しかった。
- ・ 英語の授業の必修が2年までしかないことに不満を感じました。また、内容も高校で習ったものよりも劣るような感じだったので改善すべきだと思います。
- ・ 英語に対する勉強を活かすことができなかった。科目によっては説明がわかりづらく、教授によって教え方に差があり過ぎたこと。
- ・ 学生時代でも取得できる資格を一覧表等で配布し、勉強できる時間がある時に取得させるべき（技術士補 e t c）（科目）...火薬学を教えてほしかった。
- ・ 科目選択の幅が狭く感じました。（他学科の科目選択、情報提供など）
- ・ 工学部であるのだから、情報伝達の手段（休講や教室変更等）はなるべく、メール等の手段を用いてほしかったと思う。（私の在学中は提示板のみでした）あとは、語学系の授業にもう少し工業や技術など専門性の高い内容があってもよかったのではないかと思います。
- ・ 私は、在学中に熱心に勉強することはほとんどありませんでしたが、それでも、4年になってからの研究室に入ってからは、少しだけ勉強に集中した気がします。多くの学生は、まだ自分がやりたいことがばくぜんとしていると思います。1～2年生のうちに、研究室では、具体的にどういうことをやっているのかが分かれると学生も、より勉強に集中できると思います。
- ・ 工場見学をたくさんしたかった。（新日鉄）
- ・ OBの方や企業の方の話を聞ける場があれば良いと思います。やはり、現場（会社）に入ってみないと分からない事が多いので。
- ・ 座学と実習をリンクさせて欲しかった。例えば、機械工作法と機械工作実習では、機械工作法の方を先に勉強したので、工作機械のイメージが付きづらく、理解しにくかった。よって、座学と実習を1セットにした方が受け入れやすいと思う。

- ・ 現在半導体の設計会社に勤めていますが、使う素子としてCMOSのトランジスタが多く、大学で受講した「電子回路」などでは、バイポーラトランジスタを主に使用した回路について学んだので、もっとCMOSについて学びたかった。
- ・ 放任教育すぎるところ。
- ・ 一般教養科目は浅く広くであり、1つ1つの科目への集中した学力向上につながりにくい。材料工学専攻であった為、材料組織学、材料工学については、早期から（1年生）強化した方がよい。
- ・ 3年から、研究室でいろいろ学びたかった。どんどん専門性を高めた方がよい。
- ・ 一般教養が不足している。科目とは関係ないが、就職活動に対する意識があまりにも低すぎる。
- ・ Microsoft Officeの使い方を教えて欲かった。研究室に入っても使用しない場合があり、入社した際に、Officeのソフトに慣れる為に、時間がかかる。研究室に配属された時に、計画に基づいて研究を行なうようにして欲しい。企業との共同研究を進め、在学中に企業と接する機会を増やして欲しい。1年次だけでなくそれ以降も英語を必修科目にして欲しい。
- ・ 外国語をもっと深く学べるようにすると良いと思う。
- ・ 教えることが下手な教授がいて、理解しにくい教科があった。
- ・ 「解析学」などの「学力」に対する教育はあまり意味を感じなかった。「憲法」も社会的常識程度の方が意味があると思う。教養を学ばせることはとても良いことだが、「土木」なら「土木」，「電気」なら「電気」という専門を極めることにもっと時間を遣ったほうがよいと思います。
- ・ 特になし。
- ・ 専門分野は学ぶことができるが、コミュニケーションなどのヒューマンスキルを学ぶことができなかつたためそういったことを学ぶことができればよかったと思う。
- ・ 講義室が狭い、エアコンがない。知的財産に関する講義
- ・ 研究室に所属した際に、必要以上に研究室に居ないといけない状況が不満でした。研究室に出ても、講師か教授の指導が不十分に感じました。
- ・ 良かった点で書いた工場見学について、3年生から4年生の春休みと1週間かけて行われましたが、もっと早い段階（1・2年）の時にこのような機会を作っていただければと思います。
- ・ 入社後3年程度の卒業生を講師に迎えた授業があるとおもしろいと思います。（実現しないでしょうが）
- ・ 英語はたぶん苦手な学生が多いと思うので、英語には力を入れたほうが良いと思います。

#### 4. 全体としての傾向

回答のあった卒業生は46名であり、その8割方が何らかのコメントを寄せている。同じような事柄について問2の「在学して良かった点」と問3の「不満を感じた点」で相反する形の回答も散見され、各人の在学中や就職後の充実感・手応えと言ったものが多様であること、ま



た卒業生の向上心が高いことを反映している。

学部教育と大学院前期，そして大学院後期の教育・訓練の目的や課程と実社会の業務遂行における能力・資格の差異が本人にも截然と意識されていないためアンケートには「不満」として表現されてしまったような部分が見受けられる。

英語教育，実験・実習，プレゼンテーション，経営学など実践的科目のより一層の充実が求められているが，まずは「英語力が必要」と本人が認識するための環境を整えていく方策を講じる必要があるであろう。

用語の説明

○ 課題探求能力

ひとつの課題を深く追求する能力。上司の期待が1であれば1.5倍,2倍等の結果を出す。ただし,結果を出す時間については考慮しない。

○ 課題解決能力

ひとつの課題に対し,現在所有する情報・知識を用いて,与えられた期限内に結果を出す能力。

○ 独創性

既存の概念にとらわれず新しいアイデアを創出する能力。

○ 構想力

既存の技術・装置を組み合わせる新しいシステムを構成する能力や,先を見る能力。

○ 表現力

資料作成能力やプレゼンテーション能力。

○ コミュニケーション能力

交渉能力や対話能力。

## 2.6 2006年度実施 修了生アンケート (2004年3月以前修了生)

中期目標・中期計画に基づいて、2005年度から修了後3年が経過した企業へ就職した修了生へのアンケートを実施した。

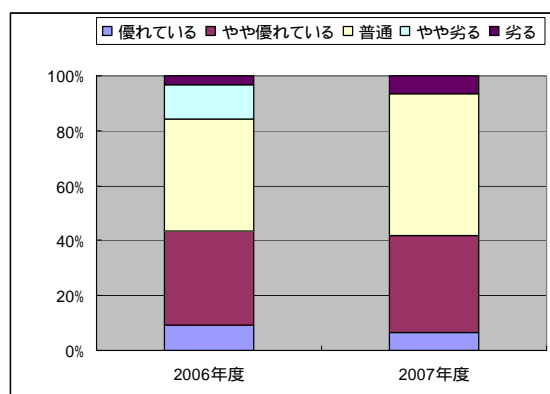
アンケートは、2004年3月期の修了生のうち企業へ就職した者のリストに基づき、工学部総務係より郵送を行った。しかし、アンケート用紙を配布した企業に就職した修了生は、222名(212社)で、回答のあった修了生は31名であり、回答率は14.0%であった。今回のアンケート実施方法としては、問題ないと思えるが、よりアンケートの実施時期は早めて、人事担当者へ直接渡す枚数を増やす等、回答率を上げる必要があると考えられる。

以下、各質問について、アンケート結果を述べる。

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

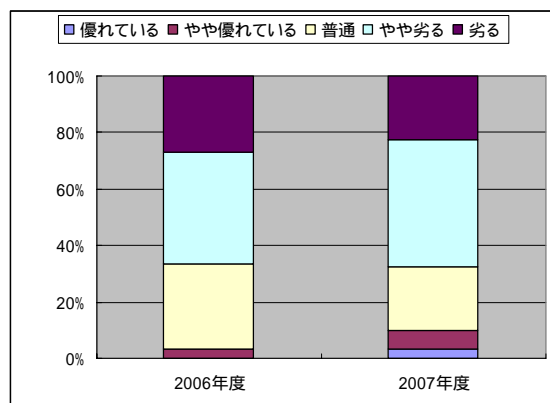
### (1) あなたが受けた教養教育のレベル

「優れている」と「やや優れている」の割合が「劣る」の割合よりも大幅に勝っており教養教育のレベルについては一般論としては肯定的に評価されている。しかし、否定的評価も僅かではあるが、存在していることは真剣に受け止める必要があり、改善が望まれる。



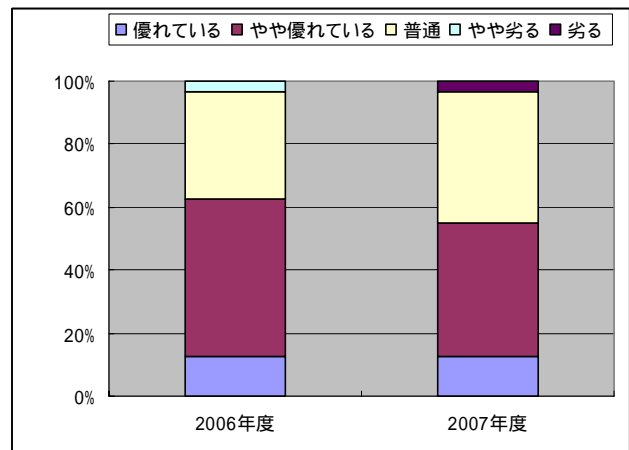
### (2) あなたが受けた語学(特に英語)教育のレベル

英語等の語学教育については、現状の批判的評価が顕著であり、今後の英語教育を大幅に見直す必要が認められる。



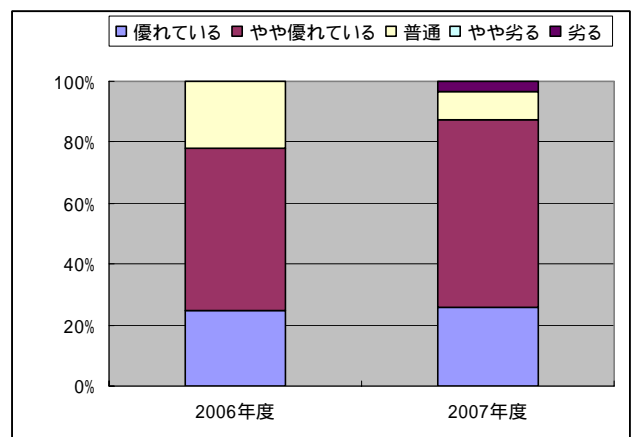
### (3) あなたが受けた理数系教育のレベル

理数系の教育レベルについては、肯定的評価が過半数を越えており現状で特に問題が無い。



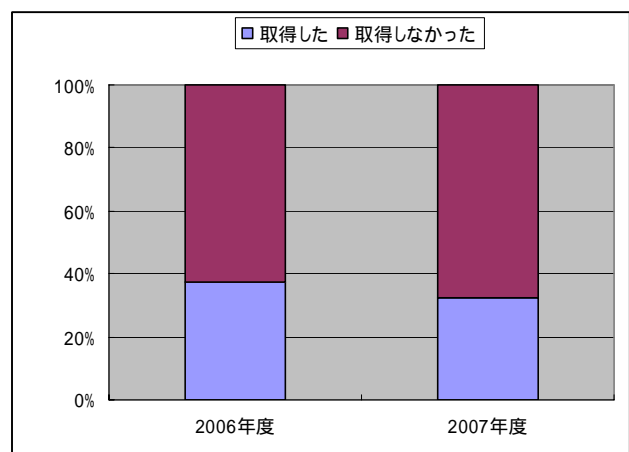
#### (4) あなたが受けた専門教育のレベル

専門教育のレベルについては、肯定的評価が過半数を越えており現在の教育内容が肯定的に評価されていると判断できる。



#### (5) あなたは入社後資格を取得しましたか？

入社後に3割強の者が資格取得を行なっていることから、入社前の基礎学力や課題探求力の育成が概ね問題なく実施されているものと推定される。



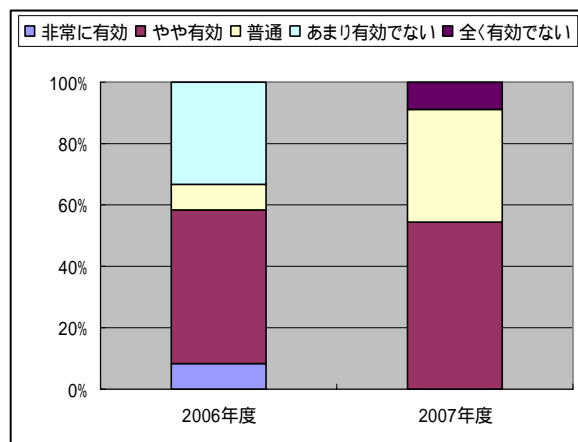
#### (5) 入社後取得した資格は具体的に。

- ・ 保全技能士
- ・ 機械保全技能士
- ・ 高所作業資格 10 m以上
- ・ エネルギー管理士
- ・ 危険物取扱者甲種

- ・ 高圧ガス製造保安責任者乙種化学，クレーン運転士免許
- ・ 技術士一次，VEリーダー
- ・ 知財検定2級
- ・ 技術士補，2級土木施工管理技士
- ・ エックス線作業主任者，危険物取扱者（乙種4類），玉掛け技能

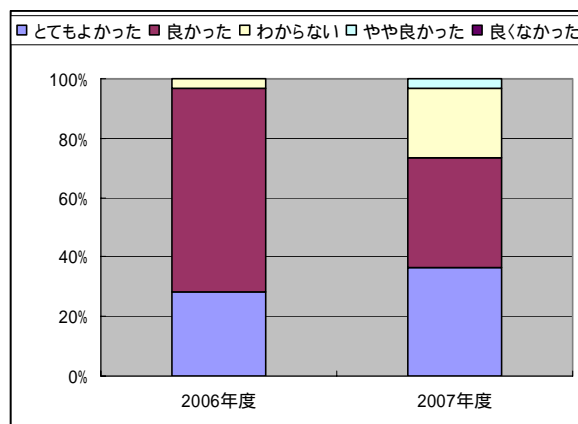
（6）資格を取得した方にお尋ねします。本学の教育は資格取得に有効でしたか？

資格取得に対する本学の教育を肯定的評価する者が過半数以上を占めている反面、否定的評価が1割を占めていることは学力の格差(分極化)を反映している可能性があり、今後の調査が必要である。



（7）あなたは、九州工業大学大学院工学研究科（博士前期又は後期課程）を修了してよかったと思いますか？

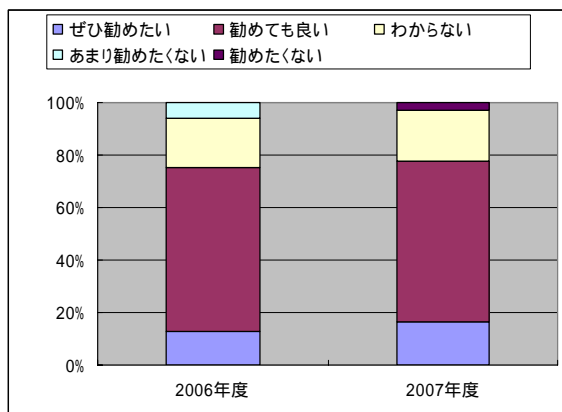
工学研究科の教育のあり方としては概ね肯定的評価をいただいているものと判断できるが、「わからない」「やや良かった」が大幅に増加しており、原因を調査する必要がある。



（8）あなたは、九州工業大学大学院工学研究科を魅力ある研究科として後輩に勧めたいと思

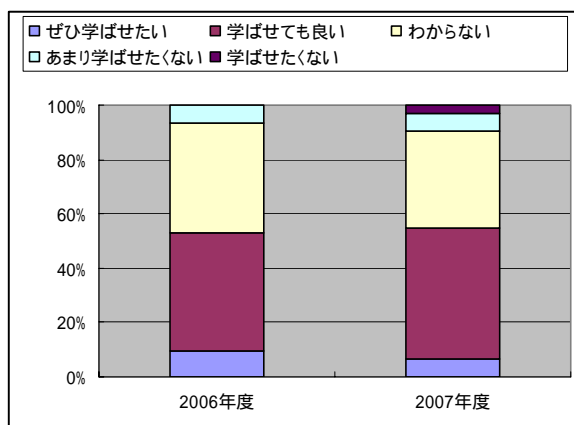
ますか？

2006年度から2007年度の傾向を見る。「ぜひ勧めたい」が16%と「勧めても良い」が62%、「勧めたくない」が3%とその割合にあまり変化はない。「ぜひ勧めたい」の割合を高める必要がある。



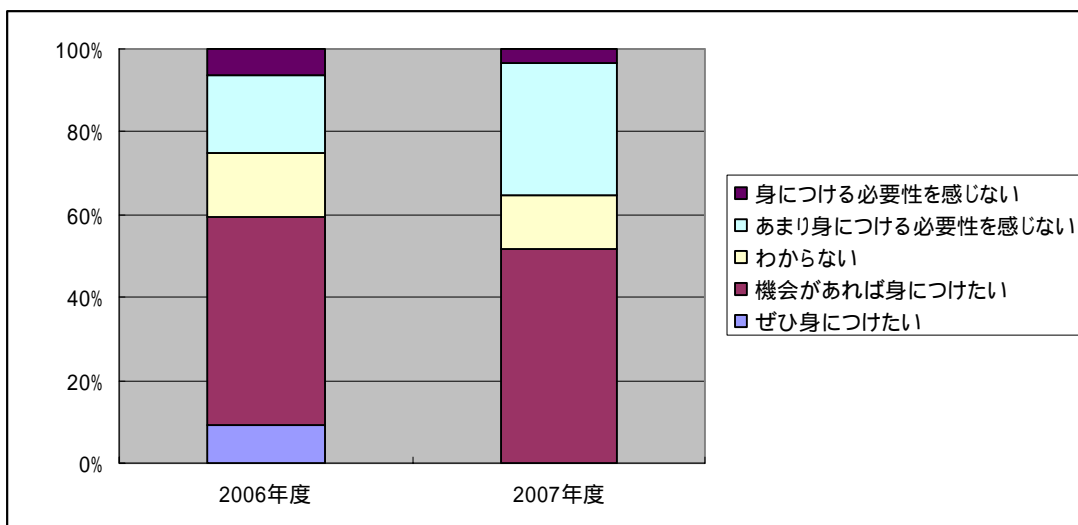
(9) あなたは将来、子供ができれば、九州工業大学に学ばせたいと思いますか？

2006年度から2007年度の傾向を見る。「ぜひ学ばせたい」が6%、「学ばせても良い」が49%、「わからない」が36%とその割合にあまり変化はない。「わからない」も依然多いため、より魅力ある大学にする努力が必要である。



(10) あなたは、更に高度な学力(博士)を身につけたいと思いますか？

「ぜひ身につけたい」と、「機会があれば身につけたい」が52%と減少し、一方で、「あまり身につける必要性を感じない」と「身につける必要性を感じない」が35%と増加しているため、高度な学力を身につける意義等を周知する必要がある。



2. あなたが、九州工業大学大学院工学研究科に在学して良かった点がありましたらご記入くだ

さい。

大学院に在籍してよかった点として、研究指導を通しての教員とのコミュニケーション、在籍中に学んだ専門知識、研究室での先輩、同輩、後輩との交流や深いつながり、研究環境が整備されていること、自由に研究ができたこと、さらに論文作成、論文発表の経験が社会で役立っていることなどを挙げている。

- ・ 学生の事をきちんと考えてくれる教授と出会えたこと。
- ・ 「モノづくり」を肌で感じることのできる教育体制
- ・ 横・縦のつながりも深いし、会社に入っても毎年九工大OB会をしています。専門性には優位だと感じます。
- ・ 団結力がある所。
- ・ 複数の学会でプレゼンする経験ができたこと。就職活動に対する先輩のアドバイスをもらえたこと。
- ・ 実習工場や実験装置の使用など実技がある程度身に付いた。
- ・ 研究室とつながりが長く続くこと。
- ・ なし。
- ・ 様々な知識が得られ、特に専門分野では高いレベルの知識が得られたと感じる。また学生同士の関係がよく、OBとのつながりにより、様々な情報が得られていたと感じる。
- ・ 実験中心の生活の中で、専門知識、実験技術を学ぶことができた。粘り強さが身についた。分析機器が充実していた。
- ・ 研究室の对外発表が活発だったこと。
- ・ 勉学への意欲次第でそれに応じてくれる（可能な）教授殿がおられること。また、学業以外への時間も十分に努力次第で確保できる程度のスケジュール
- ・ 楽しい仲間がいた。
- ・ 他大学との共同研究を行っていましたが、良い経験になりました。自分の興味あるテーマを研究させていただいたのが最も自分のためになりました。
- ・ 専門的な分野の研究については、非常にレベルが高く、私は大学院の研究分野が、そのまま仕事に結びつくため、非常に役に立っています。また在学中、学会等で知り合った方との繋がりや、その時学んだ研究内容や論文もある程度理解できているため、基礎的な知識を持った上で仕事に取り込むことができた。
- ・ 人脈
- ・ 専門分野の知識は広がった。研究分野への就職には向いているかもしれない。
- ・ 研究室にて、専門知識を得ることができた。優秀な友人と多く知り合え、卒業後も、交流を深めることができている。技術的な相談もし易い。
- ・ 昼夜とわずに研究できる環境にあり、高度な専門知識を身につけられる点がよかった。
- ・ 設計に必要な基礎知識をしっかりと学ぶことができた。（研究等で得た専門的な知識は現在の業務には活用できていない。）
- ・ 月並みではありますが良き友人、先輩、後輩に恵まれた事です。

- ・ 現在の職場での内容や話されている中身が，就学中に学んだ内容とほぼ同じである為，すんなり受け入れる事が出来，特に苦勞を感じなかった事。

3．あなたが，九州工業大学大学院工学研究科に在学して不満を感じた点，こう改善すべきだと感じた(例えばこういった技術(科目)を教えてほしかった)点がありましたらご記入ください。

指摘事項に多いのは語学教育の充実を求める点である。また，ディベートやブレインストーミングの重要性，そしてより高度な専門性と資格試験につながる科目の設置を求める声があった。

- ・ 特に無し(満足している)
- ・ 語学力が圧倒的に乏しい。特に英会話力。全員が全員英語ができる人がいないのは，問題だと思えます。
- ・ 各科目について，どういう分野で役立つかの説明を詳しくした方がよいと思う。
- ・ 制御コースでも，機械コースの科目を受けるようにした方がよかった。
- ・ 大学院の講義では(学生主導とまでは言わないが)学生同士が議論するような形式のものを導入したほうが良いと思う。プレゼン能力や考える力が身につくのでは？
- ・ 座学をもっと丁寧に(時間をかけて)教えて，戴きたかった。数値計算(シミュレーション)はプログラム実例を示して欲しい。
- ・ 語学力の構議や修得する場の充実を望みます。
- ・ 手に残る資格等が無い。もっと企業に出す人間にとって有益な技術の提供をめざすという行動をやっていくべきだと思います。
- ・ 英語やその他語学について，より多く課目を増やすことを検討してほしい。
- ・ 語学教育に力を入れて欲しい。
- ・ 応用化学棟が古かった。
- ・ ビジネス科目の不足。
- ・ 英語，特に技術系の英語は特殊なものが多いので，論文を読んだり技術系のプレゼンをする場を設けた方が良いと思う。
- ・ ディベート。プレゼンテーション。ブレインストーミング。教養でない英語
- ・ ゼネコン分野では院卒のメリットはあまり感じられない。施工管理の科目があった方がよい。CADを使った図面の書き方などを教えた方がよい。
- ・ 語学(英語)を，もっと学べれば良かった。
- ・ 現在自動車プレス関係の会社で働らいております。在学中にSPOT溶接のレーザー溶接についてまた，高ハイテン材等の材料特性について詳しく学びたかった。
- ・ 日程管理を徹底することで社会人になった時に業務を進めやすくなる(進め方を理解しやすくなる)と思われます。
- ・ 専門学校的になるかもしれませんが，資格取得を目的とした授業があっても良いのではないかと思います。
- ・ 在学中に学習した内容が直接職場で活かされる事が少ない為中身を工夫すれば良いということは一既には言えません。但し，職場では常に自分の考えが必要となってくる為，



もっと自分で考え意見を述べるような学習スタイルを導入した授業を増やしてみればどうでしょうか？

#### 4．全体としての傾向

31名，回答率14.0%ではあるが，就職して3年が経過した修了生の工学研究科に対する評価はかなり高く，十分な満足度が得られているものと判断される。

ただ，少し詳細にその内容を評価すれば，教養教育，理数系教育，専門教育のレベルに対する評価はかなり高いものの，英語教育については強い不足感を指摘した結果であった。この点は，卒業生・修了生および卒業後3年を経過した卒業生のアンケート結果にも共通しており，英語教育のあり方を真剣に議論し，早急な対策を施す必要があると言わざるを得ない。

なお，修了後の感想としては，修了してよかったと思う反面，自分の子供にも学ばせたいと思う割合は減少しており，大学のブランド力の向上が望まれているのではないかと推測する。また，博士の学位取得を希望している修了生の多いことは注目に値し，その支援策としての仕組み造りを検討する必要があると思われる。

用語の説明

○ 課題探求能力

ひとつの課題を深く追求する能力。上司の期待が1であれば1.5倍,2倍等の結果を出す。ただし,結果を出す時間については考慮しない。

○ 課題解決能力

ひとつの課題に対し,現在所有する情報・知識を用いて,与えられた期限内に結果を出す能力。

○ 独創性

既存の概念にとらわれず新しいアイデアを創出する能力。

○ 構想力

既存の技術・装置を組み合わせる新しいシステムを構成する能力や,先を見る能力。

○ 表現力

資料作成能力やプレゼンテーション能力。

○ コミュニケーション能力

交渉能力や対話能力。

### 3 工学部・工学研究科の管理運営

#### 3.1 工学部の組織図

平成18年度の工学部及び工学研究科の管理運営組織並びに意志決定体制を、図3.1.1及び図3.1.2に示す。

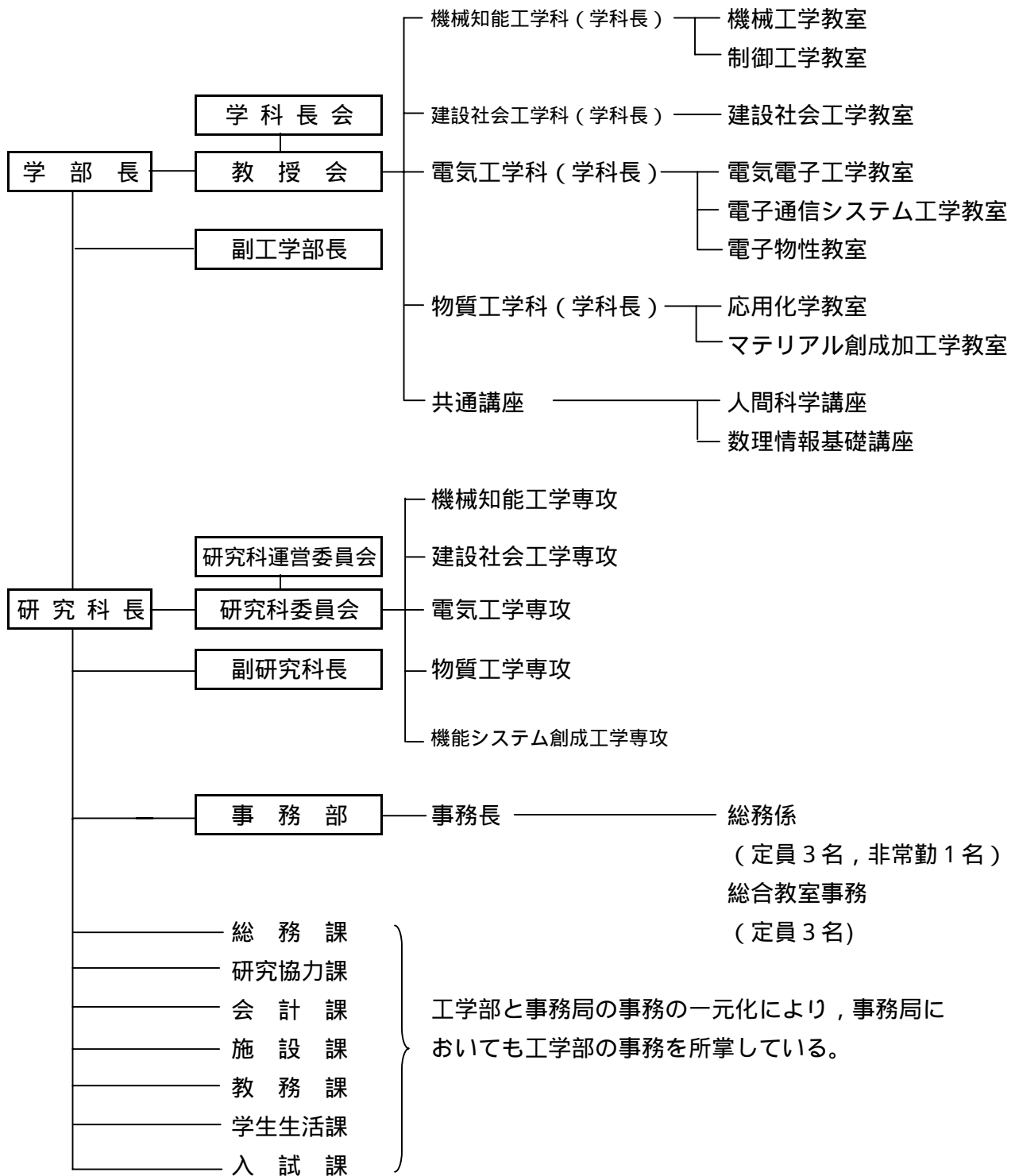


図3.1.1 組織図

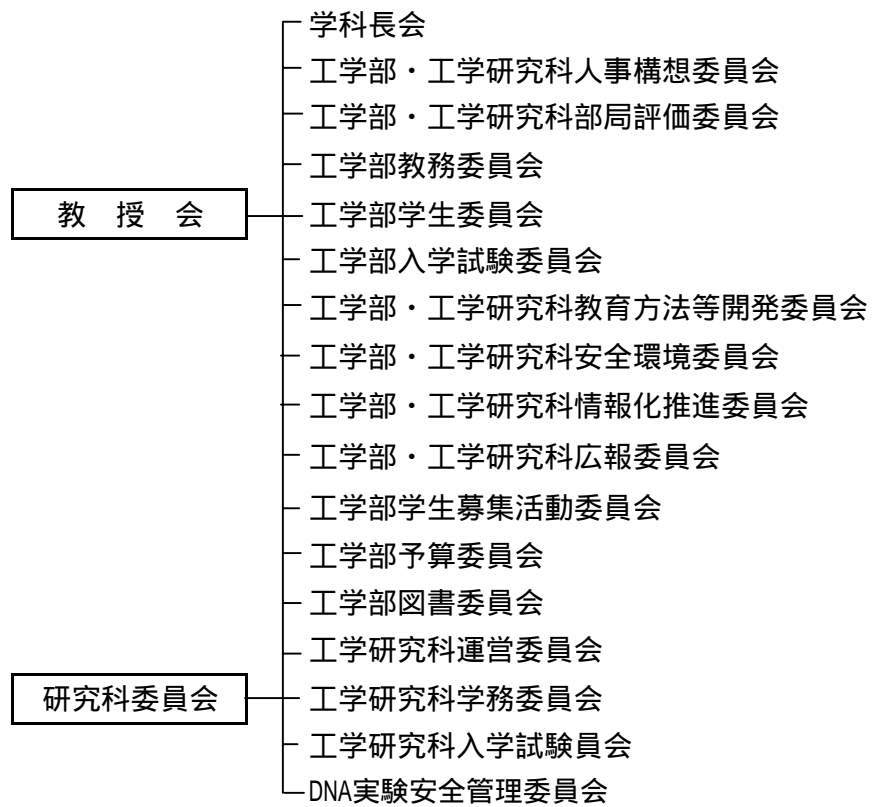


図3.1.2 各種委員会

## 3.2 各種委員会活動の点検・評価

### 3.2.1 工学部・工学研究科人事構想委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

- (1) H18.5.30 共通講座(人間科学講座・独語分野)助教授選考委員会の設置提案について審議した。
- (2) H18.6.28 物質工学科(機能設計化学講座)助手選考委員会の設置提案について審議した。
- (3) H18.7.19 電気工学科(電子機器工学講座)助手の学内講師への推薦について審議した。
- (4) H18.9.20 共通講座(数理情報基礎講座・数学分野)教授選考委員会の設置提案について審議した。
- (5) H18.9.20 電気工学科(電子デバイス工学講座)助手の学内講師への推薦について審議した。
- (6) H18.10.18 電気工学科寄附講座(電力系統制御工学講座)客員教授選考委員会の設置について審議した。
- (7) H18.11.15 機械知能工学科(熱流体学講座・流体工学分野)助教授選考委員会の設置提案について審議した。
- (8) H18.11.15 機械知能工学科(熱流体学講座・熱エネルギー分野)助教授選考委員会の設置提案について審議した。
- (9) H18.11.15 電気工学科(電子デバイス工学講座)教授または助教授選考委員会の設置提案について審議した。
- (10) H18.11.15 共通講座(数理情報基礎講座・物理分野)教授選考委員会の設置提案について審議した。
- (11) H18.12.20 物質工学科(マテリアルプロセス工学講座)教授選考委員会の設置提案について審議した。
- (12) H18.12.20 物質工学科(マテリアル機能工学講座)助教授選考委員会の設置提案について審議した。
- (13) H19.1.24 電気工学科(電子デバイス工学講座)助教選考委員会の設置提案について審議した。
- (14) H19.1.24 物質工学科(物質生産化学講座)助教選考委員会の設置提案について審議した。
- (15) H19.2.21 電気工学科寄附講座(電力系統制御工学講座)客員教授の選考について審議した。
- (16) H19.2.21 電気工学科寄附講座(電力系統制御工学講座)教員(助教相当)の選考について審議した。

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 上記に掲載した選考委員会の設置について検討し、教育研究評議会および役員会に提出したなお、電気工学科寄附講座客員助教授の選考委員会の設置については、採択後、工学部教授会に報告した。

#### 3. 委員会の議論に使用された資料

- ・ 共通講座(人間科学講座・独語分野)助教授選考委員会設置提案書
- ・ 物質工学科(機能設計化学講座)助手選考委員会設置提案書
- ・ 電気工学科(電子機器工学講座)学内講師選考調書
- ・ 共通講座(数理情報基礎講座・数学分野)教授選考委員会設置提案書
- ・ 電気工学科(電子デバイス工学講座)学内講師選考調書
- ・ 電気工学科寄附講座(電力系統制御工学講座)客員教授選考委員会設置提案書
- ・ 機械知能工学科(熱流体学講座・流体工学分野)助教授選考委員会設置提案書
- ・ 機械知能工学科(熱流体学講座・熱エネルギー分野)助教授選考委員会設置提案書
- ・ 電気工学科(電子デバイス工学講座)教授または助教授選考委員会設置提案書
- ・ 共通講座(数理情報基礎講座・物理分野)教授選考委員会設置提案書
- ・ 物質工学科(マテリアルプロセス工学講座)教授選考委員会設置提案書
- ・ 物質工学科(マテリアル機能工学講座)助教授選考委員会設置提案書
- ・ 電気工学科(電子デバイス工学講座)助教選考委員会設置提案書

- ・物質工学科(物質生産化学講座)助教選考委員会設置提案書
- ・電気工学科寄附講座(電力系統制御工学講座)客員教授選考調書
- ・電気工学科寄附講座(電力系統制御工学講座)教員(助教相当)選考調書

#### 4. 工学部・工学研究科の現状に関する意見または改善に関する提言

- (1) 工学部・工学研究科から基準以上の学長裁量ポストを拠出している状況の解消が必要である。
- (2) 柔軟な教育組織および研究組織を構築することが必要である。

### 3.2.2 工学部・工学研究科部局評価委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 本委員会の担当する中期目標・中期計画の評価
- (2) 教育職員評価の実施に関する検討
- (3) 平成17年度卒業生，修了生アンケートの解析・まとめ
- (4) 平成17年度企業アンケートの実施と解析・まとめ
- (5) 平成15年度以前の卒業生，修了生アンケートの解析・まとめ
- (6) 平成17年度版「現状と課題」の発行
- (7) 平成18年度卒業生，修了生アンケートに関する検討および実施
- (8) 平成18年度版「現状と課題」のデータ整理に関する検討

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 中期目標・中期計画の進捗状況評価と計画修正を行った。
- (2) 各種アンケートの結果をまとめ、関連する委員会へフィードバックした。
- (3) 教育職員評価の実施に関して工学部・工学研究科教育職員評価実施委員会へ具申した。
- (4) 「現状と課題」を，CDで発行した。
- (5) 平成18年度卒業生・修了生アンケート内容を検討し実施した。
- (6) 平成18年度企業アンケート内容および実施方法を検討し、実施準備を行った。

#### 3. 残された課題または将来解決すべき事項

- (1) 教育職員評価システム  
教育職員評価が実施された。教育職員評価実施委員会による分析結果等を基にして、次期評価に向けての評価システム、評価方法に関する検討が必要である。
- (2) 各種アンケート結果のフィードバック  
部局評価委員会では卒業生，修了生，企業の3つのアンケートを実施しているが、アンケートデータの長年の蓄積を通じた信頼性の高い教育システムの課題が鮮明になりつつある。この課題を関連する委員会にフィードバックして教育システムの改善に反映させる方を強化する必要がある。

#### 4. 委員会の議論に使用された資料

- ・平成17年度卒業生・修了生アンケート，平成17年度企業アンケート、平成15年度以前の卒業生・修了生アンケート
- ・九州工業大学中期目標・中期計画
- ・九州工業大学教育職員評価実施要項
- ・工学部・工学研究科評価実施委員会要項(案)
- ・九州工業大学評価実施規則(案)
- ・教育職員評価シートマニュアル

#### 5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

上記 3 . ( 1 ) ( 2 ) と同様

## 6 . 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

### ( 1 ) 教育職員評価システム

教育職員評価が実施されたばかりであり、次期評価システムの改善までには至らなかった。教育職員評価実施委員会による評価結果の分析の公表が予定されている。これを基にして次期評価システムの課題を検討していく必要がある。

### ( 2 ) 企業アンケートの工夫

回収率向上のため、アンケートの実施に当り、卒業生、修了生の就職先データを事前に収集し、各教室の就職担当者に訪問される企業の人事担当者に渡して頂くよう依頼をしたが、期待される程の回収率の向上はみられなかった。企業の人事担当者のリクルートに関する繁忙時期が関係していると思われる、次年度はタイミングを考慮して実施する。

## 3 . 2 . 3 工学部教務委員会

### 1 . 今年度取り組んだ課題

#### 1 ) 授業関係

- (イ) 英語科目の検討について
- (ロ) TOEIC の活用について
- (ハ) 合宿研修などによる休講の補講について
- (ニ) 現代 GP 関係新設科目の履修資格の拡大
- (ホ) PBL 科目の効果について

#### 2 ) 教育関係

- (イ) 19 年度からの GPA の導入について
- (ロ) 20 年度改組に基づく履修課程表案作成について
- (ハ) 履修登録単位数の上限設定について
- (ニ) 成績報告締め切りの厳守
- (ホ) 試験期間変更について
- (ヘ) 新教育課程での新入学生の基礎学力の調査と補習授業

#### 3 ) 学生関係

- (イ) 学習成果自己評価シートの改訂について
- (ロ) 履修登録科目の修正について
- (ハ) 教育システムの利用について
- (ニ) 学生全員の成績通知の実施
- (ホ) 複数担任制の充実について
- (ヘ) 欠席届の取り扱いについて
- (ト) 学生便覧の英文化

#### 4 ) その他

- (イ) 改築に伴う講義室の確保
- (ロ) 試験監督補助依頼について
- (ハ) 試験答案等の保管について
- (ニ) 教務委員会の下部委員会の運営について

### 2 . 今年度採択した事項

#### 1 ) 授業関係

- (イ) 平成 19 年度から GPA の正式導入
- (ロ) TOEIC のスコア 600 点を「上級英語」2 単位へ振り替える
- (ハ) 平成 20 年度の改組に向けての取り組み
  - ・履修上限単位数を 46 単位とする

- ・卒業要件単位数の変更
- ・英語科目の新設（現行 5 単位から 6 単位への変更）
- (二) 現代 GP 関係新設科目について
  - ・「工業技術者と地域環境支援」、「プレゼンテーション総合ワークショップ」を平成 17 年度及び平成 18 年度入学の学生に対しても適応する。
- 2) 教育関係
  - (イ) 平成 19 年度から GPA の正式導入
  - (ロ) 福岡県立ひびき高校との高大連携の継続
  - (ハ) 技術部への試験監督補助の依頼
  - (二) 新教育課程のもとで学習した 18 年度入学生の「数学」、「物理」、「化学」の前期試験の単位取得状況を調査した結果、補修授業を行う状況でないことを確認した。
- 3) 学生関係
  - (イ) 学習成果自己評価シートアンケートの改訂と実施
  - (ロ) 学生全員の成績の保証人への通知の実施
  - (ハ) GPA 導入に基づく履修登録科目の変更修正についての規則
  - (二) 教育システムの充実に伴う、除籍対象学生の指導教員への通知の廃止
  - (ホ) 欠席届に関する申し合わせについて
    - ・「欠席届」を提出しても、出席とはならないことを学生へ周知した
  - (ヘ) 留学生用に「学生便覧」抜粋の英文化
- 3) その他
  - (イ) 改築にともなう建物の新名称と講義室名称
  - (ロ) 教務委員会の下に存在する「工学基礎科目運営委員会」、「人間科学科目運営委員会」、「教職科目運営委員会」を整理統合する案を工学部長へ提言
  - (ハ) 教員の成績提出締め切りの厳守
  - (二) 非常勤講師の成績提出の迅速化についての検討
  - (ホ) 教育システムの改訂について

### 3. 残された課題または将来解決すべき事項

- (1) 授業関係
  - (イ) 試験期間を長くするために、入試委員会へ推薦入学試験の土曜、日曜日での実施を要望する。
  - (ロ) 複数クラス授業の内容および統一化
  - (ハ) 成績評価の標準化
  - (二) 履修科目数上限の設定による問題への対応
- 1) 教育関係
  - (イ) GPA の利用について
  - (ロ) JABEE 受審に対する方針
  - (ハ) 卒業生や企業へのアンケート集計結果のフィードバックシステムの構築について
  - (二) 推薦入学者に対する入学前教育の方法について
- 2) 学生関係
  - (イ) 学生の成績の保証人への送付に対する効果
  - (ロ) WEB を利用した休講通知の周知について

### 4. 委員会の議論に使用された資料

- (1) 九州工業大学中期計画・中期目標
- (2) 学習成果自己評価シート
- (3) 教育委員会資料
- (4) その他、教務委員会資料

### 5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

- (1) 工学基礎科目、語学系科目、人間科学系科目などを担当する教員間の連携が薄く、学生の学習目標達成のための学力強化について、横断的見解と協力が得られ難いのが現状である。そのためには、各種アンケートや調査結果をフィードバックするシステムの構築と早急の立ち



- 上げが必要である。
- (2) 同一科目名の講義における授業内容と評価の均一化について検討する必要がある。
- (3) 20年度入学生から適用される履修単位数を46単位とすることに対して、学生の履修上の問題点を洗い出して、その対応策について検討する。

#### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 昨年度の講義の内容の改善についての提言は、教務委員会の所掌範囲ではなく討議しなかった。
- (2) 出前講義や公開講座の内容の充実についても、教務委員会で検討する議題ではなく、討論しなかった。
- (3) GPAの利用についての議論と算出方法の妥当性、及び各学生のGPA値向上のための方策を検討する必要がある。
- (4) 20年度からの履修登録上限の設定に基づき、4年間で卒業要件単位をほぼ均一に取得する履修過程やカリキュラムの設定に向けての準備をする必要がある。

### 3.2.4 工学部学生委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 「大学への意見箱」の新しい運用方法の試行
- (2) 平成18年度学生生活実態調査の実施と報告書作成の分担
- (3) 期末試験における監督補助者の派遣方法の検討
- (4) 期末試験の期間適正化への要望の検討
- (5) 学生寮の老朽化の問題
- (6) 留学生向けに学則・学修細則の抜粋の英訳を作成
- (7) 新入生研修の日程について
- (8) 休講情報のホームページ掲載の活用への要望の検討
- (9) 工大祭への対応
- (10) キャンパス内での喫煙
- (11) 学生証のデザインについて
- (12) 平成18年度日本学生支援機構奨学生の選考
- (13) 中期目標・中期計画の実行

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 半月に1回意見箱への投稿意見を回収し、その半月後には回答を掲示する、といった運用体制を整備し、それを学生にも明示することによって意見箱の活用を図った。9月から3月まで試行したところ、投稿件数は全部で4件と必ずしも多くはなかったが、意見箱でなければ把握できなかったであろう投稿もあり、学生の認知は徐々に高まっていると思われる。
- (2) 調査を実施し、報告書に記述する回答やコメントの工学部分担分を作成するとともに、要望に対する対応を進めた。
- (3) 試験における不正行為を減らすことを目的として、期末試験において監督補助者を配置することが困難な科目に対して、工学部として監督補助者の派遣を行う体制について検討した。なおこの課題については、引き続きは教務委員会において担当してもらうことを要望した。
- (4) 期末試験期間が1週間程度と短くなっていることについては、学生の試験準備の負担を増大させ、学習機会を減少させ、さらには不正行為が減らないことにつながっている可能性があるとともに、学生からも改善の要望がある。そうしたことから、期末試験の期間を適正化することを教務委員会に要望することとした。なお、飯塚キャンパスと試験期間が異なることについては、問題のないことを、全学学生委員会において確認した。
- (5) 長年の懸案であった学生寮の老朽化については、使用を数年後以降も継続することがいよいよ危険であると判断されることから、平成22年3月の時点で現在の形の学寮を廃止することを採択した。なお、学生の受入については、平成22年3月で廃止されることを了解の上であれば、新たな入寮を許可することとした。一方、改修などを行い、新

しい形とした学生寮は、入学希望者に対する大学の競争力を高める上でも必要と考えられることから、別の場において設置の可能性を前向きに検討することを全学の学生委員会において要望した。

- (6) 留学生・チューターとの懇談会において出された要望に基づき、学則および学修細則などから特に留学生に関連すると考えられる部分を抜粋して、英訳を作成し、配布できる準備を整えた。日本語のものを希望する留学生には、英訳のもととした日本語の抜粋の部分を配布することとした。なお、英訳版、日本語版、いずれにしても、優先されるのは入学時に配布された学生便覧に記載されたオリジナルであることを、それぞれの表紙に記載して、留意を促している。
- (7) 新入生研修の日程については、講義時間を確保するために、研修は休講措置を伴わない形で実施することの要望が教務委員会よりあった。検討した結果、見学などを合わせて実施する場合には、週末に研修を実施することは困難であることなどから、休講措置を伴う必要がある場合には、工学部学生委員会として決めた特定の金曜日の全日または午後のみを休講とする形で、新入生研修を実施することとした。なお、休講措置を必要としない場合は、他の日程で実施することも可能であることを確認した。
- (8) 休講情報を大学のホームページで確認できるようにして欲しいという要望が学生より多く出されているため、教務係で管理している休講通知のホームページに、より多くの休講情報が集約されるように、教務委員会に検討を要請した。
- (9) 学生委員会の工大祭担当委員・工大祭実行委員会・学生支援課の3者が協力して検討し、問題を起こした団体に対するペナルティーのあり方については、昨年度の方法を若干修正した。また学科展の開催にあたって、工大祭実行委員会と教室との連絡が十分ではなかったという指摘に基づき、改善案の提示を求めた。さらに、各教室ごとに学科展の学生代表を決める形とし、より円滑な情報伝達ができるようにすることを要望した。
- (10) 安全衛生推進室より、戸畑キャンパス内での喫煙指定箇所について確認の要請があった。確認するとともに、各教室の実情などに応じて、変更などを要望した。
- (11) 情報化推進委員会の学生証・身分証明書 IC カード化 WG より、IC カード化にあたって、学生証中の記載事項の検討を依頼され、審議して決定した。再発行については、学生から必要となる実費を徴収することを了承した。
- (12) 例年通りの手続きで、平成18年度日本学生支援機構奨学生の候補者を採択した。
- (13) 工学部学生委員会が主担当となっている、キャンパスライフの改善を図るシステムや留学生の生活支援に関する中期計画については、上記、(1)(2)(6)といった形で実行した。

### 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

- (1) 試行した体制での意見箱の本格的な運用を開始し、学生からの要望などに、的確に対応していくとともに、必要があれば運用体制の改善をはかることが望まれる。
- (2) 学生生活実態調査のアンケートの回収率があまり高くなかったことは課題であり、必修の講義時間の一部を使い、その場で回収するなどの工夫が必要と考えられる。また、学生からの要望に答えられていない項目については、さらに改善を図っていく必要がある。
- (3) 新入生研修については、1年生を対象とすると人数が極めて多くなる学科がほとんどであることから、実施のあり方については、研修の目的を勘案した上でさらに検討していく必要がある。

### 4. 委員会の議論に使われた資料

- ・九州工業大学中期目標・中期計画
- ・意見箱の運用方法案
- ・平成18年度学生生活実態調査質問表、調査票回収状況、調査結果
- ・期末試験の監督補助派遣について
- ・学生寮の現状資料
- ・留学生・チューターとの懇談会議事録
- ・工大祭実行委員会からの依頼書
- ・戸畑地区喫煙場所設置基準について
- ・学生証の標記事項およびデザイン例について

### 5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見、又は改善に関する提言

学生生活実態調査や意見箱、または教員に直接寄せられる学生からの意見等に対して、可能な範囲で対応し、同時に対応した結果を学生に周知していくことにより、そうした意見聴取システムがさらに有効に活用されるようにする必要がある。

留学生に対する支援については、工学部・工学研究科としてできることは限られている。大学全体としての留学生受け入れに対する方針を確立し、それに応じた人員配置・予算措置等を進めていくことが、本質的な支援体制の改善には不可欠であると考えられる。

### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

キャンパスライフの改善については、建物改修により、講義室のエアコンやリフレッシュスペースの設置など、大きく進展した点もあるが、昼食時の食堂の混雑など、改善の困難な課題も残されている。なお外灯の設置については十分な検討が行えなかった。防犯と省エネをどのように両立させていくか、検討し、改善していく必要があると考えられる。

## 3. 2. 5 工学部入学試験委員会

### 1. 今年度、本委員会が取り組んだ課題

- (1) 平成19年度編入学試験選考方法について
- (2) 平成19年度入学者選抜要項について
- (3) 個別学力検査における補欠候補者数について
- (4) 中期目標・中期計画について
- (5) 平成19年度帰国子女特別選抜学生募集要項について
- (6) 平成19年度入学試験合格者決定の取扱い(追加合格)について
- (7) 平成20年度入学試験日程について
- (8) 平成19年度欠員補充第二次募集の選考方法等について

### 2. 今年度、本委員会が採択し、実施した事項

通常の見考・審査については例年どおり実施した。ここでは、新たに実施した事項についてのみ記す。

#### (1) 個別学力検査の募集人員について

委員長及び入試課より、第2回委員会資料及び追加資料に基づき説明があり、審議の結果、下記のとおり前期日程の募集人員を減らし、推薦入試および後期日程に振り替えることとなった。これに伴い、平成19年度入学者選抜要項の募集人員に関する記載を変更することとなった。

・入学定員に占める募集人員の割合

変更前：推薦入学15%、前期日程55%、後期日程30%

変更後：推薦入学20%、前期日程45%、後期日程35%

#### (2) 平成19年度欠員補充第二次募集の選考方法等について

議論の結果以下のように決定した。

欠員補充第2次募集の選考方法は個別学力検査(前期日程)で利用する大学入試センター試験の教科・科目等とするが、配点については、個別学力検査を行わないため、個別学力検査での数学・理科の配点各400点をそれぞれ加算する。

### 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

- (1) 昨今の受験者の減少傾向にあつて、推薦・前期・後期試験の定員配分、ひいては募集形態・定員をも含めた抜本的な検討が必要であると思われる。

### 4. 委員会の議論に使われた資料

- (1) 平成19年度大学入学者選抜実施要項
- (2) 平成18年度大学案内・九州工業大学
- (3) 九州工業大学工学部案内
- (4) 平成18年度入学者選抜要項
- (5) 平成18年度一般選抜等各学生募集要項
- (6) 九州工業大学工学部「現状と課題」平成18年度版(17年度の活動報告) 九州工業大学工学部自己点検・評価報告書

(7) 中期目標・中期計画(案)

## 5. 工学部の現状に関する意見, 又は改善に関する提言

- (1) 昨年度から教授会審議事項である「入学試験合格候補者の選考」が学科長会に委嘱されたことによって、学部運営スケジュールに大幅な自由度が増したと思われるが、この新体制とともに、新たにスタートした「教員による入試判定資料のチェックシステム」及び「入試成績に関わる資料の閲覧システム」について点検が必要であろう。
- (2) 受験者の増加を図るために多くの議論を行った。特に、推薦入学の比率を上げることを念頭に、「入れ替え制指定校推薦選抜制度」について精力的に検討を行ったが、当年度委員会では結論に至らず、議論は次年度に持ち越された。推薦・前期・後期試験の定員配分、また募集形態・募集定員について引き続き抜本的な検討が必要であろう。長期的には、学部改組等の将来計画が、受験者に魅力あるものとしてその期待に応えるものであることが根本的に重要であろう。
- (3) 学部の入試業務は大きく入試課に依存しているため、相互に密接な連携が要求される。この意味で、運営体制が一定程度、整備された。しかしながら、入試課入試係の過重な仕事量については、入試におけるミスを防止する観点からかねてから懸念され、同委員会前年度委員長から全学入試委員会で増員が提言されていた。今年度、引き続きこの件を要望した。事務系組織の改編に伴い、入試課に増員がなされるとのことであるが、学生募集活動に関連する業務がさらに集約されるとのことである。今後の入試業務の安定的な遂行のためには、純粋に入試業務に専任するスタッフの確保が肝要である。
- (4) 入試業務の特殊性を考えると、入試係は通常の配置換えによる職員の割り振りになじまない。入試業務に興味と愛着、そして責任感をもった人材の育成を図り、業務の安定的継承を図るべきであろう。今後、入試業務の重要性は一層増すことが予想されるため、重点課題といえる。

## 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 正員数の決定法について  
各学科の過去の実績に基づいて実施した。この件については引き続き検討・試行を行う必要がある。
- (2) 入試業務については年間を通してかなりの量の実務があり、ほとんど前年度どおり順次遂行される。そのスケジュールがタイトなため、改善すべき事項についても十分に検討・修正する時間が確保できない場合がある。この点は、例年どおりの日程より早めに対応すること等によって改善できると考えられる。

## 3. 2. 6 工学部・工学研究科教育方法等開発委員会

### 1. 今年度, 本委員会が取り組んだ課題

- (1) 授業評価アンケートの実施と授業環境の改善
- (2) 公開授業の方法の改善と実施
- (3) 学生懇談会の実施
- (4) 中期計画における年度計画の実施

### 2. 今年度, 本委員会が採択した事項

#### 2-1 授業評価アンケートの実施と授業環境の改善

昨年度の検討に基づき設定された項目に基づく授業アンケートを今年度も継続して行うとともに、授業評価アンケートに並行して物理的な教育空間の環境改善のための情報収集と具体的な改善実施を目的として、初めて授業環境改善要望アンケートを同時に行うこととした。

授業評価アンケートについては昨年度と同様の規模・方法であった。一方、同時に行われた授業環境改善要望アンケートについては、全ての授業評価アンケートと同時に配布し回収されたものを、当委員会委員全員が数百枚ずつ分担して全ての要望回答に目を通し、内容を分類して、委員会に結果を持ち寄りそこで内容を議論した。その結果、改善可能と思われる33項目について、委員会事務局(工学部)が大学内の関係部局に直接折衝し、全ての項目について具体的な改善報告や回答を得ることが出来た。さらにそれを文書化し、学内の掲示板等に掲示して、取り組みの経緯と改善内容を公開することが出来た。

## 2 - 2 公開授業の方法の改善と実施

教員研修の一環として定例化した公開授業を今年度も実施した。その実施状況は以下の通りである。なお、授業担当者の推薦など実施方法についてはそれぞれの教室に一任した。

平成18年度公開授業実施一覧

学科等	日時	授業科目	担当教員	場所	参加者総数 (学科外参加者)
機械	2007/1/9 1時限目	内部流れ学特論	西道弘先生	機械知能1号棟 第1大学院講義室	3名(1名)
機械	2007/1/10 7時限目	流れ学	西道弘先生	機械知能1号棟 共用27講義室	4名(3名)
制御	2006/7/10 4時限目	知能制御演習	相良慎一先生	制御棟 セ2講義室	4名(0名)
建設社会	2007/1/24 2時限目	河海工学	重枝未玲先生	建設社会棟 共用23講義室	9名(2名)
電気電子	2007/1/23 3時限目	高機能電力システム 特論	松本聡先生	電気電子棟 大学院講義室	1名(1名)
電子通信	2007/1/31 3時限目	電子通信システム工 学実験	生駒哲一先生	電気電子棟 E7-435(学生実験 室)	12名(3名)
応用化学	2007/1/26 1時限目	有機化学	北村充先生	機械知能1号棟 共用27講義室	7名(1名)
マテリアル	2007/1/23 3時限目	材料リサイクル工学	野口文男先生	材料棟 ヤ3講義室	13名(1名)
人間科学	2006/11/22 5時限目	リレー講義 「世界 の中の日本」	今井敦先生 コーディネーター: 大野瀬津子先生	機械知能1号棟 共用27講義室	11名(4名)
数理情報	2007/1/26 2時限目	物理学 A	岡本良治先生	共通教育棟 共南11教室	8名(3名)
機能システム	2007/1/16 5時限目	ベンチャー企業論	脇迫仁先生	総合研究棟 大学院講義室	4名(1名)

公開授業においては、今年度より、全ての授業について実施担当教室以外の最低2つの教室に所属する教員が参加するというルールを定め、産科教員がより広範な分野に及ぶよう改善した。

## 2 - 3 学生懇談会の実施

昨年度実施しなかった「学生と教員との懇談会」を11月24日(金)2限に共用講義室24(E1-212)において実施した。出席教員は工学部・工学研究科FD委員会委員8名、および学生14名であった。内訳は以下の通り。

- 3年生： 4名(機械2名、建設1名、物質1名)
- 4年生： 4名(機械2名、電気1名、物質1名)
- M1生： 3名(電気3名)
- M2生： 3名(機械1名、建設1名、物質1名)

## 2 - 4 中期計画における年度計画の実施

中期計画に基づき全学の教育委員会に報告すべき工学部FD活動の内容の公表方策について評価・検討を行った。

## 3 . 残された課題、将来解決すべき事項

### 3 - 1 授業評価アンケートの実施拡大

授業評価アンケートは、各教員の担当する1つの科目について実施しているが、前学期に実施してしまえば後学期の講義の評価がなされない。システムとして考えれば当然全ての授業科目について評価アンケートが成されるべきであるが、その一方で実施のための労力や集計にかかる費用の負担が大きな問題となる。このため、アンケートの効果を高める方策の検討を含めて、授業評価アンケートの件数拡大について慎重に議論する必要がある。

### 3 - 2 公開授業の参加者数拡大と実施時期

公開授業は、各教室での1つの授業科目について実施しているが、現在は後学期に集中して行われており、時期も偏るため、参加聴講する教員の数も伸び悩んでいる。前学期に公開授業を実施するために迅速な準備を行うことと、参加教員を増加させるための広報方法について、改善が必要である。

### 3 - 3 教育方法開発活動に対する理解促進と学生の参画

学生との懇談会を再開し、あるいは授業環境改善の要望に応える努力を今年度重ねた上で、教員と学生の双方がこの活動の受益者であらねばならないが、活動自体の内容や意義が、工学部の教員や学生の集団全体に広く知られていない状況がある。特に、授業環境の改善については、学生に声を上げてもらう機会を増やすと同時に、事務局や教員がその要望を聞いて取り組むだけでなく、学生自身が改善活動に寄与・参加でき、その成果が学生自身のメリットにつながるようなプログラムの設定が望まれる。これについては本委員会だけでなく学生委員会などとの連携が必要であろう。活動や情報収集の規模を拡大すればするほど、それに要する費用や労力が増大してゆくような取り組み方法ではなく、活動に関わる主体をどれだけ立体的に広げてゆける仕掛けがつかれるかが、今後のFD活動を有効にする上での課題であろう。

### 3 - 4 大学院（工学研究科）におけるFD活動

工学研究科の各専攻におけるFD活動は、現在のところ学部における活動の延長、という形で行われているが、公開授業、授業評価アンケートの双方について、大学院の授業科目に関しても実施する方策を今後考えて良い。学部、大学院教育の連続性や一体性を考えるにあたって、早急な大学院でのFD活動の展開を検討すべき時期に来ている。

## 4 . 委員会の議論に使われた資料

主な資料として

- (1) 平成18年度 年度計画
- (2) 平成18年度 学年暦
- (3) 平成17年度 公開授業の実施報告書
- (4) 平成18年度 全学教育委員会資料

## 5 . 工学部の現状に関する意見、又は改善に関する提言

「工学部・工学研究科教育等改善会議」が2005年度より設置され、単独の委員会の範疇で解決しづらい問題の議論や取り組み内容の共有が可能なくみが整いつつある。この会議をいかに有効に機能させるかが、今後の工学部における教育の質の改善を図るための、大きな課題であろう。

## 6 . 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

公開授業や授業評価アンケート内容の公表方法に関しては、FD委員会の中だけで議論することに限界があり、まず時間をかけて学科長会などで必要性を議論した上で工学部教員の全体の合意形成を行い、それを前提として具体的な方策、実施方法の検討をFD委員会が受け継ぐ、という形にしなければ、新たな取り組みの展開は難しいと思われる

## 3 . 2 . 7 工学部・工学研究科安全環境委員会

### 1 . 今年度取り組んだ課題

- (1) 安全衛生ミーティングの新設

研究室単位の「安全衛生ミーティング」の実施要綱を定め、平成19年度からの年二回の実

- 施を決定した。
- (2) 事故等防止のための設備等の整備  
 ドラフトの増設、安全柵の設置、階段の手すりや滑り止め、アスベスト含有の恐れのあるタイルの除去・張替えなどを含め、安全衛生推進室および安全衛生委員会との連携のもとで計画を実施できた。また、教室等のスチーム配管による火傷防止のため、高温注意のシールを貼った。
- (3) 「実験・実習における安全の手引き」の改訂。平成19年度版の作成。  
 本年度版の内容について、分野ごとに担当を定め改訂作業を行った。特に、用語の見直しに注意を払った。
- (4) 中期目標・中期計画の達成評価と次年度の計画  
 ほぼ計画に従い活動を進め「3」の達成度と評価できたので、次年度の計画は従前通りとすることにした。
- 2. 今年度採択した事項**
- (1) 安全衛生ミーティング実施要項。  
 (2) 安全衛生ミーティング記録様式。  
 (3) 学科・コースおよび研究室単位での安全講習会も継続的に実施し安全教育実施報告書を提出する。
- 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項**
- (1) 防災対策パンフレットの作成  
 (2) 防災・避難の組織的訓練
- 4. 委員会の議論に使われた資料**
- (1) 工学部の平成18年度版「実験・実習における安全の手引」  
 (2) 中期目標・中期計画 ファイル
- 5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見、又は改善に関する提言**
- (1) 学生の安全と教職員の安全は本来不可分であるために、その視点からの委員会活動の合理化。  
 (2) 戸畑キャンパス内の建物改修も進められているが、学生寮等耐震性の劣る建物が残っており、改修計画の目処が立つことが望ましい。
- 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点**  
 安全衛生委員会との連携を深めるため、毎月開催される当該委員会にはオブザーバーとして積極的に参加し、工学部安全衛生委員会に報告した。特に保健センターを利用した学生について、特に注目すべき事故を中心に、その内容を各教室へ通知した。

### 3.2.8 工学部・工学研究科情報化推進委員会

#### 1. 今年度、委員会が取り組んだ課題

- (1) 本委員会組織に関わる検討
- A. 情報ネットワーク・セキュリティ専門部会委員の推薦
  - B. 副委員長を選出、及び全学情報化推進委員会への副委員長のオブザーバー参加
  - C. 情報セキュリティーポリシー策定部会委員の推薦
  - D. 総合情報基盤構築計画策定プロジェクト委員の推薦
- (2) 全学運用情報化関連ソフトウェアの工学部での運用方法の改定と実施
- A. ウイルス対策ソフト
  - B. マイクロソフトキャンパスアグリーメント
  - C. マセマティカ
- (3) ICカードの導入
- (4) コンピュータの更新
- (5) 違法行為防止、及びセキュリティ向上についての検討と対処
- A. 情報モラル教育
  - B. 工学部情報倫理教育のための小冊子の配布
  - C. 工学部におけるインシデントに対する調査と報告
  - D. 情報モラルチェックリストの配布

- E. 情報セキュリティ対策ビデオ利用の決定
- F. 購入ライセンスのリスト記載実施の決定
- G. 教室におけるファイアウォールの現状に関する調査
- H. ネットワークにおけるセキュリティ対策（ファイアウォールの導入、管理、運営等）に関する調査（情報科学センターの提案に基づく）

## 2. 今年度、委員会が採択した事項

### (1) 本委員会組織に関わる検討

#### A. 情報ネットワーク・セキュリティ専門部会委員の推薦

前任者の任期切れに伴い情報ネットワーク・セキュリティ専門部会委員を委員会内より選び推薦した。

#### B. 副委員長の選出、及び全学情報化推進委員会への副委員長のオブザーバー参加

学部を代表して全学の委員会で果たす役割に留意し、次年度の委員長予定者である副委員長を前年度同様教授より選出した。また、審議や状況把握の継続性確保のため副委員長に全学の委員会にオブザーバーとして参加してもらうこととした。

#### C. 情報セキュリティーポリシー策定部会委員の推薦

政府機関の情報セキュリティ対策のための統一基準の制定に伴う本学の情報セキュリティーポリシーの改正のために発足した情報セキュリティーポリシー策定部会の委員の内、情報化推進委員会委員長が指名する委員について工学部からの推薦を依頼されたため、経験等を加味して前工学部情報化推進委員会委員長を推薦した。

#### D. 総合情報基盤構築計画策定プロジェクト委員の推薦

プロジェクトの発足に伴い委員の推薦を求められ、当委員会内より選び、推薦した。

### (2) 全学運用情報化関連ソフトウェアの工学部での運用方法の改定と実施

#### A. ウィルス対策ソフト

Server Protect のメディアの購入を決定し、ウィルス対策ソフトウェアインストール許可申請書の様式を変更した。

#### B. マイクロソフトキャンパスアグリーメント

ウィルス対策ソフトとともにインストールを情報基盤室でも受け付けることとした。昨年に引き続き、卒業者向け学生使用許諾証明書とそのための発行申請書を配布した。Vista への対応を協議し、メディアの購入を決定した。これに伴い、インストール許可申請書を更新し、学生への周知を図った。また、Vista の学生へのインストールは図書館では行わないことを確認した。

#### C. マセマティカ

契約切れとなる平成 20 年度以降の継続の有無について、使用者のアンケートを実施し、次年度 9 月頃までに結論が得られるよう検討を開始した。引き続き、契約解除を想定した代替え案や継続の場合のメリット等を検討することとなった。

### (3) IC カードの導入

昨年度の決定事項（非接触型フェリカ、新機能付き）に基づき、カード導入に係る各部署の担当者を含めた学生証・身分証明書 IC カード化ワーキンググループを設置し、カードの導入日程、機能等を検討した。さらに、各部署での対応内容を決定し、入札への道筋を付けた。これにより、平成 19 年度からの学生証と職員証の IC カード化が実現した。

### (4) コンピュータの更新

図書館、教育支援課のパソコンについては今年度で廃止、各教室のパソコンは当該教室が必要であれば買い取ることとし、次年度以降は学部長経費と社会人教育用経費によってレンタルパソコンを導入することとした。さらに、機種、台数等の詳細についてはワーキンググループを設置して審議し、その結果に基づいて次年度以降の導入計画を決定した。これに沿って本年度末までに図書館（40 台）、教育支援課（7 台）、情報基盤室（1 台）に計 48 台のレンタルパソコンが導入された。

### (5) 違法行為防止、及びセキュリティ向上についての検討と対処

#### A. 情報モラル教育

違法行為防止やセキュリティ向上を目的として、学部と大学院の新生オリエンテーシ



ョンで情報モラル教育を行った。また、随時必要な情報を提供し、各教室での周知に努めた。

**B．工学部情報倫理教育のための小冊子の配布**

小冊子「ネットワークをよりよく安全に使うために」を学生、教職員に配布し、ネットワーク・計算機を利用する際の安全性と情報倫理の維持・向上に努めた。平成19年度については工学部製作の本冊子を基に部分改訂し全学用の冊子を作成し、大学全体で配布することになった。

**C．工学部におけるインシデントに対する調査と報告**

航空部の学生名簿流出の経緯について調査を行い、情報ネットワークセキュリティ専門部会に報告した。

**D．情報モラルチェックリストの配布**

後期の情報モラル向上週間に合わせて情報モラルチェックリストを学部、大学院の全学生を対象として配布し、モラル向上を図った。

**E．情報セキュリティ対策ビデオ利用の決定**

全学委員会で提案のあった次年度前期情報モラル向上週間における情報セキュリティ対策ビデオの利用について、出来る限り大学院を含めた学生全員に視聴させる方向で協力することを決定した。

**F．購入ライセンスのリスト記載実施の決定**

次年度4月以降に購入されるソフトウェアについて、研究室単位で台帳を利用して管理することを申し合わせた。これに伴い、情報工学部で使用されている例を元に、様式等を作成し、各教室に実施を依頼した。

**G．教室におけるファイアウォールの現状に関する調査**

平成17年度学術情報基盤実態調査においてファイアウォールを未導入と答えた教室の状況を調査し、全学委員会へ報告した。

**H．ネットワークにおけるセキュリティ対策（ファイアウォールの導入、管理、運営等）に関する調査（情報科学センターの提案に基づく）**

情報科学センターの提案による、大学とSINETとの出入り口でのファイアウォールの適用案の実施について合意が得られ、アクセス遮断の除外の希望について調査した。

**3．残された課題，又は将来解決すべき事項**

**(1) 情報基盤室の業務の支援と協力関係**

平成18年度設置が決まった工学部・工学研究科情報基盤室の業務の円滑な実施を支援し、本年度に引き続いて適切な協力関係を築いていく必要がある。また、共通教育等の改修の完成に伴う情報基盤室の移転について必要に応じて実施段階での問題の解決を行う。

**(2) 情報モラル教育とセキュリティの向上等**

引き続き情報モラル教育とセキュリティの向上に留意し、更にインシデントが発生した場合には初動対応の迅速化に心がける。キャンパス全体を視野に入れ、ファイアウォールの設置等、安全な管理システムの構築を引き続き検討する。

本年度に実施を決定した購入ライセンスの管理台帳の記載を徹底し、将来の完全管理への努力を続ける。

**(3) コンピュータの配置計画**

本年度末に導入されたレンタルコンピュータについて、今後運用に伴って出来る問題点を調査し、対処する。

**(4) ICカードの導入**

平成19年度からの導入が準備された工学部・工学研究科のICカードについて、今後運用に伴って出来る問題点があれば対処する。

**(5) マセマティカ**

平成20年度以降の継続の有無について決定し、代替策が必要な場合にはその処置を講ずる。

**(6) 情報セキュリティポリシーの改訂**

今年度末に纏められた情報セキュリティポリシー改訂案における課題を検討し、全学の情報化推進委員会での完成に協力する。

#### 4. 委員会の議論に使われた資料

- (1) 平成18年度工学部情報化推進委員会委員名簿
- (2) 工学部・工学研究科情報化推進委員会内規
- (3) 九州工業大学情報ネットワークセキュリティ専門部会要項
- (4) ICカード検討WG(最終報告)について
- (5) コンピュータの更新等について - 配置計画(案)
- (6) ウィルス対策ソフトウェアインストール許可申請書
- (7) 学生証・職員身分証明書ICカード化検討WG報告資料
- (8) レンタルパソコン仕様書
- (9) 情報モラルチェックリスト
- (10) 学生証・職員身分証明書ICカード仕様および導入スケジュール表
- (11) 教育支援システム(工学部レンタル計算機)の導入に関する方針
- (12) ファイアウォールについての調査
- (13) Microsoft Windows Vistaに関する資料
- (14) 新入生用全学共通情報セキュリティパンフレットの変更について(案)
- (15) 戸畑キャンパスカードについて
- (16) キャンパスアグリーメント学生使用許諾書の発行について
- (17) ソフトウェア管理について(ソフトウェア管理簿整備のお願い)
- (18) 「ネットワークをよりよく安全に使うために」
- (19) 平成20年度のマセマティカについて(見積書)
- (20) Mathematica アンケート結果
- (21) 全学情報化推進委員会議事録および資料
- (22) その他

#### 5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見,又は改善に関する提言

情報セキュリティの向上が社会からも強く問われる時代にあり、より安全なシステムの構築が急務である。工学部のみでなく、キャンパス全体、あるいは大学全体を視野に入れたシステムティックな対応が是非必要である。さらに、ライセンス管理についても、完全な実施が必要な時期に来ており、対策が急がれる。

#### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

平成18年度に設置された情報基盤室について、運営が軌道に乗りつつあるが、必要な人員(室員)の確保など、基盤室の業務が十分に遂行できるよう、今後とも更に支援する必要がある。

### 3.2.9 工学部・工学研究科広報委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

(1) 教育, 研究, 組織及び運営についての公表の方針, ホームページに関すること等を検討することにした。平成17年度は, 全学としての博多駅電照広告, 九工大トップ技術の発行準備など広報活動に関する様々な試み, 提言がなされた。また, 18年度は全学の広報活動をいっそう充実すべく, 効果的な費用の用途を含めて議論がなされた。これを受けて, 工学部としては, 全学のこれらの活動に積極的に協力すると共に, 工学部ホームページ改善に向けての準備, 提案を行った。

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 九工大通信の研究最前線を担当した。
- (2) 発行した「九工大の世界トップ技術 Vol.1」が非常に好評のため増刊を検討し採択した。
- (3) 「九工大の世界トップ技術 Vol.2」を発行することにした。
- (4) 工学部ホームページの改善作業に着手した。
- (5) 大学全体で統一デザインの名刺を利用することの問題点を整理した。

#### 3. 残された課題または将来解決すべき事項

工学部ホームページのブラッシュアップ  
工学部広報用のDVD作成についての検討

#### 4. 委員会の議論に使用された資料

- (1) 平成18年度委員会名簿
- (2) 九州工業大学広報委員会規則
- (3) 九州工業大学工学部・工学研究科広報委員会内規

#### 5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

工学部における入学試験志願倍率を上げるためにも、広報活動の強化が必要である。今年度からの広報活動費が大学として予算化されたことを受けて、工学部全体での連携を深めると共に広報活動の充実のために、工学部ホームページの改善を推進し、実効性の上がる広報活動を行うよう工学部全体で議論を深めたい。

#### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

工学部のホームページの改善完了を4月下旬を目処に行っているが、来年度はホームページの実効性を調査し、改善点があれば改善する必要がある。また、統一デザインの名詞、九工大の商標登録など議論を深める必要がある。

### 3.2.10 工学部学生募集活動委員会

#### 1. 今年度、貴委員会が取り組んだ課題

当委員会が主催する定例的な活動としては、オープンキャンパス、大学説明会（高校訪問）、また、他大学や業者等が主催する進学説明会への参加、高校等から依頼される工学部見学、大学案内の編集補助等があり、本年度は各活動について下記のような課題を持って取り組んだ。

- (a) オープンキャンパス：タイムスケジュール全体の見直しなど
- (b) 大学説明会（高校訪問）：より効果的な高校への訪問実施
- (c) 進学説明会：業者主催の説明会への積極的参加
- (d) 高校からの工学部訪問への対処：希望学科・コースへの協力
- (e) 大学案内の編集補助：研究室及び学生推薦等の取材協力

#### 2. 今年度、貴委員会が採択した事項

前項目の活動及び各課題を解決するため下記事項を採択した。

- (a) オープンキャンパス
  - (1) 今年度のオープンキャンパスは8月7日(月)と8日(火)に開催した。参加人数は968人(1日目620人、2日目348人)であった。
  - (2) 実施内容は次のとおりである。午前中に全学科の見学を実施し、午後に学科・コース説明およびアンケート調査の後に、テーマ別自由見学を実施した。
  - (3) 学科の見学会においては、昨年と同様に説明者の服装、態度に関して改善をお願いすると共に、より平易な説明を心がけていただけよう依頼した。本年度のアンケート結果では、「わかりやすさ」が5点満点で3.79、「満足度」は3.79であった。
  - (4) 期間中にボランティアで協力していただく生協学生委員に対して、服装、態度に関して改善をお願いすると共に、説明内容をキャンパス生活などに限定するように依頼した。
- (b) 大学説明会（高校訪問）
  - (1) 昨年と同様に福岡県内の志望者数上位50校に対してアンケートを行い、訪問希望のあった高校及び個別に依頼があった高校の計27校に対して訪問を実施した。
  - (2) 各校1名での訪問に関して議論し、訪問担当者の準備が十分であれば、実施可能であろうと結論づけられた。
- (c) 進学説明会
  - (1) 業者主催の進学説明会については、積極的に参加する方針で21の説明会に参加した。広いエリアで入学希望者を募るという考えのもと、県外で実施される進学相談会にも参加した。
- (d) 高校からの工学部訪問
  - (1) 本年度は福岡県立門司北高校他 計7校から見学依頼があった。1校キャンセルがあった

が、4校の見学会を本委員会が、2校の見学会を現代GP（理数教育支援センター）が実施した。

(2) PTAが100名参加した福岡県立筑前高校からの見学依頼では、対応可能な6つの教室で協力して見学会を実施した。

(e) 大学案内の編集補助

(1) 来年度の大学案内は大幅に変更せず、学生のコメントとデザインの変更程度にとどめることを確認した。

### 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

本年度も、充実したオープンキャンパス、高校訪問を目指して検討してきたが以下のような課題が残されている。

(a) オープンキャンパス

午前中に全学科の見学を実施して全学科を理解する機会を与えることができたが、午後の自由見学時間が短いとの意見があった。午後の見学時間は団体の帰宅時間を配慮したものであったが、終了時間を短くして見学延長を許可するよりも、終了時間を延ばして途中帰宅を許可する方針の方が良いと思われる。

(b) 大学説明会（高校訪問）

より多くのより優秀な学生募集を行うため、福岡県外の高校も対象に含む必要があることが今年度も指摘された。また、各校1名での訪問の可能性が議論され、実施可能との結論に至ったが、訪問担当者の準備方法や情報工学部との意見・資料統一などが、さらに必要になると考えられる。

(c) 進学説明会

ある種の進学説明会は参加者が少なく、また参加者が多くても入学対象者があまり多くない場合もあり、参加についてはそれぞれの進学説明会の近況に基づいて参加の判断を下す方が効率的である。業者主催及び予備校主催の進学説明会は積極的に参加すべきである。また、現状は国立大学法人であることから参加料を払わずに済んでいるが、今後、参加料が必要となる可能性があり、何らかの予算処置をする事態が生じる可能性がある。

### 4. 委員会の議論に使われた資料

高校訪問アンケートおよび調査結果、オープンキャンパスアンケートおよび調査結果、大学案内、進学説明会趣意書等。

### 5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見、又は改善に関する提言

(a) 大学説明会（高校訪問）

高校側の希望は大学案内・入試情報・就職情報・研究紹介等の多岐に渡っている。この現状に、整理されていない情報が高校側に伝わると混乱される可能性が高い。各種広報活動との連携が重要性を増すとともに、情報工学部との情報の整理が必要になってくるものと思われる。大学説明会（高校訪問）が各校1名で実施されるには、学部の説明ではなく大学の説明を行うため、工学部・情報工学部で統一された情報を発信できるようにする必要がある。

(b) 大学案内

例年大学案内の準備が年末年始から始められるため、準備が不十分なまま印刷まで進んでしまう感じがある。例えば、写真撮影が冬になるため冬服の写真が多いが、高校に配布する時期は夏であり、季節感にずれが起こる。写真撮影などは早い時期からの準備が必要である。

### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

(a) オープンキャンパス

昨年度と同様に全学科を午前中に見学して見学内容自体は充実していると思われるが、午後の自由見学時間が短いとの意見があった。自由見学時間の延長と自由見学時の移動の案内を検討する必要がある。

(b) 高校訪問

より多くのより優秀な学生募集を行うため、福岡県外の高校も対象に含む必要があり、各校1名での訪問が可能になった場合には、県外域にも募集活動が行える体制が整うものと思われる。ただし、交通費などの予算についても今後検討が必要になる。

### 3.2.1.1 工学部予算委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 平成18年度工学部予算について審議した。
- (2) 平成18年度工学部業績等配分経費について審議した。
- (3) 平成18年度予備的経費の執行について審議した。

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 工学部予算配分方針を決定した。
- (2) 学部長裁量経費を決定した。
- (3) 光熱水費保留額は、全額を工学部事務部において保留することとした。
- (4) 工学部業績等配分経費の配分方法を決定した。
  - ・ 業績等評価配分経費について、修了者数に単位取得退学後の授与者を含めることとした。

#### 3. 残された課題または将来解決すべき事項

- (1) 大学共通経費の算定の更なる見直し
- (2) 将来にわたっての教育・研究経費の確保
- (3) 全学的な予算配分方針の際に、学部・教室から意見を出せる仕組みの更なる検討

#### 4. 委員会の議論に使用された資料

- (1) 工学部・工学研究科予算について
- (2) 平成18年度工学部・工学研究科予算配分
- (3) 平成18年度工学部・工学研究科予算配分書
- (4) 工学部・工学研究科業績等評価配分経費の配分方針
- (5) 平成18年度工学部・工学研究科業績等評価配分経費配分書

#### 5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

- (1) 教育・研究経費の確保
- (2) 省エネシステムによるエネルギー経費の節約

#### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 効率的予算の配分および執行
- (2) 教育・研究経費の確保に務めた。

### 3.2.1.2 工学部図書委員会

#### 1. 今年度本委員会が取り組んだ課題

- (1) 工学部学生用図書の予算配分額と選定について
- (2) 電子ジャーナル経費の全学共通経費化について
- (3) 附属図書館本館所蔵図書の廃棄図書選定について
- (4) 語学学習資料(専門英語)の整備について
- (5) 工学部研究報告の原稿募集について
- (6) 明治専門学校時代の蔵書(書庫4層及び5層)の廃棄について

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 工学部学生用図書の予算配分額と選定について：  
第1回工学部図書委員会において、工学部学生用図書の予算配分額案が示され、審議の結果、原案のとおり承認した。また「学生用図書資料の整備・選定に関する実施要領」に基づいて選定作業を行うことを確認し、その後、選定作業を行い、期日までに完了した。
- (2) 電子ジャーナル経費の全学共通経費化について：  
第1回工学部図書委員会において、電子ジャーナル経費の全学共通経費化について報告を受けた。委員から電子ジャーナル「ブラックウエル」コンソーシアムへ参加の検討をお願いしたい旨の意見があり、参加経費等の資料収集の上、本委員会において協議することが承認された。

- (3) 附属図書館本館所蔵図書の新刊図書選定について：  
第1回工学部図書委員会において、新刊図書選定委員会により選定した新刊図書冊数と新刊方法について報告があり、確認した。
- (4) 語学学習資料(専門英語)の整備について：  
附属図書館運営委員会により決定された「工学基礎および専門教育に係る英語の視聴覚教材整備額配分」を受け、工学部図書委員会では、電子メールを介してこの選定作業を行った。
- (5) 工学部研究報告の原稿募集について：  
工学部研究報告(数理編、人文・社会科学編)投稿要項に基づいて、電子メールにより原稿の募集を行った。その結果、数理編2編、人文・社会科学編5編の投稿を受けたことを確認した。
- (6) 明治専門学校時代の蔵書(書庫4層及び5層)の新刊について：  
明治専門学校時代の蔵書について新刊対象リストを確認する作業を行った。その際、一部の委員より次のような意見が挙げられた。
1. 新刊対象とすることが適当であるか判断できない。
  2. 時間的理由により十分に確認することができない。

これらについて検討した結果として、附属図書館長から、今一度、資料的価値を慎重に調査すべきであるという判断に達し、これらの新刊の審議については、当分の間保留する旨の報告を受けた。

### 3. 残された課題または将来解決すべき事項

上記2(2)の電子ジャーナル「ブラックウエル」コンソーシアムへの参加希望については附属図書館事務長から附属図書館運営委員会での検討依頼をお願いしたい。また、他の電子ジャーナル購入についての工学部からの意見収集等を行う機会を得ることができなかった。

### 4. 委員会の議論に使われた資料

- (1) 工学部学生図書購入予算配分(案)
- (2) 電子ジャーナル全学共通経費リスト
- (3) 学生用図書選定リスト

### 5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

現在、工学部図書委員会は、附属図書館運営委員会の下請け作業委員会として存在しているように感じられる。少なくとも本委員会委員長が附属図書館運営委員会に出席できるような組織改編を希望する。

### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善および新たな問題点

昨年度の提言として「基礎教育に関わる映像資料の整備」があったが、これは上記2(4)の語学学習資料の整備のための予算配分により実現されたと言える。

## 3.2.13 工学研究科学務委員会

### 1. 委員会が取り組んだ課題

#### 1) 中期計画の実施について

学務委員会が担当する中期計画は大学院での教育に関連した事項であり、教育理念や目標の設定、学部教育との関連、インターンシップなどの事項について各専攻や分野ごとに確定、実施してゆくことである。これを確実なものにするために、各専攻・分野ごとに授業科目の系統図を作り、その中に 中期計画で掲げた課題の記載を盛り込むことにした。その系統図は平成18年度に完成させ、19年度版の便覧に掲載することを決めた。

博士後期課程学生の指導強化、指導教員グループの充実を図るため、「教育・研究活動報告書」の検討を行い、報告書様式を決めた。

大学院Webサイトについて統一様式を定め、学生便覧の整備を行うとともに、平成18年度からHP上で公開することを決めた。

#### 2) 新社会人コースの新設に伴う学生便覧、学修細則の改正について

長期履修制度を取り入れた新社会人コースの新設に伴い、それに関連する学生便覧の整備を行った。とりわけ、新社会人コースのために新設科目をいくつか開設することになった。

- 3) うびきの SoC アカデミー「半導体講座」をはじめとした、外部機関による実習・演習について、「学外実習」、「学外演習」として単位認定することを決めた。
- 4) 大学院と学部の講義の相互乗り入れについて議論を行った。
- 5) 奨学金返還免除候補者の選考ルールを確定した。

## 2. 委員会が採択した事項

- (1) 学生異動について
- (2) 学生の除籍について
- (3) 博士後期課程指導教員グループについて
- (4) 日本育英会奨学金大学院奨学生の選考について
- (5) 国費外国人留学生（研究留学生）の受け入れについて
- (6) 学生異動及び派遣学生報告書について
- (7) 長期履修申請について
- (8) 特別研究学生の受け入れについて
- (9) 遠隔教育による大学院単位互換協定に基づく特別聴講学生について
- (10) 大学院工学研究科学修細則の一部改正について
- (11) 学生生活実態調査アンケートについて
- (12) 工学研究科の学位授与基準について、来年度の学生便覧に掲載すること、学内HPへは各分野毎の授与基準とあわせて公開することとした。
- (13) 系統図を10月を目途に仕上げ、来年度のHP、学生便覧に掲載できるようにした。
- (14) 博士前期課程修了査定手続きを取りまとめた。
- (15) 単位互換協定校等と実施した科目を履修した学生に対するアンケート調査を行うこととした。
- (16) 学部との一貫教育、GPA 予算確保の話、学部を含め成績評価資料の保管に係る保管場所、など教育等改善会議に提言することとした。
- (17) 社会人修学支援講座で実施する科目については、単位を与える場合もあるため、科目等履修生、聴講生として取り扱うこととした。
- (18) 成績評価（GPA）導入に関して、オリエンテーションを通じ、十分な周知を図り、病気等で適正な履修申告ができない場合は、学部同様、学務委員が判断し、適切に対応することとした。
- (19) 課程AおよびBについて履修課程表に係わる事項を審議した。

## 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

- (1) 中期目標・中期計画の実行
- (2) 改組関係の学務関係事項のとりまとめ

## 4. 委員会の議論に使われた資料

- (1) 工学研究科学学生便覧
- (2) 九州工業大学大学院工学研究科委員会規則
- (3) 九州工業大学大学院工学研究科運営委員会内規
- (4) 九州工業大学大学院工学研究科学務委員会内規
- (5) 九州工業大学中期目標・中期計画
- (6) 九州工業大学における日本学生支援機構大学院第一種奨学金の返還免除候補者選考に関する規程

## 5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見、又は改善に関する提言

- (1) 成績評価（GPA）導入、博士前期課程修了査定手続き、短縮修了・博士前期課程学生の修了手続き、改組関係審議事項など非常に多くの審議事項を何とかこなしたが、前年度からの積み残しの審議事項が多いのは審議項目の設定方法に問題があるように感じた。
- (2) 委員は教室の利益代表ではなく工学研究科の大学院学務全体を扱っているという共通の自覚が必要であると感じた。

## 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 博士後期課程の充足率改善に関して、改組の関係もあり今後改善されると考えられる。

- (2) 学部の授業を無料にて履修出来るシステムが必要かどうかに関しては、審議を継続する必要がある。

### 3.2.14 工学研究科入学試験委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 平成18年度工学研究科入学者選抜要項(案)について審議した。
- (2) 平成18年度工学研究科博士前期課程推薦選抜要項(案)について審議した。
- (3) 平成18年度大学院工学研究科博士前期課程及び後期課程学生募集要項(案)について審議した。
- (4) 入学定員(案)について審議した
- (5) 工学研究科博士前期課程〔推薦選抜〕入学試験成績報告書について審議した。
- (6) 工学研究科入学試験過去問題の公開方法について審議した。
- (7) 修士の学位を有しない者の出願資格の認定に関する申し合わせの一部改正について審議した。
- (8) 出願資格認定委員会委員の選出について審議した。
- (9) 工学研究科アドミッションポリシーの周知方法について審議した。
- (10) 平成18年度大学院工学研究科博士前期課程推薦選抜入学試験合格者の選考について審議した。
- (11) 平成18年度(推薦選抜合格者決定後の)大学院工学研究科博士前期課程一般選抜募集人員について審議した。
- (12) 平成18年度大学院工学研究科博士後期課程(第1回及び第2回学生募集)入学試験の出願資格認定について審議した。
- (13) 英語の試験に係る TOEIC 導入について審議した。
- (14) 学校長推薦を受けた北九州高専専攻科修了予定者の推薦選抜での受け入れについて審議した。
- (15) 平成18年度大学院工学研究科博士前期課程及び後期課程(第1回募集)入学試験合格者の選考について審議した。
- (16) 社会人長期履修制度について審議した。
- (17) 中期計画の年度計画策定について審議した。
- (18) 平成19年度工学研究科入学者選抜要項(案)について審議した。
- (19) 平成19年度工学研究科博士前期課程推薦選抜要項(案)について審議した。
- (20) 平成19年度大学院工学研究科博士前期課程及び後期課程学生募集要項(案)について審議した。
- (21) 平成18年度大学院工学研究科博士前期課程及び後期課程(第2回募集)入学試験合格者の選考について審議した。

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 工学研究科アドミッションポリシー周知のため、ホームページ及び学生募集要項に掲載することとした。
- (2) 工学研究科入学試験過去問題の公開について、従来は入試課窓口での閲覧のみとしてものを、学外者については希望する専攻分野の過去問題のコピー送付を認めることとし、学内者についても同じ対応を各専攻分野事務室において執り行うこととした。
- (3) 推薦選抜合格者が募集人員に満たなかった専攻について、その不足した人員を一般選抜(第1回)の募集人員に加えて募集することとした。
- (4) 九州工業大学大学院入学試験委員会内規を一部改正した。
- (5) 一部の専攻で、英語の試験に TOEIC を導入した。
- (6) 修士の学位を有しない者の出願資格の認定に関する申し合せを一部改正した。
- (7) 中期計画の平成18年度計画案は、工学研究科アドミッションポリシーの公表と周知徹底の方法及び評価方法の検討し、「必要に応じてアドミッション・ポリシーの見直しを行い周知を継続する」とした。

#### 3. 委員会の議論に使用された資料

- (1) 平成18年度工学研究科入学者選抜要項(案)
- (2) 入学定員(案)



- (3) 平成18年度九州工業大学大学院工学研究科博士前期課程学生募集要項(案)
- (4) 平成18年度九州工業大学大学院工学研究科博士後期課程学生募集要項(案)
- (5) 工学研究科博士前期課程(推薦選抜)入学試験成績報告書(案)
- (6) 平成18年度九州工業大学大学院工学研究科博士前期課程追加学生募集要項(案)
- (7) 「中期目標・中期計画」
- (8) 平成19年度工学研究科入学者選抜要項(案)
- (9) 平成19年度九州工業大学大学院工学研究科博士前期課程学生募集要項(案)
- (10) 平成19年度九州工業大学大学院工学研究科博士後期課程学生募集要項

#### **4. 工学研究科の現状に関する意見または改善に関する提言**

- (1) 工学研究科のアドミッションポリシー評価方法の確立。
- (2) 博士後期課程定員の確保。

#### **5. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点**

- (1) 工学研究科アドミッションポリシー周知のため、ホームページ及び学生募集要項に掲載することとした。
- (2) 社会人長期履修制度の導入を決定した。

### **3.2.15 DNA実験安全管理委員会**

活動実績なし。

### 3.3 教員組織

#### 3.3.1 教員の配置

##### 専門学科

表3.3.1 工学部専門学科定員現員及び教員一覧 (平成18年4月1日現在)

学科	講座名	教授		助教授		講師		助手		技術職員等	合計
		現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	現員
機械知能工学科	材料科学	2	原田 昭治 野田 尚昭	2	黒島 義人 河部 徹	0		0			4
	生産工学	2	水垣 善夫 小林 敏弘	3	吉川 浩一 清水 浩貴 金 亨燮	1	高藤 和樹	1	田丸 雄摩		7
	熱流体学	2	西 道弘 鶴田 隆治	2	梅景 俊彦 長山 暁子	0		2	吉田 幸一 谷川 洋文	19	6
	制御知能学	3	田川 善彦 石川 聖二 坂本 哲三	3	大屋 勝敬 相良 慎一 黒木 秀一	0		2	西田 健 タジューキ		8
	宇宙工学	4	兼田 禎宏 橘 武史 米本 浩一 赤星 保浩	2	松田 健次 平木 講儒	0		2	井上 昌信 西川 宏志		8
	小計	13		12		1		7		19	52
建設社会工学科	国土デザイン工学	3	渡辺 義則 秋山壽一郎 永瀬 英生	3	仲間 浩一 鬼束 幸樹 伊東啓太郎	1	寺町 賢一	0			7
	基盤建設工学	4	久保 喜延 山崎 竹博 幸左 賢二 山口 栄輝	4	廣岡 明彦 木村 吉郎 日比野 誠 重枝 未玲	0		1	加藤九州男	4	9
	小計	7		7		1		1		4	20
電気工学科	電気エネルギー工学	4	近藤 浩 匹田 政幸 三谷 康範 趙 孟佑	2	白土 竜一 大塚 信也	0		0			6
	電子デバイス工学	3	並木 章 西垣 敏 藤原 賢三	4	和泉 亮 川島 健児 遠山 尚武 内藤 正路	0		4	稲永 征司 佐竹 昭泰 鶴巻 浩 羽野 一則	16	11
	電子機器工学	3	岩根 雅彦 二矢田勝行	0		0		2	山脇 彰 水町 光徳		5
	通信システム工学	2	桑原 伸夫 水波 徹	1	上松 弘明	0		1	張 力峰		4
	センシング・システム工学	3	芹川 聖一 高城 洋明 前田 博	2	生駒 哲一 中司 賢一	0		2	楊 世淵 河野 英昭		7
	電子物性	2	高木 精志 出口 博之	1	美藤 正樹	0		1	松平 和之		4
	小計	17		10		0		10		16	53

物質工学科	分子創製化学	2	柘植 顕彦 吉永 耕二	4	新井 徹 荒木 孝司 岡内 辰夫 北村 充	0		2	橋本 守 毛利恵美子		8
	機能設計化学	3	横野 照尚 古曳 重美 竹中 重織	3	植田 和茂 津留 豊 坪田 敏樹	0		1	下岡 弘和		7
	物質生産化学	2	鹿毛 浩之 清水 陽一	1	山村 方人	0		1	馬渡 佳秀		4
	マテリアル機能工学	1	長谷部光弘	2	大谷 博司 野口 文男	0		1	山根 政博	12	4
	マテリアルプロセス工学	2	寺崎 俊夫 恵良 秀則	4	秋山 哲也 廣田 健治 篠崎 信也 高須登実男	0		4	伊藤 秀行 大坪 文隆 北村 貴典 和才 京子		10
	小計	10		14		0		9		12	45
合計	47		43		2		27		51	170	

上欄の( )数字は、臨時増募定員で外数。(以下、表3.2~3.4にも共通)  
技術職員等は、教務職員を含む。

### 共通講座

表3.3.2 工学部共通講座定員現員及び教官一覧 (平成18年4月1日現在)

講座名	教授		助教授		講師		助手		技術職員等	合計
	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名		
人間科学	7	井上 寛 本田 逸夫 村田 忠男 田吹 昌俊 藤澤 正明 橋本 年一 鳥井 正史	7	中村 雅之 水井万里子 李 友炯 ラクトン・I 虹林 慶 岡野 裕司 アトケル恭子	4	大野瀬津子 八丁 由比 今井 敦 東野 充成	0			18
数理情報基礎	7	加藤 幹雄 酒井 浩 三村 文武 池田 敏春 岡本 良治 西谷 龍介 金元 敏明	8	鈴木 智成 藤田 敏治 鎌田 裕之 岸根順一郎 浅海 賢一 木村 広 服部 裕司 川本 一彦	1	齋藤 香	0		0	16
合計	14		15		5		0		0	34

### 工学部総括表

表3.3.3 工学部定員現員表 (平成18年4月1日現在)

学科等	教授		助教授						合計	
	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	現員
専門学科	47		43		2		27		51	170
共通講座	14		15		5		0		0	34
合計	61		58		7		27		51	204

大学院工学研究科

表 3.3.4 大学院工学研究科定員現員及び教官一覧 (平成18年4月1日現在)

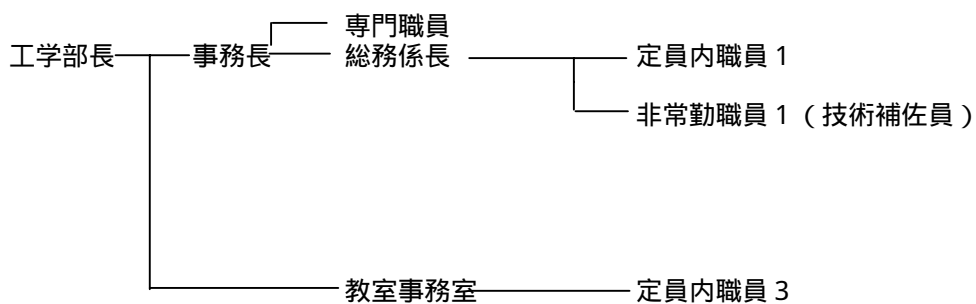
専攻名	講座名	教授		助教授		講師		助手		技術職員等	合計
		現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	現員
電気工学専攻 独立講座	ネットワーク工学	1	重松 保弘	1	池永 全志	0		1	横尾 徳保	0	3
	小計	1		1		0		1		0	3
機能性材料創成工学 能成 工学 専攻 ム攻	機能性材料創成工学	2	山崎 二郎 近浦 吉則	4	本田 崇 高原 良博 大門 秀朗 鈴木 芳文	0		3	竹澤 昌晃 山口 富子 合田 寛樹		9
	機能システム設計工学	3	松永 守央 小森 望充 増山不二光	3	中村 英嗣 孫 勇 脇迫 仁	0		1	森口 哲次	0	7
	小計	5		7		0		4		0	16
	合計	6		8		0		5		0	19

大学院工学研究科

表 3.3.5 大学院工学研究科連携講座(定員外) (平成18年4月1日現在)

専攻名	講座名	教授		助教授		講師				技術職員等	合計
		現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	現員
機能システム創成工学専攻	エネルギーマテリアルシステム(連携)	2	納富 啓 開道 力	1	西 敏郎	0		0		0	3
	合計	2		1		0		0		0	3

### 3.4 事務組織



教室事務室の非常勤職員（パート）は、勤務場所が教室事務室になっている者の数である。

図4.4.1 事務組織図（平成18年4月1日現在）

## 4 工学部の財政

### 4.1 工学部の運営費交付金配分状況

表 4.1.1 運営費交付金配分額，学部運営費，教室配分額年次変化

(単位：千円)

区分 \ 年度	平成 14 年度	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度
運営費交付金配分額 (校費配分額)	(563,295)	(605,571)	755,711	423,601	391,496
学部運営費 (うち光熱水費保留分)	245,525	269,978	325,406	129,965 (11,357)	104,257 (11,383)
教室配分額	317,770	335,593	430,305	293,636	287,239

表 4.1.2 平成 18 年度費目別配分額

(単位：千円)

費 目	配分額	比率 (%)
研究経費	56,585	14.46
教育経費	154,555	39.48
業績等配分経費	28,086	7.17
事項指定経費	48,013	12.26
学部運営費	92,874	23.72
光熱水費	11,383	2.91
その他	0	0.00
合 計	391,496	100.00

表4.1.3 過去5年間の学科等別積算校費配分額の推移

(単位：千円)

年度・科目	学科等	機械知能	建設社会	電気	物質	共通講座	機能システム創	その他
	工学科	工学科	工学科	工学科		成工学専攻		
平成14年度	教育研究基盤校費							
	教官数積算分	13,836	9,007	20,277	15,846	13,266		0
	学生数積算分	24,475	12,052	29,866	25,528	6,889		7,125
	大学分等	23,546	15,046	28,083	24,098	20,997		0
その他	5,939	588	8,683	3,578	1,482		7,563	
平成15年度	教育研究基盤校費							
	教官数積算分	14,113	8,943	20,543	13,733	11,623	6,888	2,949
	学生数積算分	24,227	12,618	29,777	22,357	5,994	2,543	7,275
	大学分等	20,532	14,850	27,194	19,771	14,457	10,844	263,841
その他	3,144	584	8,915	3,491	1,356	417	24,636	
平成16年度	教育研究基盤校費							
	教官数積算分	19,487	9,964	25,176	21,135	22,387	9,771	0
	学生数積算分	34,152	16,588	38,610	27,423	6,438	9,340	7,655
	大学分等	6,368	4,329	10,651	9,745	3,956	2,079	0
その他	16,128	6,941	51,390	13,703	3,281	126,101	287,041	
平成17年度	教育・研究費							
	研究経費	15,293	7,819	19,641	16,382	17,155	7,667	0
	教育経費	33,289	15,317	35,181	25,547	5,727	10,299	7,655
	業績等配分経費	7,880	3,518	10,858	7,915	3,680	3,077	0
その他	1,727	0	35,141	1,846	0	1,022	129,965	
平成18年度	教育・研究費							
	研究経費	10,370	5,281	12,415	11,065	12,193	5,018	243
	教育経費	38,681	17,456	40,536	31,887	5,972	12,848	7,175
	業績等配分経費	5,286	2,641	8,547	6,145	3,360	2,107	0
その他	1,872	0	33,928	1,652	0	2,218	112,600	

4. 2 科学研究費補助金の採択状況

金額は、直接経費のみ。

(転出を含み、転入を除く)

表4.2.1 科学研究費補助金採択状況(平成14~18年度)

(単位:千円)

種目	年度	平成14年度		平成15年度		平成16年度		平成17年度		平成18年度	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
特別推進研究				1	35,000	1	59,000	2	125,000	2	35,470
特定領域研究(A)(2)		1	2,100	2	2,700						
特定領域研究		1	2,100	2	2,700	3	15,000	3	14,600	5	21,500
基盤研究(A)(1)						0	0				
基盤研究(A)(2)		2	8,400	2	5,800	1	3,700			2	23,500
基盤研究(B)(1)		2	8,200	3	8,400	3	10,700				
基盤研究(B)(2)		15	67,600	15	51,900	14	61,300	15	68,600	15	59,300
基盤研究(C)(1)											
基盤研究(C)(2)		23	35,300	22	26,600	21	28,600	23	30,400	23	27,900
萌芽的研究		3	2,700	5	7,400	9	14,300	9	10,600	7	12,400
奨励研究											
奨励研究(A)											
若手研究(A)		1	6,700	1	14,300	1	1,600			1	15,900
若手研究(B)		15	19,745	14	18,338	12	15,100	17	25,300	16	20,100
特別研究員奨励費		2	2,488	2	1,600	1	1,200	1	600		
計		64	86,300	67	172,038	66	210,500	70	275,100	71	216,070

表4.2.2 平成18年度科学研究費補助金学科等別申請,採択状況

(上段数字は継続課題で内数)

事項	機械知能工学科		建設社会工学科	電気工学科			物質工学科		共通講座		専攻	機能システム創成工学	合計
	機械工学教室	制御工学教室		電気電子工学教室	電子通信システム工学教室	電子物性教室	応用化学教室	加工学教室	マテリアル創成	人間科学教室			
申請件数	24	7	15	17	18	4	28	15	11	13	14	166	
採択件数	3	3	7	9	4	1	7	1	3	3	4	45	
	3	5	8	13	4	1	13	5	6	6	7	71	

申請件数・採択件数ともに、非常勤研究員を含む。また、申請件数には、特別推進研究の継続申請を含まない。



### 4.3 外部資金導入状況

#### 4.3.1 寄附金(奨学寄附金)

表4.3.1 寄附金受け入れ状況

(単位：千円)

学科等	年度	平成14年度		平成15年度		平成16年度		平成17年度		平成18年度	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学科		15	8,890	18	7,422	26	16,180	17	13,500	13	9,770
建設社会工学科		23	33,395	19	32,660	18	32,676	18	22,354	24	32,840
電気工学科		15	23,234	17	28,370	10	13,550	14	11,390	15	11,280
物質工学科		50	52,758	42	30,870	40	24,440	39	27,780	42	26,357
共通講座		2	2,400	1	1,500	1	500	3	4,500	5	2,400
機能システム創成工学専攻				16	10,549	14	9,250	10	5,200	8	5,385
合計		105	120,677	113	111,371	109	96,596	101	84,724	106	88,032

#### 4.3.2 民間等との共同研究

表4.3.2 民間等との共同研究受け入れ状況

(単位：千円)

学科等	年度	平成14年度		平成15年度		平成16年度		平成17年度		平成18年度	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学科		6	5,280 (4,780)	2	1,550 (0)	4	3,100 (3,100)	9	6,168 (6,168)	8	5,670 (5,670)
建設社会工学科		12	17,039 (15,100)	11	35,250 (8,800)	6	16,950 (16,950)	5	7,100 (7,100)	5	10,806 (10,806)
電気工学科		11	43,816 (32,940)	14	34,485 (5,820)	20	43,725 (43,725)	26	46,930 (46,930)	24	36,085 (36,085)
物質工学科		10	16,917 (14,470)	10	15,622 (2,977)	10	13,640 (13,640)	26	30,500 (30,500)	20	25,399 (25,399)
共通講座		0 0	0 0	1	1,050 (0)	1	1,050 (1,050)	2	3,050 (3,050)	2	2,500 (2,500)
機能システム創成工学専攻				1	3,556 (556)	3	1,400 (1,400)	3	900 (900)	4	2,000 (2,000)
合計		39	83,052 (67,290)		91,513 (18,153)	44	79,865 (79,865)	71	94,648 (94,648)	63	82,460 (82,460)

下段の( )数字は民間負担分の歳入金額で内数。

複数年契約を含む。

#### 4.3.3 受託研究

表4.3.3 受託研究受け入れ状況

(単位：千円)

学科等	平成14年度		平成15年度		平成16年度		平成17年度		平成18年度	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学科	6	8,009	4	5,760	6	6,665	10	29,007	15	24,283
建設社会工学科	2	6,827	3	8,558	1	4,975	4	12,300	2	6,465
電気工学科	4	27,538	9	27,475	7	39,704	10	54,484	12	72,469
物質工学科	9	34,060	9	18,899	13	19,460	10	28,441	11	24,903
共通講座	1	1,477	2	6,600	0	0	1	4,250	1	5,696
機能システム創成工学専攻			1	682	1	1,000	3	2,556	5	10,633
合計	22	77,911	28	67,974	28	71,804	38	131,038	46	144,449

複数年契約を含む。

#### 4.3.4 寄附講座

表4.3.4 寄附講座受け入れ状況

(単位：千円)

名称	所属学科	寄附者	年度別受け入れ金額					教員組織
			平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	
電力系統 制御工学	電気工学科	九州電力(株)	30,000	15,000	30,000	30,000	30,000	平成18年度 客員教授1 客員助手1

#### 4.3.5 寄附金の利息

工学部寄附金の利息を、工学部の共通経費として運用している。表4.3.5に平成18年度の使用内訳を示す。

表4.3.5 平成18年度工学部寄附金共通経費使用報告

(単位：円)

受入額		使用額	
事項	金額	事項	金額
前年度より繰越	5,117,572	九州地区工学系事務長事務 協議会会議費	11,250
寄附金オーバーヘッド分	3,354,272		
		(小計)	11,250
		繰越額	8,460,594
合計	8,471,844	合計	8,471,844

## 5 工学部と社会のつながり

### 5.1 地域貢献活動

#### 5.1.1 大学公開

大学公開事業の一環として実施している高校生のためのオープンキャンパス（学内見学会）の実施状況を表5.1.1に示す。

表5.1.1 高校生のためのオープンキャンパス（学内見学会）の実施状況

年度	参加校数（校）	参加者数（名）	
		大学全体	学部別
平成14年度	135	1,639	（工） 968
			（情） 671
平成15年度	209	1,240	（工） 690
			（情） 550
平成16年度	224	1,481	（工） 892
			（情） 589
平成17年度	224	1,481	（工） 892
			（情） 589
平成18年度	255	1,543	（工） 968
			（情） 575

#### 5.1.2 公開講座等

表5.1.2 公開講座等実施状況

（単位：名）

年度	講座名	対象	参加者数
平成14年度	北九州工学体験工房	中学生	52
	親子で作ろう電子回路	小学生の親子二人一組	27
	状態図計算法（CALPHAD法）による 状態図の予測と機器分析による検証	材料の組織分析業務に従事している者	12
平成15年度	北九州工学体験工房	中学生	41
	通信の現在と未来	一般市民	11
	ふしぎ発見！わくわくサイエンスキッズ 2003	小・中学生	4,111
	土曜サイエンス講座	小・中学生	31
	本物ものづくり教室～ゆめをかたちに～	小学生	41
	最先端技術とものづくり体験講座	小・中学生	27
平成16年度	ふしぎ発見！わくわくサイエンスキッズ 2004	小・中学生	2,862
	技術士の専門知識	「技術士1次試験」を受験する者	19
	北九州大学体験工房	中学生	22
	体験学習「電気電子技術体験だい！」	下関西高校	40
平成17年度	本物ものづくり教室		
	エネルギー・エレクトロニクスの未来技術	一般市民・高校生	14
平成18年度	第3回 ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙を切って作るふしぎな図形」	小学生以上	59
	八幡大谷市民センター 折り紙講座	市民対象	27
	第4回 ジュニア・サイエンス・スクール 「光の不思議を体験しよう」	小学校4年生以上	55
	明治学園小学校 天体観測会	5年生	41
	戸畑子ども会 折り紙講座	小学生	50

平成18年度	第5回 ジュニア・サイエンス・スクール 「人力飛行機で学ぶ飛行機の仕組み」	小学校4年生以上	73
	第6回 ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！ 北九州工学体験工房」	中学生	17
	第7回 ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙をたたんで作るふしぎな模様」	小学生以上	64
	第8回 ジュニア・サイエンス・スクール 「圧力ガンガン」	小学校4年生以上	68
	第9回 ジュニア・サイエンス・スクール 「正六角形で作るふしぎな立体」	小学校以上	99
	第10回 ジュニア・サイエンス・スクール 「超伝導ってなんだろう？」	小学校4年生以上	63
	第11回 ジュニア・サイエンス・スクール 「発泡スチロールのリサイクル」	小学校4年生以上	44
	第12回 ジュニア・サイエンス・スクール 「燃える不思議 - 花火のひみつ - 」	小学校4年生以上	88
	第13回 ジュニア・サイエンス・スクール 「正六角形で作るふしぎな立体」	小学校以上	97

### 5.1.3 リカレント教育への協力

本学は、福岡・北九州地域リカレント教育推進協議会主催のリカレント教育の実施大学の一つになっていたが、その後継事業として、平成16年度から北九州市民カレッジが始まった。これらの事業にこの5年間に工学部が協力したセミナーの実施状況を表5.1.3に示す。

表5.1.3 北九州市民カレッジ（リカレント教育）協力セミナー実施状況（単位：名）

年 度	セミナー名	参加者数	備 考
平成14年度	溶接・総合技術の基礎と応用	11	リカレント
	土木施工管理の基礎知識	34	
平成15年度	プログラミングC言語	19	リカレント
平成16年度	Windows プログラミング入門	22	市民カレッジ
平成17年度	申込者が少数のため実施なし		市民カレッジ
平成18年度	申込者が少数のため実施なし		市民カレッジ

### 5.1.4 出前講義

近年、社会的問題となっている、いわゆる青少年の「科学離れ」「理工系離れ」対策の一環として、小・中・高等学校の生徒を対象に本学の教官が小・中・高等学校に出向き、理工系分野の学問の最前線の話や魅力等について分かり易く講義をする。

表5.1.4 出前講義

年度	講義名	実施件数	対象者
平成14年度	エンジンの話	1	高校生
	地球環境と風力エネルギー	16	小学生
	時代を読む技術者と一文系/理系ではこれから生きられないー	2	高校生
	「ものづくり」はどのように行われるだろう？ - 乗用車の開発から製造まで -	1	中学生
	ロボットの腕のコントロール	1	小学生

平成14年度	私たちの身近なみどりとまちづくり	9	小学生
	バリアフリーとまちづくり	4	小・高校生
	宇宙の進化と地球の生命、環境	4	小・中学生
	情報通信技術とコンピュータによるこれからの私たちの生活	6	小・中・高校生
	超伝導のふしぎ	3	中・高校生
	私達の暮らしと放射線	1	中・高校生
	ハイテクを支える錯体（医薬から材料まで）	1	高校生
	プラスチックのリサイクルと環境問題	2	高校生
	身近な金属材料のリサイクル	1	中学生
	「核エネルギーと放射線の話」	1	高校生
	「身近な科学の話」	4	中・高校生
	地球の温暖化を防ぐ水のエネルギー	12	小・中・高校生
	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	2	高校生
	プログラミング入門	5	小学生
平成15年度	地球環境と風力エネルギー	4	小学生
	時代を読む技術者とは - 文系/理系ではこれから生きられない -	2	高校生
	「ものづくり」とは何だろうか？ - 乗用車の開発から製造まで -	3	高校生
	進化する“ものづくり”～生産工学の最前線	3	高校生
	私たちの身近なみどりとまちづくり	7	小・高校生
	バリアフリーのまちづくり	3	高校生
	君はアトムを見たか：超ミクロの世界 - ナノテクノロジーの時代 -	5	高校生
	ITとコンピュータによるこれからの私たちの生活	5	中・高校生
	私達の暮らしと放射線	2	高校生
	自分たちで判断して行動するロボットたち	20	小学生
	ハイテクを支える錯体（医薬から未来材料まで）	1	高校生
	身のまわりのプラスチックとそのリサイクル	1	高校生
	「身近な科学の話」	8	小・高校生
	宇宙における元素形成の謎をさぐる	2	中・高校生
地球の温暖化を防ぐ水と風	1	小学生	
宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	1	高校生	
平成16年度	地球環境と風力エネルギー	6	小・中学生
	これから世界で活躍する技術者・研究者になるために、今、何をしておくべきか	5	高校生
	「ものづくり」とは何だろうか？ - 乗用車の開発から製造まで -	3	高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用 - 脳をまねてロボットを動かすはなし -	8	高校生
	魚のすみやすい川づくり	7	小・中・高校生
	私たちの身近なみどりとまちづくり	10	高校生
	顔認証・世界最小のバーコード変換技術	19	小・中・高校生
	ITとコンピュータによるこれからの私たちの生活	10	中・高校生
	君も色のマジシャンになってみませんか - 新幹線から制がん剤まで -	3	中・高校生
	電池の科学 - クリーンでソフトなエネルギーの缶詰 -	4	小学生
	生活に見る材料力学	1	高校生
	身のまわりのプラスチックとそのリサイクル - ペットボトルをもっと知ろう！ -	2	高校生
	身近な科学の話	12	小・中学生

	シャボン玉から知る複合材料の科学	1	中学生
	宇宙・星のしくみと私たち	2	中・高校生
	地球を守る水と風	8	小学生
	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	7	高校生
平成17年度	やさしい情報通信の世界 - インターネットの基礎と応用 -	2	高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用 - 脳をまねてロボットを動かすはなし -	6	中・高校生
	電子が創るナノワールド - 高校理科から最先端技術へ -	6	高校生
	光触媒を使った太陽光による環境浄化	1	高校生
	身のまわりのペットボトルのリサイクル - ペットボトルをもっと知ろう！ -	1	高校生
	身近な金属材料のリサイクル	3	高校生
	地球を救う水と風のエネルギー	1	小学生
	君も色のマジシャンになってみませんか - 新幹線から制がん剤まで -	2	中学生
	3次方程式の解法 - 楽しい数学 -	1	高校生
	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	4	高校生
	進化する機械工学とグローバル化時代に期待される技術者	1	高校生
平成18年度	テレビはなぜ見える！ - テレビ・ラジオの原理と電波のふしぎ -	5	小・中学生
	迷路とマイクロマウス - 人工知能ってなに -	2	小・中学生
	物理と工学 - 物理は何の役に立つ？ -	2	高校生
	風を生活に役立てる最先端研究 - 何がわかって、何がわかってない？ -	1	高校生
	ひとにやさしいまちづくりって？ - バリアフリーのまちづくり -	1	小・中・高校生
	天気予報の物理と数学 - 流れの力学から気象予報士になる方法まで -	2	高校生
	エコポ・ワークショップ！植木鉢から学ぶ身近な自然と日本の文化 - 自分でデザインした植木鉢をつくって植物を育てよう -	1	小・中・高校生
	魚のすみやすい川づくり	1	中・高校生
	身近な科学の話 - 理科（科学）の学習の意味を考える -	3	中・高校生
	3次方程式の解法 - 楽しい数学 -	1	高校生
	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	2	高校生
	万有引力の法則の初等的な導出法 - ニュートンが目指したもの -	1	中・高校生
	相対性理論と4次元時空間 - アインシュタインが目指したもの -	3	中・高校生
	進化する機械工学とグローバル化時代に期待される技術者	1	高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用 - 脳をまねてロボットを動かすはなし -	1	高校生
エネルギーと環境	1	中・高校生	

### 5.1.5 情報公開

工学部の情報公開の実施状況を表5.1.5に示す。

表5.1.5 工学部の各種情報公開の現状

現在公開（公表）している情報等	編集方針	年間発行回数、発行時期、発行部数	公開・情報提供先	編集組織の名称
工学部自己点検・評価報告書	工学部とその関連部局における自己点検・評価を行い、その結果を公表する。	1回 12月 350部	教職員、文部科学省、各国立大学	部局評価委員会

## 5.2 学生の国際交流

### 5.2.1 外国人留学生(国籍別・課程別・費用別)在学状況一覧表

外国人留学生在学状況 H18.5月現在

(単位:人)

国籍		中	マ	韓	タ	メ	ハ	ベ	イ	エ	ス	コ	ペ	ケ	モ	イ	フ	イ	オ	フ	合		
		国	レー	国	イ	キシ	ン	トナム	ド	ジ	リ	ス	ラル	ニア	ロッ	ン	ラ	ス	ス	ラ	計		
所屬・課程・費用別等			シア			コ	グ	ム	ネ	プト	ラン	タリ	ルシ		コ	ラ	ラ	ト	ト	ラ			
工学部・工学研究科	課程別	博士後期課程	2	1		1			2	1												8	
		博士前期課程	9		1			1		1													12
	内 訳	学 部 生	11	12					1	1													25
		研究生/聴講生	3		8			1		1											2		15
	費用別	JASSO			1																1		2
		国 費	3			1		2		3													9
	内 訳	本国政府派遣		12																			12
		私 費	22	1	10			1	1	2	1										3		41
	国籍	小 計	25	13	10	1		3	1	5	1										3		62
	情報理工学研究科	課程別	博士後期課程	6	3			1	7	1	1		1				1						21
博士前期課程			5		1				2			1	1		1			1					12
内 訳		学 部 生	13	7	1							1									1		23
		研究生/聴講生	2																				2
費用別		JASSO																					
		国 費	3	2			1	2				1	1			1					1		12
内 訳		本国政府派遣		7																			7
		私 費	23	1	2			5	3	1		2			1			1					39
国籍		小 計	26	10	2		1	7	3	1		3	1		1	1		1		1			58
生命体工研究科		課程別	博士後期課程	10	2	4				1							3		1		1		22
	博士前期課程		8	1	1									1									11
	内 訳	学 部 生	3																				4
		研究生/聴講生	3																			1	4
	費用別	JASSO																					
		国 費	3	1	2					1													8
	内 訳	本国政府派遣																					
		私 費	18	2	3									1			3			1	1		29
	国籍	小 計	21	3	5					1				1		3		1		1	1		37
	合 計	課程別	博士後期課程	18	6	4	1	1	8	1	4	1	1				1	3		1		1	51
博士前期課程			22	1	3			1	2	1		1	1	1	1			1					35
内 訳		学 部 生	24	19	1				1	1		1									1		48
		研究生/聴講生	8		8				1		1										2	1	21
費用別		JASSO			1																1		2
		国 費	9	3	2	1	1	4		4		1	1			1				1	1		29
内 訳		本国政府派遣		19																			19
		私 費	63	4	15			6	4	3	1	2		1	1		3	1			4	1	109
国籍		合 計	72	26	17	1	1	10	4	7	1	3	1	1	1	1	3	1	1	1	4	1	157

JASSOは、独立行政法人日本学生支援機構による短期留学推進制度によって在籍する者(費用別区分では私費を含む)  
 研究生/聴講生は、JASSO制度に係らない協定校からの特別聴講(研究)学生を含む

## 5.2.2 外国人留学生（学科別・専攻別）在学状況一覧

（平成18年5月1日現在）（単位：人）

所 属 区分	機械知能工学科		建 設 社 会 工 学 科	電 気 工 学 科			物 質 工 学 科		合 計
	機 械 工 学 コ ー ス	制 御 工 学 コ ー ス		電 気 工 学 コ ー ス	電 子 工 学 コ ー ス	情 報 工 学 コ ー ス	応 用 化 学 コ ー ス	材 料 工 学 コ ー ス	
博士後期課程	2	1	0	5	0	0	0	0	8
博士前期課程	0	4	3	1	1	1	1	1	12
学部生 2年生以上	6	4	1	6	2	1	2	1	23
学部生 1年生	2		0	0			0		2
研究生・聴講生	3	2	4	2	2	1	0	1	15
短期留学生	1	0	0	0	0	0	0	1	2
合 計	25		8	22			7		62



### 5.2.3 学生の海外派遣

年度	国名	交流協定校	学生派遣数
14	アメリカ	オールドドミニオン大学	語学研修 8 名 (工学部 8 名)
	オーストラリア	モナシュ大学	語学研修 1 2 名 (情報工学部 1 2 名)
	韓国	忠州大学	相互交流 1 0 名 (工学部 1 0 名) 短期留学 1 名 (情報工学部)
		昌原大学	相互交流 1 7 名 (工学部 1 2 名, 情報工学部 5 名)
	韓国海洋大学校	相互交流 1 8 名 (情報工学部 1 8 名)	
15	アメリカ	オールドドミニオン大学	語学研修 8 名 (工学部 8 名)
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修 1 2 名 (情報工学部 1 2 名)
		シドニー工科大学	交流協定による派遣 4 名 (工学部 2 名, 工学研究科 1 名, 生命体工学研究科 1 名)
	韓国	忠州大学	相互交流 1 6 名 (工学部 1 6 名)
		昌原大学	相互交流 1 4 名 (工学部 1 2 名, 情報工学部 2 名) 短期留学 1 名 (工学部)
		韓国海洋大学校	相互交流 1 7 名 (情報工学部 1 7 名)
	浦項工科大学	合同ワークショップ 1 5 名 (生命体工学研究科 1 5 名)	
16	英国	サリー大学	交流協定による派遣 1 名 (情報工学研究科) 短期留学 1 名 (情報工学研究科)
	アメリカ	オールドドミニオン大学	語学研修 8 名 (工学部 8 名)
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修 1 2 名 (情報工学部 1 2 名)
		シドニー工科大学	交流協定による派遣 2 名 (工学部 1 名, 生命体工学研究科 1 名)
	ニュージーランド	オークランド工科大学	短期留学 1 名 (生命体工学研究科)
	韓国	忠州大学	相互交流 1 4 名 (工学部 1 4 名)
		昌原大学	相互交流 1 5 名 (工学部 1 5 名)
		韓国海洋大学校	相互交流 8 名 (情報工学部 8 名)
マレーシア	プトラ大学	交流協定による派遣 1 名 (生命体工学研究科)	
17	英国	サリー大学	交流協定による派遣 3 名 (工学研究科 2 名, 情報工学研究科 1 名)
	アメリカ	オールドドミニオン大学	語学研修 8 名 (工学部 8 名)
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修 1 2 名 (情報工学部 1 2 名)
		シドニー工科大学	交流協定による派遣 1 名 (工学部)
	韓国	忠州大学	相互交流 1 2 名 (工学部 1 2 名) 短期留学 1 名
		昌原大学	相互交流 8 名 (工学部 8 名)
		韓国海洋大学校	相互交流 1 0 名 (情報工学部 1 0 名)
マレーシア	プトラ大学	交流協定による派遣 2 名 (生命体工学研究科)	
18	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修 8 名 (工学部 8 名)
	イギリス	サリー大学	交流協定による派遣 1 名 (情報工学研究科 1 名) 短期留学 1 名 (工学部 1 名)
	オーストラリア	モナシュ大学	語学研修 1 2 名 (情報工学部 1 2 名)
		シドニー工科大学	交流協定による派遣 1 名 (工学研究科)
	韓国	忠州大学校	相互交流 1 4 名 (工学部 1 4 名)

## 6 おわりに

部局評価委員会活動にもこれまでに多くの経営資源が投入されている。

そのせいもあってか、厳しい環境にあってもアンケートの回答は教育職員の日常の努力に応じて高いレベルを映している。しかし、受け入れる学生の学力や気質の変化と受け入れて貰う企業の要請の変化に対応した工学部・工学研究科の教育・研究の更なる変化・改善の必要性は明らかである。工業系単科大学としての専門科目能力のより一層の深化・拡大とそれを支える制度充実の必要性は言うまでもないが、企業に在籍する卒業生や修了生の共通の関心事は語学やプレゼンテーション科目のより一層の充実と解することができる。本「現状と課題」を基として学部・研究科が更に発展することを切に願う。

鶴田委員長の指揮のもと無事に役目を果たすことができ、感謝している。(古曳 重美)

部局評価委員会委員を1.5期(3年間)務めさせていただきましたが、任期最後の年は委員長を仰せつかりました。「評価」というと重い響きがあります。しかしながら、アンケート調査からは学生や企業の生の声が聞こえてきますので、教育する側としてその声に謙虚な気持ちで向き合いたくなります。また一方で、これから法人評価や認証評価が行われますが、こちらは中期目標・計画の達成度がそのエビデンスとともにチェックされるという厳格なもので、やや窮屈さを感じてしまいます。大学の「古き良き時代」は終わったという声を耳にすることもありますが、いずれにしても教育と研究に楽しく専念できる日々が過ごせるよう心がけたいと思います。(鶴田 隆治)

部局評価委員会委員として、着任して一年間が経過しました。これまでの部局評価委員会の活動は「現状と課題」にまとめられてきたわけですが、大学教育機関としての機能評価と言う観点からは、様々な課題を持ちながらも一応の評価機能を果たしつつあることは今までの委員の方々のご努力の賜物と考えます。学生アンケート、企業アンケート結果は外部から大学教育機能についての評価として、貴重なご意見を今後の大学の活動にフィードバックして行くべき事柄ですが、このような活動も10年単位の息の長い着実な継続性の中に、効果が現れるものと期待しています。今年度は、「教員情報データベース」に基づく「教育職員評価システム」による教育職員のいわゆる個人評価と言う極めて重い作業がいよいよ始まった訳ですが、大学という公的教育機関では、企業活動における営業利益追求、効率重視の評価システムとは、自ずと異なった判断がなされるべきでしょう。しかし、旧ソビエト型のサービス精神欠如、公僕意識欠如の中からは、大学の存続が危ぶまれる社会情勢ですので、適切な評価システムを確立する必要性は否定できません。多分、今後問題になる課題は、評価の実施方法ということになるのでしょうか。この重い課題に対する賢明な判断がなされるように祈ります。(藤原 賢三)

これまでのアンケート結果を見る限り、本学の専門課程の教育と人間力や創造性に関する

る能力（課題探求力，課題解決能力，独創性，構想力，表現力，コミュニケーション能力）の育成については卒業生の活躍状況から概ね役割を果たしていることが伺われるが，語学能力の向上のために教育課程やシステムの改善と充実が求められていると考えられる。

今後この評価活動が本学の教育と研究の飛躍的な向上に大きな役割を果たすようになることを期待している。（増山不二光）

工学部・工学研究科の評価システムはこれまでの委員の努力によって確立されており，年々積み上げられる卒業生・修了生アンケートや企業アンケートの集計結果は学部・研究科の改善を持続的に進めていくための十分な基礎資料となっています。学内は順次進められていく建物の改修に伴って教育環境は格段に改善・整備されつつあります。2008年度より新たにスタートする学部・大学院の教育・研究と相俟って，今問われている「課題」がスムーズに解決していくよう期待しています。（三村 文武）

今回，初めて，部局評価委員会委員の1人として，「現状と課題」の編集に携って，この報告書は，評価方法の枠組みを作成した初期の委員，それを引き継いでアンケートの実施・分析・まとめを数年間に渡って継続してきた委員，そして，それを支える事務職員，多くの方々の膨大なエネルギーがつぎ込まれた結晶であること改めて感じた。

PDCA（Plan-Do-Check-Action）サイクルの中では，「現状と課題」は「Check」に相当するが，企業とは追求する目的が異なる教育・研究機関であることを大前提に，このサイクルの意図するところを認識し，より良い制度を整えることが必要ではないであろうか。

（渡辺 義則）

2008年（平成20年）2月

---

平成19年度工学部・工学研究科部局評価委員会委員（50音順）

小川 みやこ	工学部事務長
古曳 重美	工学部教授
鶴田 隆治	工学部教授【委員長】
藤原 賢三	工学部教授
増山 不二光	工学部教授
三村 文武	工学部教授
渡辺 義則	工学部教授

---